仮面ライダーファントム

藍沢光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーファントム

【Ｎコード】
Ｎ０９８２Ｕ

【作者名】
藍沢光

【あらすじ】
これは
仮面ライダーの話

街の涙を拭う二色のハンカチ――仮面ライダーＷ

そんな
二人で一人の仮面ライダーの意志を継ぐ一人の仮面ライダーの話で

ある

プロローグ（前書き）

ライダーのなかで一番好きなWの二次創作です。

駄文ですが
よろしくお願いします。

プロローグ

仮面ライダーW
――左翔太郎とフィリップの二人の物語が始まった夜

ビギンズナイト

その夜にもう一つの事件が起こっていた

園崎家にのみ許されたゴールドメモリ

『テラー』
『タブー』
『クレイドール』
『スミロドン』
『ナスカ』
『ユートピア』

そして
その事件の中心となる二本のメモリ

『　』
『　』

この二本のメモリが忽然と姿かたちを消した夜

もう一つのビギンズナイト

この夜からすべてが始まったのだ

幻の仮面ライダーにまつわる物語のすべてが……

プロローグ（後書き）

感想お待ちしてます！

第一話　現れたP／ボランティア探偵（前書き）

やっぱり
文章書くのは難しいですね。

またも駄文ですが、よろしくお願いします。

第一話　現れたP／ボランティア探偵

ここは
水の都・水都。

風の街・風都の姉妹都市であり、その名の通り水力発電で街のすべての電気を作っているエコの街である。

その水都の入り口に
一人の少女が地図を片手に佇んでいた。

「ここが……水都…」

水都の街並みを見つめながらその少女は呟く。

彼女の名前は鳴海小春。

風都にある「鳴海探偵事務所」というところで探偵助手をしていた。
……過去形である。

別に解雇されたわけではない。

実は「鳴海探偵事務所」の探偵である左翔太郎が彼女にこの街に行くよう言ったのだ。

というのも、この街には翔太郎の弟子である水町海斗という少年が探偵事務所を開いていて、そこが人手不足のため彼女を送った次第である。

「水町海斗さん……か。一体どんな人なんだろ……」

小春のハトコ・照井亜樹子の話では、かなりのイケメンだそうだ。彼氏のいない一女子高生としては、期待してしまう。

亜樹子にも照井竜というイケメンの夫がいる。

そんな亜樹子がイケメンというのだから期待できる。

それに、亜樹子たちも探偵事務所所長と警察官として出逢ったという。

ならば、探偵と探偵助手もありじゃないか、と密かに考えていた。

「……あっ、ここだ」

まだ見ぬ水町海斗に想いをはせているうちに、件の「水町探偵事務

所」に到着していた。

「……よし！」

小春は胸の動悸を無理矢理押さえつけて探偵事務所の扉を開けた。

「こんにちは！　助手として「鳴海探偵事務所」から来ました、鳴海小春と申します！」

「やぁ、待っていたよ。僕は、水町海斗。よろしくね」

……というような返答はなく、ただあったのは……。

「……」

真っ白いスーツ姿で床に倒れている少年だった。

「……えぇと……」

あまりに予想外過ぎる光景に、小春は叫んだ。

「わたし聞いてない！！」

これが、探偵・水町海斗と探偵助手・鳴海小春の最初の出逢いであった。

小春がたまたま持っていた御菓子を与えると、少年は復活した。どうやら空腹で倒れていたようだった。

「ホント助かったよ！ありがとね、小春ちゃん」

少年――水町海斗は、爽やかにそう言うと、小春の手の甲に軽くキスをする。

「なっ！？」

小春は思わず赤面してしまった。

水町海斗は、亜樹子の言う通りイケメンであった

今までキスをしたことのない小春にとっては、手の甲とはいえ、イケメンにキスをされては赤面してしまうのも無理はない。

「照れてるんだね。ふふ、初々しくていいね！」

「えと、あの！」

「ん？　どうかした？」

「その、ですね……なんで倒れてたんですか？」

照れていることにこれ以上突っ込まれたくなくて、小春は少し強引に話を逸らした。

「その、お腹が減ってたんですよね？　何か買ってくればよかったじゃないですか？」

「あぁ、お金がなくてね」

「えっ！？　……もしかして、依頼が来ないんですか？」

「いやいや、依頼は沢山くるよ。」

「……？　じゃあ、なんでお金がないなんて…？」

依頼は来るがお金はない。そんな状態が全くもって理解できない小春が尋ねると……。

「僕は女性からしか依頼を受けないし、女性からは報酬は貰わない主義なんだよ」

海斗はそう宣った。
胸を張って、堂々と。

「……」

「あれ？　どうしたんだい、小春ちゃん」

「……」

「もしかして……嫉妬？」

「ふっっざけんなぁぁぁぁぁぁぁ！！」

――ガツン！

海斗のその一言でついに小春がキレた。
カバンに忍ばせたスリッパで海斗を全力で叩く！！

「うぉぉぉ！？」

叩かれた頭を抱え、悶える海斗。
それもそのはず、小春のスリッパは金属製である。

「ふざけてるんですか！　それ探偵じゃないですよ！　ただのボランティアです！」

「そ、そうは言っても、女性からお金とるなんて僕の主義に反す――」

「却下です」

「えっ！？」

「わたしが所長になります！　あなたには経営は絶対任せられません！」

「ちょ、ちょっと小春ちゃん？」

「なにか？」

「……いえ、なんでもありません…」

――コンコン

海斗が小春に屈したちょうどその時、まるで話が終わるのを見計らったようなタイミングで事務所のドアがノックされた。

「「はーい！（……）」」

「失礼します。えぇと、ここ「水町探偵事務所」ですよね？」

「はい、そう――
「いえ、「鳴海探偵事務所水都支店」ですよ！」
「ちょっ、小春ちゃん！？」
「……どうかしました？　海斗さん……」
「いえ、何でもありません」

笑顔で微笑む所長兼探偵助手・鳴海小春。
項垂れる探偵・水町海斗。呆然とする依頼人。

「鳴海探偵事務所水都支店」そこには、そんな奇妙な光景が広がっていた。

「それで、今日はどうしました？」

海斗が自ら淹れた紅茶を応接用のソファーに座っている依頼人の女性に出しながら言った。

「はい、実は父を探して欲しいんです」

今回の依頼人・松山菜々の依頼は「父親を捜してほしい」というものだった。

詳細はこうだ。

先週の月曜日、彼女が自宅に帰ると、一枚の書き置きを見つけた。

それには、ただ一言「逃げろ」とだけ書かれてあったらしい。

その筆跡は、確かに父親の宗二のものだった。

本来なら、警察に届けるのだが、彼はイタズラ好きで、たまにイタズラをして家族を驚かせていたという。

だから、今回もイタズラだろうと思い、放っておいた。

だが、1週間経っても帰って来ないので、心配になりここにきた、ということらしい。

「それは大変でしたね。わかりました、お引き受けしましょう！」

笑顔で微笑む海斗。

「ありがとうございます！　それで……その…報酬の方なんですが、ウチあまりお金なくて……」

「お金？　そんなものいりませんよ。女性が困っていたら――――ゴスン

「おヴ！？」

顔に似合わぬ声を出して海斗は倒れた。
無論、小春の攻撃によって、である。

「さっき金欠で死にかけたの忘れたんですか！」

「……あの…」

「すみません。あの人のことは気にしないで下さい。　えぇと、ただというわけにはいきませんが、そこは考慮しますから安心してください！」

「ありがとうございます」

こうして「鳴海探偵事務所水都支店」の記念すべき初仕事が探偵抜きで決定したのであった。

第一話　現れたP／ボランティア探偵（後書き）

未だに変身が出来ない。

次は変身します！……きっと…

第二話　現れたP／幻の仮面ライダー（前書き）

冗談抜きで
難しい文章づくり

そして
遅い更新

オレ大丈夫だろうか

第二話　現れたP／幻の仮面ライダー

「それでこれからどうするんですか？」

調査に乗り出すため、事務所を出た海斗に小春がそう聞いた。

「とにかく情報が少なすぎるからね。書き置きがあっただけじゃわからないし、集めに行くよ」

「聞き込み…ですか？」

「ううん、もっと効率のいい方法があるんだ。いつもそっちで調べてる」

「……？」

「小春ちゃんも来る？　事務所に一人でいたってつまらないよね」

「は、はぁ」

「じゃあ……乗って」

そう言って海斗は小春にヘルメットを渡す。

事務所の前には、いつの間にか真っ白いバイクが停めてあった。

「それじゃ行くよ。しっかり捕まっててね」

バイクは走り出す。
解決を目指して。

「やぁ、やっぱりここにいたんだね」

海斗と小春はある人物のことを訪ねていた。

「ちっ、また来やがった。……こいつ誰だ?」

「なっ!?　この子何ですか!」

小春は絶句する。

無理もないだろう。
今、海斗と小春の目の前にいる人物は、どう見ても小学校に通っていそうな子供なのだ。
そんな子供に「こいつ」呼ばわりされては、誰でも怒る。

「紹介するよ、カイくん。彼女は鳴海小春ちゃん。今日から僕の助手になったんだ」

「そして、こちらはカイくん。僕の協力者で情報屋。水都のことなら何でも知ってるすごい人だよ」

海斗は、互いを互いに紹介した。
カイと呼ばれた少年は、小春を値踏みするようにじろじろと見る。

「な、なんですか…？」

「海斗よぉ……こんなチンチクリン助手にして、遂に頭トチ狂ったかぁ？」

「チンチクッ――！？」

「カイくん、そういうこと言うのは女性に失礼なんだよ」

「知るか！　ただのガキだろうが！」

「……だ…だれがガキかぁぁぁぁぁぁ！！」

我慢の限界であった。

デフォルトの敬語も忘れ、怒り狂う小春。

「ガキにガキって言って何が悪い！！」

「ガキにガキっては言われたくありません！！」

「てめぇ、上等だ！　表でろや！！」

「嫌です！　というか、ここ外ですぅ！！」

小学生と女子高生が本気で言い争うというシュールな光景が、そこにあった。

場所は変わって

「鳴海探偵事務所水都支店」

「つまり、菜々さんは嘘をついている、ということですか？」

「あくまで可能性の一つだよ。そんなことは、あって欲しくないけど、ね」

『松山宗二は大きい会社のお偉いさんで、松山家は裕福である』

カイと小春をなだめることに成功した海斗は、そんな情報を手にいれた。

だが、今回の件は
カイにもそれ以上は分からないらしい。
水都のことを何でも知っているはずのカイが知らないこと。

つまり……。

「……『ガイアメモリ』」

「えっ？　『ガイアメモリ』って、あの！？」

地球の記憶が記され
人間を「ドーパント」と呼ばれる怪物に変えてしまうＵＳＢメモリが存在する。

『ガイアメモリ』

それは元々、風都にしかなかったものだが、いつの頃からか水都にも広まるようになった。

「あぁ、小春ちゃんは知ってるんだね。」

「はい、翔太郎さんとフィリップさんが戦ってるのをいつも見てましたから」

「説明の手間が――」

急に言葉を止め、険しい顔をする海斗。

「えっと、海斗さ――」

「黙って！」

「！！」

いつもの緩い口調とは全く違う声に萎縮してしまう。

そんな小春を尻目に黙ったままの海斗の耳には、ある音が聴こえていた。

――ドクンドクン――

「近い！」

そう叫ぶと、海斗は事務所を飛び出していく。

「か、かいとさん！？」

訳の分からないまま、その後を小春も追って行った。

探偵事務所近くの裏路地

「ここか！」

海斗がそこに着くと、一人の女性が、ハンマーのような右腕をした黄色の「ドーパント」に襲われていた。

「た、たすけ――」

『死んでしまえぇぇ！！』

「やめろぉぉ！」

――グシャッ―

叫ぶ海斗の目の前で

「ドーパント」は拳で女性を押し潰した。

そして、「ドーパント」はそのまま海斗の方に向き……。

『なんだ？　もしや私の邪魔をするのか？』

「……させてもらう。目の前で女性が殺されたんだ。どうあっても許さない」

『許さなくて結構！！』

言葉と同時に殴りかかってきた。

「……っ！」

それをギリギリで避ける、はずだったが、少し肩をかすってしまった。

鈍い痛みが走る。

『ふふふ、勝てるつもりでいるのかい？　探偵さん』

「とうぜん…勝つよ。君は女性を殺し、この街を泣かせてるからね」

――海斗が「ドーパント」と対峙する少し前―

「か…かいと、さん…。はぁはぁ、走るの、速いで…はぁ……す。」

――プルルルプルルル―

携帯電話が鳴った。

小春は走るのを止めて電話に出た。

「は、はい。鳴海です。」

『もしもし？　小春ちゃんか？』

「翔太郎さん！？」

電話の相手は風都の探偵・左翔太郎だった。

「えぇと、どうかしたんですか？」

『いや、無事水都に着いたかと思ってな』

「あっ、はい。無事着いて海斗さんにも会えました！　今も仕事中です！」

『そうか！　いやぁ、海斗もちゃんと探偵してんだな。女好きが災いして仕事しないんじゃないかと思ってたけど……流石はオレの弟子だな！』

「……」

『ん？　どうした？』

翔太郎さん、あなたの推理見事的中してますよ。

……と言いかけたが、ギリギリのところで踏みとどまることに成功した。

「なんでもないんですけど……。あっ、すいません！　今、海斗さんを追ってる最中なので……」

『どういうことだ?』

「その……いきなり怖い顔して黙りこんで、それから突然どこかに行っちゃって……」

『……もしかし――うぉ！　なにしやが、フィ―』

『ハルちゃん聞こえるかい!?』

「フィリップさん!?」

電話の向こうで電話の争奪戦があったのか、相手が別の人物に変わっていた。

フィリップ

翔太郎の相棒で、『地球（ほし）の本棚』という地球の全てが記された本棚にアクセス出来る天才魔少年である。

『あの荷物は彼に渡したかい?』

「……あっ」

『どうやら、今まで忘れていたようだね……』

実は、小春はフィリップからある荷物を渡されていて、それを海斗に渡すように言われていたのであった。

『とにかく、それを今すぐ彼に渡したまえ！　おそらく彼は「ドーパント」とすでに交戦中だ！』

「……はぁはぁはぁ」

『威勢がよかったのは最初だけ……私に勝つんじゃなかった？』

海斗は弱っていた。

すべての攻撃を避けていたからやられてはいないものの、避け始めてからすでに三十分が過ぎた。

体力は削られる一方だ。

――ガクッ―

（しまった！？）

遂に足に限界が来た。
一瞬動きが止まってしまった。

その隙を見逃さずドーパントは拳を突き出す。

『終わりだぁぁぁ！！』

「かいとさぁぁぁん！！」

『なんだ！？』

聞こえてきた声に一瞬ドーパントが注意を向けた。

「おらぁ！」

『うぉお！？』

海斗の足払いにドーパントはよろけ、そのまま倒れた。

「…はぁはぁ、小春ちゃん……なんで…」

「いきなり走り出したら追いかけますよ！　それより……これ！」

そう言って小春はアタッシュケースを差し出した。

「こ、れは？」

「フィリップさんから預かってたものです。海斗さんに渡すように、と」

海斗がアタッシュケースを開ける。

そこには、青い色をした、ロストドライバーと呼ばれるベルトと、何も描かれていないガイアメモリがあった。

「……ありがとう、小春ちゃん。助かったよ」

海斗はニコリと微笑み、ドライバーとメモリを取る。

そして、再びドーパントの方を向いた。

『くそっ！　ふざけやがって！』

「ふざけてるのは、君だよ。女性を、街を泣かせるようなことは、僕が許さない！　謝ってももう遅い！」

海斗がドライバーを腰の前にかざすと、ベルトが現れ、固定される。

そして、懐から一本のゴールドメモリを取り出した。

『そ、それは！？』

メモリを起動する。

『ファントム』

ガイアウィスパーが鳴り響き、そのメモリをさっき受け取ったメモリに差した。

『ファントム』

再びガイアウィスパーが流れる。
メモリをドライバーに挿入し、展開――

「――変身！！」

白い霧が海斗の身体を包み込み、仮面ライダーファントムに変身した。

第二話　現れたP／幻の仮面ライダー（後書き）

感想お待ちしてます！

そして、次回は
更新遅れます…←

第三話　現れたP／仮面ライダーの使命（前書き）

今日は更新出来ました

では、どうぞ！

第三話　現れたP／仮面ライダーの使命

霧が晴れる。

そこには一人のライダーが立っていた。

黒い装甲。
真っ赤に輝く大きな眼。
たなびくマント。
そして、顔の右半分を覆う白い仮面。

仮面ライダーファントム

Wの意思を継ぐ仮面ライダーがここに誕生した。

『な、なんだ!?　お前、ただの人間じゃないのか!?』

「ただの人間……じゃない。僕は、この水都を守る者・仮面ライダーだ」

『仮面……ライダー!?』

「……私、聞いてません」

ドーパントも小春も海斗が変身したことに唖然としていた。

「さぁ、行くよ！　はぁぁぁぁ！！」

声をあげながら、ドーパントに向かって走るファントム。

そして、ドーパントの身体に拳を打ち込む。

『……くっ』

ドーパントがよろめく。

それに乗じて、さらに拳と蹴りを打ち込んでいく。

「はぁ！　らぁぁ！！」

『うっ！　ぐがっ！』

拳と蹴りを五発くらいずつ打ち込まれたドーパントはそのまま後退りをした。

だが、倒れない。
どうやらファントムの攻撃に威力が足りていないようだった。

『ふぅふぅふぅ……どうしました？　やはりさっきの攻撃が効いてるようだな』

「いや、このメモリのスペックが低いだけだよ」

そう言ってベルトのメモリを指差す。

『負け惜しみですか？』

「いや、メモリ自慢さ」

『はっ？』

ファントムはベルトに手を掛ける。

そして、挿入されていたメモリを取り出し、再び挿入、展開した。

――『ジョーカー』――

ガイアウィスパーが鳴り響く。
だが、それは『ファントム』ではなかった。

『ジョーカー』

つまり、Wのメモリのものだった。

ファントムの仮面が黒に変わる。

『何をした！？』

「ジョーカーを借りるだけ、だよ！」

言葉を言い終わらないうちに、攻撃を仕掛けるファントム。

――ドスッ―

『かっ、は！？』

攻撃は命中。

ドーパントはその一撃だけで吹き飛んだ。

『くっ…なにが――』

「どうなってるんですか？」

小春の頭は既にオーバーヒート寸前だった。

海斗が仮面ライダーになったことですら驚いたのに、それに加えて、今とは比べ物にならない攻撃力になったこと。

まったく訳が分からない。

『どうやら成功のようだね』

「あ…フィリップさん。一体なにが……」

『彼に渡したものの中に何も描かれていないメモリがあったろう？』

「……はい」

『あのメモリに、元々彼が持っていた『ファントム』のメモリをコピーしたのさ』

「そんなこと……出来るんですか！？」

『出来る。フォーマットされたメモリなら、他のメモリの記憶を移

すことも可能だ』

「じゃあ、ジョーカーを借りる、って……」

『あぁ、あれは『ファントム』メモリの力さ。あのメモリは単体では限りなく弱い。けど、他のメモリの記憶を借りることが出来るんだ』

『そして、あのドライバーには、僕達、Wのメモリの記憶が入っている』

「つまり……」

『そう、仮面ライダーファントムはWの力を使えるというわけさ』

「それじゃあ、もう終わりにするよ」

ファントムはメモリをマキシマムスロットに入れ、軽く叩く。

『ジョーカーマキシマムドライブ』

「はぁぁぁぁ！！」

ファントムの足が紫色に光り出す。

「ジョーカーエクス――」

ドーパントに飛びかかる。――が

『うぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！』

――防がれた。

いきなりドーパントの身体から出てきた無数の昆虫によって……。

そして、その昆虫が爆発し出す。

「くぅ！」

爆発が止んだ時、そこには既にドーパントの姿はなかった。

――ドーパントとファントムの交戦から一夜明け

――「鳴海探偵事務所水都支店」

「パラサイトガイアメモリ……ですか？」

「そう、最近広まったみたいなんだけど……」

パラサイトガイアメモリ

基本的には、普通のガイアメモリと同じなのだが、

ドーパントがピンチになると身体から爆発する昆虫が出てくる。

そして、もう一つの性質。それが――

「メモリブレイクが出来ない！？　……じゃあ、殺してしまわないといけないんですか？」

「ごめん、語弊があったね。正しくは、普通には出来ない、かな。メモリがある位置を攻撃する必要があって、それに失敗すると、ドーパントのまま死んでしまう」

「そんなこと……簡単に出来るんですか？」

「出来ないよ」

それはそうだろう。

小春は何度もWの戦いを見ているが、ガイアメモリのある位置なんてパッと見には分からなかった
それに、Wである翔太郎とフィリップでさえも分からない、と言っていた。

「……でもね僕には、出来るんだ」

「えっ？　出来るって……メモリのある場所が分かるんですか？」

「うん……鼓動が聴こえるんだよ」

「鼓動…が？」

訳が分からないような表情でおうむ返しをする小春。

「そう、心臓みたいな音がね。メモリが近くにあれば聴こえるし、

ドーパントに一度でも触れれば、そのメモリの名前も分かるよ」

「……」

信じられないような話だ。

小春はそんな人がいるなんて想像したことすらなかった。

フィリップの『検索』は、何度か見ていたが、キーワードが必要で、そのために翔太郎は走り回っていたのだ。

だが、目の前にいる人物は近くにメモリがあればその鼓動が聴こえるし、ドーパントに触ればメモリ名も分かるという。

「あのドーパントが使っていたメモリは、『ハンマー』――鎚の記憶だね。そして、使用者もたぶん分かったよ」

「本当ですか！？」

「この事件のキーパーソンは「松山宗二」だ。」

「えっ？　どういうことですか！？　……もしかして、彼が……？」

「答えを出すのはまだ早いよ。僕は、少し調べてくるから、小春ちゃんは松山菜々さんを呼んで」

そう言うと海斗は事務所を飛び出していった。

――五時間後

「鳴海探偵事務所水都支店」

「えぇと、まだ探偵さんは来ないんでしょうか？」

「すみません。……あと少し待ってくださいね」

松山菜々が事務所を訪れてからかれこれ二時間が経っていた。

普通は、怒って帰ってしまっても不思議ではないのだが、人がいいのか、菜々は未だに海斗の帰りを待ってくれている。

帰ってきたら絶対金属スリッパで叩こう。

小春がそんな決意を固めていると、勢いよくドアが開き、海斗が事務所に入ってきた。

「申し訳ありません。遅くなりました。」

「遅いです！　松山さん二時間も待っていて下さったんですよ！」

小春は目を吊り上げて怒る。そんな小春に――

「だから、小春ちゃん。そんなに怒っちゃ可愛い顔が台無しだって。小春ちゃんは笑ってるのが一番！」

そんなことを堂々と言ってのける海斗。

「だれのせ――」

「あの！」

小春の怒りが爆発する前に菜々が口をはさむ。

「私はなんで呼ばれたんですか？　なにか分かったんですか！？」

「……はい。宗二さん、見つかりましたよ」

海斗は菜々に向き直り、微笑みかけた。

「本当ですか！？」

「はい。では、宗二さんと待ち合わせしてるので、そこに一緒に行きましょう」

「はい！」

海斗と菜々、小春は松山宗二と会うために事務所を出た。

事務所から歩いて約五分くらいの所にある河川敷――

「ここに父がいるんですか？」

「……もう」

「はい？」

「もう止めにしましょう。松山菜々さん…いや、寺田菜々子さん」

「「えっ？」」

いきなりのことに小春と菜々の声が重なった。

「えぇと、何をおっしゃっているんですか？」

「そうですよ！　まず、寺田菜々子って誰ですか？」

「その人の本名だよ、小春ちゃん。その人、菜々子さんは松山宗二さんの娘でもなんでもないんだ」

「えっ！？」

「なにを！？　松山宗二は私の父です！」

声を荒らげて言う菜々。

今まで静かだった反動で、その声には迫力があった。

だが、海斗は冷静に続ける。

「元々松山さんには娘なんていないし、家計が厳しいなんてこともない」

「何を根拠に！」

「僕は探偵ですよ？　無論、調べたんです。……貴女のこともね」

海斗はおもむろに懐から手帳を取り出し、内容を読み上げ始めた。

寺田菜々子さん。

松山宗二さんの部下で、自分よりも仕事が出来ないのに上の職に就いている彼に敵対心を抱いていた。

虎視眈々とその職を狙っていたが、彼はコネを持っていたため、その職から降ろすことが出来ずにくすぶっていた。

「……と、これで間違いないですよね？」

「なっ！？」

自分のことを的確に当てられ、動揺を隠せない菜々、いや、菜々子。

「……そして、ガイアメモリに手を出した…」

「だ、だから、何を根拠に！」

「貴女の右のポケットの中に『ハンマー』のメモリが入ってますよね？」

「！！」

自分のポケットを庇うようにする菜々子。
その動作が真実を物語っていた。

「……なんで？　私の演技は完璧だったはずよ！」

「貴女、僕と戦った時に、僕のことを探偵、と呼んだでしょう？
普通はこんな白スーツ着ている人が探偵だなんて思わないでしょう？」

「あ、自覚はあったんですね……」

もはや空気と化していた小春の呟きを気にせず海斗は言葉を続けた。

「……もう、終わりにしましょう。罪を償ってください。」

「……ふふ、ふふふ、あはははは！！！」

――『ハンマー』！

菜々子は狂ったように笑いながら、黄色いメモリを取り出し首筋に差した。

『もうこうなったらお仕舞いよ！　あなたたちも潰してあげるわ！』

「……もう、声は届かないみたいだね」

目を伏せ、落胆した声で呟き、懐からメモリを取り出す。

「小春ちゃん！」

「は、はい！」

「危ないから、ちゃんと離れてるんだよ？」

――『ファントム』！！

「変身！」

白い霧が海斗を包む。
そして、霧が晴れ、海斗はファントムに変身した。

「はぁぁぁ！」

まずは、ファントムの先制攻撃。

正面からのジャブ。

そして、ガードするせいでがら空きになった側頭部に、上段の回し蹴りを叩き込む。

『うぅぅ……』

「どうだ！？」

『あぁぁぁぁ！！』

やはりあまり効いていないようだった。

ならばと、ファントムはメモリを一度外し、再挿入する。

『ジョーカー』！！

ファントムの仮面が黒色に変わった。

肉体での戦闘能力が格段に上がった『ジョーカーフォーム』となる。

「さぁ、行くよ！」

『うぉぉぉぉ！！』

ハンマードーパントが拳を降り下ろしてきた。

ファントムは、その攻撃を受け流し、次の攻撃に転じる。

腹部を狙った膝蹴り。

『――ぐぅぅぅ』

見事に命中し、ハンマードーパントは倒れ込んだ。

「……そろそろ終わりにしましょうか」

マキシマムドライブを発動するためメモリに手をかけた瞬間――

『おおおおおおお！』

再び現れた無数の昆虫。

「忘れてたよ。……でも！」

『サイクロン』！！

『ジョーカー』から『サイクロン』へ、フォームを変える。

仮面が緑色に染まり、その途端、ファントムの身体に風がまとわり

ついた。

その風はファントムに向かってくる虫を一匹たりとも寄せ付けない。

虫はあらぬ方向に吹き飛ばされ、爆発してゆく。

そして――

『なぜ、なぜ私の邪魔をするの！』

「なぜかわからない？」

ファントムは一歩一歩ハンマードーパントに近づいて行く。

そして、メモリをドライバーから抜き取り、マキシマムスロットに入れ、叩く。

『ファントム／サイクロン――マキシマムドライブ』！！！

ファントムを包む風が次第に広がり、ハンマードーパントを巻き上げる。

その風に乗り、ファントムは翔び上がる。

「サイクロントルネード！！　はぁぁぁぁぁぁ！！」

暴風の勢いを味方につけたファントムのキックは、ドーパントの腹部に命中した。
そして、命中した腹部からメモリが排出され、割れる。

「なぜ、私の邪魔を……するの……」

荒い息を吐きながら、菜々子が変身を解いた海斗に再度問いかける。

海斗は菜々子に近づいていき――

――ギュッ

菜々子を抱き締めた。

「僕はただ泣いてほしくないだけなんですよ、この街にも……女性にも……」

「なに、を…？」

「貴女も例外ではありませんよ。たぶん最初は、軽い気持ちでメモリを使ったんでしょう？　だけど、メモリを使うにつれ、メモリの魔力に負け、呑まれてしまった……」

「……」

「……そんな人達を救うのが、僕の…仮面ライダーの使命なんです」

「もう、終わったんです。勿論、貴女がしたことは許されることではないですが、それでも罪を償って……もう一度生きてください」

「……うぅぅぅぅ……わぁぁぁぁん」

彼女は泣いた。
思い切り声をあげて泣いた。

海斗はそんな彼女をただ黙って抱き締めていたのだった。

――事件報告書

依頼人

松山菜々

依頼内容

父（松山宗二）を捜してほしい。

詳細

今回の依頼人の本名は、寺田菜々子。

松山宗二の会社の部下で、彼を今の地位からひきずりおろそうとしていた。

だが、メモリを手にしたことにより、魔力に呑まれて目的が彼の命を奪うことに代わってしまった。

さらに、『ハンマー』のメモリの持つ破壊衝動に動かされ、無関係の一般人女性を殺害。

結果

仮面ライダーファントムの力でメモリブレイクに成功。
彼女をメモリから解き放つことが出来た。

自分を取り戻した彼女は、その後、警察に出頭。
自らの罪を認め、罰を受け入れると言っているらしい。

「それで、なんで小春ちゃんは怒ってるの？」

「別に怒ってません！」

海斗は事件の報告書を書き終わると、顔を上げ、明らかに怒っている小春に質問をした。

だが、小春は理由を教えようとしない。

「明らかに怒ってるよね？　僕なにかしたっけ？」

「……自分の胸に手を当てて、考えてください！」

「うーん……」

実は、小春は事件の終盤、自分が全く相手にされず、空気と化していたことに怒っているのだった。

だが――

「あっ！　もしかして、嫉妬かなぁ？　菜々子さんを抱き締めたから？」

と、すっとんきょうな推理をした海斗。

「なっ!?　そんなわけ――」

「そっか…ごめんね。気付いてあげられなくて……。その分、今からたくさん抱き締めてあげるからね？」

「や――」

「……や？」

「やめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！！！」

――ガコーン！！

事務所に小春の怒声と、渇いた金属音が響き渡った。

――水都にあるとあるビルの最上階――

「それじゃあ、例の女は始末出来たのかぁ？」

「はい。『ハンマー』の行動を操ることに成功しまして、女と情報を抹消しました」

そこには、二人の男がいた。

言葉遣いから見て、上司と部下であると予想される。

「そりゃよかった！　オレ様たちのことを警察にばらされちゃ面倒だからなぁ」

上司と思われる男は、懐から一本のガイアメモリを取り出した。

そのメモリは、ビルの窓から入ってくる赤い夕陽の光を浴びても、
尚も黄金の光を放っていた。

第三話　現れたP／仮面ライダーの使命（後書き）

なんとか書けました（汗）

バトルシーンは異様に苦手

かといって、その他が上手いわけじゃない

どうしよう…

――コホン

とにかく『現したP』編はこれで終わりです

感想お待ちしています！

あっ

次回の更新は土日のどちらかになると思いますので…

ではでは

第四話　サボり魔なS／刑事からの依頼（前書き）

更新出来ました！

前回に比べると格段に薄いですよ…。

とにかくどうぞ！

第四話　サボり魔なS／刑事からの依頼

「はぁ……」

――水舞高校

「はぁぁぁ……」

時は、放課後。

高校生ならば誰もが待ち望む自由の時間。

そんな時間にも関わらず

小春は机に突っ伏し、大きなため息をついていた。

「収入は……なし、か…」

仮面ライダーファントム――海斗は無事ハンマードーパントを倒した。

しかし、依頼人がドーパントであり、依頼自体がなくなってしまったので、報酬がまったくなかったのだ。

それから一週間依頼は一切来ていなかった。
所長になったはいいが、こんな結果に終わり、正直不安を隠せない。

「……よし！　悩んでても仕方ありません、今日も頑張りましょう！！」

気合いを入れ直し、小春は探偵事務所へと向かった。

「こんにちは！」

「やぁ、小春ちゃん。こんにちは」

元気よくあいさつをすると事務所の海斗が答えてくれた。
今日も今日とて一応爽やかな笑顔である。

「お？　誰だ、このお嬢ちゃんは…？」

事務所には、先客がいた。

海斗とは対照的なくたびれた雰囲気を持った男性。
歳は四十代くらいだろうか。
短く切り揃えられた白髪とくわえたばこが印象的だった。

「あ、紹介しますよ、源さん。
彼女は、鳴海小春ちゃん。僕の助手兼この事務所の所長になった娘です。」

「そして、この人は加納源一郎さん。
現職の刑事さんだよ。」

「は、初めまして！　鳴海小春と申します。えぇと、よろしくお願いします！」

「おう、俺は加納源一郎だ。こいつのセクハラに困ったら、言ってくれ。逮捕してやるから」

海斗の紹介を受け、それぞれがあいさつを交わす。

「仕事をしない人が何を言ってるんですか？」

「うるせぇな。俺はやるときはやるんだよ！」

「えぇと……？」

小春が海斗と源一郎のやりとりに困惑していると、海斗が解説をしてくれた。

「この人はね、小春ちゃん、仕事をしないんだよ。めんどくさいという理由で仕事をしないで、いつも僕に厄介事を押しつけてくる厄介者なんだ。」

「えっと、それって職務怠慢じゃ……」

「いや、することはしてるぞ！」

「その上、毎回僕に一銭も払わないからね。本気でろくでなしさ」

「誰がろくでなしだ！　女にだらしないてめぇには言われたかないわ！」

「奥さんに逃げられたあなたには言われたくありませんね！」

「なんだと！？」

「なにか？」

「……」

「ん？　どうしたの、小春ちゃん？」

さっきからうつむいている小春に気づいた海斗は、源一郎との口論を打ち切り、話しかける。

「もしかして、具合でもわる――」

「……は……さい…」

「「えっ？」」

「払ってください！！！」

「うぉ！？」

いきなり大声でキレられた源一郎は、驚き後ろに仰け反った。
なおも、小春は続ける。

「今すぐ払ってください！！　今まで解決した分を！　早く！　迅速に！！」

「お、おぉ？」

「こ、こはるちゃん…？」

「海斗さんも海斗さんです！　ちゃんと請求してください！　事務所の状況わかってるんですか！？」

さっきまで事務所の経営に悩んでいた小春にとっては大問題であった。

「まぁ、ご愛嬌てやつだ」

「えっと、小春ちゃん、落ち着いて…」

「返事はイエスのみ承ります……」

「「……」」

「お二人とも返事は？」

「「……はい…」」

小春の迫力に、二人は頷くしかなかった。

「それで、今回はどうしたんですか？」

気を取り直して、海斗は源一郎に尋ねた。

源一郎が事務所に来て、すぐに小春が来たため話はまだしていなかった。

「あぁ、厄介なことが起こったらしくてな……」

「厄介なこと、ですか？」

紅茶を源一郎に出した小春が聞く。

「あぁ、最近起こってる連続殺人事件知ってるか？」

「知ってます！　死体の一部が切り取られてるっていうのですよね？」

「小春ちゃん、よく知ってるね」

「テレビのニュースで散々やってますから…。というか、逆に海斗さんは知らないんですか？」

「うん、お金なくてテレビ買ってないからね」

「……」

収入が入ったら最初にテレビを買おう。

そんなことを思う小春であった。

事件を知らない海斗に小春があらましを説明する。

事件が起こり出したのは、一週間くらい前、つまり、小春が水都に来た頃からであった。

最初に殺されたのは、三十代のサラリーマンの男性。死因は失血死。左腕が切り取られていた。

次は、二十代の無職の男性。

死因は同じく失血死で、今度は左足を切り取られていた。

そして、一番最近犠牲になったのが、二十代の女性。次は右足だったという。

「……女性が犠牲に…」

最後の事件にだけ海斗は食いついた。

「その女性の時が厄介なんだが……」

「どんな風に？」

女性が犠牲になったことが引っ掛かったんだろう、海斗は源一郎に詰め寄った。

「あぁ、今までは人体だけが異様にきれいな切り口で切られていたんだが…」

「今回はドアごと切られていた」

「ドアごとって…」

「被害者は自宅のマンション近くで襲われたようなんだが、自室に逃げ込んだところをドアごとスッパリと、な」

「……ドーパントですね」

海斗が静かに呟いた。

――水都にあるとあるビルの最上階

「順調かぁ？」

イスに座った上司が目の前に立つ部下に聞いた。

「はい。メモリの製造・販売共に良好と言えます」

「そうか。……ところで、この事件、ドーパントだな？」

上司と思われる男の手には巷で話題の連続殺人事件が載った新聞があった。

「はい。約一週間前にそのメモリを販売したのですが、その直後から使い出しています」

「ほう、なかなか使えるじゃねぇか。あと一件しでかしたら、ここに呼べ」

「幹部にするのですか？」

「使えるようだったらな」

「わかりました。……では、私は仕事に戻ります」

「おう、ご苦労だったな」

男は懐からメモリを取り出す。

そして、おもむろに
金色に輝くそのメモリを起動させた。

『　　』

第四話　サボり魔なS／刑事からの依頼（後書き）

感想お待ちしています！

第五話　サボり魔なS／所長のプライド（前書き）

S編二話目更新です！

毎度のことですが
駄文です……（汗）

それでも
読んでくださると
とても嬉しいです！

では、どーぞ！！

第五話　サボり魔なS／所長のプライド

源一郎の依頼を正式に受けた海斗と小春は、三件目の現場に連れて来られていた。

「これは…ひどいですね」

現場を見るなり海斗は呟いた。

血の臭い。

そこは、まるで処刑場のようで、室内の床はもちろん壁や切り裂かれた扉、あげくは廊下にまでベッタリと血がこびりついていた。

事件に慣れている海斗といえど、気分が悪くなる。

「……うぅ…」

振り向くと、小春が真っ青な顔をして口元を押さえていた。

海斗は忘れていた。

小春は風都で助手をしていたとはいえ、ただの高校生でただの女の

子なのだ。

配慮が足りなすぎた。

「小春ちゃん、こっちに！　源さん、ちょっと失礼しますね！」

「お、おう」

海斗は小春の身体を優しく抱きよせ、その場をすぐに離れた。

「……落ち着いた？」

「は、はい……」

現場を離れて、約三十分後、小春は落ち着きを取り戻していた。

顔色もいくらかよくなっている。

「ここで待ってて、僕が調べてくるから…それじゃ――」

「待ってください！」

小春を置いて、現場に戻ろうとした海斗を呼び止める。

「小春ちゃん？」

「大丈夫です……」

小春は、全く大丈夫じゃない様子で答えた。

「無理はダメだよ。それに、君は女の子なんだから、あんなもの見るものじゃない」

「でも……」

「僕に任せて……ね？」

「……はい」

笑顔だが、有無を言わせない雰囲気に、小春は半ば押し切られるように頷くしかなかったのだった。

そして、海斗は、小春の頭を軽く撫でて現場に戻っていった。

「待たせましたね」

「いんや、お嬢ちゃんは大丈夫か？」

「今は落ち着いています」

「そうか。……それじゃ」

「お願いします」

海斗は、源一郎に促した。

二人は黄色いテープで区切られた空間に入っていった。

玄関には惨状が広がっていたにも関わらず、中は比較的きれいだった。

被害者が几帳面だったのか、部屋を一通り見ても、塵一つ落ちていない。

血でベッタリと汚れている玄関以外は綺麗なままだ。

ふと、海斗の目に、玄関に敷かれた本来は白い、今は血で赤く染まったカーペットが入って来た。

「源さん、被害者は即死でしたか？」

「いや、失血死らしいからな。少しの間は生きていたみたいだが……。それがどうした？」

「玄関の外から玄関ごと斬られたなら、なんで部屋の中に逃げなかったんでしょうね……」

「あ？　なにいってんだ？」

「……普通、外に自分を殺そうとした者がいたら、内側に逃げるでしょう？　もし、内側に逃げていたならこのカーペットはもっと血だらけのはず……。　でも、そこまで汚れていない…むしろ血の痕は、外に続いている……」

「おい、つまり――」

「つまり、被害者は外から扉ごと斬られたのではなく……内側から斬られて、その余波で扉が斬られた……ということです」

「それじゃ、犯人は今回の被害者に関係が近いやつつーことか！？」

――被害者の自宅前

――ドスン

「あ、痛っ」

「すみません！！」

海斗たちの捜査が終わるのを、外でぼんやり待っていた小春は、人にぶつかってしまった。

ぶつかったせいで男の手荷物が散らばる。

それを慌てて、拾おうとした小春だったが――

「あっ！？」

散らばった荷物の中に、銀色のガイアメモリを見つけてしまった。

「ちっ！！」

男は荷物をかき集めると、そのまま逃げていった。

「ちょっと!?」

急いで追いかけたが……

「はぁ……はぁ、私…聞いてません……」

男の姿はどこにもなかったのだった。

――「鳴海探偵事務所水都支店」

「…ということで、容疑者が一人浮上した」

そう言うと、源一郎は自分の手帳から一枚ね写真を取りだし、机に放り出した。

「容疑者の名前は、佐藤幸平。三番目の事件の被害者の恋人だ」

「あっ！？」

写真を見た途端、小春が声をあげた。

「うぉ！？　びっくりしたぁ」

「どうしたの？　小春ちゃん」

「この人、さっき私が現場の前でぶつかった人です」

「なにぃ！？」

そう、写真に写っていたのは、先程小春がぶつかった男でだったのだ。

「それで、この人とぶつかったとき……」

「ガイアメモリが……」

「「！！」」

小春は夜道を一人、歩いていた。

街灯は何個かあるから、真っ暗で周りが全く見えないわけではないが、暗いものは暗い。

……怖い。

でも、怖がってもいられない！！

だって――。

「おい、嬢ちゃん、本気で言ってんのか！？」

源一郎が小春に詰め寄る。

「はい！」

小春は提案した。

もし彼が犯人ならば、次に狙うのは、ガイアメモリを見られた小春のはず。

ならば――

「私が囮になります」

「それはダメだよ」

海斗の言葉。

女の子のことを何よりも一番に考えている彼の言葉は、強くて……重かった。

そんな彼の気持ちを小春もわかっていた。

この一週間、彼のことを誰よりも近くで見ていたから……。

それでも――

「やります。やらせてください！　私、探偵事務所の所長なんです！　海斗さんは捜査をして、ドーパントと戦って、この街を守っているのに……」

「……小春ちゃん…」

「私はなにがなんでもやります！　それが、私が今できる唯一のことですから！」

「……」

「……」

「……わかったよ」

「おい、海斗！？」

大声を出す源一郎を海斗は制した。

「一度決めたら、聞かないよね？」

「はい」

「ハトコなだけあって、亜樹子さんによく似てるね。……それじゃあ、よろしく頼むよ、所長！」

「はい！！」

――だって、私は所長なんだから！！

第五話　サボり魔なS／所長のプライド（後書き）

どうでしたでしょうか？

読んでくださった方には
感謝感謝でございます！

次回更新は……明日とかにできたらいいなぁ……。

では、また会いましょう！

第六話　サボり魔なS／ハサミに勝つのは意思（前書き）

なんとか更新！

バトルに入ると、表現がなぁ……。

とにかくどうぞ！！

第六話　サボり魔なS／ハサミに勝つのは意思

――銀色のメモリを持つ男視点

昼間、元恋人の家の前にいた女。

その女にメモリを見られた！

どうする？

殺すか？

いや、これ以上は殺るべきではない。

これ以上はリスクを負うだけだ。

だが、生かしておいたほうがリスクが高いのではないのか？

そうだ！

ならば、殺そう。

オレには力がある。

この……メモリが……。

男はメモリを握りしめ、そして、起動する。

『シザース』！

ガイアウィスパーが暗闇に鳴り響いた。

『――――』

聞こえた！

小春は身構える。

確かに、あの機械音が聞こえた。

さすがにメモリ名はわからなかったけれど、近くにいるのは確かだ。

『シャァァァ！！』

――雄叫び――

振り向くと、銀色に光る怪物がすぐそこまで迫っていた。

――ズゴッ

『おぉぉぅぅ！？』

鈍い打撃音とドーパントのリアクション。
なんとドーパントが殴られたのだ。

『だ、誰だ！？』

当然の疑問である。
その疑問に答えたのは――

「僕だよ」

海斗であった。

『知らねぇよ！　だから、てめえは一体何者だ！？』

「小春ちゃん！　大丈夫だった！？　怪我とかは？」

「……えっと、大丈夫ですけど…」

「そうか。なら、よかったよ。よく、頑張ったね」

そう言って小春を抱きしめる海斗。

「なっ！？」

『おい、こら！！　なに、オレのこと無視してイチャイチャしてんだぁ！？』

今まで無視され、目の前でイチャつかれていたドーパントが、ついに我慢の限界を迎えた。

まぁ、当然である。

「あぁ、いたんだ」

小春を抱きしめていた海斗は、今までいなかったかのようにドーパントに話しかける。

『いたんだ…だ、と…？』

「……そういえば、何か聞かれてたね。……僕が何者か、だっけ？」

『あああああ！！　もういい！！　てめえも切り刻んでやるよぉぉ

お！！』

ドーパントが自らの腕と同化しているハサミをかざし、海斗に襲いかかる。

…が、それを事も無げにかわす海斗。

その左手には、青のロストドライバー。

そして、右手には、『ファントム』メモリが用意されていた。

「何者か……僕は、ファントム……仮面ライダーファントムだよ」

「変身！！！」

『ファントム』！！！

身体を霧が包み込み、海斗はファントムに変身した。

『らぁぁぁぁ！！！』

シザースドーパントのハサミがファントムに襲いかかる。

人体を切り裂いた余波で、鉄製の扉が綺麗に切れてしまうようなハサミ。

だが――

『なぜ……なぜ当たらねぇ！？』

ファントムには当たらなかった。

一撃も。

それどころか触れることさえ出来なかった。

『なにかしやがったのか！？』

「……してないよ」

そう、まだファントムはフォームチェンジを一度もしていなかった。

基本性能が低いはずの『ファントムフォーム』のまま戦っている。

「何もしてないよ、強いて言うなら、全力でやってるくらいかな」

そう言うと、ファントムは姿勢を落とし、下からドーパントのハサミを右足で蹴り上げ、がら空きになった腹部に左足で回し蹴りを放った。

『ぐぅぅぅ！？』

命中し、後退り、倒れるドーパント。

「まだまだいくよ！」

ファントムは更に距離を詰め、立ち上がろうとしたドーパントの足を払う。

そこから倒れたドーパントを蹴り上げ、拳で思いきりぶん殴った。

『うぅ！？』

ドーパントが声にならない声を上げながら、飛ばされていった。

「そろそろ潮時、だね」

ファントムがドライバーに手をかけたその瞬間――

『おおおおおお！！』

シザースドーパントの体から大量の昆虫が這い出てきた。
その昆虫たちは、ファントムに向かってくる。

『死ねぇぇぇぇ！！！』

『メタル』！！

ガイアウィスパーが響き渡ると同時に、昆虫が爆発を起こした。
――が―

「…ケホッ。煙たいね…」

ファントムは全くの無傷であった。

『なにを!?』

「ん？　フォームを変えただけだよ」

ファントムの仮面が銀色に染まっていた。

『メタルフォーム』

Wのボディメモリ・メタルの特性を持ったフォームである。
防御力がずば抜けて高くなり、腕力も上がる。

『くそっ！　こうなったら!!』

ドーパントは物陰に隠れていた小春を狙って、走ってきた。

「えっ!?」

『死ねぇぇぇぇ！』

「きゃぁぁぁぁ！！」

小春は目をつぶる。

死んだ。

そう思ったが――

「目を開けて、小春ちゃん」

「……えっ？」

攻撃の代わりに降ってきたのは、優しい声。

恐る恐る目を開く。

そこにはファントムが、海斗がいた。

「今回はホントに狙われるね、小春ちゃん」

「ははは」

冗談めかした言葉に緊張の糸が切れ、地面に座り込む小春。
その頭を軽く撫でて言う。

「そこで座っていていいよ。……もう終わる」

『切れない、だとぉ!?　オレの『シザース』メモリは全てを切れるはずだ!!』

「君みたいに大した覚悟もしないで、メモリを使えばそうなるよ」

『なんだと!?』

「その証拠に、君とそのメモリの適合率は３０％……僕の半分にも満たない」

ファントムはそう言って、シザースドーパントの腕をハサミの部分を掴む。

そして、マントの中から、『メタルフォーム』専用の武器であるシャフト・メタルシャフトを取り出し、ドーパントを突き飛ばす。

「それに、僕は怒ってるんだ。女性に手をかけたこと、そして、なにより小春ちゃんを殺そうとしたこと」

「師匠たちのお株を盗るようで悪いけど、あえて言わせてもらうよ……」

ファントムは右腕を前に出し、ドーパントを指差す。

「さぁ、お前の罪を数えろ！！」

『ファントム／メタル――マキシマムドライブ』！！！

メタルシャフトにファントムメモリを挿入すると、シャフトから銀色の光が溢れだした。

ファントムはドーパントに向かって駆け出す。

『ナメるなぁぁぁぁ！！』

ドーパントも腕のハサミをファントムの方に突きだしながら、突進していく。

――キンッ！

金属音が鳴り、ハサミとシャフトがぶつかった。

その結果――

『オ、オレの腕がぁ！？』

腕のハサミが壊されたことに動揺するドーパントに追い討ちをかけるように、ファントムが攻撃を繰り出す。

「メタルブランディング！！　はぁぁぁぁぁ！！！」

突き出されたシャフトはドーパントの左肩を突き、光が爆発、衝撃が開放される。

そして、そこからメモリが排出され……壊れた。

「これで、終わりだ」

「うぅぅ」

変身を解除した海斗は、倒した相手を一瞥もせずに、小春に駆け寄る。

「大丈夫だった?」

「……はい、大丈夫で――わっ!?」

口では大丈夫と言っていても、身体からは力が抜け、結局、海斗に抱き抱えられてしまう。

そんな小春に海斗は

「お疲れさま、所長」

そう、声をかけたのだった。

――事件報告

依頼人

源さん（加納源一郎）

依頼内容

仕事を手伝え

（これは立派な職務怠慢でしょう？）

詳細

死体の一部が切り取られることを共通とする、連続殺人犯を捕まえるのが、目標だった。

三件目の事件から、ガイアメモリの関与が認められた。

犯人は、三件目に犠牲になった女性の恋人、佐藤幸平。

使用したメモリは『シザース』。ハサミの記憶だったが、適合率は３０％前後でかなり低かった。

動機は、カッとなって殺した、らしい。

結果

今回は、小春ちゃんが囮になることで、犯人を誘き寄せることが出来た。

やはり小春ちゃんも亜樹子さん同様、一度言い出したら止めることはないようだ。
今後は気をつけよう。

それ以外は
三つ目のフォーム・『メタルフォーム』の力も分かったし、次の犯行も阻止できたし中々の成果であった。

ただ――

「いやぁ、ありがとな！　嬢ちゃんと海斗のおかげで無事解決した！」

「それにしても、源さんが捜査に積極的だったのは、意外でしたね」

「……まぁ、クビかかってたからな…」

「あの…！」

「ん？　どうした、嬢ちゃん？」

「報酬をお願いします！」

「……」

その後、「鳴海探偵事務所水都支店」には、四十すぎのおっさんと女子高生が金について口論する、というシュールな光景が広がっていた。

――水都自然公園

「貴方ですね、一週間前にパラサイトガイアメモリを買ったのは…」

スーツ姿の男が、座っていた初老の男性に話しかけた。

「何か御用ですかな？　ワシは忙しいのですが」

「貴方を試しに来ました。社長は貴方を幹部入りさせたいようですが……私は反対なのです」

「ワシを試しに……？　ほほほ、言うのぉ！　若造が！！」

『オペ』！！

老人がメモリを起動する。が、それを見て、スーツの男は両手を挙げる。

「早まらないで頂きたい。私は戦えません」

どうやら降伏の意思表示だったようだ。

「ならば、どうするというのかね？」

メモリを構えたまま、老人は聞いた。

「大丈夫です。メモリを見れば分かりました。貴方は合格です」

スーツ姿の男は老人に背を向け、歩き出す。

「どこへ？」

「ご案内致します」

「我々の会社――エンタープライズへ」

第六話　サボり魔なS／ハサミに勝つのは意思（後書き）

次あたりに
今までの設定を
載せようかと思います。

それでは、次回に！

登場人物設定（前書き）

まずは

現在までに登場し
ある程度登場し続けるであろう主要登場人物の設定です！

そのうち

メモリとか
用語の設定も作ります。

登場人物設定

登場人物

水町海斗

年齢不詳（今のところ）
職業は探偵

水都で探偵事務所を開いている少年
いつも白いスーツを着ている

無類の女好きで
フェミニスト
それが原因で（女性には無償で、男性からは依頼を受けないスタンスを続けていたため）探偵事務所の経営は火の車だった

風都にいた時もあり
その時に鳴海探偵事務所の面々に助けられ、翔太郎を師と仰ぐ

探偵としてのイロハも
その時に教わった

鳴海小春

１８歳
華の女子高生
照井亜樹子のハトコ

元々は
風都の鳴海探偵事務所で
探偵助手（いわゆる雑用）をしていたが
左翔太郎の依頼で海斗の探偵助手としてやって来た

しかし
海斗の有り様を見て激怒

所長に名乗り出て
水町探偵事務所から
鳴海探偵事務所水都支店に改名した

加納源一郎

４０歳後半
水都署超常犯罪捜査課に勤める刑事

サボリ癖があり
いつも上司からお叱りを受けている

面倒な事件をいつも海斗に押し付ける
その際、金は払わなかったが、小春の出現で渋々払うようになる

カイ

年齢不詳
情報屋

外見は完全に小学生
だが、小春をガキ扱いしたり、海斗に対してタメ語だったりと、年齢は不明

水都のことなら
なんでも知っているが
『ガイアメモリ』のことは知らない模様

社長と呼ばれる男

現在、名前、年齢、その他一切が不明

判明しているのは

「エンタープライズ」と呼ばれる会社の社長であること、金色のガイアメモリを持っていることのみ

秘書と思われる男

社長の部下であり
手足のような存在

常に冷静沈着で無表情、何を考えているかは不明だが社長に忠実に従っている

戦闘はしない、と言っている

初老の男

年齢は５０歳後半
白髪・白髭で、いつも杖をついている

「エンタープライズ」に幹部として、招かれている男

『オペ』のメモリを持つ

登場人物設定（後書き）

次回は

メモリ・用語編の設定かなぁ

メモリ・用語設定（前書き）

予告通り
メモリ・用語設定です

読みにくいかもしれませんが、どうぞ！

メモリ・用語設定

場所・建物設定

水都

本作の舞台となる街
水力発電によって、街の電気のほぼ全てを作っている

姉妹都市である風都が
エコの街として成功したため作られた

噴水や小川といった
水をモチーフとしたものが街の至るところにある

水町探偵事務所

本作の主人公・水町海斗が経営する探偵事務所

外見は、噴水に囲まれた西洋風の建物
内装は、風都の鳴海探偵事務所と瓜二つである

小春が来るまでは
海斗の主義のせいで
経営難だった

鳴海探偵事務所水都支店に改名してからは、少しずつ黒字に近づいてきている

水都署

刑事・加納源一郎らが
勤務する警察署

水都署の超常犯罪捜査課は風都署の同名課と協力体制をしいている

水都自然公園

水都で一番大きな公園

中央に大きな噴水があり
そこから半径３キロほどが公園の敷地

老若男女が集まる

エンタープライズ本社

水都で最も大きな企業

表向きは貿易会社

ビルは２５階建て

メモリ設定

『ファントム』：Ｐ

幻の記憶を引き出すメモリ

全てのガイアメモリの中で唯一、他のメモリから記憶を引き出すことができる

元々は、園崎家に保管されていたゴールドメモリだったが、消失
いつ海斗の手に渡ったかは現在、不明

フィリップからフォーマットされたメモリを渡され、その中に取り込み、純化した

パラサイトガイアメモリ

水都に流通するガイアメモリ
通常のガイアメモリと違い、ブレイクするためには的確にメモリのある位置に攻撃しなければならない

少しでも攻撃がずれると
体内でメモリがブレイクされ、使用者が死に到る

また、ドーパントがピンチに陥ると、体内から爆発する昆虫が発生する

『ハンマー』：H

鎚の記憶を引き出すメモリパラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、腕がハンマーになり、圧倒的な力が手に入る

本作では、寺田菜々子が使用したが、ファントムに敗れ、ブレイクされた

『シザース』：S

ハサミの記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、両手が巨大なハサミになる。
ダイアモンドも斬ることが出来る

本作では、佐藤幸平が使用したが、適合率が３０%前後だったため、メモリの力を充分に引き出せず、ブレイクされた

『オペ』：O

手術の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

能力は現在、不明

使用者は

白髪白髭の初老の男性

メモリ・用語設定（後書き）

メモリ設定は
連載中に何回か
追加で書きますね

次回は本編に戻ります！

では、また！

第七話　Mの七不思議／ただの小休止（前書き）

ちょっと短いですが
更新しました！

どーぞ！

第七話　Mの七不思議／ただの小休止

空がキレイです……。

私は、学校の教室の窓から外を眺めていた。

水都に来てから、早くも三週間が過ぎようとしていた。

私が転入してきた、この水都高校のこのクラスにも慣れて、何人か友達も出来た。

それだけなら、順風満帆なんだけど……。

「小春、小春！！」

「えっ？」

「ドーーーン！！」

不意に身体に衝撃が走る。気付いた時、私は床に押し倒されていた。

「なっ！？」

「ははは！　びっくりした？　こはるぅ～！」

「かなえちゃん！　いつも言ってますけど、突然突進してくるのは、止めてください！」

私はいつものように叱りつけた。

私に突然突進してきたのは、私の友達・空野叶。

私がここで一番最初に友達になった娘だ。

元気が服着て歩いてるようなもので、いつも人に抱擁という名の突進をしてくる。

「むぅぅ…だって、小春なんかぽけーっとしてたんだもん！　なんか悩んでんのかなぁ～て思って」

「……まぁ、悩んでますけど…」

「お？　どんな悩み？　このかなえ様が聞いて差し上げよう！」

「一介の高校生は本来持ち得ない悩みですよ…」

そう、私の悩みは、私が所長を務める探偵事務所の探偵のことだ。

あの探偵は、何回言っても女の人からしか依頼を受けようとしないし（源一郎さんは除く）、その依頼も無料でやろうとするし……。

本当に最悪……。

「ふむ……」

私の話を聞いたかなえちゃんは、腕を組んで何かを考えている模様。

なにか嫌な予感が……。

「よし！　私がその探偵くんを叱ってあげよう！」

「えっ！？」

「そうしようそうしよう！　という訳で、小春！　探偵事務所に連れてって！」

しまった！

これが狙いだったんだ！

「いや、その……面白くないですから…」

「いやいや、面白いかどうかなんて関係ないよ！　友達が困ってたら無償で助けるのが空野叶という女だ！」

嘘だ！

絶対に面白そうだからだ！だって、目が輝いてる……。

「えっと、その……また明日！」

「あっ！？　待て、こはるぅぅぅ！！」

逃げるが勝ち。

明日、何か言われるかもしれないけど……。

私は探偵事務所へダッシュで逃げたのだった。

「やぁ、小春ちゃん」

事務所に入ると、いつも通り海斗さんが紅茶をいれていた。

「飲む？」

「あ、お願いします」

お客さん用のソファに倒れ込んでしまう。

……ふかふかでキモチイイ…。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

起き上がって、海斗さんの淹れた紅茶を飲む。

おいしいです。

「そんなに慌ててどうしたの？　僕に早く会いたかったとか？」

「そんなんじゃないです」

「あ、そうだ！　小春ちゃんにお客さんが来てたんだよ」

「……私に？」

誰でしょう？
もしかしてアキ姉さんかな？

「おっす！　オラ、かなえ（＾３＾）／」

「……」

……来ていた。

「…って、なんでいるんですか！？」

「あぁ、僕が招待したんだ。小春ちゃんを探してたみたいだったからね」

「というわけだよ、こはるぅ～」

「……」

「それで、叶ちゃんから聞いたんだけど、悩みがあるのかい？」

「……」

「……小春、ちゃん？」

「ふ、ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

――ガンッ！

叶をここに入れたこと。
そして、悩みの原因である張本人が心配したこと。

さぁ、お前の罪を数えろ！

……ふぅ、すっきりした。

「小春……」

「なんですか？　叶ちゃん」

「探偵くん、白目剥いてるぞ？」

「……」

「こはる？」

「……やりすぎました」

その後、海斗さんが目を覚ましたのは、二時間後のことだった。

――「エンタープライズ」本社・社長室

ビルの最上階に位置する社長室には、三人の男がいた。

一人は椅子に座り偉そうにしている。

一人はスーツに身を包み、無表情で立っている。

そして、最後の一人は、初老の男性で、穏やかな表情で来客用の椅子に座っていた。

「まずは、紹介をしておこう。オレは天城王芽、この会社の社長だ！　で、こっちのスーツが宮内という、オレの秘書だ」

「以後、お見知りおきを」

天城の紹介に合わせるように宮内は頭を下げる。

「では、ワシもさせて頂きますかな。……ワシは、白石龍平と申し

ます。職業は医者。……それくらいですかな」

「それだけじゃないだろ？　ガイアメモリ研究者でドーパントの医者でもある。……違うかぁ？」

「お見通しですな。……では、どうするのですかの？」

白石は杖をついて立ち上がり、天城を見据える。

「お前の力が欲しい。幹部としてウチで働かないか？」

「……」

「どうだ？」

「嫌だ、と答えたら、命はないでしょうな。……なりましょう、幹部に…」

「歓迎する」

天城は白石と握手を交わす。

その光景を、宮内はじっと見ていた。

――風都署・超常犯罪捜査課

そこの課長・照井竜は部下の刃野から報告を受けていた。

「なに!?　井坂深紅郎の師匠だと……」

「はい、なんでも、井坂が医学部だった頃に世話になった教授らしく、ガイアメモリに関わった後も、度々会っていたようです」

「ウェザーを手にした後も……名前は、その教授の名前は分かったのか!?」

「はい」

「白石龍平、という男です」

第七話　Mの七不思議／ただの小休止（後書き）

という訳で
事件は発生しませんでした

次から入ります。

あと
奴らが始動し出しました

天城王芽（あまぎおうが）

宮内（みやうち）

白石龍平（しらいしりゅうべい）

一応読み方だけ補足です。

では、また次回で！

第八話　Mの七不思議／消える人々（前書き）

更新しました！

駄文になってますが
よかったら見てください。

あと、文を書くのが楽しいっす！

第八話　Mの七不思議／消える人々

「とにかく！！」

声を荒立てる小春。
その前には、正座をする海斗と叶。

「海斗さんは仕事をしてください！　叶ちゃんは用がないなら帰ってください！」

「いや、僕は依頼が入ってないだけだよ？」

「私も用事はあるぞ！」

小春の剣幕にも負けず、二人は発言する。

「……海斗さんは…しょうがないとして……。叶ちゃんは？」

「調査依頼にきた！」

「なんのですか？」

「七不思議！！」

「「……えっ？」」

小春の友達が持ち込んだ依頼内容は、近頃学校で起こっているという、七不思議の一つ「消える生徒」の調査というわけである。

「なんでそんなことを？」

「いやぁ、何人かほんとにいなくなった人、いるらしいからさ！生徒会長さんとして黙ってはいられないのですよ！」

「……叶ちゃん、生徒会長だったんですか？」

「おうよ！」

「それは……意外というか…無謀というか……」

「とにかく、その依頼、引き受けるよ」

「海斗さん！？」

「実際に被害は出てる。だけど、噂レベルじゃ警察は動けない。小春ちゃんだって危ないわけだし……この依頼は引き受けるよ」

「……わかりました」

まだ微妙に納得のいっていない表情ながらも小春は頷いた。

――夜・水舞高校

海斗と小春、叶は、夜の学校に侵入していた。

「だ、大丈夫なんですか？　これ、犯罪じゃ……」

「大丈夫大丈夫！　生徒会長がいるんだぞ？　どんなことだって許される」

「いや、それは……」

どうやら叶は、生徒会長だからという理由で全てがまかり通ると思っているらしい。

「小春ちゃん、考えてごらん？」

「なんですか？」

「源さんって警察なんだよ？」

「……なら、大丈夫ですね」

海斗の言葉に本気で安心する小春。

源一郎の怠慢ぶりを見ると警察に捕まりはしないだろうと思えてしまう。

「それじゃあ、調査を始めようか」

「おうさ！」

「はい」

――理科室

「ここは……」

「理科室！　ここにまつわる七不思議は『走る人体模型』！」

「定番ですね」

「定番だね」

三人は人体模型に近づいていく。

「異常は……ないみたいだね」

「これが行方不明事件に関係するとも思えませんし……次に行きましょう」

「おうさ」

――音楽室

「ここはベートーベンかな？」

海斗がこれまた定番なことを言い出す。

「当たり！　『笑うベートーベン』！」

「うわぁ…なんか……」

嬉々として言う叶とは対照的に小春は飽々としながら言う。

「これは立派なベートーベンだね、額に入ってるのは初めて見たよ」

「なんにせよ、ここも関係無さそうですね」

「そんじゃ次行きますか！」

一行は理科室を出て、次の場所に向かった。

――踊り場

「ここに何かありました？　なにもなかったような気がしたんですが……」

小春が首を傾げる。

小春が水舞高校に来てからここは何度も通ったことがあったが、ここには特筆すべきものはなかったはずだ。

「七不思議つっても、昔に出来たものだからな。ここは『午前四時の大鏡』」

「どういう話なんだい？」

「それはですね……」

――ドクン

「！！」

「……海斗さん？」

「いるよ……。ドーパントだ……」

「えっ！？」

海斗は小春たちを置いて、鼓動の方へ走り出した。

「……小春……探偵くんは、どこ行ったの？」

「えっと……」

海斗が仮面ライダーであることを教えていいのか、悩んだ小春は――

「きっとお手洗いですよ」

と答えた。

「ここか！？」

海斗が駆けつけたのは、一階の男子トイレ。

鼓動はここから聴こえていた。

そして――

『あ？　なんだ、お前は』

案の定ドーパントがいた。

全身が光沢を帯びた銀色で特徴という特徴は他にはなく、まるでただの金属の塊のようだった。

そのドーパントは、警備員と思われる男性を引きずっていた。

「僕は、仮面ライダー……君の敵だよ！」

『ファントム』！！

「変身！！！」

ファントムへと姿を変えた海斗は、そのままドーパントに殴りかかる。

「はぁぁぁぁぁぁぁ！！」

『……ちっ』

軽く舌打ちをすると、ドーパントはその攻撃を避ける。
そして……

『お前と戦う気はない！』

そう言うと、トイレの窓に向かって走っていく。

そして、そのまま窓を開けもせずに窓を通過する。

「なっ！？」

慌てて駆け寄り、窓を開けて外を見る。
しかし、ドーパントの姿はなく、ただ夜が広がるだけだった。

――「エンタープライズ」本社

「被験体が必要ですな」

初老の男性・白石が言った。

「やはりワシ個人では研究にも限界がありましたからな……ここに入ったなら材料を提供して頂きたい」

「いいだろう！　宮内！」

天城は自分の秘書である宮内を呼びつける。

「はい。準備はしてあります。下の者が数名動いており、あと数日で実験用の人間を回収する予定になっています」

どこからともなく現れた宮内がそう報告すると、天城は満足そうに頷き、白石の方に向き直る。

「と、いうわけだ。どうだ？」

「いいですな。楽しみにしてますよ」

白石は、懐からガイアメモリを取り出し、おもむろに起動させる。

『オペ』！

――鳴海探偵事務所水都支店

『おぅ、海斗！　そっちから電話かけてくるなんて珍しいじゃねぇか。どうしたんだ？』

海斗が電話をかけた相手、それは海斗の探偵の師匠・左翔太郎であった。

「翔太郎さん、フィリップさんはいますか？」

『いるが……ドーパント絡みか？』

「……はい」

『わかった、待っとけ』

それだけのやり取りで察したらしく、翔太郎は電話を離れ――

『やぁ、水町海斗。僕の力が必要かい？』

少しの間があって、フィリップが電話に出た。

「はい、『検索』をお願いします」

『了解した』

電話の向こうでフィリップが「地球の本棚」に入った。

『キーワードは？』

「……『水舞高校』……『失踪』……『七不思議』……『通過』」

『……』

海斗は待つ。

今、電話の向こうでは『検索』が行われている。

この『検索』が終わったら解答がでるはずだ。

だが――

『……『検索』出来ない』

「えっ!?」

『どうやらキーワードが違っているようだ。……『通過』……たぶんこれが間違っている』

「……」

海斗は考える。

しかし、これ以上のキーワードはなにもない。

「『鏡』!」

海斗の横から声がした。

小春であった。

「小春ちゃん?」

「あの後、叶ちゃんから聴いたんです。たぶん七不思議の『午前四時の大鏡』が関係してると思うんです。……だから、『鏡』」

「……フィリップさん」

『なんだい？』

「キーワードの訂正と追加をお願いします。……『通過』を訂正、『鏡』を追加」

少しの間。
そして――

『出たよ』

「本当ですか！？」

『あぁ、ドーパントは……』

――水都署

「ご苦労様です、照井刑事」

源一郎が軽く敬礼をした。その相手は、風都署の刑事・照井竜であった。

「敬礼はいい。それより白石龍平のことは調べてあるのか？」

「いえ、それが白石龍平という名前以外は元医者という以外には分かりませんでした」

「……ガイアメモリとの関係は…？」

「一切不明です」

「……」

「どうしますか、照井刑事」

照井は、しばらく沈黙を貫いた後、言った。

「オレも捜査に加わろう。ガイアメモリには、詳しい方だからな」

第八話　Mの七不思議／消える人々（後書き）

どうでしたでしょうか？
感想お待ちしてます！

次回更新は土日かな？

では、また！

第九話　Mの七不思議／黄金に染まる翼（前書き）

更新しました

どうぞよろしく！

第九話　Mの七不思議／黄金に染まる翼

「つまり、鏡に引きずり込まれている、と……？」

フィリップから『検索』の結果を聞いた海斗は、驚きの声をあげた。

『その通り！　おそらくメモリ名は『ミラー』、鏡の記憶だ。ドーパント自身とそのドーパントに触れた物体・生物を鏡の中に引きずり込むことが出来るのさ』

「そんなことがあり得るんですか……？」

小春も海斗と同様の質の声をあげた。
その疑問にフィリップは淡々と答える。

『あり得るさ。メモリの力は人智を超えている。それは君たちも知っているだろう？』

「「…はい」」

『相当厄介な相手だね。鏡に入られたら、こちらからは何の干渉もできない。何か対抗策はあるのかい？』

「……」

黙るしかない。

海斗は、これまで『ハンマー』と『シザース』の二体のドーパントと戦い、勝利した。

ただし、二体とも特殊能力が備わっていない、言ってしまえば、ただの力バカだったが……。

だが、今回の敵は違う。

よりにもよって鏡の中、攻撃の届かないところに逃げられてしまう。

今の海斗のメモリでは、対抗する術は……ない。

『じゃあ、どうする？　諦めて大人しく見ているだけにするかい？』

若干挑発めいたフィリップの言葉。

「いえ、戦いますよ。小春ちゃんの身の安全を確保するためにも、ね？」

にこりと微笑み、小春の頭を撫でる。

「だ、だから、止めてください！！」

小春は海斗の手を振り払い、スピーカーになっている携帯に向かっ

て聞く。

「弱点はないんですか？」

『弱点というならば、ミラードーパントは身体能力が著しく低い。おそらく普通の人間レベルだろう』

「じゃあ……」

『そう、鏡に逃げらなければ確実に倒せる』

――夜・水舞高校

海斗と小春は、再び高校に忍び込んでいた。

今、二人がいるのは、例の大鏡の舞台である踊り場の陰。

約一時間ほどこうして張り込んでいる。

「……」

だが、この一時間小春は黙ったままである。

昨日は叶も一緒にいたからこの暗闇も怖くなかった。あの明るい調子に助けられていたということが今になって分かる。

それに――

「小春ちゃん、怖かったら抱きついててもいいからね？」

別の意味でも怖い。

この一見好青年なスケコマシと暗闇に二人きり。

恐ろしい。

「……小春ちゃん」

「な、なんですか！？」

「しっ！　来たよ、ゲストの登場だ」

踊り場の壁の一部が剥がれ、高さ二メートルをゆうに超える鏡が現れた。

そして、そこから例の銀色のドーパントが出現した。

ドーパントが鏡から離れたのを確認し、二人は物陰から飛び出した。

「大人しくしてください！！」

『誰だ！』

小春の声に振り向くドーパント。

そして、海斗が言う。

「前も言ったよ。……僕は君の敵で、仮面ライダーだ！」

「変身！！」

『ファントム』！！

ファントムに変身し、ドーパントに向かっていく。

『ちっ！』

ファントムに背を向け、走り出すミラードーパント。向かう先は大鏡。

「行かせないよ！」

『ルナ』！！！

ガイアウィスパーが鳴ると同時に、ファントムの仮面が金色に替わる。

ファントムは、ドーパントとの間が空いているにも関わらず、その場で拳を突き出す。
本来なら、絶対に届かない距離。

だが――

「はぁぁぁぁ！」

『ぐぅ！？』

命中。
ファントムの腕が伸び、鏡に逃げようとしたドーパントを殴り飛ばしたのだ。

『なにが、起きた！？』

ミラードーパントは、事態を把握出来ずに叫ぶ。

「こういうことだ、よ！」

『なっ！？』

今度はファントムの脚が伸びて、蹴りがドーパントの脇腹を打ち抜いた。

その衝撃に耐えきず、ミラードーパントは後ろに吹き飛ぶ。

「いける！」

フィリップの検索通り、ミラードーパントは身体能力が低かった。

勝利を確信していた。

だが――

『くそっ！？』

ドーパントは、どこからか手鏡を取り出していた。
そのまま鏡の中に、入る。

「逃がさないよ！」

腕を伸ばすファントムだったが、一足遅く、ドーパントは鏡の中に逃げ込んでしまった。

「逃げられ、た……」

変身を解く。

海斗はその場に残された手鏡を手に取った。

「油断したよ、こんなことも出来たんだね……」

油断していた。

今も――

「海斗さん！！」

「！！」

声のする方を見る。

叫ぶ小春の後ろに――いた。

奴が、窓ガラスから出てきていた。

「小春ちゃん！？」

手を伸ばす。

油断したことを後悔するよりも早く――

だが、もう遅かった。

「海斗さ――」

小春の姿は、夜を映す窓に呑まれていた。

「くそっ！！」

海斗らしくない、乱暴な言葉。

あの時から棄てたはずの口調が、出てしまう。

あの時の――

『ぐぁぁぁ！？』

「！？」

悔やむ海斗の前に、ミラードーパントが転がってきた。

「なにが……」

何が起きているか、わからない。
なぜ逃げたはずのドーパントがここにいるのか。

わからない。

――カツン

――足音。
それはあの大鏡の中から聴こえてくる。

何かが……誰かが出てくる。
鏡の中から。
光輝く無数の羽根とともに……。

『……』

それは、黄金の騎士だった。
まるで、鳳凰を連想させるような姿。

闇夜の中でも、その輝きを失わず、存在している。

そう、姿こそ違えど、それはまるで――

「仮面、ライダー…？」

「海斗さん！！」

呆然としていた海斗に、駆け寄ってきた影。

小春であった。

「小春、ちゃん？」

「はい！」

「大丈夫なのかい…」

「大丈夫です。あの人が助けてくれたんです」

「……」

黄金のライダーは、ドーパントに近づいていく。

『な、なんなんだ!?』

『……』

『くっ!?』

逃げようとするドーパントだったが――

『アドベント』

機械音が鳴り響き、鏡の中から黄金の鳥が現れる。

『ひっ!?』

その鳥は、ドーパントを爪で掴むと、鏡の中に引きずり込んだ。

その後を黄金のライダーがついていく。

「どこに行ったんでしょうか？」

「待ってて」

海斗はメモリの鼓動を探す。

―トクン

「いた！　外だ。行くよ、小春ちゃん」

「は、はい！」

――水舞高校・校庭

『いきなりなにを！？』

『……』

やはり答えないライダー。

言葉を発する代わりに、杖のようなものを取り出し、ベルトから抜き出したカードを入れる。

『ソードベント』

機械音の直後に、空から剣が降ってきた。

それを掴み、ドーパントに向かっていく。

『……』

『ぐぅ！？　ぐぁぁぁ！？　うっ！』

無言で斬る。斬る。斬る。

『くっ、なめるなぁ！』

ミラードーパントも身体能力が低いなりにかわして、黄金のライダ

ーに近寄り、殴りかかった。

しかし、ライダーはそれを受け止め、ドーパントに囁きかけた。

『うちの生徒に手を出されたら、黙っておけないさ。……私の立場上、ね』

『な、に…ぐぁっ！？』

ライダーは、ドーパントを蹴り飛ばし、距離をとる。

そして、一枚のカードを使う。

『ファイナルベント』

鳥が現れ、ライダーは鳥とともに飛翔していく。

「ダメです！」

「待ってくれ！」

ライダーが攻撃を繰り出そうとしたちょうどその時、校庭にたどり着いた海斗と小春は声をあげた。

「その怪人は元は人間なんだ！　そのまま攻撃を当てたら確実に死んでしまう！」

『……』

ライダーは鳥から飛び降り、地上に降り立った。

「あとは、僕がやるよ」

黄金のライダーは静かに頷き、姿を映すガラス窓に消えていった。

「それじゃ、行くよ」

『くぅ…！』

『ファン――

『ナイト』！！

ファントムを起動するより早く、別の起動音が聴こえた。

「！！」

「なんですか！？　さっきの……」

海斗たちが周りを見渡す。――何もない。

そう、何も――

「か、かいとさん！　あのドーパントがいません！」

「どこに……」

ドーパントが忽然と消えた。

影も形もなく、消えた。

後に残ったのは、暗闇と沈黙だけであった。

――事件報告

依頼人

空野叶

依頼内容

水舞高校七不思議と失踪事件の調査

詳細

依頼人は小春ちゃんの友達の叶ちゃんだった。

今回の事件には、ミラードーパントが関わっていて、人々を鏡の中に引きずり込んでいた。

結果

ミラードーパントと交戦したが、逃がしてしまう。
それどころか、小春ちゃんを拐われてしまった。
あの黄金のライダーがいなければ危なかった。
『あの時』のようにならないためにも、油断・慢心は捨てないといけない。
ところであのライダーは、何者だったんだろうか。

――とある路地裏

『うっ…』

ミラードーパントは目を覚ました。
ここはどこだ？
先程まで仮面ライダーと戦っていたはずだが……

『仕事……』

『！』

声がした。
周りを見渡すが、何の姿も見えない。
見えるのは、ただの闇。

『仕事に失敗しましたね』

『い、いや！　失敗していない！　鏡の中に十人ほどいる』

『その十人もあの黄金の仮面ライダー・オーディンによって解放されました』

『なっ！？』

『つまり、任務失敗。……宮内副社長からの伝言です。使えない人間はいりません。死んでください、だそうです』

その声がした次の瞬間――

『うぁぁぁ、まだ、まだ死にたくない！』

闇がミラードーパントを呑み込んでいく。

闇と肉体の境界が曖昧になっていき、そして、消えた。

『……仮面ライダー…ファントム』

闇の呟き。
それも闇に溶けていった。

第九話　Mの七不思議／黄金に染まる翼（後書き）

というわけで
M編終わりました。

作中にオーディンが出てきましたが、物語には直接は関係ありません。

えっ？
なぜ、オーディンなのか？

無論、オレの趣味です！

オーディンカッコいいですよね！？

……コホン、取り乱しました。

とにかく！
感想お待ちしてます！

では、また！

第十話　Qで勝負／高飛車女とクイズ男（前書き）

更新しました！

いつも通りの駄文ですが、良ければどうぞ！

第十話　Qで勝負／高飛車女とクイズ男

――水舞高校

「……」

昼休み。
周りの生徒たちが弁当をつついている中で、小春だけはノートをじっと見つめ、動かないでいた。

そんな小春に――

「こはるぅぅ！！」

「きゃ！？」

突進してきた一人の女の子。
つまり、叶である。

「かなえちゃん……ついこの間も言いましたが、突進するのは止めてください！！」

「いやぁ、つい癖で……」

「そんな癖はどこかに捨ててください！」

「ムラっとしてやった。後悔はしていない」

「変質者か！？　……っと」

突っ込みと同時に、鉄製スリッパを取り出しかけたが、なんとか踏み留まる小春。

さすがの小春も、友達を殴り倒すのは気が引けた。

……今、現在押し倒されてはいるが……。

「お、そうだったそうだった。今日は小春に渡すものがあったんだ！」

叶はそう言って懐から茶封筒を取り出した。

一般的なものではあったが、それにはかなりの厚みがあった。

「えっと……これ何ですか？」

「あぁ、報酬」

「いや、受け取れませんよ！　前回の依頼は失敗だったんですし……」

小春は少しうつむく。

前回の事件では、小春たちは犯人であるミラードーパントを逃がしてしまったのだ。

報酬は受け取れない。

そう考えていた小春に、叶は言った。

「結果オーライ！　結局、失踪した人たちも全員戻ってきたしさ」

「あれは、その……」

実は、それも小春たちの手柄ではなかった。

あの謎のライダーがいつの間にか鏡に閉じ込められていた人々を助け出していたのであった。

だから、余計に報酬を貰うのを躊躇ってしまう。

「いいの！！　小春も探偵くんも頑張ったんだし、依頼した私がいいって言うんだから！」

「……はい」

半ば押しきられるように頷き、小春は茶封筒を受け取った。

「あの……叶ちゃん？」

「どうした、小春」

「退いてもらえませんか」

「いやだ！」

「……ん！」

押し倒されたままというのは、肉体的にも精神的にも辛いものである。

小春は必死に抵抗するが、抜け出せない。

その間も周囲の好奇の目に晒され続ける。

「あ、そういえばさ、こはる」

「ん！　どうした、ん！ですか？」

「これまた噂なんだけどさ」

「クイズ男？」

「そう、クイズ男。なんでもクイズを出してくるらしいんだけどさ……」

海斗は、情報屋の少年・カイのもとを訪れていた。

すべては数時間前、一人の女が探偵事務所に乗り込んできたことから始まった。

――鳴海探偵事務所水都支店

「……ふぅ」

久し振りのティータイムを優雅に楽しんでいた海斗。

最近は、小春が積極的に依頼を持ってくることが多く、こういう時間が少なかった。

昨日もペット探しをしていて一日を潰してしまった。

だから、依頼がない今日くらいは、ゆっくりとしよう……そう思っ

ていた矢先――

「失礼いたしますわ！」

その女は現れた。

「こんにちは、見目麗しいお嬢さん。依頼ですか？」

紅茶の時間を物の見事に邪魔されたにも関わらず、海斗はいつも通りの対応で迎え入れた。

ちなみに、小春が来てからは自粛していたが、この対応が海斗の「いつも」である。

「ふんっ、依頼がなければ、こんな貧乏くさい所に用などないですわ」

「それもそうですね。では、依頼を聞きますよ」

と、皮肉にも動じずに尋ねる海斗。

「なかなか器の大きな殿方ですわね、わたくしの執事になりませんこと？」

「残念ですが、僕にはこちらの仕事がありますからね。それでお嬢さん、お名前は？」

「こほん、わたくし、天弦院朝乃、と申しますわ」

「僕は、水町海斗といいます。」

「名前もこの水都に相応しいいい名前ですわね」

「ありがとうございます。では、依頼を聞きますよ」

「そうでしたわ…こほん」

わざとらしい咳払いを一つして、朝乃は高らかに言い放った。

「クイズ男を見つけ出しなさい！」

――と。

「はぁ、あの天弦院のお嬢様の依頼か」

依頼人とのやり取りだけを聞いたカイがため息交じりに呟いた。

「あれ？　カイくんがため息なんて珍しいね。朝乃さんと何かあったのかい？」

いつもは唯我独尊天上天下で不遜な態度を貫くカイが、ため息を漏らしたことに少し興味が沸いた海斗がそう聞いてみる。

「いや、なんかよぉ」

「むかつくじゃねぇか」

「……」

非常に彼らしかった。

「まぁいい。で、クイズ男だな？」

「うん。分かるかな？」

「当たりめぇだ」

カイの話をまとめるとこうだ。

今、水都の金持ちたちの間では、クイズ大会が流行っている。

有り余る金を賭けて、クイズ対決をしていく。

負けてもその有り余った金を失うだけ。

それで娯楽が買えるのだから安いもの、らしい。

だが、ここ最近になって、そのクイズ大会を邪魔するものがいるらしい。

それが『クイズ男』だという。

「一体何者なのかな、そのクイズ男って」

「正体は分かってる」

そう言って、カイは一枚の写真を渡した。

「鈴木一郎」

「また普通な名前だね」

「まぁ、普通の冴えねぇ男だ。だが、クイズには滅法強くてクイズ番組にも出て、賞金をばんばん稼いでるんだとよ」

「へぇ」

「たぶん金に物言わせて、クイズを適当にやってるブルジョワどもが許せなかったんだろうよ」

「なるほど、ね」

海斗は、写真を見つめながら、静かに頷いていた。

――「エンタープライズ」本社

「クイズ大会、ですか？」

「あぁ、随分金になるらしい」

社長室で天城と宮内が会話していた。

話題は件の金持ちが集まるクイズ大会の話である。

クイズ大会という陳腐な響きに、宮内は珍しく表情に変化を見せた。

「どうだ？　参加権を得たんだが、オレたちで稼いでこねぇか？」

「……」

「白石も連れて行くか」

「……わかりました。では、私から白石に伝えておきます」

「頼むぞ」

「はい。……それでは、失礼いたします」

――バタン

「……N、いますか？」

社長室を出た宮内は、暗がりに話しかけた。

「はい」

本来なら、何もないはずの場所から声が返ってくる。

「護衛を頼みます。念のためにメモリは持っていってください」

「はい。わかりました」

その言葉を境に気配が消え、声も聞こえなくなった。

「何もなければいいのですが」

感情のこもっていない声で

感情を感じられない表情で

宮内はそう言った。

第十話　Qで勝負／高飛車女とクイズ男（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

いつも通りの導入編でした。

にしたって、感想来ないなぁ……。

ちょっと寂しい藍沢さんなのですよ（泣）

まぁ、とにかく！

次回更新は……水曜か木曜を目安にします。

では、また！

第十一話　Qで勝負／クイズ大会を警備せよ（前書き）

更新です！

あと暑いです……。

どうぞ！

第十一話　Qで勝負／クイズ大会を警備せよ

――鳴海探偵事務所水都支店

「こんにちは――」

「クイズ男を探しに行くよ」

「……えっと……いきなりどうしたんですか？」

小春が探偵事務所の扉を開けるとすぐに、海斗がそう告げた。

その間、約コンマ一秒。

小春が来ることを予知していたのかと疑うほどの反応速度であった。

そんな小春の表情を読んだのか、海斗は言い訳をする。

「予知とかじゃないよ？　ただ盗聴と監視カメラの映像を見ていただけだから」

「……え…」

にこやかな表情で危ないことを言う海斗。

盗聴と監視カメラ。

私の周りには変態しかいないのか、と小春が絶望しているのを知ってか知らずか海斗は話を続けた。

「まぁ、冗談は置いておいて」

「ややこしいわぁ！！」

――ガスン！

小春の鉄製スリッパが火を吹いた！

学校でのこともあり、威力は五割増しである。

が、しかし――

――ガシッ

敵もさるもので、その攻撃を見事に受け止めていた。

「甘いね、小春ちゃん。僕がいつまでも殴られ続ける男だと思ったら大間違いだよ」

「くっ、でも、海斗さんは私を含め、女子には手をあげないはずです！」

「その通り……でもね」

海斗は、そこで言葉を区切り、小春に更に近づいた。

「ひゃっ！？」

その途端、小春は短い悲鳴をあげた。

「な、なな、なんで頭を撫でるんですか！？」

「ん？　ダメかな？」

「……」

相も変わらず爽やかでにこやかに微笑む海斗に、何も言い返せない小春。

いつもならここで鉄製スリッパを取り出すところなのだが、今は抜刀済みのうえ、掴まれて使用不可の状態である。

それゆえ、次第に小春の顔が真っ赤に染まっていく。

「やっぱり可愛いね、小春ちゃんは」

「……なっ」

小春の顔が夕日もしくは林檎レベルまで達したその時だった。

「海斗に嬢ちゃん、お前らなにしてんだ？」

探偵事務所の扉が開き、水都署の刑事・加納源一郎が入ってきた。

そして、激戦（？）を繰り広げていた二人に疑問を投げ掛ける。

「源さん」

「今です！」

「し、しまった！？」

――ガスン

鈍い音が鳴り響き、海斗が頭を押さえ、倒れた。

「あぁ、いつも通りか」

その光景を見て、そう納得する源一郎。

慣れたものである。

「邪魔するぞ」

と、源一郎の後ろから一人の男性が現れた。
真っ赤なジャケットに隙のない表情。
風都署の刑事・照井竜、その人であった。

「竜さん！」

その姿を認めた小春が、照井の方に駆け寄る。
実を言わなくても、二人は顔見知りである。
照井は、小春のハトコである亜樹子の夫であり、小春にとっても兄のような存在になっていた。

「そうか、左に言われてここで助手をしていたんだったな」

「違いますよ？　私、今は所長です！」

「ふふ、ホントにそっくりだな、所長……いや、亜樹子と」

そう言って、微笑する照井。
その後、海斗に向き直り、聞いた。

「水町海斗だったな」

「はい」

ダメージから回復した海斗がそれに答える。

「事件に協力して欲しい」

「クイズ男ですか？」

「あぁ。知っていたか。なら、話は早い」

照井と源一郎は、小春に席をすすめられ、客用のイスに座る。

「この写真を見て欲しい」

と、照井が取り出したのは数人の男女の写真。

年齢も外見もバラバラである。

「この写真がなにか？」

「その説明は、俺からしよう」

源一郎がそう言って、説明を始めた。

「こいつらは、クイズ男の犠牲者だ」

「犠牲者、ですか？」

海斗が怪訝な表情をする。

犠牲者という言葉に違和感を感じたからだ。

海斗がクイズ男について聞いたのは、金持ちたちの娯楽であるクイズ大会を邪魔するという話だけである。

どう邪魔するか詳しくは聞いていなかったし、その被害も聞いてなかった。

「金持ちたちがしてるクイズ大会とやらがあるんだが……クイズ男はそこに乱入し、訳の分からないクイズをするらしい」

「そして、そのクイズに答えられなかった奴らは、魂が抜けちまうんだとよ」

「「！！」」

海斗と小春は、その話に絶句してしまった。

海斗が受けた依頼の中でも小春が聴いた噂の中でも、そんなことは聴いたことがなかった。

「正確には、魂が抜けたようになる、だ」

と、照井が源一郎の説明を捕捉した。

「これは間違いなく…」

「ドーパントだ。もうフィリップの検索も終わっている」

「メモリ名は？」

「『クイズ』。使用者の質問に答えられなかった人間の精神に入り込み、支配することができる、らしい」

照井は、そこで一旦言葉を区切って、さらに続けた。

「次のクイズ大会とやらは明後日にあるらしい。それまでにメモリの保有者を見つけ出したい」

「で、お前の出番だ、海斗。容疑者は数人に絞り込んであるから、こんなかから探し出せ！」

源一郎が写真を数枚机に叩きつけた。
その中に――

「いたよ」

「なに!?　ホントか、海斗!?」

そう、その中にいたのだ。昼間、カイに見せてもらった写真が。

「鈴木一郎……こいつが犯人かよ」

「水町、それは確かなのか？」

「はい、この町のことなら何でも知ってる情報屋からの情報ですから」

「……わかった。加納刑事、この男の指名手配を」

――二日後・クイズ大会会場

鈴木一郎の指名手配から二日が経ち、クイズ大会当日になった。
流石にたった二日で見つかるはずもなく、捕まえることが出来なかった。
そのため、探偵事務所と警察で大会の警備にあたることになった。

「これ、報酬出るんですか？」

「……どうだろうね」

探偵事務所の二人がそんな話をしていた。
ちなみに、二人の仕事は会場内の見回りである。

「あら、探偵さん？」

そんなとき、海斗のことを呼び止める人物がいた。

「こんにちは、朝乃さん」

「ごきげんよう」

相手は、海斗にクイズ男を探すよう依頼した相手・天弦院朝乃であった。

彼女は、派手派手しい真っ赤でゴージャスなドレスを着ていて、周りからの注目を集めている。

「うわぁ、悪趣味です」

そんな彼女を見て、小春が思わず呟いてしまった。

「……探偵さん、この貧乏臭い女は誰ですの？」

「なっ！？　海斗さん！　この悪趣味な方はどこのどなたですか！？」

「あ、あくしゅみぃぃ！？」

「はい、悪趣味です！　成金ちっくです！」

「このわたくし、天弦院朝乃を悪趣味、成金ですって！？　上等ですわ、貧乏娘！　名を名乗りなさい！」

「さっきから貧乏貧乏と！　こっちも上等です、私は鳴海小春！　海斗さんの上司です！」

「ふん！　ならば、口を慎みなさい！　わたくしは依頼人ですわよ

！」

女二人の口論はヒートアップしていく。

海斗もあまりの迫力に口を挟めずにいた。

「かかって来なさい！　ひねり潰して差し上げますわ！」

「こうなったらアキ姉直伝のスリッパ術で」

海斗が、スリッパ術ってなに！？と突っ込もうとした、そのとき――

『海斗！　奴がいたぞ！』

耳につけていたイヤホンから源一郎の声が飛び込んできた。

鈴木一郎を見つけたようだ。

「どこにいるんですか！？」

さっきまで口論をしていた小春も、それを止め、聞き返す。

『そっちに行った！　ステージだ！』

「「！！」」

前方を見る。

いた！

ステージを駆け上がっている。

「源さん！　ここにいる人たちの避難を！」

『わかってる！　照井警視も向かった！』

通信が切れた。

それと同時に、海斗はロストドライバーとメモリを出す。

「小春ちゃんは源さんと一緒に」

「はい！」

小春が出口に向かっていく。

「水町！」

入れ違いに照井が走ってきた。
手には、アクセルドライバーとアクセルメモリ。

『アクセル』！！

『ファントム』！！

「変…身！！！」

「変身！！！」

第十一話　Qで勝負／クイズ大会を警備せよ（後書き）

とにかく暑いです……。

そして、よく話を読むと、話がほとんど口論ですね。

次回は、土日どちらかかな

出来るだけ早く更新する努力はします（「▽」；）

では、また！

第十二話　Qで勝負／闇の片鱗（前書き）

更新しました

どうぞ！

第十二話　Qで勝負／闇の片鱗

『アクセル』！！

『ファントム』！！

海斗と照井がそれぞれのドライバーにメモリを差すと、二人の姿が変わる。

二人はステージの方に走りながら、仮面ライダーファントムと仮面ライダーアクセルに変身した。

「ひっ！？」

鈴木一郎が、二人の姿を見て、悲鳴を上げた。

「く、来るな！」

声を張り上げながら逃げる鈴木。

しかし、ドーパントに変身していない人間と仮面ライダーでは、走力を比べるだけ無駄だ。

すぐに鈴木は追い詰められた。

「くそぉ！」

『クイズ』！！

鈴木は青色のメモリを起動させ、生体コネクタがある左の手のひらに差し込んだ。
そして、シルクハットの形をした頭に、〇と×が描かれた大きな札を持ったおかしな姿をしたドーパント・クイズドーパントに変身した。

『クイズを邪魔するやつはクイズで死ね！』

――一方、小春と源一郎・源一郎目線

「速やかに避難してください！」

「こっちです」

大会に来ていた人々を誘導する。
それがドーパントと戦えない俺と嬢ちゃんの役目だ。

怪物がいると教えると、パニックになる恐れがあるため、そのことは伏せていた。

だからだろうな。

「おい！」

「なんでしょうか？」

「なんで、不審者からの犯行予告くらいで中止なんだぁ？」

こういう連中も現れる。

これで三組目か。

さっきは貴婦人二人組、その前は、恰幅のよい老人、そして、今の三人組。

文句を言ってきた態度のでかさが行動から滲み出ている男。
その後ろにまるで執事か秘書のように付き添うスーツの男。
そして、白髪に白髭で杖を突いている初老の男。

「ですから、危険なのです。皆様の安全を…」

流石に面倒なことはしたくねぇ俺でも、一般人をドーパントの危険にさらすわけにはいかない、という気持ちはある。
だから、さっきから説得は続けている。

「必要ねぇよ！」

痺れを切らしたようで、男がそう叫んだ。
そして、男は懐から金色のガイアメモリを取り出した。

「な、あんた！？」

「警察風情がオレ様に指図するな！」

『エンプティー』！！

――少し前、会場内

「さぁ、振り切るぜ！」

アクセルが剣を構え、クイズドーパントに向かっていく。

「おぉおぉおぉ！！」

『ひぃいいいいい！？』

アクセルが降り下ろした剣を間一髪で避けるドーパント。

『ふぅ、危ない…』

アクセルの攻撃を避けたことで隙を見せたドーパント。

そこに――

『メタル』！！

ガイアウィスパーが鳴り響き、アクセルの背後からメタルの力を纏ったファントムが飛び出してきた。

アクセルをブラインドにした攻撃。

瞬時にアクセルも身を屈め、ファントムの射程外に引く。

「はぁぁぁぁぁぁ！」

『ぐぁぁぁぁ』

ファントムが繰り出した突きは敵の腹部に命中。

そのままクイズドーパントは吹き飛び、地面を転がる。

『ぐぅ』

「水町、終わりにするぞ」

「了解です」

二人はメモリブレイクするために、メモリに手をかけた。

『く、だ、第一問だ！』

「…なにを……」

『は…はは、はははは』

クイズドーパントのいきなりの発言に、海斗が反応を示すと、愉快そうに笑いだした。

「なにを笑っている！」

その笑いが癪に障った照井は、ドーパントに怒鳴り付ける。しかし、ドーパントはそんな照井を無視して会話を続けた。

『仮面ライダーファントム、お前に問題だ！　オレの名前はなんでしょう？』

「ふざけてるの？」

いきなりのことに呆れ、そう返す。
すると、ドーパントはまた笑い出した。

『ふふ、ははは…違いまーす！　オレの名前は「鈴木一郎」、もしくは「クイズドーパント」だ！　せっかくのサービス問題だったの

になぁ！』

「なにを……」

『クイズに間違えた奴には、「罰ゲーム」！！！』

クイズドーパントが持っていた×印の札をあげる。

その×印が光り出すと同時に――

「ぐぁぁぁぁ！！」

ファントムが頭を抑え、倒れ込んだ。

「水町！？」

アクセルが駆け寄って、声をかけても、返事は返ってこず、苦しみ続ける。

あげくのはてには、変身が強制解除されてしまった。

「貴様、何をした！！」

『精神に介入した。そこにちょっと攻撃しただけさ』

「これがフィリップの言っていた能力か！？」

迂闊だった。
フィリップに検索してもらって、情報は持っていたはずなのに、能力の発動を防げなかった。

『ほらほら、次にいこうか！』

小馬鹿にしたような口調。

『君の仲間が返事をした時点でもう君たちは、解答権から逃げられない！　さぁ、次の解答者はお前だ！』

「……」

『なんだ？　なぜ何も言わない？　……生意気な』

「……」

『頭に来るぞ！　めちゃめちゃ難しい問題を出してやる！　第二問！』

「……お前は、なぜガイアメモリを使う？」

唐突に、ドーパントの話を遮るように問いかけた。

『なにを言ってる？』

「……」

『まぁいい。　オレがメモリを使ってるのは、力を見せつけるためさ！　オレはクイズに関しては天才だ！　それをやれ普通だ、やれ平凡だと、名前で判断しやがる！』

「それだけか？」

喚き散らすドーパントとは対照的に静かに聞くアクセル。

『あぁ、それが全てだ！　それじゃあ、行くぞ！　第二問！』

「ならば、躊躇うことはないな」

『なにぃ？』

ドーパントがそう言うのと同時にアクセルは駆け出した。

「はぁぁぁぁぁぁ！」

『なに！？　だ、第二も――』

「俺に、質問するなぁぁ！！」

『ぐぁぁぁぁ！！』

エンジンブレードでドーパントを斬りつけた。

そのまま、転がっていくクイズドーパント。

すぐに、追い打ちをかけるようにアクセルは踏み込む。

「はぁ！　だぁ！」

『ぐ、ぬぁぁ！？』

アクセルの猛攻になす術もなく、よろよろと後退していくドーパント。

「水町！」

アクセルが海斗の名前を呼ぶと、海斗はよろめきながらも立ち上がり、返事をした。

「……は、はい」

「大丈夫か？」

「なんとか……」

「なら、メモリの位置を指示しろ！　俺がやる」

海斗はコクリと頷き、耳を澄ませる。

――トクン

聴こえた。

「左の手首にあります」

海斗は、ドーパントの左手首を指差し、アクセルに伝える。

それを確認したアクセルは銀色のメモリを取り出し、エンジンブレードに挿入した。

『エンジンマキシマムドライブ』！！

その音と共にエンジンブレードが赤い光に染まる。

「はぁぁぁぁぁぁぁ！」

『ぐぅ、おぅ、がぁ！』

剣が×の札を持つ左手の手首を切り裂いていく。

一回

二回

そして、三回

剣の軌跡は、まるでＡの字を描くように赤く光り――

『うぁぁぁぁ！！！』

――クイズドーパントの断末魔と共に光が爆発した。

アクセルは、エンジンブレードから飛び出したメモリを掴み、

「絶望がお前のゴールだ」

と言い放った。

メモリブレイクした後、海斗と変身を解いた照井が鈴木の元にやって来る。

照井は、手錠を取り出して彼の手首に掛けた。

「くそぅ……」

「大人しく罪を償うんだな」

「くそぅ…くそっ」

照井の言葉も全く耳に入っていないようで、鈴木はぶつぶつと独り言を繰り返す。

「あいつがガイアメモリなんて渡さなければ…」

「あいつ？」

独り言に引っ掛かる単語に海斗が聞き返した。

「あぁ、あいつだ…」

海斗と照井は、顔を見合わせた。
照井が切り出す。

「あいつ、とはガイアメモリのバイヤーか？」

「そうだよ！　あのクソじじい！」

「どんな外見か覚えていますか？」

海斗があくまでも下手にまわり、慎重に質問する。

「白髪に白い髭、あとは杖をついてた」

「！！」

「どうしたんです？　照井刑事」

驚きの表情を浮かべる照井に海斗が声を掛ける。

その質問には答えず、鈴木に詰め寄る照井。

「そいつの名前は？」

「……白石――」

『ナイト』！！

突如として、ガイアウィスパーが鳴った。

そして、闇が訪れる。

「なんだ！？」

「こ、れは……」

困惑する照井とは違い、海斗には覚えがあった。

『ナイト』という声。

あれは、ミラードーパントとの戦いでも聴いたものだ。
何も見えない闇の中で、辺りを警戒する海斗たち。
だが――
「うわぁぁぁぁぁぁ！」
「「！！」」
悲鳴。
その直後に世界が明かりを取り戻す。
そこには、倒れた鈴木の姿。
「な、に！？」
「……死んでる」
先ほどまで、生きていたはずの鈴木は、ただの物言わぬ肉塊となっ

ていたのだった。

――事件報告

依頼人

天弦院朝乃

依頼内容

クイズ男を探して、捕まえてほしい

詳細

クイズ男の正体は、鈴木一郎という男が、『クイズ』のメモリを使った姿だった。

動機は、自分を馬鹿にした者に対する復讐だったようだが、メモリ

の魔力に負けて暴走した。
最終的には、自分の力が一番に生かせるクイズ大会に潜入し、力を使っていたようだ。

結果

照井刑事と共闘

途中でドーパントの能力にやられて、リタイアしてしまったが、照井刑事のおかげでメモリブレイクに成功

……まではよかったが、何者かに鈴木一郎を殺害された。
恐らく『ナイト』のメモリを持つ者と思われるが、詳細は不明。

補足として、クイズドーパントの被害者は全員、メモリブレイクと共に意識を取り戻したらしい。

避難誘導にあたっていた源さんと小春ちゃんにも、『何も』なかったようだし

あと、

「という訳で探偵さん、貴方を雇いに来ましたわ！」

「ええと……」

「わたくし、貴方が気に入りましたの。わたくしの執事になりなさい！」

依頼の報酬を払いに探偵事務所に来た朝乃。

だが、なんやかんやあってこんな話になっていた。

「だから、海斗さんは雇わせません！　これは、所長の決定です！」

「うるさいですわ、小娘！　部外者は黙っていなさい！」

「な、私は関係者です！」

と、小春も入って、大変なことになっていた。

「二人とも落ち着いて、ね？」

その場を収めるために、海斗がそう言っても

「海斗さんはどっちの味方なんですか！？」

「そうですわ！　探偵さん、はっきりこの小娘に言ってやってくださいな」

「何をいってるんですか！　海斗さんは、女の子の味方なんですよ？　悪趣味の味方ではありません！」

「な、なな、誰が悪趣味ですの！？」

「もちろんあなたです！」

「……」

二人の口論の最中、海斗は空を見上げる。

「はぁ、空が青いね…」

海斗はただただそう呟くしかなかった。

――「エンタープライズ」本社・会議室

社長室の真下の部屋・会議室。
そこには、宮内と白石がいた。

「助かったよ、宮内くん」

「いえ、これも会社のためですから」

「いやいや、あの刑事にはあまり追われたくないからの」

「何かあったのですか？」

いつも通りの無表情で、社交辞令的に質問をする宮内。

「あの刑事には、ワシの教え子の井坂くんがやられていてね。ワシもやられるんじゃないかとヒヤヒヤしとるよ」

「ご冗談を」

白石の発言に、平淡な声で返す宮内。

「そういえば」

ふと白石が話題を変えてきた。

「あの『ナイト』のメモリの使用者には、まだあったことがないですの」

「Nですか。あれは、お気になさないで下さい」

そこで言葉を区切り、ポツリと呟く。

「あれは、ただの『出来損ない』ですから」

第十二話　Qで勝負／闇の片鱗（後書き）

という訳で、Q編完結です。

今回も、ファントム以外のライダーが活躍しちゃいました。

……頑張れ、海斗！

あとは、いつもながら文章が稚拙ですね……。

まぁ、そこは少し大目に見ていただければ……無理かな？

えー

次の更新は……水曜とかだと思います。

あとは、仮面ライダーエターナルがレンタル開始ですね！

明日、借りてきます！

……あれば。

では、また！

第十三話　再会のＹ／幼なじみは突然に（前書き）

エターナルがないんだけどぉぉぉぉぉぉ！！

どうぞ

第十三話　再会のＹ／幼なじみは突然に

――水舞高校

クイズ事件から三日後のこと。

小春はいつも通り、教室で探偵事務所の経営について考えていた。

真っ昼間から経営について真剣に悩む女子高生。

なかなかシュールな画である。

そんなシュールな光景をぶち壊すような叫び声が今日も響く。

「こはるぅぅ！」

「うっ」

いつもの様に聞こえてくる声にびくっと反応する小春。

殺気、もとい気配を感じて振り返ると、予想通りの光景。

なんと叶が突進してくるではないか！

「るぅぅぅぅ！」

「甘いです！」

――ひらり

叶の突進を華麗に回避する小春。

――だが

「わっ！？」

何かに引っ掛かり、転んでしまった。

「大丈夫かー？　小春ぅ」

心配そうに叶が近寄って、手を差し出す。

その手を取って立ち上がると――

――グニッ

嫌な音が聞こえた。

まるで、人を踏んづけたような音だ。

「うぅぅ」

……踏んづけていた。

「ご、ごめんなさい！」

小春は慌ててその人の上から退いた。
そして、その人を起き上がらせる。

「あの、大丈夫ですか？」

「う、うん。だいじょぶです……」

小春が踏んづけてしまったのは、女の子だった。

パッチリとした目にサラサラの茶色がかった髪。
そして、儚げな立ち振舞い。

美少女であった。

思わず見とれてしまう小春に、その子は声をかけた。

「あの……なにか…？」

「あ、いえ。なんでもないです！」

「七海は相変わらず鈍くさいなぁ」

テンパる小春の横で叶が呟く。

「叶ちゃんも少しは反省してください！」

「あはは、スマンスマン」

まったく反省した様子を見せない叶。
さすがの小春もこれには、怒った。

「もう！　しっかり反省してください！」

海斗に怒る時ほどじゃないが、それなりの迫力を見せる小春に、

「ご、ごご、ごめんなさいぃぃ！」

七海と呼ばれた子が謝っていた。

「よし、とにかく一段落したところで！」

「してないです！」

脈絡も何もない叶の発言にツッコミを入れる小春だったが、無論無視され、会話は七海を入れて再開される。

「七海は知ってるかい？」

「な、なにを…ですか…」

「雪男の話さ」

「…え、えっと…」

「うわっ、また噂話ですか？」

「そ！」

叶が取り上げた話題に、七海は戸惑い、小春は呆れていた。
二人の反応など気にもせずに叶は話を続けた。

「その雪男は」

「「……」」

「……夜な夜な水都を徘徊する」

「「……」」

「……」

「……えっ！？　それだけですか？」

「それだけー」

とてもアバウトだった。

「とても適当な話ですね」

「……た、たしかに…」

「噂なんてそんなもんさ！」

「それはそうですが…」

小春は少し拍子抜けしていた。

今まで叶から聞いた噂話は、必ずと言っていいほど、具体的だった。

それに、ガイアメモリ事件が多かったが、今回は……。

大丈夫そうですね。

「それでだ！」

「はい？」

「探偵くんに調べて貰おう！」

「……いや、なんでそうなるんですか？」

「もしかしたらうちの生徒に危険が及ぶかもしれないからね。かいちょーとしてはほっとけない！」

あぁ、そういえば叶ちゃんは生徒会長だったなぁ、と思っていると、七海が呟くように聞いてきた。

「たんてい？」

そんな七海に叶が説明する。

「そ、この水都で探偵してるイケメンがいるんだよー」

「中身は残念ですけど…」

「でも、イケメンだろ？　白いスーツに穏やかな口調、なによりフェミニストだしなー」

「……！？」

そこまで聞いた七海の目の色が変わった。

「なまえ！　なまえはなんていうんですか！？」

「えっ！？　水町、海斗さんっていう名前ですよ」

そう答えた小春の前で七海はフリーズする。

「えっと、七海さん？」

「おーい、ななみぃ！」

呼び掛ける二人の声が届いていない様子の七海。

数分が経って、七海は一言だけ呟いた。

「……かいと兄さん…」

――と。

――鳴海探偵事務所水都支店

「……うーん」

探偵事務所には、一人の悩める若人がいた。

水町海斗である。

本来は、来客用のソファに座り、小一時間ほど頭を抱えていた。

「決め台詞……かぁ」

そう、彼は決め台詞について考えていた。

三日前のクイズ事件で、仮面ライダーアクセルの戦いを見た後から気にはなっていたことだ。

決め台詞

例えば、絶望がお前のゴールだ、とか。

例えば、さぁ、お前の罪を数えろ、とか。

例えば、俺、参上、とか。

とにかく印象に残り、なおかつカッコいい言葉。

海斗は、そんな言葉を探していた。

だが、たかが三日で考えつく訳もなく……。

「……うーん」

また思考の海に沈んでいくのだった。

――バタン！

海斗の思考を邪魔するように、乱暴にドアが開かれた。
そこにいたのは――

「か、かいとさん！」

「探偵くーん！」

「……えと…」

小春と叶、そして七海であった。

「小春ちゃん、そんなに慌ててどうしたの？　それとこんにちは、叶ちゃん」

そこまで言って、海斗は、もう一人いるのに気がついた。

そして、今までの穏やかな表情から、一転して、驚いた顔になる。
そうして、一言呟いた。

「…さく、や…？」

「さくや」と、そう言った。

「海斗兄さん！」

七海は、海斗に抱きつく。そしてそのまま泣き出してしまった。

小春も叶もその光景をただ呆然と見守るしかなかった。

「…え、と、恥ずかしいところを見せてしまいました」

海斗の頑張りで、なんとか落ち着きを取り戻した七海が、赤い顔をして言った。

そんな七海に、叶が気になっていたことを単刀直入に質問する。

「七海！　ずばり聞こう！　お二人はどういうご関係で？」

「……（コクンコクン）」

小春も頷きだけで、返答を促す。

「えっと、ボクと兄さんは同じ孤児院で育った兄弟みたいなものなんだ」

「「孤児院！？」」

海斗と一緒に仕事をしていた小春も、七海と知り合いだった叶もそんな話は聞いたことがなかった。

「初耳ですよ、海斗さん」

「……」

海斗は何も答えない。
ただ俯いているだけだ。
そんな海斗の様子に気づいていないのか、七海はさらに話を続ける。

「十年くらい兄さんの行方が分からなかったんです」

「……」

「十年？」

「はい。十年前のあの事件の――」

「さくや！！！」

「！？」

突然、海斗が叫んだ。

今まで見たこともないような凄い形相で…。

「……あの、ごめんなさい。兄さん」

「……いや、こっちこそごめんね、さくや」

「「「「……」」」」

重い沈黙が四人を支配する。

そんな中――

「……あの」

小春がおずおずと手を挙げた。

「どうしたの？　小春ちゃん」

「あの、さっきから気になってたんですけど、さくやって…？」

「あぁ、こはるはまだ知らなかったっけかぁ、七海」

「…は、はい」

叶に促され、七海が一歩前に歩む出た。

「改めて自己紹介します……ボクは七海咲也（ななみさくや）、海斗兄さんの弟みたいな感じです……」

恥じらいながら、自己紹介をする咲也。

そんな咲也を見て、呆然とする少女が一名。

ちょっとして、我を取り戻した小春が呟く。

「男の子、だったんですか……」

第十三話　再会のＹ／幼なじみは突然に（後書き）

今回は
事件もバトルも
ものの見事に起きませんでした！

次は、起きます、たぶん…

では、また！

第十四話　再会のＹ／謎の雪男を追え（前書き）

結構早く更新できました！

Ｙ編第二話、どうぞ！

第十四話　再会のＹ／謎の雪男を追え

――鳴海探偵事務所水都支店

小春の男の子だったんですか発言で、ショックを受けた咲也が立ち直って、少し経ったとき、

「そうだ！　雪男！」

と、叶がそんなことを言い出した。

「……いきなりどうしたのかな？」

「…え、と……？」

「どうしたんですか？　叶ちゃん」

三人とも、いきなりのことに理解が追い付かない。

「いやさ、今日の本題だよ！」

「……あぁ、そういえばそんなことを言っていたような……」

小春も思い出したようで、適当に相槌を打った。

「探偵くん！」

「ええと、依頼かな？」

「イエス！！　題して、謎の雪男を追え！」

叶がよく分からないテンションでそう宣言する。

だが――

「今回は依頼は受けられないよ」

返ってきたのは、予想外の答えだった。

「海斗さんにしては、珍しいですね。女の子からの依頼を断るなんて……」

小春にとっても意外だったらしく、海斗にそう質問した。

「ははは、他の依頼で忙しくてね……」

乾いた笑いで返事をする海斗。

「いつのまに依頼受けたんですか？」

「昨日と一昨日に二件ずつ、ね」

そう、実は二日連続で計四件ほど依頼が来ていた。

すべてペット探しであったため、本来の彼なら受けないのだが、今回は違った。

「依頼にきた人、四人とも可愛い女の子だったんだよ……」

「……はぁぁぁ」

なんというか予想通りであった。

ちなみに、先ほど決め台詞を考えていたのは、忙しさからくる現実逃避である。

「だから……小春ちゃん」

「はい？」

海斗は、真剣な表情になって、小春に向き直る。

「代わりに依頼受けてくれないかな？」

「……マジですか」

「マジですね」

「……はぁ、わかりました」

そう言うと、小春は立ち上がる。

「私も所長ですからね。　叶ちゃん！」

「んー？」

「叶ちゃんの依頼、私が引き受けます！」

「おっ、頼んだぞ、こはる！！」

「はい！」

――スッ

意気込む小春の目の前で手が挙がった。

「あ、あのぅ…」

雰囲気に圧倒されているのか手を挙げた咲也の声は、弱々しい。

「どうしたんですか？　七海さ、くん」

「ボクはどうしたら……」

「あー、どーするかねぇ……探偵くん、どーする？」

「……さくやは小春ちゃんたちの方に」

平淡な声で、そう言う海斗。

「いいんですか？　せっかくの再会なのに」

「いいんだよ」

「……」

その声は無機質で、拒絶の意思さえ感じられた。

だから、小春も叶も咲也も黙って頷くしかなかったのだ。

――水都自然公園

小春たち三人は、公園に来ていた。

散歩とかではなく、れっきとした調査のためである。

「さぁ、ちょーさだ！」

「叶ちゃん、楽しそうですね……」

「おぅ！　楽しい！」

「海斗さんも言ってましたけど、危険だと思ったらすぐに逃げるんですよ？」

「ふっ、この叶様に逃げるなんて行為は似合わんのさ」

「……はぁ、じゃあ、これ」

「ん？」

小春は、バックから何かを取りだし、叶に渡す。

それは、海斗から渡された時計のような形をしたものだった。

「んー、なにこれ？」

「このギジメモリをこれに入れると……」

［スパイダー］

ギジメモリが時計に挿入されると、ガイアメモリよりも機械的な音声が流れる。

すると、時計から足が飛び出し、勝手に動き出したではないか。

その姿はまるで蜘蛛のようである。

「おぉ！」

「と、こうなって護身用になるらしいです」

「すご！」

「ただ、あまり長くはもたないらしい……って聞いてないですね」

叶は、動く蜘蛛型時計に感動して、それと戯れている。

叶への説明は後回しにすることを決めた小春は、同じものを咲也に渡そうとした。

だが…。

「……」

「ええと…七海くん？」

「……はぁ」

「ななみくーん」

「……ふぅ」

と、事務所を出た辺りからこんな調子の咲也であった。

呼びかけてもため息と沈黙しか返ってこない。

海斗と会った時とは大違いである。

「……はぁ」

「七海くーん」

「……」

「……」

「……ふぅ」

「あっ！　海斗さんだ！」

「えっ！？」

反応あり。
どうやらこのネタならいけるらしい。

「ごめんなさい、嘘です」

「……ひどいです……」

「だって、呼んでも全く気づかなかったんですよ？」

「あ、それは……ごめんなさい…」

自分がしたことに気付き、しゅんと項垂れる咲也。

「だ、だいじょうぶです、ケド」

「？　小春さん、どうしたんですか？」

「いやいや、なんでもないデスヨ！」

「？」

言えない！

項垂れる七海くんが可愛かったなんて、口が裂けても……言えない。

そんな自らの心の叫びを誤魔化すように、小春は会話を再開した。

「な、なんだか、七海くん元気がないような気がしたので」

「……」

「その、大丈夫ですか？」

「だ、だいじょうぶです。……けど……」

「けど、なんですか？」

小春が先を促す。

「……なんだか」

ボソリと近くにいる小春がなんとか聞き取れるくらいの呟きだった。

「海斗兄さん、変わっちゃってて……」

――その頃、海斗は――

「見つからないなぁ」

ペット探しに奮闘していた。

今までに見つけたペットは犬二匹に猫一匹の計三匹である。

つまり、あと一匹が見つからないのだ。

「弱ったなぁ。……ん？」

頭を抱えた海斗の元に何かが飛んできた。

機械で出来たコウモリ、探偵の七つ道具のうちの一つ・バットショ

ットだ。

「おいで」

海斗がバットショットに手のひらを向けると、バットショットは手の中に収まり、カメラに戻る。

すぐさま、撮れた写真を確認する。

ぱっと見たが、特にめぼしいものは写ってなかった。

「……」

画像を次に送っていくも、海斗の頭は違うことを考えていた。

それは、咲也のこと。

十年ぶりに再会した幼なじみ。

自分以外誰もいないと思っていたあの事件の生き残り。

そして、昔の自分を知る、今となっては唯一の人物。

正直、嬉しかった。

でも――

「昔の「海斗」は……もういない……」

――小春・叶・咲也

あの後、咲也は再び黙ってしまった。

だから、一行は再び雪男の調査を再開した。

「うむ、いない……」

「そう簡単には見つからないと思いますよ」

「いやぁ、だけどさぁ」

見つからないことにだんだん飽きてきたのか、叶はスパイダーショックを弄りながらぼやく。

そろそろ諦めるかな、と小春が油断した矢先――

「そうだ！　誘きだそう！」

そんなことを言い出しなさった。

「……叶ちゃん……一体なにをするつもりですか？」

「こう、来い来い来ーい、てな感じで？」

「いや、無理です」

「ボクも、それは…どうかと……」

今まで黙っていた咲也ですら、この提案には異を唱えた。

だが、ここで引き下がる叶ではない。

「ものは試しだ！　……ねこかんでいいかな～？」

そう言って、ポケットから猫缶を取りだして開ける叶。

「なんで持ってるんですか……」

「ふんふふんふーん」

叶は、小春の質問にも答えず、ご機嫌な様子で餌を準備する。

「よし！　あとは……小春、七海！」

「なんですか？」

「は、はい…」

叶は、草むらを指差す。

「張り込みだ！」

――一方、海斗

「ふぅ、ないなぁ」

バットショットが撮ってきた写真を全て見終わった海斗。

探し始めて、かれこれ三時間が経っていた。

「……小春ちゃんたちの方に行ってみようかな」

気分転換の意味も含めて、海斗は小春たちの様子を見に行くことにした。

この時の海斗は気づいていなかった。

バットショットが撮ってきた中にあった自然公園の写真。

そこに、白髪で白髭、片手に杖を持ったあの男・白石龍平が写っていたことに……。

第十四話　再会のＹ／謎の雪男を追え（後書き）

少しだけ
海斗の過去に関わるエピソードです。

まぁ、全部が全部明らかにはしませんけどね。

そして、海斗変身しないなぁ……。

ま、いいか！……いいのか？

では、また！

第十五話　再会のＹ／兄弟（前書き）

更新しました！

どうぞ！

第十五話　再会のＹ／兄弟

――水都自然公園

日も傾き始めた時間帯。

小春と叶、咲也は草むらで息を潜めていた。

「……」

「あ、あの叶さ――」

「しーっ！　静かに！」

「は、はぃ……」

「……はぁ……」

かれこれ三十分は経っているだろう。

いるかどうかも危ういのにこんな罠で誘きよせられるわけがない。

小春がそんなことを考えたその時――

「ママぁ、あのひとたちなにやってるのー？」

「ダメよ！　関わっちゃダメ！」

「……泣きたくなってきました…」

本気で何をやっているんだろう。
今度こそ帰ろう。

『イエティー』！！

「！？」

小春の耳にあの機械音声が入ってきた。

条件反射のように駆け出す。
叶と咲也の手を引いて。

「わぁぁっ！？」

「おっとっとー？」

二人は今の状況を把握していない。
だからと言って、今説明していたら殺される。
だから――

「逃げます！！」

そう叫んだ。
しかし

『シャアアアア！！』

回り込まれていた。
全身が白い毛で被われた化け物に……。
その姿は異質。
想像していた姿と違い、四足で牙も生えている。

「「「！？」」」

三人は動かない、否、動けない。

その姿に、その視線に、そして恐怖に身体を支配され、動けない。

「……ゆき、おとこ」

咲也の呟きを合図に、雪男は三人に殴りかかった。

――少し前、海斗視点

ずっと咲也について考えていた。

たぶん、いや確実に咲也は僕の様子に戸惑っていた。

そりゃそうか、今の僕は昔とは違う。

変わったんだ。

でも、過去の罪は消せないから……。

恨まれこそすれ、疎まれこそすれ、嬉しがられるわけはない。

時間が経てば、咲也だって思い出す。

恨みを。

怒りを。

憎しみを。

だから、突き放したい。

でも――

「――――！！」

「！？」

悲鳴が聞こえた。

あれは、咲也の声。

無意識で駆け出す。

――水都自然公園・咲也視点

目の前には、訳のわからない怪物。
その怪物は、僕たちに殴りかかろうとしている。

終わった。
そう思った時、何かが手に触った。

「！」

ボクはそれを、ギジメモリを掴む。

『スタッグ』

小春ちゃんから預かったスタッグフォンを使う。

『ギィィィィ』

『フゥー！　フゥー！』

スタッグフォンが怪物を撹乱させている。
成功だ！
同じことを考えたようで、小春さんも叶さんも逃げ出している。
ボクも今のうちに――
――カクン
「あ、れ…？」
足が動か、ない。
『ギャァァァ！』
――ガシャン！
スタッグフォンも、怪物にやられて動かなくなってしまった。
…ボクも、ああなるのかな……。

いやだよ……いやだよ、いやだよ！

「……助けて、兄さん…」

『ファントム』！！

「……」

衝撃も傷みもない。

そっと目を開ける。

そこには、

「大丈夫？　さくや」

ヒーローがいた。

「大丈夫？　さくや」

雪男・イエティードーパントと咲也の間に、割って入ったのは、ファントムに変身した海斗であった。

「う、うん。ありがとう…海斗兄さん」

「無事ならよかったよ」

ドーパントの攻撃を防ぎながらも咲也と話を続ける海斗。

咲也の頭を軽く撫でて呟く。

「あとは……『俺』に任せろ」

「…うん」

海斗は、ドーパントの方を向き、蹴り飛ばす。

『シャァァァァ！』

威嚇を続けるイエティードーパント。
それに向かって海斗は言葉を投げかける。

「君はなぜ人を襲うんだい？」

『グルルル』

「まぁ、いいか。そんなことは今は問題じゃないね」

「覚悟は決まったかな」

海斗、ファントムは、ドーパントに一旦背を向け、そこから振り向く。

その姿はまるでWのようで……。

けれど、Wとは違い、一つ指を鳴らして、指を指した。

そして、依然として睨み付けてくるドーパントに言い放つ。

「さぁ、断罪の時間だ！」

『ギシャァァア！！』

その言葉を境に戦闘が始まった。

イエティードーパントがファントムに殴りかかる。

考えなしの攻撃だったため、ラクラクと避けるファントム。

反撃にでる。

「はぁぁぁぁ！」

――ガン！

鈍い音。

ファントムの攻撃は、

『クシュゥゥゥ！』

効いていなかった。

「硬いなぁ。よし！」

ファントムはメモリに手をかける。
フォームチェンジのためだ。

『ジョーカー』！！

ジョーカーフォームへと変わり、すかさず攻撃を食らわす。

「らぁぁぁぁぁぁ！！」

『ギャァァァ！？』

効いていた。
行ける！！
ファントムがそう思った瞬間――

『ぐ、グラァァァ！』

「蟲か！？」

パラサイトガイアメモリの特徴である昆虫が出てくる。

――ボン！

昆虫が爆ぜた。

それと同時に、白い霧のようなものが辺りを包む。

「これは！？」

今まで経験のないことに隙を見せてしまう。

そこに、

『キシャァァァァ！！』

イエティードーパントが白の中から現れた。

「！！」

ギリギリでファントムが避ける。
反撃しようとするが、ドーパントは再び白に紛れてしまう。

「どこに……」

「海斗さーん！！」

戸惑う彼に掛かる小春の声。
周囲に警戒をしつつ、返事を返す。

「どうしたの？」

「『ヒート』を使ってください！」

「そうか！　ありがとう、小春ちゃん！」

メモリに手をかける。

『ヒート』！！

ファントムの仮面が黒から真紅に染まる。
そして、それと同時に、ファントムの身体から炎が溢れ出た。
「おぉぉぉぉぉ！！」
ファントムの雄叫びとともに炎が大きくなっていく。
辺りの白を赤にかえていく。
『ぐ、グシャァ…』
ドーパントが姿を現す。
ファントムの炎に苦しんでいるようだ。
それもそのはず。
雪男にとって炎など天敵中の天敵。
さっきの景色を白く染めたのも、雪だ。
身体を被っていた毛も凍りつき、強度を誇っていた。
だが、すべて溶けていく。

「終わりにするよ！」

ファントムはメモリをマキシマムスロットに入れた。

『ファントム／ヒート――マキシマムドライブ』！！！

「ヒートプロミネンス！！　はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

炎がファントムの腕に凝縮され、イエティドーパントの腹を、レーザーのように撃ち抜いた。

メモリが、砕け散る。

後には、焼かれた地面とメモリの使用者が残されていた。

「……」

海斗も小春も叶も咲也も、あることの確認のために使用者に駆け寄る。

使用者は眠っていた。

いや、者はおかしいかもしれない。

正確には……

「……猫」

「……猫ですね」

「……猫だねぇ」

「……猫、です…」

そう、そこにいたのは、猫だったのだ。

しかも、ただの猫ではない。

「あ、この猫、探してた最後の一匹だよ」

かくして、海斗のペット探しと小春の雪男調査は、同時に終わりを告げたのだった。

――事件報告

依頼人

可愛い女の子×４
空野叶

依頼内容

ペットを探してほしい×４謎の雪男を追え！

詳細

ペット探しの方は、犬二匹に猫二匹だった。

しかし、猫が一匹見つからなくて悪戦苦闘。

一方、雪男の方は、小春ちゃんが担当した。

念のために、ガジェットを渡して、調査してもらった。

結局、雪男もガイアメモリに関係する存在だった。

結果

雪男の正体は、何と探していた猫がイエティーメモリを使った姿だった。

メモリブレイクの後遺症もなかったようで、安心して飼い主に返せた。

ただ終わってから思ったけど、今回担当する依頼反対だった方がよかったかもしれない……。

あぁ、あと追記として――

「というわけで、七海くんにはウチの事務所で働いてもらうことにします」

と、小春が宣言する。

その前には、事態がよく飲み込めていない人が二人。海斗と咲也である。

「……つまり、どういうことかな？」

「ボクも、いまいち……」

明らかな戸惑いを見せる二人に小春が言う。

「二人は家族なんですよね？　なら、少しでも一緒にいるべきだと思います」

「うーん」

「え、えと…」

咲也は、唸る海斗を上目遣いで見る。

咲也にとっては、ありがたいことだ。
十年ぶりに再会した家族と一緒にいられる。
そんな嬉しいことはない。

だから、返事を待った。

一方の海斗は、悩んでいた。

正直、小春の提案は魅力的だった。

だからこそ、悩む。

自分が一緒にいていいのか、と。

だから――

「あ、反論はなしです。決定事項ですから！」

「「……」」

葛藤する少年たちの心を完全に切り捨てる小春。

そんな小春を見て――

「ははっ」

海斗は可笑しそうに笑った。

「さすがに所長さんには逆らえないね」

「え、じゃあ……？」

「あぁ、いいよ。さくや、僕のこと、手伝ってくれるかな？」

海斗の優しい笑みに、

「うん！　兄さん！」

咲也はしっかりと頷いた。

――水都自然公園・事件の直後

ファントムとイエティードーパントとの戦闘。
それを白石龍平は、静かに見ていた。

ファントムの行動、戦闘パターンを観察していたのだ。

そして、今。

白石はファントムによって砕かれたメモリを見ていた。

「うむ、動物を媒体にしたドーパントをも楽々と倒すあの力……」

不意に、砕けたイエティーメモリに手を当てる白石。

すると、メモリが再生していく。

ほんの数秒でメモリは元通りに。

「……欲しい、あのメモリを、『ファントム』のメモリが！！」

邪悪な笑みを浮かべて、白石はただ叫び続けていた。

第十五話　再会のＹ／兄弟（後書き）

はい、Ｙ編終わりましたー

そして、探偵事務所に新メンバー加入！！

まぁ、海斗くんの妹、いえ弟ですね。

キャラ紹介は次回とかに、用語、メモリと一緒に紹介します。

あ、あと次回は更新かなり遅れます……。
ご容赦を。

では、また！

設定・2（前書き）

予告通りの
設定紹介です。

設定・2

登場人物

七海咲也

１８歳
小春のクラスメイト
海斗の弟分

見た目は美少女。
中身も女の子よりの草食系男子。

本人はそれを非常に気にしている。

何気ないきっかけで、クラスメイトである小春と知り合い、兄のような存在である海斗と再会した。

海斗と同じ孤児院出身であり、その頃の影響で海斗を「兄さん」と呼ぶ。

また、小春の所長命令で鳴海探偵事務所水都支店で働くことになった。

空野叶

１８歳
華の女子高生
小春のクラスメイト&親友

天真爛漫を地でいく少女
フランクな口調で話すムードメーカー

水舞高校の生徒会長であり、生徒に害がありそうなものは、すぐに調べるのを主義としている。
そのため噂などにも敏感で、小春に依頼を持ち込むことが多い。

本人は、正義の生徒会長を目指している。

実は、彼女も……

天城王芽

２７歳
ガイアメモリ製造販売組織エンタープライズ社長

水都のガイアメモリ製造販売組織エンタープライズの社長を務める男

唯我独尊天上天下・オレ様主義である

また、面白そうなことにはなんでも食いつく子供のような性格でもある

能力不明の『エンプティー』メモリを持つ

宮内

年齢不詳
エンタープライズ社長秘書

常にスーツで無表情な男
冷静沈着で合理主義者

社長の天城に忠実で、パラサイトガイアメモリの製造販売の大部分を任されている

戦闘は行わない
変わりに「N」と呼ばれる部下を戦闘に出す

白石龍平

５０歳後半
白髪・白髭でいつも杖をついている

エンタープライズに幹部として招かれた初老の男性

ガイアメモリの研究家で、ドーパントの医者でもある

井坂深紅郎は、大学での教え子で、井坂の卒業後もガイアメモリについての話をしていた

メモリブレイクされたガイアメモリを再生させる能力がある様子

また、『ファントム』のメモリに興味を持ち、手に入れようと企む

『オペ』のメモリを持つ

N

正体不明

宮内との会話から、宮内とは上司部下の関係であると仮定できる

任務に失敗した社員の始末・処刑を担当する

宮内曰く「出来損ない」

『ナイト』のメモリを持つ

用語設定

エンタープライズ

天城王芽が社長を務める会社

表向きは貿易会社だが、本当は水都でパラサイトガイアメモリを製造販売をする組織

今のところ、天城、宮内、白石がここに所属している

メモリ設定

『ミラー』：M

鏡の記憶を引き出すメモリパラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、全身が鏡で被われただけの姿になる。
自身の体と触れている人・物を鏡の中に引きずり込むことができる

本作では、エンタープライズの一社員が使用したが、仮面ライダーオーディンに追い込まれ、最後は『ナイト』によってブレイクされずに殺された

『クイズ』：Q

問題の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、○と×の札を持ち、シルクハットを被ったような頭をした姿になる
問題を出し、その問題に間違った人間の精神に攻撃することができる

本作では、鈴木一郎が使用したが、仮面ライダーアクセルと戦い、メモリブレイクされた
使用者は『ナイト』によって殺された

『イエティー』：Y

雪男の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、鋭い牙に真っ白い鋼の強度を持つ毛を持った雪男のような姿になる

本作では、猫のミーちゃんが使用した
動物がパラサイトガイアメモリを使用すると、通常とは異なる力を手に入れることがあり、今回の吹雪を起こす昆虫もその一例である

ヒートメモリによって、メモリブレイクされて、飼い主に無事引き渡された

『ナイト』：N

夜の記憶を引き出すメモリパラサイトガイアメモリの一種

能力は不明だが、闇に関係する力のようだ

使用者は「N」

『エンプティー』：E

詳細は一切不明

使用者は天城王芽

源一郎と小春の前で一度使用したが、二人ともそれについては全く言及していない

設定・2（後書き）

次回からは
本編です！

……が、やはり更新が遅れます…。

今回は、夜眠れなかったんで…（汗）

あぁ、ひぐらしがないてるよ

では、また！

第十六話　Cの後悔／双子の依頼（前書き）

Vシネマの
仮面ライダーエターナルを見た

……不覚にも
大道克己がカッコいいと
思ってしまった

……かっこよかったなぁ

では、どうぞ

第十六話　Cの後悔／双子の依頼

――鳴海探偵事務所水都支店

「海斗さん、そっちのホウキ取ってください」

海斗たち、探偵事務所の面々は事務所の掃除をしていた。
別に今日が大晦日とかいう理由ではない。
強いていうなら……

「……小春ちゃん、いま、むりだ、よ」

「に、にいさん、大丈夫ですか!?」

「はぁ、片付けないから本に押し潰されるようなことになるんですよ？」

海斗の世話である。

呆れる小春に、本の下敷きになる海斗、そして、慌てふためく咲也。

「ちょっと……辛い…か、な…」

「わっ!?　に、兄さん!」

「七海くん、海斗さんはあとで助けるとして、早く掃除しましょう……」

「う、うん」

「さ、さくや……たすけ」

「……ご、ごめんね」

無情にも海斗のもとから去っていく咲也。

「うっ……」

海斗はその場で倒れるしかなかった。

その頃、探偵事務所の外には、二人の少女が立っていた。

「……ここが」

「……すいとの」

「「……たんていじむしょ…」」

二人は足並みを揃えて歩き出す。
そして、事務所の扉を開けた。

「「こんにちはぁぁ」」

事務所の扉が勢いよく開き、二人の女の子が入ってきた。
そう、女の「子」だ。

「えぇと、迷子ですか？」

小春がそう言ってしまうのも無理はない。

なぜなら、この二人の女の子は、どう見ても小学生だったからだ。
さらに、二人は瓜二つ。
双子の迷子だ、海斗も咲也も同じことを考えていた。

だが、小さな来客はそれに首を振って否定し、

「「おかあさんをさがしてください！！」」

そう言った。

今回、探偵事務所にやってきた二人の小さな依頼人。

名前は、金堂亜美と金堂真美。

二人とも七歳で小学二年生だそうだ。

名字からも外見からもわかるように、双子である。

その双子が持ち込んだ依頼、それは、お母さんを探してほしいというもの。

しかし、先ほども言ったが、迷子というわけではない。二人には母親がいない、正確にはいるが、会ったことがないらしい。

ある日、彼女たちは思い立った。

お母さんを探そう、と。

だが、小学生二人だけでは見つけられるはずもない。

だから、『親切な人』に教えてもらった海斗のところに来た、とい

うわけだ。

「海斗さん、どうしますか？」

金堂姉妹の話が終わると、小春が海斗にそう聞いた。その隣では、咲也も海斗の答えを待っている。

「そうだね、受けることに――」

――ドクン

「なっ！？」

海斗がイスから飛び退いた。

「に、にいさん？」

「海斗さん、いきなり何ですか！？　失礼ですよ！」

突然の海斗の奇行に、咲也は驚き、小春は注意をした。

金堂姉妹に至っては、怯えてすらいる。

だが、海斗はそのまま警戒の姿勢を崩さない。

そして、小声で呟く。

「小春ちゃん、さくや……その二人から離れて…」

「「えっ？」」

「どちらかはわからないけど……メモリの気配がするんだ」

「！？」

海斗の言葉に、咲也はすぐに海斗の後ろに隠れた。

しかし、小春は――

「……」

無言で双子に近づいていく。

「小春ちゃん！？」

「小春さん！」

「大丈夫です！！」

双子と目線を合わせて、

「お母さん、探してあげますよ」

と言った。

一時間後・鳴海探偵事務所水都支店

金堂姉妹からの依頼を正式に受け、二人を見送った小春は今、

「はぁ、見損ないましたよ！」

「「ごめんなさい」」

兄弟を叱っていた。

「いくらなんでも、あんな子たちがメモリを使うわけないじゃないですか！」

「いや、でもね」

「言い訳しない！」

――バキッ

久しぶりのスリッパ制裁に声もなく沈む海斗。

「あ、あの」

隣で自分の兄が倒れていくのを横目で見ながら、咲也はおずおずと手を挙げる。

「ん？　七海くん、どうかしましたか？」

「に、にいさんは…メモリの鼓動が聞こえたって言ってましたよ？」

「……ですけど、その後、すぐに止まったって言ってましたし……」

そう、海斗が聞いたメモリの鼓動はあの後、すぐに止んだのだ。

だから、海斗も渋々依頼を引き受けたわけだが…。

「とにかくです！　引き受けたんですから、早速調査を始めますよ！　海斗さん！」

意気込み、振り返る小春。だが、その先には、物言わぬ海斗の姿が！

「……返事がない、ただの屍のようです…。一体誰が！？」

「いや、小春さんが……」

「何か言いましたか、七海くん…」

「（ブンブンブンブン）」

身の危険を感じ、全力で首を振る。

「よし！　それじゃあ、行きましょう、七海くん！」

「……はい」

海斗も咲也も、どうやら小春には逆らえない運命らしい。

とにもかくにも、こうして新生探偵事務所の初仕事は始まったのだった。

――数日前・金堂姉妹

金堂姉妹は困り果てていた。

母親を見つけようと決心したものの手がかりはなし。頼るツテもなし。

つまりは、行き詰まりだ。

「どうする、あみ」

「どうする、まみ」

お互いに顔を見合わせる姉妹。

もちろんどちらにも策はなく、ただ時間が過ぎていくばかり。
そんな時、一人の『親切な人』が現れたのだった。

「お嬢ちゃんたち、どうしたんだい？」

「うんと、おかあさんを」「さがしてるの」

「ほうほう、それじゃあ、ここに行ってごらん。きっとお母さんが見つかるよ」

一枚の紙を渡される。
そこには、平仮名で書かれた「鳴海探偵事務所水都支店」の文字。

「うん」
「ありがとう」
「おじいちゃん」

姉妹は、にっこりと笑ってお礼を言った。
そして、父親からの教え通りにあることを聞いた。

「おじいちゃん」
「おなまえ」
「「なんていうの？」」

「ワシかい、ワシは……」

「しらいしりゅうべい」

第十六話　Cの後悔／双子の依頼（後書き）

C編です

……それ以外にないなぁ

あ、次回も更新遅れます
度々すみません…（T＿T）

では、また！

第十七話　Cの後悔／双子の想い（前書き）

かなり遅れましたが、更新です。

どうぞ！

第十七話　Cの後悔／双子の想い

――とある高架下

小春・咲也の両名は、無事復活した海斗と共に、水都の情報屋・カイのところに来ていた。

「また、ガキが増えてやがるな。……海斗よぉ、保育園でも作るつもりか？」

「またガキって！」

「……ほ、ほいくえん…」

「カイくん、だから、そういう風に言っちゃダメだよ」

相変わらずのカイの毒舌っぷりに、各々反応を見せる。

「まぁ、いいか。んで、今日は一体なんだ？」

その反応をすべて受け流し、話を続ける。

「カイくんのことだから、金堂亜美ちゃんと真美ちゃんはもちろん

知ってるよね？」

「あぁ。んで、そいつらがどうしたよ？」

「その二人の母親についての情報が欲しいんだ」

「母親…ねぇ」

カイにしては珍しく、言葉を濁す。
もちろん長い付き合いである海斗は、その反応を見逃すはずもない。

「なにか問題があるのかな？」

「……いや、ただ、殺されたって話は聞いた」

「殺されたんですか！？」

「！？」

殺された、という物騒な響きに、邪魔をするまいと黙っていた小春もつい口を挟んでしまった。
咲也に至っては、言葉を失っていた。

「な、なんでそんな……殺されたなんて…」

「落ち着け！　チッ、だから、ガキは……」

「む、むぅ」

「今から話すことは、あくまでも噂だ。犯人は捕まってないから詳しいこともわからねぇ」

「それでもいいよ。参考にはなるから」

そう言って、海斗は先を促した。

カイは、それに無言で頷き話し出した。

金堂家は、ごく普通のありふれたどこにでもある家庭だったらしい。

仕事もきちんとやるが、何よりも家庭を大事にする父親。

そんな父親を支える母親。そして、生まれたばかりの二人の女の子。

子供たちは両親の愛を受けて、すくすくと育っていった。

だが、今から約五年前、その事件は起きた。

母親が殺されたのだ。

いや、正確には本当に殺されたか否かは未だに分かっていない。

ただ第一発見者である父親が見たものは、大量の血液の海の中で眠る自らの子供二人の姿だったという。

「つーわけだ」

「「「……」」」

カイの話を聞いた三人は、ただ黙るしかなかった。

それほどに衝撃的だった。

その中で、咲也が口を開く。

「…じゃ、じゃあ……お母さんを、探すなんて……」

徐々に語尾が弱くなっていく。

そう見つけることは無理かもしれないのだ。

……もう死んでいるから。

「まぁ、生きている可能性もあるな」

「根拠はあるのかい？」

海斗が尋ねる。

「あぁ、血の海とは言ったが、致死量じゃなかったらしいな」

「でも、お母さんの姿はなかったんですよね？」

「そうだ。生きていたとしても動けるはずはないらしいな」

「……一体どうなっているんだろうね……」

ぼそりと海斗が呟いた。

沈黙がその場を支配する。

「……」

「……」

「……」

「……俺が知ってんのは、こんなところだな」

「……そっか、ありがとね。助かったよ」

「あぁ、またな」

海斗とカイだけが別れの挨拶を交わし、海斗たちはその場を後にした。

――水都署・超常犯罪捜査課

翌日のこと。

小春は、探偵事務所と縁のある刑事・源一郎のところに来ていた。というのも、カイから情報を貰った後、海斗に例の金堂姉妹の母親の事件の詳細を調べてくるよう、頼まれたからだ。

「これだな」

そう言って源一郎は、小春に一冊のファイルを手渡した。

「ありがとうございます、源一郎さん」

「たく、本当はこういうの見せるのは駄目なんだがなぁ…」

「……捜査協力費」

「ぐっ……」

源一郎は苦虫を噛み潰したような表情になる。

まだ依頼金の未払いがあるため、反論できない源一郎であった。

「で、嬢ちゃん。お目当てのことは分かったか？」

「はい、一応は分かりました」

そう言うと、小春はファイルをパタンと閉じた。

どうやら調べ物は終わったようだった。

――鳴海探偵事務所水都支店

「うん、わかった。ありがとう、小春ちゃん」

――ブツッ

小春からあらかたの情報を聞いた海斗は、電話を切った。

「あとは、実地調査かな」

そう言うと、外出の支度を始めた。

「あ、あの……にいさん」

「なに？」

おずおずと声をかけてきた咲也の方を支度をしながら見る。

「本当に、生きてるのかな？」

「……分からない。でも、探すよ」

「……」

咲也には分からなかった。

なぜ海斗が探そうとしているのか。

もし見つかったとしても、生きているとは限らない。死んでしまっていて、あの子たちにショックを与えてしまうかもしれない。

「……それでも」

咲也の表情から気持ちを読んだのか、その不安をなだめるような声で、表情で、海斗は言った。

「依頼人が探してと言ったんだ。それに僕は応じた。……なら、僕は探さなきゃいけないんだ」

咲也を諭すような声。

「だって、僕は探偵だからね」

だけど、凛とした声だった。

「……」

「さくやは留守番していて。……行ってきます」

――バタン

音を立てて扉が閉まる。

咲也はただイスに座っているだけだった。

――数十分後・咲也視点

――ピンポーン

「あ、れ？」

何かの音に、我に帰る。
どうやら、あの後、ずっと呆けてしまっていたみたいだ。

――ピンポーン

「…あっ、は、はい！」

インターホンに答え、事務所の扉を開く。
そこには……

「「こんにちは」」

「あ……い、いらっしゃい」

そこには、今回の依頼人の金堂姉妹がいた。

とりあえず中に招き入れる。
海斗兄さんも小春さんもいないので、自然とボクが話を聞くことになる。

「えと、今日は、どうしましたか？」

「あ、みつかった」
「かなとおもって…」
「その、まだなんだ。今、にい――探偵さんが調べてるから」
「「……そうですか」」
「……」
それ以来黙ってしまう二人。
「そ、その…二人はお母さんが好きなのっ？」
なんとなく気まずくなってそう切り出してみた。
……声、裏返ったけど。
「「……」」
「えぇと……」
「わたしたち」
「おかあさんのこと」
「あんまりおぼえてないから」
「えっ……その…」

しどろもどろになってしまう。
あぁ、やっぱりボクって会話力ないなぁぁ。

「だから」
「あいたいの」
「おかあさんと」

「……そっか」

この二人は、本当にお母さんが好きなんだって感じて何も言えなくなった。

ボクには、この二人が羨ましかった。

ボクにはお母さんがいなかったから。

……だから――

「お母さん、が……もし、死んじゃってたら…」

「「えっ？」」

「死んじゃってても、会いたいの？」

そんな、最低なことを言っていた。

自分でも最低だと分かるほど最低な質問。

しまった、と思った。

泣いてしまうかもしれないと思った。

だけど、違った。

「それでも」

「あいたい」

「わたしたちは」

「もうだいじょうぶって」「もういいからって」

「つたえたいの」

「えっ？」

ボクには、分からなかった。

二人が何を言っているのかも。

この先に待つ、辛い結末も……。

第十七話　Cの後悔／双子の想い（後書き）

はいっ
こんな感じでした。

次で、C編完結です！

……が、またも更新遅れます…。

本当にすみません。

用事がてんやわんやと溢れかえってまして……。

まぁ、土日には更新できると思いますので！

では、また！

第十八話　Cの後悔／双子の真実（前書き）

更新しました！

いつもの倍の長さになってしまいましたが、どうぞ！

第十八話　Cの後悔／双子の真実

――旧金堂家

探偵事務所を出た海斗は、愛用の白いバイクを走らせ、事件があったという旧金堂家に来ていた。

五年も時が経っていても、そこは黄色い立ち入り禁止のテープで囲われていた。

「よし」

テープを乗り越え、中に入っていく。

そして、玄関から入ろうとするが――

「……やっぱり開かないか」

当然、鍵が開いてるはずもなく、海斗は別の入り口を探し始める。

そして、

「ここ、からならっ」

立て付けの甘い裏口を強引に開き、そこから中に入る。

一見すると犯罪のようだが、というか犯罪そのものだが、気にしない。

……気にしている暇は――ない。

中は、当然のことだが、静かだった。

五年前から止まったままの世界。

話に聞いた通りの光景で、床には、血の痕がベッタリと残っていた。

その中で、

「……あった……」

血の痕の中に微かな切れ筋があった。

海斗の推理通りだった。

「ふっ！」

溝に手をかけ、力を入れる。

すると――

――ガコッッ

床板が外れて、地下へ続く階段が現れた。

「……」

しばらくその虚空を見つめる海斗。

その後、海斗はその中に入っていった。

――咲也視点

あれから二時間が経った。

小春さんも警察から戻ってきて、金堂姉妹と遊んでいる。ボクは、というと……

「……ほぅぅ」

ただただボーっとしていた。

あんまり人付き合いが得意じゃないボクは、邪魔にならないように隅の方に座っている。

なんだか自分で、そう言っていると切なくなってくるけど……。

――リリリリッ

やりきれなさに包まれている最中、いきなり事務所の固定電話のベルが鳴った。

それを慌てて取る。

「はは、い！　なるみたんていじむしょすぅいとしびゅでしゅ！」

……盛大に噛んでしまった！？

うぅぅ、小春さんも顔背けてるし……。

……うん、よし。落ち着いた。

『さくや？』

「あ、あれ？　兄さん？」

気を取り直して電話に耳をあてると、聞こえていたのは兄さんの声だった。

「どうしたの？　もしかして……何か分かった？」

『……事務所に金堂亜美ちゃんと真美ちゃんはいるね？』

「えっ？　う、うん…」

『代わってくれるかな？』

「わかった、よ」

口調は柔らかかったけれど、ボクはその裏にある有無を言わせぬ意志を感じ取っていた。

だから、素直に従う。

「あの……」

「？　どうしたんですか、七海くん」

小春さんが気づいて、答えてくれた。
受話器を差し出す。

「え、えっと……金堂さんに…」

「……どっちの金堂さんですか？」

「えっ？　あ、その……えっと……」

「とりあえずスピーカーにしましょうか」

「あ、はい……」

うぅ……さっきから恥ずかしいところしか見せてないよぉ…。

――ピッ

スピーカーに切り替える。

「海斗さん、スピーカーにしましたけどいいですよね？」

『小春ちゃんかぁ。……うん、問題はないよ』

『……金堂亜美ちゃん、真美ちゃん、聞こえるかな？』

「「はい」」

『今、昔君たちが住んでいた家に来てる』

「「……」」

『お母さんに会うために、ね』

「「！？」」

兄さんの発言に、ボクも小春さんも驚いてしまった。

逆に……。

「「……」」

金堂さんたちは黙ったまま電話を見つめている。

その表情からは感情は読み取れない。

どういうことだろう。

普通なら、お母さんが見つかったんだから、喜んでもいいはずなのに……。

『その様子だと……もう、大体分かってるのかな？』

電話口から兄さんの声。

気のせいかもしれないけど、なんとなく声に元気がないような……。

「……」

「……」

「……」

「……」

誰も口を開かない。

そんな中――

「「……はい」

沈黙を破り、二人が答えた。

「お母さんがしていることも」
「私たちがどういう存在なのかも」
「「全部分かってます」」

「どういうこと、ですか……？」

理解が追いついていないボクに代わって、小春さんがそう聞いた。

「「……」」

金堂さんたちは答えない。

『……見てもらった方が早いね。……今からこっちに来てくれるかな』

「はい。……あ、でも道が……」

『道は二人が知ってるよ。ね？』

兄さんの問いに、二人はコクンと頷いた。

『じゃあ、また……』

――ブツッ

電話が切れる。

小春さんが受話器を元の位置に置いた。
それを確認した双子は口を開いた。

「「行きましょう、私たちの家に……」」

――旧金堂家

「……来たね」

小春たちが着いたのを確認すると、海斗は家を見上げる。

「海斗さん……」

「兄さん、一体どういうことなの？」

「ここにいるんだよ、二人のお母さんがね」

そう言って、振り向く海斗。
その目はまず、金堂姉妹を見据えた。

「お母さんはここにいる。依頼は果たしたよ」

「「はい」」

「もう、いいんだね？」

「「……はい」」

「……わかった」

そして、小春と咲也

「小春ちゃん、咲也」

「はい」

「…う、うん」

「これから見るのは、真実。辛い現実だ。」

海斗はそこで一旦言葉を区切り、そして、問う。

「……二人は真実を知る覚悟あるかな？」

と。

――旧金堂家・地下へ続く階段

海斗たちは、海斗が見つけた階段を地下へと下っていた。

先頭から海斗、金堂姉妹、小春、咲也の順だ。

「こんな所があったんですね」

そんな小春の呟きも、狭い空間のために反響して、全員が聞き取れる程の大きさになる。

「事件の時に出来たんだと思うよ」

「事件の、時に……って……」

咲也の呟きもまた、反響し全員に伝わる。

「……まず、この事件の概要そのものが違ってたんだよ」

「えっ？」

「……そろそろ着くよ」

海斗が指を差す。
光が見える。

「んっ」
「っ」

金堂姉妹が光に向かって駆け出す。

海斗たちもその後を追った。

広い部屋が広がっていた。
そこは部屋全体が真っ白に統一されていた。
壁も床も家具も、すべてが白。
頭がおかしくなりそうなほどの白、白、白。

そして、その部屋の中心には一人の女性。

「「おかあさん！！」」

「……あみ？……まみ？」

それは二人の母親。

二人の記憶よりだいぶ痩せ細り、髪も真っ白になっていたが、間違いなく母親であった。

そして、彼女はあるものを抱き締めていた。
ボロボロな何か。
それは、何かの亡骸のようだった。

「あ、れ……は？」

「なんなん、ですか……あの人が持っている……あれは？」

動揺する小春と咲也。

海斗は辛そうな表情をしながら、真実を告げた。

「あれは……」

「あれは、亜美ちゃんと真美ちゃんの遺体……だよ」

――五年前・金堂家

その日は、父親が仕事で不在で、母親は双子と遊んでいた。

昼食の時間になったために、母親はキッチンへと向かっていった。

そこまでは、いつもの通りの金堂家。

だが、違った。

リビングに亜美と真美の二人だけになった、ちょうどその時、『何か』が現れた。

「「だれ？」」

まだ小学二年生になったばかりの二人には、それが一体なんなのか分からなかった。

真っ白な『何か』。

白い手袋に白いマスク。

まるで手術服を着ているかのような姿だった。

ただ、その『何か』は、明らかに人間ではなかった。

『……』

『何か』が二人へと近づいていく。

そして――

――グシャッ

二人を切り裂いた。

『何か』の手袋は真っ赤に染まり、その手には、血の滴るメス。

『……』

そして、黙ったまま二人の右足と右腕を切り取る。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」

――悲鳴。

昼食の準備を終えた母親が、リビングの入り口にへたり込んでいた。

「あ、な……ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

血で染まった二人の娘を見て、声を上げた。

確認するまでもなく、二人は死んでいた。

「……ぁぁ、ぅ…」

絶望にうちひしがれる彼女に、『何か』が手を差し出す。

『悲しむことはありませんよ。これを使いなさい』

いつの間にか差し出された手の中に、一本のメモリが乗っていた。

『これを使えば、娘さんたちは帰ってくる』

『ほら、これを。貴女も娘たちには、帰ってきてほしいでしょう?』

「……ぇ」

彼女には意味が分からなかった。

目の前の『何か』は、娘たちを殺した。

殺した。

なのに、娘たちを帰って来させろと言う。

完全に矛盾している。

だが――

「……はい」

今の彼女には、娘たちを失った絶望と帰って来させられる希望で、他のことを考える余裕などなかった。

だから、そのメモリを受け取った。

『クローン』のメモリを……。

――現在

「「……」」

海斗が小春と咲也に語った事実は、信じられないものだった。

死んでいたのは、実は、亜美と真美の方だったのだ。

母親は、そのメモリを受け取り使った。

『クローン』メモリの力で、死んだ二人のクローンを造り出したのだ。

その後、彼女は例の『何か』によって、この部屋に幽閉されていた。

鍵もない場所だったが、ここから出れば、娘たちを再び殺す、と言われていたらしい。

「酷すぎます」

小春は、拳を握り締めながらうつむく。

「……そうだね……ぶち殺したくなるくらい……」

「……兄さん」

海斗の呟きが咲也にだけ聞こえていた。

「……海斗さん、どうにかなりませんか…？」

小春たちの前には、ただ泣きながら抱き合う母子の姿があった。

「……メモリを……入れたままなら二人は…消えないんだよね？」

「うん、そうだね」

「兄さん！　だったら！」

「ダメだ！！」

咲也の言葉を強い口調で否定する海斗。

「っ……どうして！？」

「このままなら、母親は確実に死ぬ」

「っ！？」

「こんな部屋に五年間も閉じ込められてたんだ。……このままだと、メモリの魔力に呑まれて、心も身体も壊れてしまうよ」

「……そんな…」

「海斗さん」

「うん、壊すよ」

「……はい」

会話を止め、三人はただ母子を見ていた。

数分後、姉妹が海斗たちのところに歩いてきた。

「もう、いいのかい？」

「「はい」」

「わかった」

海斗は、母親の元へ歩いてゆき、声をかける。

「こんにちは」

「……たんてい、さん。ありがとうございました」

「……」

「…あの、私たちは一緒に暮らせるんでしょうか？」

「……いえ、無理です」

「……そう、ですか…」

顔を伏せる母親。
そんな彼女に海斗は言葉を紡いでいく。

「今から僕は貴女の中にあるメモリを破壊します。それで亜美ちゃんと真美ちゃんは消滅します」

「っ！」

「貴女がメモリを使って彼女たちを造り出したのは、彼女たちに対する罪です」

「彼女たちはもう一度死を体験する」

「う、うぅあ…」

「だけど……」

「よかったんだと思いますよ？　貴女の顔を見ながら別れられるんですから…」

そう言う海斗の声は優しかった。

彼も死に目に会えず永遠に別れてしまう辛さを知っていたから……。

「今から僕が貴女の罪を断ち切ります。……だから、最期は笑いかけてあげてください」

「……は、はい」

彼女は涙を堪えると、娘たちの方を向く。

海斗はそれを確認して、メモリを取り出す。

『ファントム』

「……変身」

ファントムに姿を変えた海斗。

そのままマキシマムスロットにメモリを入れた。

『ファントム――マキシマムドライブ』！！

「……さぁ……断罪の時間だ……」

ファントムの手が彼女の肩を叩く。
ガイアメモリは、五年ぶりに空気に触れ、
――パリン
音を立てて砕けた。

それと同時に、姉妹の姿が透けていく。

「あっ！？」

二人の肩を抱いていた小春が声をあげる。
小春の腕は、もう二人を抱くことはできなくなっていた。

「……お母さん」

「な、に？　……あみ」

「……お母さん」

「どうし、たの？　まみ」

「「生んでくれて……ありがとうっ」」

「うっ……うんぅん。ごめん、ね……ダメ、なっ……おかぁさんっ
で……」

「……そんな、こと……なっぃ…よぉ」
「――たのし、かった……よぉ」
「だか、らっ」

「「わらって、おかあさん！」」

泣きながら、でも、精一杯亜美と真美は笑った。
だから――

「うんっ、あみっ…まみっ……！」

母親である彼女も、精一杯笑った。

そして、

「ばいばい、おかあさん」「ばいばい、おかあさん」

「……ばい、ばいっ」

二人は消えていった。

「うぅ……」

その光景を見ていた小春は泣いていた。

我慢していた。

だが、無理だったようだ。

「小春ちゃん、大丈夫？」

「だいじょぶじゃ、ないですよぉぉぉ！」

「よしよし。おいで、僕の胸を貸すよ……と言いたいところだけど……」

見ると、母親が倒れていた。
五年間のメモリ使用の反動が今来たようだった。

「僕は彼女を見てくるよ。さくや、小春ちゃんをよろしくね？」

「……わ、わがっだよ」

「あらら、咲也もか……。……とにかく見てくるね？」

海斗が寄っていくと、どうやら眠っているようだ。
とりあえず一安心して、地上に帰ることを提案しようとした。

その時――

――ドクンっ
――――ドくッ
―とクン――どクんッ
――トぐんッ―ドくっ

鼓動が――

――トクンっ
―ドくッ―ドクんっ
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン

――聴こえた。

強い、その上いくつもの鼓動。

とっさに――

「伏せろぉぉぉぉぉ！！」

――叫んでいた。

――旧金堂家・外

地下から飛び出した光。
その光が形を成していく。

光が形造ったのは、手術服のようなものを纏ったドーパント。
そう、金堂姉妹を殺害し、その母親を幽閉したドーパントだった。

「実験終了」

その声と共に、変身が解かれた。

そこにいたのは
『白石龍平』であった。

「精神を限界まで磨り減らした状態でのメモリの長期使用……いいデータが採れたのぉ」

ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべる白石。

「ワシの邪魔をする奴も殺せたし、一石二鳥だったの……いや」

白石は、懐から一本のメモリを取り出した。

「新しいやつも試せたから一石三鳥かのぉ」

『ライトニング』！

「今持っとるのは……」

『ライトニング』！
『オペ』！
『ルーム』！
『ユニオン』！

「……四本。……まだ足りんの」

そこまで言って、白石は歩き出した。

そして、去り際に

「残りは、あと三本」

そう、呟いた。

第十八話　Cの後悔／双子の真実（後書き）

読んでいただき
ありがとうございました！

というわけで
C編終了です。

書いておもいましたが、白石最悪ですね……！

自分で書いてて
思いました（＾ｏ＾；）

今回は
若干後味悪かったかな？

まぁ、ご容赦ください。

次回更新は
またも間を空けます。
来週になると思います。

では、また！

第十九話　動き出すT／探偵不在の探偵事務所（前書き）

やっと更新出来ました！

それでは、どうぞ！

第十九話　動き出すT／探偵不在の探偵事務所

――？？？

「何でクラスの子殴ったんだい？」

「……」

「うーん、黙っていちゃわからないよ？　話してくれないかな？」

「……」

「……当ててみようか？」

「……」

「給食のプリン食べちゃったから？」

「ちげぇよ！！」

「ふふ、やっと答えてくれたね」

「うっ……」

「言ってごらん」

「……て……わ…た」

「えっ？」

「おやなしっていわれた！　だから…だからっ！」

「……そっか」

「……うん」

「……そんなの気にするな！　君にはここの皆がいるだろう？」

「……」

「それに…」

「僕が父親、だろ？」

――鳴海探偵事務所水都支店

「海斗がけがしたってのは本当か！？」

血相を変えて事務所に源一郎が飛び込んできた。

「あ、源一郎さん」

「おう、嬢ちゃん、で、本当なのか!?」

「はい、全身打撲で入院中です……」

金堂家の地下が何らかの原因で崩れた時、海斗は小春たちを庇って、瓦礫の直撃を受けた。

幸い命に別状はなかったものの全身を強く打ち、入院した。

そのため探偵事務所は、小春と咲也で回していた。

「そうか。そりゃあ困ったな」

「どうしたんですか?」

「いや、実はな…」

「ただいま帰りましたぁ」

と、話を遮るように咲也が事務所に入ってきた。
両手には買い物袋が。

「あ、おかえりなさい。重くありませんでしたか？」

「だ、大丈夫です…」

そう言うものの、決して大丈夫そうには見えない咲也である。

「おい、嬢ちゃん」

「あ、すみません…どうかしましたか？」

「いや、また海斗は女連れ込んだんだな」

「なっ！？」

源一郎の言葉に辛うじて持っていた買い物袋が落下した。

「あ、彼、男の子ですよ」

「……？　何言ってんだ？　どう見ても女の子じゃねぇか」

「……うぅ」

「いえ、確かにそう見えますけど……」

「……うぅぅぅぅ」

「で、お嬢ちゃん、名前は何て言うんだ？」

「……うぅぅぅぅぅ！」

「あぁ、七海くん！？　大丈夫ですか！？」

「……ダメです」

床に手足を着き、本気で項垂れる男の娘がそこにはいた。

「ボクは女の子じゃありません！！」

切実な叫びであった。

咲也が精神的ダメージから立ち直れず、家に帰った後のこと。

「…怪盗…ですか？」

小春は怪訝な表情を源一郎に向けていた。

「今のご時世に怪盗なんて名乗る人がいるんですね」

「あぁ、アホみたいだが、本当の話なんだよ」

源一郎もため息をつきながら答えた。

「でも、源一郎さんってガイアメモリ犯罪の担当でしたよね？」

「そうなんだが、人手が足りないらしくてな。警備に俺も回されたってわけだ」

だから、海斗に手伝わせようと思ったんだが、とぼやく源一郎。
だが、その本人がいないと分かったためか話を切り上げた。

「まぁ、というわけでこれから仕事だ。邪魔したな、嬢ちゃん」

「あ、はい」

バタンと扉が閉まり、源一郎は事務所から出ていった。

「……怪盗、ですか」

扉を見つめながら、小春はぼそりと呟いた。

――商店街・咲也視点

「……ボク、そんなに女の子っぽいかなぁ…」

今日、何度目かの呟き。

昔から少し女顔だっていうのは自覚していた。

だけど、普通なら間違われないだろうとも思っていた。

なのに……。

「はぁぁぁぁ」

ため息だって出るよぉ。
そういえば、最初は小春さんにも言われたし……。
……なんでだろう？
顔？
もちろんそれもあるだろうけど、それだけじゃ……。
体つき？
……もあるかな。
でも、顔も体つきも簡単には変えられないし……。
なら、あとは……行動、かな…？
男らしいことをすれば、きっとボクだって……。
そんなことを思っていたら、なにやら少し離れたところで嫌な感じの声が聞こえた。
「おい！　そこの綺麗なおねーちゃん！」
「……」
「おいおい、無視すんなよぉぉ！」
「……」

「おぉ？　なんだぁ？　黙っちゃってよお！」

女の子が柄の悪い男の人たちに絡まれていた。

出来すぎた偶然だけど……。

「…よ、よし！」

あの女の子を助けよう。
そうすれば少しは男らしいよね！

女の子を助けるために、絡んでいる二人の男に向かう。

勇ましく、勇ましく…。

「こ、こら！」

「あん？」

「なんだよ？」

「そそ、その子…い、いやがっている……だろぉ……だから…
…やめたほう、がぁ……」

無理でした！
この人たち怖すぎるよ！

「んだあ？　お前も可愛がって欲しいのかぁぁ」

「おぉ、よく見りゃ中々の上玉じゃねぇかよ！」

「えっ……そ、そのっ！？」

いやらしい表情で迫ってくる男たち。
逃げなくちゃと頭では分かっているのに、足がすくんで動けない。
ど、どうしようっ！？

こんな時、兄さんがいたらっ。
だけど、今はいない。
目の前に迫ってくる。

「っっ！」

助けて、兄さん！！

――バキッッ

「グブッッッ！？」

「グゥウゥウゥ！？」

「……えっ？」

おそるおそる目を開ける。だけど、目の前に男はいなかった。

その代わりに――

「……」

さっきの女の子が立っていた。

自分よりも背も高くて、体格のいい男二人を殴り倒していた。

「くそっ！　このクソアマァァァ！！」

すぐに起き上がった男が女の子に殴りかかる。

「あっ！？　危なっ――」

「……」

それを楽々とかわして、男のアゴに拳を入れた。

「……っぐ！？」

「お、おい！？」

一人、倒れた。

そして――

「ぐぶっっ！？」

「……」

二人目も落ちて……。

彼女がこちらを向いた。

真っ黒い髪に真っ黒い瞳。彼女が纏う雰囲気は、ガラスや氷みたいに冷たくて、でも……綺麗だった。

なによりかっこよかった。

こんなことを本気で言うのは、とっても恥ずかしいことだけど……。

ホントは立場は逆なんだろうけど……。

それでも、ボクは恋に落ちたんだ。

第十九話　動き出すT／探偵不在の探偵事務所（後書き）

始めに言っておきますと、この章では戦いは全くありません！

皆無です！

それはご了承ください（＾＾；

次回更新は
土日になりそうです。

では、また

第二十話　動き出すT／少年の恋と怪盗の予告状（前書き）

更新遅れました（汗）

土日とか言ってたのにごめんなさい！！

とにかく、どうぞ！

第二十話　動き出すＴ／少年の恋と怪盗の予告状

――商店街・咲也視点

七海咲也、１８歳。

人生初の初恋をしてしまいました。

人生初と初恋がかぶっていることさえどうでもよくなるくらいの一目惚れです！

相手は、不良に絡まれているのを助けようとしたら、逆に絡まれ、それを助けてくれた人です！

わかりにくいですが、とにかく綺麗な人です！

「あ、あの……ああ、アリガトウゴザイマシタァ！」

しまった！？

緊張で片言になってしまった！

「……」

変な風に思われたかも、と思ったけれど、その人は無反応。
と、とにかくなにか話をしないと……！

「あの、おなまえわぁ」

「……」

「……えっ、と……その」

「……」

「なにか、助けていただいたおれーをさしぇてくだしゃい！」

「……」

本当に無反応。
清々しいくらいの無反応だった。
そして、何事もなかったかのように立ち去ろうとする。

だから、つい

「あ、あの！　ままま、まってくだしゃい！」

……。

噛んだ！？
恥ずかしすぎて、穴があったら入りた――

「……私に」

「……ふぇっ？」

間抜けな声が出てしまった。
でも、仕方がないと思う。

だって、さっきまでずっと無言で、不良と戦っている時ですら無言だった彼女がいきなり喋ったんだから。

動揺するボクに構わず、彼女は続けた。

「私に関わるな」

続けたと言っても、その一言だけ。
それだけ言うと、今度は全く振り返らずに行ってしまった。

「……」

もしかして、ボク――

「……フラれ、た？」

――郊外にある大豪邸

「……なんで、嬢ちゃんがいるんだ？」

「興味がありまして」

小春は、源一郎と共に水都の中心部から少し離れた所にそびえ立つ屋敷にいた。

何のことはない。

怪盗に興味を持った小春が、警備に行くという源一郎の後を着けただけのことだった。

「とにかく私も怪盗を捕まえるの手伝いますから」

「……まぁ、人数多い方が俺は仕事が楽になるからいいんだけどよ」

自棄になったのか本心から言ったのかわからないが、源一郎はそんな意見に落ち着いたようだった。

「それで、怪盗が狙っているのはどんなものなんですか？」

「……いや、実は詳しくは知らねぇんだ。　この家の主人は、とにかく金庫を守れ、とそれだけしか言わないらしくてなぁ」

「金庫、ですか？」

「あぁ、金庫だ」

これだけの大豪邸なら、金庫の一つや二つあってもおかしくはないだろう。

そう納得しかけた小春の頭に、ふと一つの疑問が浮かんだ。

「源一郎さん」

「ん？　どうした？」

「なんで個人のためにこんな大がかりな警備になっているんですか？」

小春の言う通り、この屋敷に対する警備は、一個人のための警備体制とは思えないほど大がかりだった。

屋敷の回りを約七十人ほどの警官が取り囲み、源一郎の話では、中にはさらに五十人ほどの刑事や警官が待機しているらしかった。

国立博物館などの国が運営する場所の警備なら、この体制もあり得る。

だが、今回は個人警備だ。だから、この体制は異常であると言える。

「いや、この怪盗がいつも予告状を出してくるようでな。しかも、警備しても毎回毎回盗まれてんだ」

「毎回？　こんなこと、過去にあったんですか？」

「あぁ、一年くらい前から今までに十件はあったが、守りきれたことはない」

「警察ダメですね」

「まぁ、その通りだわな。んで、面倒なことにお偉いさんが警察のメンツを気にしてるつーわけだ」

「……なるほど」

小春は納得した。

警備対象が中身の見えない金庫だとしても、予告状を出されたならば警察は動くしかない。

しかも、警察のメンツを保つためならば尚更だ。

「それで、いつ怪盗は現れるんですか？」

「あぁ、それは――」

「あと五分だ」

――時は遡り、一時間前・水都病院

咲也は、海斗が入院している病院に来ていた。

受付にいた看護婦に軽く挨拶をして海斗の病室に向かう。

その間も、商店街で出会った女の子のことが咲也の頭の中を巡っていた。

それほどまでに名も知らぬ彼女が気になっていた。

「……でも……フラれたんだよね、ボク……」

はぁ、とため息をつく咲也。

その調子のまま咲也は、海斗が入っている病室の扉を開けた。

すると――

「マコちゃんはホント可愛いね！　こうやってマコちゃんに看てもらえるなら、このまま入院しててもいいかな」

「もうっ、海斗くん、上手ねっ！！」

海斗がナースをナンパしていた。

「……にい……さ…ん」

「あ、さくや。お見舞いに来てくれたのかな？」

いつも小春にデレデレしていながら、いけしゃあしゃあと他の女の子をナンパする海斗。

フラれたショックでナイーブになっていた咲也に、これは堪えた。

兄貴分である海斗と自分との差を感じ、どんどん自分が惨めに思えてくる。

「……う、うぅぅ」

「えっ！？　どうかしたの、さくや！？　なんで涙目！？」

いきなり涙目になるという第三者から見れば唐突すぎる行動に、海斗は思いっきり戸惑ってしまう。

そんな海斗に追い討ちをかけるように咲也は言葉を続けた。

「……小春さんに、言いつけるっ」

「えぇっ！？　待って、さくや！　さっきから全く意味がわからないよ！」

「……」

「シカト！？」

「……」

「……はぁ」

一つため息をつき、それから海斗は、しょうがない、というような表情をする。

そして、咲也に優しく声を掛けた。

「辛いことでもあったのかな？　話してごらん、聞いてあげるよ？」

――郊外にある大豪邸

怪盗の予告まであと三分。

「あと、三分ですね」

「ふぁぁぁ、何も起こらねぇと楽なんだがなぁ……」

時計をじっと見る小春とは対照的に源一郎は欠伸をしながらそう言った。

「なんだかやる気がまったく感じられませんね……」

「はぁ、しょうがないんだよ。今日は久しぶりの休みだったんだが、これのせいで休み返上……はぁ」

「それは不憫ですけど、仕事はしないとダメですよ？」

「わかってるわかってる！　嬢ちゃんの言う通りだよ！」

半ばやけくそ気味に言って、源一郎は頭を掻く。

そんな雑談をしている間にも、時間は刻一刻と迫ってくる。

「……」

「……」

そして――――

――ピピピピ、ピピピピ！

セットしたアラームが、予告の時間になったことを知らせる。

何も起こらない。

――ヒュウウウウウウ――

二人がそう思った瞬間だった。

一筋の光が空に向かって上がってゆく。

そして、光が飛び爆ぜた。

――バァァァァン！！！

空に開く一輪の光の花。

それと共に何かが屋敷の屋根へと降り立った。

「なんだ！」

「なにがあったんだ！？」

「何の音だ！？」

「警備を固めろ！！」

「怪盗か！？」

「わからない！」

「いいから持ち場に―！」

その場にいたすべての人がいきなりのことに動揺し、叫ぶ。

無論、小春も源一郎も何が起こったかすら把握できていない。

そんな中、屋根に降り立った何者かは、夜空に咲く光の花を背に叫んだ。

『怪盗２０、参上！！』

第二十話　動き出すT／少年の恋と怪盗の予告状（後書き）

というわけで、T編二話終わりです。

まぁ、今回も見事に戦いませんでしたね……。

キーワードからバトル消そうかな（汗）

補足ですが、最後に出てきました怪盗の名前は

怪盗２０（かいとうトゥエンティ）です！

なぜ２０なのかは後ほど解説いたしまーす。

次回更新は

金曜日になると思います。

更新遅くて

すみませんｍ（＿＿）ｍ

では、また！

第二十一話　動き出すT／怪盗２０（前書き）

またも遅れてしまいました……。

しかし、これには訳があるのです！

まぁ、それはあとがきで話します。

今回は長めです。

それでは、また！

第二十一話　動き出すT／怪盗２０

――水都病院

「……そんな…感じ」

「なるほど、ね……うぅん……」

咲也から話を聞いた海斗は唸る。

可愛い弟分が初めて恋をしたというのだ。

兄としては、なんとかしてあげたい。

しかし、相手はどこの誰かも分からない上に、関わるなとさえ言われたらしい。

ならば、出来ることは……

（……ないなぁ……）

内心で海斗はそう呟いた。だが、それをそのまま伝えるという追撃の一手を打つわけにはいかない。

とにかく自分の経験から、アドバイスを絞り出す。

「……にいさん？」

「あ、な、なに？」

「えと……汗、すごいよ？　だいじょうぶ？」

「あ、あぁ。……えぇと、さくや？」

「なに？」

「さくやはその子が好きなんだよね」

「…う、ううう……うん」

狼狽えながらも肯定の意思を示す咲也。

それを見て海斗は言った。

「なら、その子を知ることから始めた方がいいよ」

「……知る……」

「うん。だって、まだよく知らないんだしね」

「……う、うん」

「さくやがその子を知って、その子にもさくやを知ってもらうこと、これから始めよう！」

「わかったよ！　ボク頑張ってみる！」

「よし！　頑張るんだよ」

「うん！　ありがとう、兄さん！」

そう言うと、咲也は病室から出て行った。

「……ふぅ」

海斗は額の汗を拭いた。

そして、一言呟く。

「なんとかなったな」

今の咲也は気づいていなかったのだ。

海斗のアドバイスは、会えることを前提にしたものであり、今の状況では全く役立たないことを。

――郊外にある大豪邸

「怪盗２０、参上！！」

怪盗は、そう言って屋敷の屋根に降り立った。

「怪盗だぁぁ！」
「警備を固めろっ！」
「どこにいるんだっ！？」
「あそこだ！」
「捕まえろぉぉ！！」

警官たちが一斉に動き出す。

警備の援護に行く者もいれば、怪盗を捕まえるために屋根に昇ろうとする者もいる。

そんな中、小春と源一郎は――

「あー、現れたなぁ……」

「そうですねぇ……」

落ち着いていた。

周りが慌てていると逆に冷静になる、という現象が二人にも起きていた。

小春はいいが、警察官である源一郎がこの状況で落ち着いているのは、些か問題だが……。

「源一郎さんは行かなくていいんですか？」

「面倒だしなぁ……」

「職務怠慢ですね」

「だなぁ」

このまま渋いお茶でも飲み出しそうな勢いである。

が、そんな空気も長くは続かず……。

「おい！　加納！　早くお前も来い！！」

遠くにいた源一郎の上司が源一郎を呼んだ。

さすがにそれを無視するわけにもいかない源一郎は、立ち上がる。

「はぁ……行くか。嬢ちゃんはどうするんだ？」

本気で嫌そうな顔をしながら源一郎は小春に尋ねる。

「私は……見てます」

「そうか。なら、気をつけて見てんだぞ」

「はい、気をつけてくださいね？」

「おう」

上司の方へ駆けていき、源一郎は屋敷の中に入って行った。

それを見送った小春は、改めて怪盗の姿を見る。

一言で言うと『奇抜』だった。

怪盗２０

装備品
胴：学ラン（上）
腕：未装備
腰・足：ジャージ（七分丈）頭：猫のお面

酷い装備だった。
なにより……。

「ださい……ですね」

小春ですら、思ったことをそのまま口に出してしまう程のダサさであった。

「はーはっはっはっ！！　捕まえてご覧なさーい！」

もちろん遠くにいる小春の言葉は聞こえるはずもなく、怪盗は警官たちを嘲笑いながら屋根の上でスキップをする。

そうこうしてる間に、警官がざっと二十名ほど屋根の上にたどり着いていた。

「大人しくしろ！！」

警官たちは、怪盗の周りを銃を構えて取り囲む。

普通の犯罪者ならば、その状況ならば怯むであろう。

だが――

「かかってきたまえ！！」

怪盗２０は違った。

両手を高く掲げ、空を仰ぎ見た。

「う、動くな！！」

警官の一人がそう警告する。

「あーはっはっはっ！！　撃てるものならば撃ってみたまえよ！！」

なおも挑発する怪盗。

そんな怪盗に痺れを切らした警官たちは引き金を――

「撃てぇぇぇ！！！」

――引いた。

――パァァァン

――パァァァン

――パァァァン

――パァァァン

――パァァァン

――パァァァン

――パァァァン

銃声が鳴り響いた。
しかし――
「ほら、無駄さぁ！」
怪盗は無傷だった。
「な、何故だ？」
「なにが……」
「……！？」
自分たちは確実に引き金を引いた。
だが、怪盗には傷一つついていない。
そこから一ミリたりとも動いていないにも関わらず、である。
これには警官たちも狼狽えるしかない。
「なにが起こった！？」
「ははははぁ、その疑問にこの私、猫伯爵がお答えしよう！！」
怪盗は胸を張ってそう言うと、学ラン（上）のポケットから何かを

取り出した。

「これ、なーんだ？」

「そ、それはっ！？」

それは大量の弾丸であった。
しかも、未使用の。

警官たちは、慌てて自分の銃を確認する。

二十人全員の拳銃には、弾は詰められていなかった。

そう、つまり――

「皆様の弾を盗ませていただきました～☆☆」

猫のお面の下で、怪盗はウインクをした。

不思議なもので、警官たちにも、そのしてやったり的なウインクは伝わったようだった。

「き、きさまぁぁ！　それを返せぇぇぇ！！」

その態度に触発されたように、一人のガタイのいい警官が、もの凄い形相で怪盗に襲いかかる。

「おっとっと～☆」

「な、なに!?」

「とう!!」

その攻撃を見事にかわし、バランスを崩した所に跳び蹴りを叩き込む。

だが、それ以上追撃しようとはせず、むしろ怪盗は両手をあげた。まるで、降参しているかのように。

「な、なんの真似だ!?」

「ははは、見て分からないか？　降参さ！　ほら、弾を返そう！」

そう言って、じゃらじゃらと弾をばらまいていく。

――ガンッ

弾に紛れて他の何かが投げられた。
それは――

「おっと、間違えて手榴弾を投げてしまったぁ！」

「な、なにぃぃぃぃ！？」

「はっはっはっ、うっかりうっかり！　今、流行りのドジっ娘というヤツ――」

「全員たいひぃぃぃぃ！」

怪盗の突っ込み所満載な台詞を聞き終わる前に、警官たちは逃げていく。

爆発が来る。
そんな警官たちの考えとは裏腹に、

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ば、爆発しない？」

そう、爆発は起きなかったのだ。

そして――

「おい！？　奴がいないぞ！！」

「なに！？　どこに行ったんだ！？」

「きっと中だ！　連絡を！」

「全員、屋敷内の警備に回れぇぇ！！」

警官たちは、鬼の形相で屋敷内に駆け込んでいった。

――屋敷内・源一郎視点

「なんだ？　外が騒がしいが……」

「大丈夫です。外には警官が七十人ほど、この屋敷の中にも五十人の刑事が警備に当たっています。警備体制は万全です」

屋敷の主に、捜査二課の課長が言う。

「はぁぁぁぁ」

俺たちまで現場に引っ張り出しといて、何をふんぞり返っていやがんだ。

はぁ、せっかくの休みだっつうのに……。
ため息だって出るぜ。

「おい、加納」

「ん、なんですか？」

「一応、ちゃんとやれよ」

俺に声をかけてきたのは、二人しかいない超常犯罪捜査課の内のもう一人。

俺の上司の上田課長だ。

「ですがね、課長」

「これ以上サボるなら減給すんぞ」

「ぐっ！？」

課長はいつもこういう脅し方をする。
だから、嫌いなんだ、この人は……。

――バタンッ

「課長！　大変です！」

「どうした？　騒がしいぞ！」

突然、警官が一人中に駆け込んできた。
捜査二課の課長がそれを怒鳴りつけている。

……うるせぇなぁ。
一体何だっていうんだ？

「なに！？　怪盗が侵入しただと！？」

「はい、おそらく」

「なら、外の警官を全員中に入れて探せ！」

「わかりました！」

警官と二課課長とのやりとりを見ながら思う。

面倒なことになりそうだ。

「はーはっはっ！　その必要には及ばんよ！」

どこからか、アホみたいな高笑いが聞こえてきた。

ほら、やっぱり面倒なことになった。

「はーはっはっ！　その必要には及ばんよ！」

小春が屋敷の中に忍び込んだちょうどその時、そんなおかしな高笑いが聞こえてきた。

声がした場所は、さっきまで怒鳴っていた二課課長のすぐ隣。

そこに、センス0なあの怪盗がいた。

「はっはっは。お仕事御苦労様だなぁ！」

「貴様！　いつからそこに！？」

「いやいやいや、さっきからここにいたさ！」

「とにかく、逮捕だ！」

二課課長がそう叫び、警官に指示する。

そして、警官たちは怪盗に向かっていく。

しかし――

「なんだ！？」

「消えたぞ！！」

怪盗は、その姿を警官たちの目の前から忽然と消した。

まるで最初からそこにいなかったかのように……。

そんな狼狽える警官たちを嘲笑うように高笑いが響き渡る。

「はーはっはっはっ！！　どこを見ているのかね？　怪盗２０はここにいる！！」

その声は、警官たちの後ろから。

「ちみたちの目は節穴かねぇ？」

「だれがちみたちだ！　ふざけやがって！　かかれぇ！！」

再び指示するが、また……

「また、き、消え――」

「はーはっは、この私に触れられると思うたか！？」

「貴様、何をした！？」

「ただのトリックさ。それよりも本題に入るとしよう」

そう言うと、怪盗は、屋敷の主に近づいていく。

そして、一つお辞儀をして言った。

「主殿、貴方が持っているガイアメモリを渡していただきたい」

「「「「「!?」」」」」

その発言に、屋敷にいたすべての人が衝撃を受ける。

「な、なにを言っている!?　ガイアメモリ!?　そんなもん知らん!!」

「いいえ、持っているはずですよ」

「持っていない!!」

「……例えば、その金庫の中に……」

「なっ!?」

怪盗の言葉に動揺する主。

「くっ……」

「どういうことですか？　話を聞かせていただきたい。場合によっては、あなたを逮捕します」

二課の課長が主に詰め寄る。

水都の安全を守る警察が、水都の安全を脅かす代物であるガイアメモリを警備していたというのだ。

こんなバカな話はない。

主も警察も怪盗も、それを端の方で見ていた小春も、誰も何も話さない。

沈黙が場を支配した。

そして、

「っう……ふ、ふっ……ふふふふ」

「おい、なにを笑って――」

「メモリは渡さん！！」

――バンッ！

主が銃を怪盗に向け、発砲した。
突然のことに、警官たちが動揺している隙をつき、金庫を開けた。

「取り押さえろぉぉ！！」

「もう遅いっ！！！」

『タイラント』

メモリが主の体の中に入る。
同時に、主は甲冑を着た武者鎧のような姿をしたドーパント・タイラントドーパントに変身した。

「うてぇぇぇ！！」

二課課長の号令で、ドーパントに向けて銃を撃つ警官たち。

だが、見かけ通りの硬度を誇るタイラントドーパントには効くはずもない。

『この力を手放すわけにはいくかぁぁ！！　警察も怪盗も消えろぉ！！！』

――小春視点

まさかガイアメモリが関わってくるなんて、思ってもみなかった……。

ここには、海斗さんもいないし、今の私はガジェットも持ってない。

正直な話、絶体絶命です。

いったいどうすれば……

「はーはっはっ！！」

こんな時にまで聞こえてくるあの高笑い。

その高笑いの主は、やっぱりあのダサい怪盗だった。

もしかしたら、恐怖で頭がおかしくなったのでしょうか……？

私は、悲しいことに事件に慣れてしまったから、気持ちが分からないですけど……。

「警察の諸君！　下がっていたまえ」

「おい！？　なにを！？」

怪盗が警察の人たちを差し置いて、前に進んでいく。

そして、学ランのポケットから何かを取り出した。

一つはナイフのような形でもう一つは――

『トリック』！！

ガイアメモリ！？

それを、ナイフの柄のような部分に……挿した！

「目には目を、歯には歯を、メモリにはメモリを！」

それだけを言うと、怪盗はドーパントに近づいていく。

海斗さんや竜さん、翔太郎さんとフィリップさんのように、仮面ライダーならその行動も理解出来る。

だけど、姿は変わらない。

あのおかしな格好のまま、向かっていく。

――三人称

「もう一度言おう。……そのメモリを渡していただきたい」

『誰が渡すか！！』

「ならば、致し方ない」

『まずはお前から消す！』

ドーパントが持っていた刀を振りかざし、怪盗に襲いかかった。

その刀は、怪盗の右肩を捕え、切り……裂く。

「――！？」

声にならない叫びをあげる怪盗。

『なんだぁ！！　そのナイフもメモリもただの飾りかぁ！！』

「ぐっ…っう……」

ブンブンと刀を振り、タイラントドーパントは怪盗の体を傷つけていく。

怪盗には、なす術がない。

戦闘が始まって約一分が経過し、怪盗は

『ははははは！　この調子で皆殺しだぁぁ！！』

「……」

既に息絶えていた。

切り裂かれた身体から、大量に血を流し、物言わぬ姿になっていた。

その姿を一瞥すると、ドーパントは笑いだした。

『ふふ、ハハハハハ！　さぁ、次はどいつだ？』

ドーパントは、見定めるように警官たちの姿を眺める。

気取っていた怪盗を殺して、気が大きくなっていた。

自分がタイラント、つまり、独裁者にでもなったと思っていた。

――だが、

『なっ！？』

警官たちを見定めていたドーパントの目は、ある一点で止まった。

そこには、奴がいた。

「やぁ」

殺したはずの

「さっきぶりだな」

奴が

「主殿」

『お、おまえなぜ生きている!?　いったい何をした!!』

「はーはっはっはっ!!　ただの『トリック』さ!」

怪盗は再びタイラントドーパントの前に立つ。

そして、今までとうってかわって真面目な顔を作り、言った。

「そのメモリ、この私がいただこう」

『黙れぇぇ！！』

怪盗の言葉にキレたタイラントドーパントが襲いかかる。

だが、当たらない。

『な、なぜだ！？　さっきは簡単に……』

声に焦りが混じり始めるドーパント。

一方の怪盗は、

「それは簡単さ！　私はまだ二つ変身を残している！　つまり、まだ二段階は強くなるのだよ！　はーはっはっはっ！！」

あのふざけた格好でふざけたことを口走っていた。

少しの間、攻撃を避け続けていた怪盗は、突然避けるのを止めると、今までのふざけた口調から一転して、鋭い口調で言った。

「コホン、冗談はさておき……そろそろ終わりにするとしよう」

そして、タイラントドーパントが振り回す刀をナイフで受け止める。

『なっ！？』

逃げに徹していた怪盗がいきなり、刀を受け止めたことに驚くドーパント。

だが、それだけでは終わらない。

怪盗は、メモリを一度抜くと、再び装填した。

『トリック――マキシマムドライブ』！！

ガイアウィスパーが響く。それと同時に、ナイフに光がまとわりつき始めた。

『メモリを破壊する気か！？』

マキシマムドライブの発動でメモリを破壊されると思ったドーパントは、素早く後ろに引いた。

逃げるためである。

『ここは退かせてもらうぞ。今、このメモリを――
「いやいや、もう終わりさ」

――キンッ！

だが、彼はドーパントの後ろにいたのだ。
そして、斬りつけていた。
マキシマムドライブが発動しているそのナイフで…。

『ぐっ！　な、なぜっ後ろにぃぃ!?』

「さぁ？」

質問に答えることなく、怪盗は何度も斬りつける。
ついにナイフが光を失った。
マキシマムドライブが終わったのだ。

しかし、メモリが破壊された様子はない。

『失敗…か？』

「いや、成功している。見ていてご覧……3…」

怪盗は何かをカウントし始めた。

「2」

「1」

それは

終わりへの

「0」

カウント。

『がっ！？　何が…ぐぅぅ……なにおぉぉ、したぁぁぁぁぁ！？』

カウントが０になった途端、ドーパントが苦しみ出した。

「さぁ、おいで」

苦しむ声など耳に入っていないのか、怪盗は断末魔を無視して他の何かを呼んだ。

すると、ナイフで斬った傷口から、メモリが飛び出した。

そのメモリは壊れることなく、そのまま怪盗の手に収まった。

「き、きさま……いったいなにを……」

変身が解け、元の姿に戻った屋敷の主がそう問いかけると、怪盗は

「はーはっはっはっ！！　メモリスティールというやつさ」

そう答えた。

――小春視点

ただただ驚くしかない。

たった今、目の前で、仮面ライダーでもない人がドーパントを倒してしまった。

しかも、メモリブレイクをしないで倒した？

正直……

「……訳がわかりません」

「はーはっはっはっ、それでは皆さんまた会いましょう！！」

怪盗は、ポケットから何かを出して床に投げつけた。

すると――

――ボフッッッ

途端に、ケムリが辺り一面に広がった。

ケムリ玉って……彼は一体何者なんでしょうか……。

もしかしたら、忍者とかでは？

私が、そんなおかしなことを考えている間も、警察の人が叫んでる。

だけど、たぶん無駄……。

彼は捕まらない。

根拠はないけれど。

なんとなくそんな気がした。

――屋敷から少し離れた空き地・怪盗２０視点

「ふぅ、疲れた疲れた」

メモリの回収も上手くいったし……。

なんとなく、『タイラント』のメモリを弄る。

「こんなくだらないもののせいで……」

そんな言葉が無意識に出てきた。

メモリを持つ手にも力が入ってしまう。

……いけないいけない。

これは、貴重な力なんだ。

父親を殺したあの男……天城王芽を倒すための……。

――数日後・???視点

また、殺してしまった。

今日殺したのは、『タイラント』メモリの元使用者。

社員であるのに、メモリの力を使って会社の金庫を破壊し、金を盗んだらしい。

だから、殺した。

もう殺したくないのに。

殺した。

だけど、私じゃない。

いや、私だ。

違う。

違わない。

脅されたんだ。

いや、それがお前の意志だ。

違う。

違わない。

違う。

違わない。

いやだ、もう……。

「……たす、けてよ……」

第二十一話　動き出すT／怪盗２０（後書き）

というわけで、T編でした！

今振り替えると、伏線張りまくりだ！？（「▽|　；）

まぁ、そのせいで長くなったんですがね……。

えー
前書きにも書きましたが、更新が遅れたのには
れっきとした（？）理由があるのです！

実は
私の知り合いの方と合作でもう１つライダーの話を作ることになり
ました！

いや、あんたただでさえ更新遅いのに！？

と思う方もいるかもしれませんね。

まぁ、その通りなんですがとにかく頑張ります！

なので、生暖かい目で見守ってやってくださいm（＿＿）m

次回更新は、少し時間を頂いて来週の日曜になると思います。

件の作品は
来週中に始めますので
時間があれば覗いてやってくだせぇ！

では、また！

第二十二話　転校生N／Garl's　talk　with　him（前書き）

こんばんは

こっちの方が早くアップ出来ました

N編スタートです！

少しずつでも、確かに物語は進んでいきます

それでは、どうぞ！

第二十二話　転校生N／Garl's talk with him

――？？？

「今日から家族になる『　　』くんだよ！　みんな、挨拶をしよう！」

『……』

「あ、の…よろしくね？　『　』くん」

「よろしくたのむぞ！」

「……ん」

「咲也も蒼も偉い偉い。……で、海斗？」

「……なに？」

「ちゃんと挨拶！」

「……よろしく」

「よしっ！　じゃあ、『　』くん、君は今日から僕たちの家族だ！　よろしくねっ！」

『……』

――水舞高校

朝の七時。

登校している生徒も、まだまばらな中、小春と咲也と叶は、小春の席の周りに集まって話をしていた。

「こはるぅ、ひまぁぁ」

「いつもの如くどうしたんですか、叶ちゃん」

「刺激がぁぁぁぁぁぁぁぁ足りない！！！」

「えと、……しげき……です、か？」

「そうさ！　いいか、小春、七海！　女子高生といえば、恋愛だろう！！」

「恋愛ですか？」

「…！？」

「イケメーンな彼氏とキャッキャウフフ、これぞ青春だぁぁぁぁ！！」

「は、はぁ……」

いつもとは違う方向に突っ走る叶に、いつも以上に困惑する小春。

そして、女子高生という単語に反論せず、沈黙する咲也。さらに、次第に俯いていく。

そんな不審な様子を叶が見逃すはずもなく……

「ほほう……さては七海、恋をしてるねぇ？」

「なぁぁ！？」

バレてしまった。

「そ、そのぉぉ……」

「図星だねぇ」

「そうなんですか？」

「うっ、あぅぅ……」

言葉に出して返事をしなくても、咲也の反応は一目瞭然であった。

好奇心が服を着て歩いているような存在である叶は、無論これに食いつく。

「どんな人なんだぃ？」

「えと……か、かっこいいひとです……」

もじもじと赤い顔をしながらもそう答える。

「かっこいい……男か！？　というか探偵くんか！！」

「いや、叶ちゃん。海斗さんはかっこいいっていうより、ダメな人ですよ？」

「だ、だから！　女の子ですよ！！」

「「なっ！？」」

好きな人は女の子発言に、叶だけでなく、小春も驚いていた。

「な…なんでそんなに驚くんですかっっ!?」

「あっ、ごめんなさい！　その、七海くんが女の子に恋をするということに驚いてしまって……」

「うぅぅ……」

「……あっ」

傷つけないようにと、いつも以上に丁寧な言葉で、取り繕おうとした小春だったが失敗。

さらに、咲也にショックを与えてしまった。

だが、そんな咲也の様子を無視して、叶が聞いてくる。

「でさでさ、ななみはなんでそのおなごを好きになったんよ?」

「それは……」

咲也は、出来るだけあの時、名も知らぬ女の子に助けられた時のことを思い出していた。

――鳴海探偵事務所水都支店

『またも発生！
　連続失踪事件』

「それでこの記事が？」

「あぁ、そうだ。これがお前に依頼しようかと思っている事件だ」

探偵事務所には、めでたく怪我も完治し、退院した海斗と、もはや常連となっている源一郎の姿があった。

海斗は、源一郎が持ってきた新聞の中の、ある記事を読んでいた。

連続失踪事件。

その名の通り、何人もの人が突然失踪している。
だいぶ前から起こっている事件で、失踪した人は二十人近くいる。

警察も捜査、捜索をしているが、被害者を見つけるどころか、被害者の共通点すら見つけられないでいるのだ。

「引き受けるのはいいとして……。ちゃんと払ってくださいよ？　払わないと、小春ちゃん怒るから……」

「分かってる分かってる！　それに……これは照井刑事からも頼まれてな」

「……照井さんから？」

照井の名前が出て、海斗は表情を変えた。

風都署の刑事であり、仮面ライダーアクセルでもある照井からの頼み。

いつもの源一郎の怠慢でないというならば、海斗の対応も変わるというものだ。

「それで、僕は何を調べればいいんです？」

「その前に……海斗、お前、クイズ事件は覚えているか？」

「まぁ……あれがどうかしました？」

いきなり脈絡もない質問に怪訝な表情になる海斗。

それに構わず源一郎は話を続けた。

「あの事件の容疑者、鈴木が死んだ時、お前らの周りが真っ暗になったらしいじゃねえか？」

「確かになりましたね。でも、それと何の関係が？」

「失踪した瞬間を見たやつがいてな」

「……？」

海斗は首をかしげた。

失踪した瞬間という言葉に違和感を持ったのだ。

失踪する瞬間などあるわけがない。

人が目の前で失踪するとはつまり、目の前で消えることを表しているのだから。

「あっ！？　まさか……」

目の前から消えるというワードで海斗は思い出した。

以前にもあったではないか。

いきなり目の前から人がいなくなったことが……。

「……ミラー」

そう、これも海斗が以前に戦ったミラードーパントも目の前から消えた。

もしかしたら、ミラーメモリの力かと思っていたが……。

「ミラーの時もクイズの時も聞こえた――『ナイト』……メモリ…」

「そうだ、それが、照井刑事から頼まれた依頼だ」

「『ナイト』を、探せ」

――水舞高校

「名も知らぬ女の子ねぇ」

「うーん……難しいですね……」

咲也の話を一通り聞いた小春と叶は唸っていた。

海斗同様、二人にもアドバイスできるほどの経験はない。

小春は彼氏いない歴＝年齢であるし、叶も同じくである。

だから、打つ手はない。

それに、何よりのネックは、恋した相手が、街で助けてもらっただけの名前も分からない女の子であることだ。

「もう少し関わりがあればよかったんですけど……」

「正直ムリ！！」

「うぅぅ……やっぱり、無理、かなぁ……」

――キーンコーンカーン

「あ、もう終わりかぁ」

咲也が打ちひしがれたと同時に鐘が鳴る。

叶は、先生が来る前にと、自分の席にとっとと戻っていった。

対する咲也は沈んだ様子のまま、席に戻っていった。

少しして、前のドアから教師が入ってくる。

そして、教壇まで行くと、いつもしているように挨拶をし、

「突然だが、今日からうちのクラスに転校生が来ることになった」

と言った。

――ガヤガヤガヤガヤ

その一言で、今まで静かだったクラスが、一気にざわめき出す。

「はぁぁぁぁ」

だが、咲也のモチベーションは下がったままだった。

正直な話、転校生なんてどうでもよかった。

彼にとっては、今の最重要事項は名も知らぬ女の子のことだからだ。

咲也の憂鬱にも関わらず、話は進んでいく。

「入りなさい」

――ガラガラガラ

教師の声に従い、一人の女の子が教室に入ってきた。

教師が挨拶をするよう促すと……。

「白石音々」

とだけ言った。

「……えっ？」

今まで俯いていた咲也は、その声に顔をあげる。

そこにいたのは、あの時の少女。

腰まである艶やかな黒髪をたなびかせ、不良と戦っていた少女。

そして――

彼が、七海咲也が恋した少女がそこにはいた。

第二十二話　転校生N／Garl's talk with him（後書き）

いかがでしたでしょうか？

前書きでも言いましたが
少しずつ物語は進んでいきます

まぁ、まだまだ伏線は貼りまくるつもりですが！

明日か明後日に
雪と作っている方がアップ出来ると思いますので
そちらもよろしく！

では、また！

第二十三話　転校生Ｎ／Ｂｏｙ　ｍｅｅｔｓ　ｇｉｒｌ　ａｇａｉｎ（前書き）

更新しました！

では、どうぞ！

第二十三話　転校生N／Boy meets girl again

――水舞高校

休み時間。
教室は再び喧騒に包まれていた。

一人の席の周りを囲むようにして、クラスのほぼ全員が集まっている。

その中心にいるのはもちろん、転校生・白石音々である。

「ねぇ、白石さんはどこから来たの？」

「今はどこに住んでんの？」

「好きな食べ物なに？」

「彼氏は？　彼氏はいるの？」

次々にかけられる質問の雨の中、白石音々は、

「……」

何も喋らなかった。
ただ目の前を見つめるだけ。

「おーい？　白石さん？」

「……」

「白石さーん！」

「……」

クラスメイトたちが声をかけるが、無反応。

それどころか

「私に話しかけるな」

「……えっ？」

小声で、近くにいる人しか聞こえなかったが、確かにそう言った。

冷たく突き放す言葉。

周りとの関わりを拒絶する意志がその言葉に表れていた。

「はいはーい！　諸君、白石さんが困っているだろぉう！　今は一旦席につきたまへ！！」

異様な雰囲気を感じ取ったのか、叶がクラスメイトたちを散らすために、音々の席の前に立った。

叶の人望もあって、クラスメイトたちは言う通りにする。

クラスメイトたちが散ったのを確認すると、叶は小声で話しかけた。

「どういうことさぁ？　話しかけるな、ってのは…」

いつもとは違う真剣な口調。

音々は、そんな叶を見ることもせず立ち上がる。

「!?　どこに!?」

「……」

その質問にも答えずに、音々は教室を出ていった。

――とある高架下

「はぁ、今度はなんだよ?」

「やぁ、カイくん。久しぶりだね」

手掛かりがなく、『ナイト』探しに行き詰まっていた海斗は、カイのもとを訪ねていた。

カイはガイアメモリについては知らない。

だが、事件についてなら知っているはずだ。

「連続失踪事件についての情報がほしいんだ」

「別にいいけどよぉ……」

渋々ながらもカイは失踪事件についての情報を話した。

失踪が始まったのは、約二年前。

最初の被害者は、どこかの企業の重役だったらしい。

目撃者の話によると、いきなり消えた、そうだ。

当時、警察はこの目撃者の証言は、酒に酔っていたためにあてにならないと判断した。

だが、その判断は間違いで、実際にいきなり消えたのだ。

ガイアメモリの力によって……。

「俺が知ってんのは、こんなもんだな」

「十分だよ、ありがとう」

「あぁ、だがよ……」

「ん？　なに？」

「いや、おかしいんだ、この事件は」

「おかしい？」

「あぁ……俺もたまに推理じゃねぇが、暇潰しに事件について考えることがあんだ」

カイは、そこで一旦言葉を区切る。

そして、少し考えた後、口を開いた。

「いつ考えてもわからねぇ。この事件には一貫性が全くと言っていいくらいない」

「一貫性？」

「失踪した奴らの共通点がない」

「確かに……」

海斗も自分が遭遇した失踪事件を思い返した。

時間帯は昼と夜だったし、場所も夜の学校と人目につく場所。

共通点があるとしたら

「……ガイアメモリ……」

そうだ。

二人ともガイアメモリを使っていた。

だが、他の事件はどうだろうか？

そこまで考えて、カイに話を振る。

「僕が見たクイズ事件と水舞高校の事件以外の事件でガイアメモリが関わっている事件、わかるかな？」

「さぁな、俺はそいつは専門外だから知らね」

「そっか。それじゃ、ありがとうね、カイくん」

ガイアメモリ関連ならば、警察の方が情報があるだろう。

そう思った海斗は、カイに礼を言い、水都署に向うためバイクを走らせた。

――水舞高校・咲也視点

衝撃を受けていた。

まさか、あの人が転校生だなんて思わなかったから。

夢なら醒めないでほしい。

――ギューーー！

「よし！　夢じゃない！」

「……えっと、何をしてるんですか？」

「わぁぁぁっ！？」

いきなり後ろから声が聞こえて、飛び上がってしまった。

後ろを見ると、

「あっ……こ、こはるさん……」

小春さんが不思議そうな顔をして、ボクのことを見ていた。

うぅぅ、恥ずかしいよぉ……。

「いや、何かほっぺたつねってたみたいだったので、どうしたのかと思いまして」

「あ、えと、ボクが……好きな、人……あの人なんです……」

「えっ!?　そうなんですか?」

黙って頷く。

すると、小春さんはなにやら興奮した様子で、ボクに詰め寄ってきた。

「告白すべきです!!」

「……ふぇ?」

「だから!　告白です!　こ・く・は・く!!」

「えぇぇぇぇぇ!?」

叫ぶ。

シャウトする！

あぁぁぁ、なんで英語！？

と、とにかく！

「そ、の……こ、こここここくはく！、とかは……ま、まだはやいと思いましゅ！」

「そんなことないです！　これはきっと運命です！」

「……う……運命…」

運命。

なんだかいい響きだな。

……もし、もしも運命なんだとしたら……。

「ね！　七海くん！」

「は、はいっ！？」

「告白、しましょう！！」

――水都署

海斗が超常犯罪捜査課に入ると、そこには源一郎とその上司・上田課長がいた。

さらに、赤いライダースーツを身に纏った青年・風都署の刑事である照井竜の姿もあった。

「おぅ、海斗」

「あぁ、誰かと思えば、探偵か」

上田も、海斗が捜査に協力していることもあり、顔見知りである。

「こんにちは、源さんに上田さん」

「水町か」

「照井さんもこんにちは」

「あぁ」

照井とも挨拶を交わすと、海斗は本題を切り出した。

「照井さんと源さんから頼まれた『ナイト』探しなんですけど」

「何かわかったのか？」

「いえ、残念ながら。とにかく情報が少なすぎですから……」

「んあぁ、なるほど。過去の資料か」

「上田さん、お願いできますか？」

「待ってろ」

そう言うと、上田は資料を探しに、部屋の奥にある資料棚へと姿を消した。

それと同時に、照井が話を始める。

「例の『ナイト』のことだが……」

「はい、なんですか？」

「フィリップに検索をしてもらった。これがその結果だ」

照井は警察手帳から一枚のメモを取りだし、海斗に渡した。

源一郎もそれを覗き込んでくる。

「『ナイト』メモリ……夜の記憶のメモリらしい。能力は、夜闇に紛れたり、闇を発生させたりして、その中に人を引きずり込む」

照井は、フィリップから受けた説明をかいつまんで話す。

能力の説明を受けた海斗は、納得していた。

ミラーの時は、闇に紛れて、クイズの時は、闇を発生させて、メモリ使用者を殺したのだ。

「使用者は分からん。キーワードが足りなかったようだ」

「そうですか……」

使用者が分からなかったのは残念だが、メモリの知識は得た。

これならば、ある程度は戦えるだろう。

海斗がそう考えていると、

「おい！　加納!!」

資料を探していたはずの上田が血相を変えて戻ってきた。

「どうした?」

照井がそう聞くと、上田は声を荒立てて言った。

「今、人が襲われているらしい！　たぶん襲っているのは件の『ナイト』だ！」

「「「！？」」」

その知らせを聞いて、海斗と照井は顔を見合わせる。

そして、二人は部屋を飛び出していった。

「行っちまったな」

「ですね。それで課長、資料は見つかったんですか？」

「ん？　あぁ」

上田は資料を源一郎に渡すと、ため息をついた。

「はぁぁ、共通点もなし。手口も毎回微妙に違う」

「……案外、複数犯かもしれないですね」

「いや、まさか。同種のメモリは一本しかないんだろう？」

「まぁ、確かに」

上田の言葉に、源一郎は再び頭を抱えたが……。

「やめっか」

考えるのを止めた。

どうせ、二人が向かったんだから、真相はわかるだろう。

そう、考えて……。

第二十三話　転校生N／Ｂｏｙ　ｍｅｅｔｓ　ｇｉｒｌ　ａｇａｉｎ（後書き）

はい、N編二話でした。

まぁ、若干の転換期ですね。

少しずつ話は進みます。

次回更新は土日かな……？

感想お待ちしてます！

では、また！

第二十四話　転校生Ｎ／Ｔｈｅ　ｔｒｕｔｈ　ｏｆ　Ｎ（前書き）

はい。
Ｎ編最終話です！
どうぞ！

第二十四話　転校生Ｎ／Ｔｈｅ　ｔｒｕｔｈ　ｏｆ　Ｎ

――水都自然公園

「きゃぁぁぁぁ！？」

『あ、ぁぁぁ』

海斗と照井が自然公園に駆けつけると、上田が言っていた通り、女性がドーパントに襲われていた。

ドーパントの姿を見る。

黒い鱗のようなものを全身が覆っており、その鱗から黒い霧のようなものが噴出している。

目と思われるものは見当たらなく、まるで顔の黒いのっぺらぼうである。

「水町！」

「はい！」

二人はバイクから降りると、海斗はドーパントに向かって、照井は襲われている女性に向かって走り出した。

海斗は、懐からドライバーとメモリを取り出す。

そして、

「変身！」

ファントムへと変身した。

『あ！？　かめん…らいだー？』

変身したファントムに気をとられるドーパント。

その間に、照井は襲われていた女性を避難させた。

これで、戦える。

「連続失踪事件の犯人、ナイトドーパント！」

「さぁ、断罪の時間だ！」

『あ〝ぁぁぁ』

ファントムに指を向けられたと同時に、ドーパントは走ってくる。

ファントムも走り出す。

「はぁぁぁ！　らっ！！」

『っ！　おぉっ！？』

ファントムは、そのままの勢いで飛び蹴りを繰り出す。

攻撃は命中。

ドーパントの側頭部を捉えた。

助走の勢いのおかげで、肉体能力の低いファントムフォームのまま

でも、相手を仰け反らせることが出来た。

「よしっ！」

『ぐっ……ぅぅ……』

「どんどん行くよ！　らぁ！　はっ！」

立ち上がったドーパントに追い討ちをかけるように、パンチやキックの嵐で攻め立てていくファントム。

ドーパントはその猛攻に対応しきれない。

「よし、メモリブレイクだ」

『ファントム――マキシマムドライブ』！！

メモリの鼓動が強い場所、ドーパントの額の部分に狙いを定め、攻撃の体勢に入る。

しかし、一筋縄ではいかないようで、

『ぐっ、がぁぁぁぁぁ！』

ドーパントが雄叫びをあげ、それに呼応するかのように、体から黒い霧が立ち込めた。

「昆虫じゃない！？」

「水町！　気をつけろ！」

後ろから照井の声がかかる。
一瞬だけ後ろを見て、それに頷く。
そして、再びドーパントに向き直る。

が、

「……いない？」

ドーパントの姿は忽然と消えていた。

逃げたのか？

そう思った次の瞬間――

『ぎやぁぁぁぁ！！！』

――ザクッッ

何かが刺さる音。

それと同時に、肩に鋭い痛みが走った。

「なっ！？」

肩を押さえながら、飛び退く。

そこには黒い霧があった。

霧は徐々に何かの形を作っていく。

そして、輪郭を完全に取り戻したその姿は、先ほどのドーパントだった。

「な、なるほど。これが、『ナイト』メモリの能力ということかな？」

『う゛う゛う』

ドーパントは答えない。

その代わりに、照井が答える。

「フィリップからの情報にこんなものはなかった」

「じゃあ、この能力は？」

「わからん。だが……」

『アクセル』！！

懐からメモリを取り出し、起動させる。

そして、言い放つ。

「倒してから聞けば分かる！」

「変……身！！」

『アクセル』！！！

照井の体を熱気が包み込み、アクセルへと姿を変えた。

「行くぞ、水町！」

「はい、照井さん！」

――水舞高校

「そういうわけで叶ちゃんも協力してください！」

小春と叶は、咲也の席に集まり、話していた。

議題は勿論、咲也の片恋相手の白石音々のことである。

「偶然、街中で出会った初恋の相手が、実は転校生だったなんて…
…運命ですよ！　告白すべきです！」

「はぁぁ、こく、はく……こくはく……」

告白という単語に思いっきり動揺する咲也。

本来ならば、そんな咲也を囃し立てるのが、叶の立ち位置なのだが、

今日の叶は違っていた。

「んー、あんまり乗らないのぉ」

「えっ？」

「なんだか嫌な予感がするんよぉ」

叶らしくない発言に、困惑する小春。

「熱でもあるんじゃ……」

「ない」

言い返してくるテンションもだいぶ低い。

「本当にどうしたんですか？」

「ただ乗らないだけさぁ。あと告白も止めた方がいい気もする」

「なんでですか？」

「……これは、運命なんかじゃなく……」

叶は、咲也を見ると、躊躇いがちに呟いた。

「……誰かの意思がある」

「意思？」

いつになく真剣な様子の叶に、今まで動揺していた咲也も我に返り、聞き返す。

「あくまで勘さ。でも、出来すぎてる」

そこまで言って叶は、ぶつぶつと独り言を言いながら考え込んでしまった。

当分返ってくる様子はない。

「こ、こはるさん、叶さんはどうすれば……」

「……ちょっと来てください！」

「ふへっ？」

それが分かると、小春は咲也の手を引っ張って、教室の外に連れ出した。

「あ、あのっ……ここ、こはるさん！？」

「叶ちゃんは当てになりません！」

「えっ？　あっ、うん…」

小春が告白のことを言っているのだと、少し遅れて気づく咲也。

「手紙でいきましょう！」

「て、手紙？」

「下駄箱に手紙を入れて、放課後に屋上に来てもらいましょう！」

「えっ？　あの、その……叶さんが言ってたことは？」

咲也は叶の言葉が引っ掛かっていた。

確かに偶然にしては出来すぎているような気もする。

「この際忘れましょう！」

「えぇぇぇぇぇ！？」

咲也は思わず叫んでしまった。

小春がいつもとは違い、あまりにも強引すぎる。

「そうと決まれば早速手紙を書きましょう！」

「えっ、あの……その、ここ、こはるさん！？」

咲也の抵抗を物ともせずに、意見を押し通す小春。
結局、咲也が告白する予定は覆らないのであった。

――水都署・取り調べ室

ドーパントとの戦闘は、アクセルの介入によって決着がついた。
エンジンメモリのスチームとファントムのヒートフォーム。
霧と化したドーパントでもこの二人のマキシマムを食らえば、一溜まりもなかった。

仮面ライダーの勝利。
それで『ナイト』との勝負は終わるはずだった。
だが、

「一体俺が何をしたんだよ！」

「ガイアメモリを使って、誘拐していただろうが！」

「はあ！？　なに言ってんだよ、刑事さん」

そう、ドーパントの使用者は記憶がなかった。

そして、ガイアメモリを使った後遺症も全くなかったのだ。

「どう思う、水町」

取り調べ室の外で、源一郎の取り調べを見ていた照井が海斗に聞いた。

「……さぁ。でも、彼は確かにドーパントだったはず……」

「あぁ。だが、ブレイクしたはずのメモリが見当たらなかったことも事実だ」

ドーパントを倒した後、二人は辺りを探したのだが、メモリらしきものは見つからなかった。

ふと、海斗は一つの可能性に思い至る。

「まさか彼は……『ナイト』ではなかったのかも……」

「どういうことだ？」

「わかりません。ただの勘です」

「の割には、確信を持っているようだな？」

わかりましたか、と少し苦笑いをして、海斗は説明し出した。

「強いて言うなら、あのドーパントから感じた鼓動はおかしかった」

「お前が感じるというメモリの鼓動か？」

「はい。かなり弱々しくて前に感じたものとは比べ物にならない程です」

海斗は、メモリ自体の強さによっても鼓動の大きさは変わる、そう説明した。

「ならば、奴は……」

照井は、取り調べを受けている男を窓越しに見る。

それを見て、海斗は頷いた。

「『ナイト』ではない可能性も――」

――ドクンッ

「っ！？」

「……どうした、水町？」

いきなり言葉を切った海斗を不審に思い、顔を覗き見る。

すると、海斗の顔は真っ青になっていた。

「おい！？　水町！？」

――海斗視点

この鼓動はなんだ……？

今まで聞いたことがない程に大きな音だ。

「……うっ」

「――――」

耳を塞いでも聞こえる。

なんなんだっ、これは！？

『ナイト』

ガイアウィスパー！？

鼓動だけじゃないのか？

こんなこと初めてだっ。

「照井、さんっ」

「――――――！？」

よく聞こえない。
鼓動が強すぎて……。
でも、伝えないとっ！

「『ナイト』はまだいる！！」

――少し前・水舞高校屋上・咲也視点

放課後になってどのくらいが過ぎたのかな……。
ボクは屋上で音々さんを待っていた。

「今日の小春さんは強引すぎだよぅ……」

なんだかノリノリだったし。
なんだか手紙を書く時も色々言われたし。
結局、内容は『放課後、屋上で待ってます』だけになったし。

でも、

「小春さんに感謝かなぁ」

きっとボクだけでは、こんな思い切ったことは出来なかったと思う。

ううん、絶対出来なかった。

だから、あとはボクが告白の勇気を出すだけ……。

「が、がんばれ！　ななみさきゅや！！」

――キィッ

ボクが自分の名前を噛んだちょうどその時、階段から屋上に繋がる扉が開いた。

そこには、

「……」

音々さんがいた。

やっぱり何度見てもかっこよくてきれいな人だなぁ。

「……」

音々さんはこっちに近づいてくる。

うぅぅ、緊張するよぉ…。

「あ、あのっ！」

声が上ずってしまう。
だけど、そんなこと構っていられない！

「そそ、そのっ！」

「……」

ボクの目の前に音々さんが立っている。
ボクのことを見てくれている。

口が渇く。
手も震えてる。
逃げ出したいっ。

でも、小春さんも頑張ってくれたんだ。
今、頑張らないと！！

頑張って、この気持ちを伝えないとっ！！

「あのっ、えっと……す、すきです！！」

い、いえ……た？

やった！

言えた！！

「……だから」

「……えっ？」

「関わるなって言ったのに……」

『ナイト』！！

第二十四話　転校生N／Ｔｈｅ　ｔｒｕｔｈ　ｏｆ　Ｎ（後書き）

という訳でN編最終話でした！

いかがでしたでしょうか？

感想お待ちしてますね！

あと補足で

『ナイト』メモリは起動しない限りは、鼓動を感じ取れないような仕様があります。

それだけですね、補足。

次回更新は
来週の……木曜くらいだと思います。

毎度毎度
遅くてごめんなさい……。

では、また！

第二十五話　Oの欲望／対立（前書き）

はい
予想より早く更新出来ました！

最初に言っておく！

今話はオーズとは
一切関係ない！！

それでは、どうぞ

第二十五話　Oの欲望／対立

――水舞高校・咲也視点

聞こえた。

確かに、聞こえた。

『ナイト』！！

「……」

彼女の手には、ガイアメモリ。

それを首筋に……入れた。

途端に彼女の姿が変わる。

目や鼻、口のないただ黒いだけの顔。

黒い鱗のようなものに包まれた体。

彼女の周りには、黒い靄がかかっている。

「な、なんで……」

『……』

答えは……ない。

彼女は、こっちに掌を向けてきた。

――――――――

何かを感じて、咄嗟に横に跳ぶ。

――――ズズズズズ……

何かが地面を這うような音がした。

さっきボクがいた場所からだ。

「一体……」

恐る恐るさっきまでボクがいたところを見る。

そこには、

「ゆ、ゆかが……な、い？」

床がえぐられ、何かの残滓のような無数の黒い蛆が、そこで蠢いていた。

その蛆たちも、まるで餓えた獣か何かのように、貪欲に地面を貪っていた。

寒気が、する。

吐き気も……。

さっきとは、全く違う意味で震えも止まらない。

恐怖だった。

純粋な、恐怖だった。

『……』

彼女は、黙ったままこちらに近づいてくる。

――たぶん……殺される。

死にたくない。

でも、何も出来ない。

嫌だ。

いやだ！

目の前には、鱗に覆われた掌。

逃げられ…な、い！

「たすけてっ！！」

『ソードベント』

目を閉じてから、もう何秒も経ってる。

でも、痛みはない。

目を、開く。

――そこには、

『うちの生徒に手ぇ出すなって言ってんだろ？』

黄金の騎士がいた。

――オーディン視点

私は、ゴルドバイザーで敵の腕を地面に押さえつける。

すごい力だ……。

オーディンの性能を持ってしても、これは辛い。

しかも、七海を守りながらだと余計に、だ。

だから、呆気にとられている七海を呼ぶ。

『七海！』

「は、はい！？」

『逃げんよ！』

「えっ？」

『らぁぁぁぁ！』

呼び出した剣で奴を一度斬ると、新たにカードを入れる。

『アドベント』

機械音とともに、

――――キィィィィ！！

鳴き声が聞こえてくる。

ゴルドフェニックス。

名前はピー子。
オーディンである私の契約モンスターだ。

『七海！』

鳴き声に気を取られていた七海に手を伸ばす。
その手を、七海はしっかりと取った。
同時に、体が宙に浮く感覚。
そして、屋上がどんどん離れていく。
だけど――

『油断すんなさっ！』

「ふぇ？」

――――――――――

黒い靄が迫っていた。
よく見れば、靄の中には、無数の蛆。
きしょく悪いさっ！

「うっ！？」

『我慢せい！』

『ガードベント』

次は盾を呼び出す。
そして、一度掴んだ盾を

『てぃやぁぁぁぁ！！』

投げるっ！

――グシャッグシャッ

音を立てて盾を咀嚼する霧。

うぅ、きもいさぁ。

『今のうちに！！　ピー子！！』

――キィィィ！

ピー子は加速していく。

その去り際――

『……――――』

何かが聞こえた気がした。

――鳴海探偵事務所水都支店

「っう……頭、まだ痛いや……」

ソファから頭を押さえながら起き上がる海斗。

水都署にいた彼が今はここにいて、ソファに寝ていた理由。

それは……。

源一郎に『ナイト』のことを伝えた海斗は、直後に意識を失った。

すぐに、源一郎が車で病院へ運ぼうとしたが、途中で意識を取り戻した。

病院へ行っても無駄だと判断した海斗は、そのまま探偵事務所に送ってもらった。

そして、今に至るというわけである。

「それにしても……」

海斗は、頭の痛みを我慢しつつ、思考を張り巡らせる。

例の鼓動について……。

あれは恐らく『ナイト』メモリの鼓動だ。

それは十中八九間違いない。

なぜか頭に響いてきたガイアウィスパーも『ナイト』の物だった。

問題は、偽者と本者との関係と『ナイト』の能力。

居所については問題ない。

あの鼓動をもう一度聞けば、たぶんだけど突き止めることが出来る。

正体もブレイクすれば分かる。

だが、偽者が持っていた能力と本物が使う能力がはっきりしない限

り、こちらは不利なままだ。

「……なら、どうする？」

解決法としては、フィリップに検索してもらうのが確実だろう。

だが、照井から伝え聞いた話では、検索結果にそんな能力はなかった。

なら、キーワードを追加すれば？

「……よし」

海斗はそこで考え込むのを止め、立ち上がった。

「ひとまずキーワード集めかな。……んっ、でも」

一つ伸びをして、それからまたソファに座り直す。

「今日はもう夕方だし……明日にしよう」

緊張感はないが、仕方がないだろう。

海斗は一応病み上がりでもあるのだ。

無理して傷が開いても困る。

だから、今日は休もう。

そう思っていた矢先に――

――ドンッ！

「はぁ……ん、っ……海斗さんっ！！」

事務所の扉が勢いよく開き、小春が現れた。

急いで走って来たのか、息があがっていた。

「小春ちゃん、大丈夫？　とにかく落ち着いて。……水でも飲む？」

「はっ、つぅ……だいじょうぶですっ。それよりっ、七海くんがっ！」

海斗の気遣いを断り、言葉を紡ぐ小春。

その様子から事態の深刻さを悟った海斗は、急いで表に出た。

そこには、顔面蒼白で今にも倒れそうな咲也と彼を支える叶の姿があった。

「さくや！？」

海斗は、慌てて駆け寄り、咲也の身体を支えた。

その身体はガクガクと震え、力が入っていなかった。

「小春ちゃん！　叶ちゃん！」

「はいっ！」

「おうさっ！」

二人は海斗の意思を汲み取ったようで、すぐに事務所の中の何か使えそうな物を探しに屋内に姿を消した。

それを横目で確認すると、咲也を抱き締めて宥めにかかる。

「大丈夫、大丈夫だから。さくや、安心して……」

海斗には、なにが起きたのかは全く分からない。

とにかく咲也の心を落ち着けないと……。

それだけを考えて、咲也の背中を撫でたり、声をかけたりする。

「大丈夫、大丈夫だよ…」

「うっ、あぁぁぁぁ」

海斗の腕の中で、咲也は狂ったように震え続けていたのだった。

――数時間後

結局、咲也が落ち着きを取り戻したのは、もう日も沈んだ頃だった。
詳しいことを聞くために、今も小春と叶は探偵事務所に残っている。
海斗はすぐに帰るように言ったのだが、咲也が心配と言って、頑なに帰ることを拒んだのだ。

「さくや、落ち着いた？」

「……うん」

弱々しくも頷いた咲也に、海斗は笑顔を返す。

「なら、とりあえずよかった」

「ご、ごめんね……兄さん。それに、叶さんと小春さんも……」

「気にしないで下さいっ！　ですよね、叶ちゃん？」

「ん。気にすんな、気にすんな！」

二人も咲也に笑顔を向ける。
咲也が安心するようにと。

「さくや、一体何があったんだい？」

「……う、うん」

咲也は躊躇いながらも、海斗に少しずつ話し出した。
前に話した、助けてくれた女の子が転校生として来たこと。
小春の案で彼女に告白しようとしたこと。
手紙を書いて彼女を屋上に呼び出したこと。

そして、彼女がドーパントになり、殺そうとしてきたこと。

海斗は、しばらく黙って咲也の話を聞いていたが、あることに引っかかりを覚え、ボソリと呟いた。

「……メモリ」

「えっ……？」

「メモリ名は聞いたかい？」

海斗はそう尋ねた。

海斗の予想が正しければ、その彼女は……

「確か、『ナイト』って」

犯罪者なのだから。

「わかった。小春ちゃん、源さんに電話して。『ナイト』の正体が分かったと」

「海斗さん……」

「えっ!?　兄さんどういうことっ!?」

海斗は、咲也を一瞥すると、強い口調で言った。

「彼女は、連続失踪、いや誘拐と殺人を犯したガイアメモリ犯罪者だ」

「で、でもっ……」

「でも、じゃないよ。街を泣かすような存在は、たとえ女の子でも許さない」

「っ!?」

それは、海斗が翔太郎から教わった探偵の心構え。

街を泣かすとは、その街に住む人々の心を傷つけること。

誘拐されたり、殺害された人たちにも、家族はいたはずだ。
家族の人たちは、帰らない彼らを思い、今も傷ついている。

だから、海斗は許さない。
街を泣かせる存在を。

「……でもね、咲也」

先程までの強い口調から一転して、優しく咲也に話しかける海斗。

「許さないけど、殺すわけじゃないよ。罪を償って、また生きて欲しいから、倒すんだ」

優しく諭すように海斗は、咲也に語りかける。

海斗は、確かに翔太郎から街を守る探偵としての心構えを教わった。

だが、彼自身の想いとして、彼は街にも女の子にも泣いていて欲し

くはないのだ。

だが、

「あの、人は悪くない、よっ！」

咲也は、認めなかった。

「捕まるなんて、おかしいっ！！」

彼女が罪を犯したことを。

「さくや……」

「おかしいっ絶対に！！」

「……七海くん…」

「……ななみ…」

声を荒立てる。
いつものおどおどした自信のない咲也は、そこにはなかった。

「あの人は僕を助けてくれたんだよ！？」

「……だけど、殺そうともしたんだよね？」

「っ」

「さくや、僕は――」

「もういいっ！！！」

海斗の言葉を聞き終わる前に、咲也は事務所から出ていった。

「……海斗さん」

「今は、放っておくしかないよ……」

「……はい」

海斗たちは、ただただ咲也が出ていった扉を見つめていた。

――咲也視点

あの人は、音々さんは悪くない、絶対に。

だって、あの時――屋上から逃げる時、聞こえたんだ。

小さな、聞き逃してしまいそうなくらい小さな声だったけど……

『……助けて』

そう聞こえたんだっ。

だから、ボクは…助ける。
例え、兄さんと対立することになっても、だっ。

「少年」

「えっ？」

ボクの真後ろから声がした。

振り向く。

そこには、一人のおじいさんが立っていた。

「少年には、今助けたい女の子がいるの？」

「えっ？」

おじいさんは、まるで今のボクの心を読み取ったかのように、そう

質問してきた。
ボクは頷く。

「そうか……。事情を少し聞いても？」

そう聞いてきたおじいさんに、ボクは頷き、今までのことを話した。
彼女、音々さんのことを。

すべてを話し終えた後、おじいさんは、

「少年は……正しい」

と言った。
そして、続ける。

「ワシも話そう、彼女の真実を……」

ボクはそのおじいさんから音々さんの真実を聞いた。

その真実を聞いたボクは、再び決意した。

彼女を、助けようと。

「それで、じゃが」

「は、はい」

「ワシにも手伝わせて欲しいんじゃよ」

「えっ？」

「彼女を助けるのを……」

「ワシは音々を助けるために、動いていた」

「ワシは、白石龍平。音々の祖父じゃ」

第二十五話　Oの欲望／対立（後書き）

こんな感じで
O編でした。

なんか最近、文章がグダグダです（泣）
うぅぅ……。

あっ、オーズ終わっちゃいましたね。

実を言うと
最初は、オーズ好きじゃなかったんですよね。

なんだか2色→3色みたいでね（「▽|；）

でも、見てるうちに
面白くなりました！

タジャドルカッケ！！

……みたいな（笑）

うーん
すると、フォーゼもそうなるのかなぁ……。

プロトの方の更新遅れててすいません（汗）

今、書いていますので
ご容赦ください。

ファントム更新は、土日になりますね。

では、また！

第二十六話　Oの欲望／協力（前書き）

はい
なんだかんだで
こっちの方を更新です…

プロト見てる方には
すみませんｍ（＿＿）ｍ

とりあえず、どうぞ（＾ｏ＾；）

第二十六話　Oの欲望／協力

――鳴海探偵事務所水都支店・海斗視点

咲也がここを飛び出していってから約二十時間が経った。

今は、午後三時。

ソファに深く座り、今までの事件の情報を整理する。

昨日の夜、翔太郎さんの所に電話をして、フィリップさんに検索してもらったこと。

『ナイト』は、自分の力の一部を飛ばして、第三者を偽者として操ることが出来るらしい。
また、自らの身体を霧のようにすることも出来る。

問題だった事項は全てわかった。

『ナイト』メモリの使用者も分かり、解決に近づいたはずなんだけれど……

「とうっ！！」

――ドガッ！！

「いっ！？」

いきなり頭に衝撃が走った。

顔を上げると、そこには、鉄製スリッパを持った小春ちゃんがいた。

考えを整理することに集中していたから来ていたのに気づかなかったみたいだ。

「えっと、こんにちは、小春ちゃん」

「こんにちは、じゃないです、海斗さん」

何か物凄い迫力を小春ちゃんから感じるけど……。

「怒ってる、のかな……？」

「はい」

「ええと、昨日のこと？」

「はい！　当然です！」

やっぱりそうだよね……。

「僕も分かってる。……言い方、悪かったよね……」

「……分かってはいるんですね」

「分かってるよ」

犯罪者、とか言っちゃったからね……。

後から冷静になって考えてみれば、好きな子のことを犯罪者扱いは……ないなぁ。

咲也を殺されかけて、頭にきていた、としてもだ。

「はぁぁ……まぁ、あんなことになったのは、私にも原因はありましたから、あまり強くは言えないですけど……」

小春ちゃんはため息をしながら少し項垂れた。

「小春ちゃんは責任感じなくていいよ。小春ちゃんがいなかったら、さくやは告白もしなかったろうしね」

「……でも」

食い下がる小春ちゃん。

まったく、優しいなぁ、小春ちゃんは。

「大丈夫。さくやは僕が見つける」

「……」

「音々ちゃん、だっけ？　ついでに、さくやとその子もくっつけちゃおう！　ね？」

「……はいっ」

いつも通り、いつも通り。

そうしないとこの日常は守れない。

そのためにも、まずは調べないと……。

彼女、白石音々がメモリに手を出した理由を……。

――水都自然公園・咲也視点

放課後、ボクは龍平さんと会うために公園に来ていた。

中央に設置されているベンチに龍平さんはいた。

「あっ、龍平さん……」

声をかけると、ボクに気づいたようで、優しげな笑みを浮かべて手を振ってくれた。

こんな人がボクに協力してくれるんだ。

心強いなぁ。

「それで、龍平さん。昨日の話、詳しく教えてください」

昨日、龍平さんから聞いた話は、音々さんが自分の意思と関係なくメモリを使っているという大雑把な内容だった。

だから、今日、詳細を聞くことになっていたのだ。

「うむ。あの子は、メモリに寄生されている」

「き、きせい……？」

「そう、寄生じゃ」

「……」

「少年は今、水都に出回っているガイアメモリが『パラサイトガイアメモリ』と呼ばれているのを知っているかの？」

「あっ、は、はぃ」

そのことは、ボクが探偵事務所を手伝うことになったとき、兄さんから聞いていた。

パラサイトガイアメモリ。

メモリがある位置を正確に攻撃しないと、使用者が死んでしまうメモリ。

使用者がピンチになると、ドーパントの体内から虫が出てくる。

そんな感じだったと思うけど……。

ボクが記憶を辿っている間にも、龍平さんは説明を続けている。

「パラサイト、つまり、寄生虫の名前の通り、このメモリは宿主に寄生する」

「……メモリ、がですか？」

「そうじゃ。そして、寄生された者は、何かに操られる、らしいの」

その何かがわかっとらんがの、と苦笑いを浮かべる龍平さん。

「なら、ボクは……」

「ん？」

「ボクは、どうすればいいんですか？」

そう、音々さんを助けるためにボクに出来ることを知りたい。

表情からボクの気持ちを読み取ってくれたようで、龍平さんは、優しい口調で言った。

「少年は、あの子を探しだしてくれ」

「え、でで、でも、それだけじゃ音々さんは……」

見つけるだけじゃダメなはずだ。

それだけじゃ音々さんを助けられないっ。

「メモリを破壊すれば、寄生は解除される。破壊は……」

龍平さんは、そこで言葉を区切ると、懐から何かを取り出した。

それは、白いロストドライバーだった。

「ワシがするからのっ」

――とある高架下

海斗と小春は、白石音々についての情報を手に入れるために、カイの所に来ていた。

しかし、

「情報がない……？」

「あぁ、そいつ転校生なんだろ？　つまり、最近水都に来たばっかってことじゃねぇかよ」

カイの言う通りで、音々はつい先日、水舞高校に転校してきたばかりだ。

しかも、今日に至っては、学校にすら来ていない。

だから、音々については、水都のことなら何でも知ってる情報屋の専門外、水都以外のことと言っても過言ではない。

「うーん、困ったなぁ」

「どうしますか、海斗さん」

カイが知らないと言うならば、どうしようもない。

海斗にもお手上げ状態である。

海斗は、残りの手段として一つのことを思いついた。

「……お邪魔したね、カイくん」

「おぅ、とっとと消えろ」

カイの憎まれ口を背に受けながら、海斗はその場から立ち去った。

――鳴海探偵事務所

「翔太郎、知っているかい？」

「……今度は一体なんだよ……」

「生ハムメロンというものを！」

ここは風都の鳴海探偵事務所。

中では、翔太郎とフィリップがいつものようなやり取りをしていた。

「……興味深いね」

生ハムメロンのことについて、ホワイトボードに次々と書き込んでいくフィリップ。

翔太郎は呆れるしかない。

そんな中、

――Ｒｒｒｒ

翔太郎のスタッグフォンが鳴った。

画面を見ると、そこには『水町海斗』とある。

「海斗からか……」

電話を取る。

『もしもし、翔太郎さん？』

「おぉ、海斗か。どうした？　また事件か？」

『はい、フィリップさんはいますか？』

「あー……フィリップは……はぁぁぁぁ」

翔太郎が横目でフィリップを見て、ため息をつく。

『あぁ、いつものですか』

「そうだ、代わりに聞いとくぜ？」

『助かります。じゃあ、検索するものは、『動機』。キーワードは、白石音々、ナイトメモリ、あとは、連続失踪事件』

「わかった。フィリップが元に戻ったら伝えとく」

『……ありがとうございます』

翔太郎は、海斗が電話を切ったのを確認して、自分も電話を切った。

一つため息をついて、検索に夢中になっている相棒をもう一度見る。

「本来、果物であるメロンに、生ハムを乗せる。一見、ミスマッチに思えるが……。実に奥が深い。ゾクゾクするねぇ！」

まだまだかかりそうだ。

そう思う翔太郎であった。

――鳴海探偵事務所水都支店

「ふぅ」

翔太郎に検索の依頼を伝えた海斗は、事務所の電話を置いた。

「どうでしたか？」

「フィリップさん、検索に入っちゃってたよ……」

「あ、ははは……」

若干呆れ気味に言う海斗。

そんな海斗の言葉に、小春も苦笑を返すしかない。

だが、いつまでもこうしてはいられない、と思った海斗は、立ち上がった。

その、

「よし、打てる手は打った！　後は足で――

瞬間、

――ドクンッ

「なっ！？」

「……海斗さん？」

海斗の耳に、鼓動が飛び込んできた。

それは、あの――

「『ナイト』の鼓動だ！」

『ナイト』の鼓動だった。

海斗は、バイクのキーをポケットから取り出し、事務所を飛び出す。

「海斗さんっ！？」

「行ってくる！　小春ちゃんは、源さんに電話して！」

「は、はいっ」

小春の方を振り返ることなく、海斗はバイクを飛ばし、向かった。

『ナイト』の元へ……。

――水都自然公園

「ん？」

「どうかしたんですか？」

会話の途中で急にどこかを睨み始めた龍平を不審に思い、咲也がそ

う聞いた。

「どうやら……来たようじゃな」

「え、えっ？」

「あの子がメモリを使ったようじゃ。場所は……少年の学校かのぉ」

「……も、もう」

「行くかの？」

「はは、はいっ！」

龍平の質問に、しっかりとした声で答え、咲也は龍平の後ろを歩き出す。

大丈夫。

絶対に助けられる。

そう、信じて。

第二十六話　Oの欲望／協力（後書き）

そんなこんなで
O編の第二話でした！

前書きでも書きましたが、プロト見てる方、ごめんなさいっ！

今、書いてますんで
ご容赦ください。

えー
本編ですが
話が進んだような、進んでないようなですね。

なんというか
バトらないなぁ。

まぁ、話の内容は、焦ってもしょうがないので、気長に書きます。

次回更新は、来週かな？
もしくは、土日です。

では、また！

古鷲川さんに怒られませんように……。

第二十七話　Oの欲望／不壊（前書き）

O編ラスト
アップしました！

プロトの方ですが
原作の古鷲川さんが
テスト中のために
ちょいと休止にしますね。

それでは
ファントムの方をどうぞ！

第二十七話　Oの欲望／不壊

――水舞高校屋上・音々視点

このメモリを起動してから、約十分。

そろそろ来てもおかしくないはず。

でも、来てほしくない。

私に関わると、皆死んでしまうから……。

【おぅ、まだそんなこと言ってんのか？】

「！？」

【これはお前が望んだことだろう？】

「違う、私は……」

【うそつけ。オレはお前だ】

「……」

【なぁ？　オレがちゃんと殺してるだろ、お前の代わりによぉ】

「わ、私は……」

【まぁいい。どうせ『ナイト』になりゃ、お前の意思は関係ない】

「……」

黙るしかない。

私には言い返す権利なんてまったくないから……。

【ほらほら、来たぜ？　お前の標的がよぉ】

来てしまった。

あの子が。

私に告白した物好きなあの男の子が。

私は、あの子を殺さなければならないのに……。

【お？　ちっ、なんだよ！　余計な奴も来たみたいだなっ】

「えっ？」

もう一度、下を見る。

そこには、全身を白いスーツに包んで、白いバイクでやってきた若い男の人。

「……あれは？」

【ファントムだな。あーあ、台無しだ】

――咲也視点

「はぁっ……はぁっ」

屋上を目指して、階段を駆け上がる。

息切れしてる。

でも、気にしてる暇はない。

一刻も早く音々さんを助けないと……。

屋上の扉が見えてくる。
その扉を、
――バタンッ
開けた。
そこには、彼女がいた。
「……来たの……」
何の感情もこもっていないような冷たい声だった。
「た、たすけにっ……はぁっ、来ましたっ」
息がまだ切れてる。
正直、辛い。

肺が痛い、苦しい。

でも、こんなのどうってことない。

自分の意思に反して、人を傷つけてしまった彼女の痛みや苦しみに比べたら……。

「メモリを渡してくださいっ」

「……」

「言っても無駄じゃ」

隣にいる龍平さんがそう言う。

やっぱり、話し合いじゃ無理なのかな……。

「下がってるんじゃ」

「……なぜ……」

「……えっ？」

一歩前に出た龍平さんに、彼女が何かを問いかけた。

……なんて？

「……なぜ、ここにいる……白石龍平……」

えっ？

「君を救うためじゃよ」

「そんなことは、指示されてないはず……」

指示されていない？

「龍平さん、それって、どういう――

――バタンッ！

ボクの声を遮るように、扉が勢いよく開いた。

そこにいたのは、

「さくやっ！！」

海斗兄さんだった。

――海斗視点

「さくやっ！！」

扉を開ける。

そこにいた全員が僕の方を見た。

咲也に、メモリを持った少女、たぶんあの子が音々ちゃんだろう。

そして、白髪白髭の男。

いつか、照井さんに見せてもらった写真の男。

照井さんの家族を殺した男の師。

あの……男はっ

「白石…龍平っ！？」

あの男がなぜここに？

「ほほぅ、ワシを知っとるのか」

「兄さん、知り合いなの？」

なぜ、さくやと一緒にいるんだ……？

なぜ……？

【ちっ、逃げんぞ】

『ナイト』！！

――ドクンッ！

僕たちが狼狽えていた隙に、あの女の子がメモリを起動させた。

そして、それを首筋に挿入すると同時に、屋上から飛び降りた。

「なっ！？」

「少年！　あの子を追うんじゃ！」

「で、でもっ……」

さくやが僕の方を見る。

さくやはあの子を助けると言って、事務所を出ていった。

だが、今のさくやは、この男の指示で動いている。

つまり、

「さくやっ！」

さくやを呼ぶ。

声を張り上げて……。

だが、

「少年！　彼はワシが説得する。じゃから、早く！！」

「は、はいっ」

「さくやっ！」

無情にも、さくやは屋上から去っていった。

「残念じゃったなぁ」

「……」

僕は、白石を睨み付けた。

この男、一体なにを考えているんだ？

「何を考えているか、わからんといった顔じゃのぉ」

「……」

どうやら、考えは読まれているようだ。
なら、ここで隠す必要もない。

「あなたは一体何者だ？」

「ワシか？　ワシはただの医者じゃよ」

「医者……？　ただの医者がガイアメモリに関わるはずないでしょう？」

「ほほっ」

僕の言葉に、白石は笑う。
何かを楽しむように……。

「いかにも！　ワシはガイアメモリの研究家。ゆえに、興味深いメモリが欲しくて欲しくて堪らないっ！」

「だから、『ナイト』を狙っている…と？」

「その通り！　どんなことをしてでも手に入れる！！　……そして、

実験をするのじゃっ！」

「……実験？」

「そう！　例えば、娘二人を亡くした母親に、その娘たちを蘇らせることのメモリを渡したら、母親は何年メモリに耐えきれるか……とかのぉぉぉ！！」

「なっ！？」

思い出した。

あの時……クローンの時に幼い金堂姉妹を殺し、その母親にメモリを渡したドーパントがいた、と……。

それがっ

「っ……てめぇかぁぁぁ！！！」

こいつがっ、あの事件の元凶。

っ！！

「ガイアメモリの実験？　……ふざけんなよ……」

「はぁ？」

「そんな、ふざけたことのためにてめぇはぁぁ！！」

「人の心をっ、人の命を利用するのかぁぁぁっ！？」

「ふざけたこと？　ふふふふっ、ワシの実験の礎になれたんじゃ！
むしろ感謝されたいくらいじゃのぉ！！」

っ、こいつ！
こいつはっ！！

「俺がっ、てめぇをぉぉ、ぶち殺すっっ！！」

『ファントム』！！

「若僧がぁ！　殺れるもんなら殺ってみろぉ！！」

『オペ』！！

『ライトニング』！！

『グラビティー』！！

――三人称

「らぁぁぁぁぁ！！」

白石が姿を変える前に、ファントムは全力で殴り掛かる。

――――バキッッ

勢いよく放たれたファントムの拳は、白石の顔面を捕らえた。

『くっっ、卑怯じゃのぉ』

手術服姿のドーパント・オペドーパントになった白石が、頬を撫でながら言う。

口調から見て、ダメージは少ないようだ。

「黙れっ！　卑怯もくそもねぇ！！」

『ジョーカー』！！

ドライバーに手をかけ、フォームを変える。

それと同時に、再び殴りかかる。

「はぁぁぁぁぁっ！！」

――ドスッ

『ヒート』！！

拳が命中した瞬間に、ファントムはフォームをチェンジした。

攻撃に炎がまとわりつき、ドーパントを殴り飛ばす。

『っう！？』

「まだだぁぁぁ！！」

『ルナ』！！

仮面が黄金に変わると同時に、ファントムは吹き飛んだ敵めがけて、蹴り出す。

すると、蹴り出された右足は、まるでゴムのように伸び、ドーパントの体を蹴り上げた。

空中に打ち上がったオペドーパントは、叫び、

『なめるな、若僧がぁ！！』

身体を光と化した。

『ライトニング』メモリの能力の一つである。

それを見たファントムは、更に、フォームを変える。

『トリガー』！！

顔の右側を覆う仮面が金色から青色に変わる。

そして、ファントムは、どこからともなく専用武器・トリガーマグナムを出し、構えた。

『そんなもの当たるわけなかろうっ！！』

光が移動する。
右へ左へ。
目では追えないほどの速度で。

トリガーの銃弾が、何発も撃ち出されるが、光の速度を得たオペドーパントには当たらない。

それでも、ファントムは撃ち続ける。

『だから、言っとるじゃろうが！』

光が一瞬、ファントムの視界から消える。

「！？」

一瞬戸惑うが、

『サイクロン』！！

冷静に判断し、サイクロンに変える。

風が周りの空気を巻き込み、暴風に成長していく。

『ぐっ……』

風が光を押し戻す。

オペドーパントは、ファントムに近づくことさえ出来ない。

「てめぇはもうっ、終わりだぁぁ！！」

『メタル』！！

『ファントム／メタル――マキシマムドライブ』！！！

メタルシャフトを構え、未だに消えない暴風に乗って、ファントムは駆ける。

そして、オペドーパントを

「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

マキシマムの光が、

『ぬぅぅ！？』

――――ガッッ！！

――貫いた。

メモリが体外に排出され、

――キンッ

砕けた。

そう、砕けた、

「……大人しくしろ。てめぇは――――

「ケケ」

はずだった。

『ユニオン』——！

ガイアウィスパーが響く。

「なっ！？」

本来ならばあり得ないことだ。

メモリをブレイクされたにも関わらず、動けること、それ以上に、まだメモリを使用しようとすること。

白石はそのメモリ、ユニオンメモリをゆっくりと体内に入れた。

「!?」

止めなければと思ってはいるが、目の前の異常な光景に、体がいうことを聞かない海斗。

メモリは、白石に完全に飲み込まれた。

だが、見た目は変わらない。

ただ、

『オペ』!!

『ライトニング』!!

『グラビティー』!!

ブレイクしたはずのメモリが独りでに動き、直っていく。

そして、再び、白石の体内へ……。

有り得ないはずの光景が、そこにはあった。

『さぁ、もう一度楽しもうか、仮面ライダー！』

第二十七話　Oの欲望／不壊（後書き）

いかがでしたでしょうか？
O編でした。

今回もN編に引き続き
歯切れの悪い終わり方ですね（「▽｜；）
ですが、心配（？）しないでください！

次回、K編で
この章は完結します！

更新は、来週の木曜日くらいにします。

では、また！

第二十八話　Kを守るために……／それぞれの決意と想い（前書き）

こんばんは

初めての同日投稿です！

ちょっと短めですが、どうぞ！

第二十八話　Kを守るために……／それぞれの決意と想い

――音々視点

限界だ。
もう、限界だ。

「もう、メモリは……」

使いたくないっ。

だけど……

【何言ってんだ！　お前は！】

頭の中で声がする。

いつからか住み始めた、もう一人の私の声が。

【お前、拾ってもらった恩を忘れたのかよ！】

「……」

そう、私は拾われたんだ。

十三年前の冬の日、私が五歳だった時に。

私は、あの日、遊園地にいたんだ。

確か、両親に連れられて、遠くの遊園地に遊びに来ていた。

私の両親は、二人とも忙しい人で私を構う余裕はなく、むしろ私を邪険に思っていたみたいだった。

もちろん遊びになんて連れていってもらったことなんてなかった。

だから、嬉しかった。

二人がやっと私を見てくれたんだと思って。

でも、違っていた。

日が落ち始めて、私は初めて、自分の側から両親がいなくなっていることに気づいた。

必死で探した。

だけど、やっぱり見つからなかった。

どんどん辺りは暗くなり、寒くなっていく。

その時、幼いながらに気づいてしまった。

『私は、捨てられた』

気づいて、泣きそうになった。

そんな時、

「どうしたんだい？」

私に声をかけてくれたのが、白石龍平。

つまり、今の私の義祖父だったのだ。

それから、あの人は私を引き取ってくれて、たくさん可愛がってくれた。

でも、今から五年前。

あの人は、私にエンタープライズで働くように言って、姿を消した。

私はその通りに動いた。

頑張って、幹部にまで登り詰めた。

そして、数ヶ月前に、私はあの人と再会した。

久々に会ったあの人は、昔と変わらない優しい笑みを私に向けてくれて、

「ワシのために、働いてくれるね？」

そう、言った。

【お、忘れてないじゃないか。なら、お前がやることは一つだよな？】

わかってる。

私は……

「……危険となる存在を排除する。企業とあの人のために……」

【そうだ！　わかってるじゃないか。じゃあ、一人一人確実に行くぞ】

「うん」

わかってる。
これでいいんだ。

こんな私に優しくしてくれたあの人を、裏切るなんて……出来ないから。

――水都自然公園・咲也視点

「はぁっ……はぁ、はっ」

どのくらい走っただろう。

音々さんを追いかけて、追いかけて、結局見失っちゃった。

うぅぅ……どうしよう。

「ボクにも兄さんみたいに、メモリの位置が分かったらいいのに……」

そうしたら、きっとすぐに見つかるはず……。

って、無い物ねだりしてもしょうがないよね。

なら、ボクに出来るのは、

「はぁっ……ふぅう」

息を整えて、一気にっ

「音々さぁぁぁぁん！！」

――叫ぶ。

恥ずかしい。

だけど、これで見つかるなら

「……」

返事はなし。

「ねぇ、おかあさん。あの人、変なこと――

「しっ！　ダメよっ、近づいちゃっ！」

「……」

うぅぅぅ。

……恥ずかしい。

いないなら、早く移動しようっ！

ボクは、歩く速度を上げて公園を立ち去った。

――水舞高校屋上・海斗視点

「か、はっ……つ……」

歯が立たなかった。

あの後、奴は全てのメモリの力を最大まで引き出していた。

『ライトニング』で、こちらが対応する前に、襲いかかり

部屋内の物ならば、全てを斬りつけることができる『オペ』の力は

『ルーム』で造った真っ白い部屋で、最大限に力を発揮した。

こちらが動こうとすれば、『グラビティー』を使い、動きを封じてきた。

奴は、強い。

まるで、化け物だった。

だけどっ

「……くっ、そぉぉ……」

負けちゃいけなかった。

負けるわけにはいかなかったのにっ……。

「う、ご……けよっ」

必死に体を動かすが、動かない。

というよりも、力が入らない。

「っ……く、つぅっ」

人の心を踏みにじったあいつを許すわけにはいかない、のにっ！

『なら、願え』

頭上から声が降ってきた。

だけど、体が動かないから上も向けない。

『願え』

声は、続ける。

何を？

何を願えと？

『戦える身体を』

戦える？

悔しいけど、身体は動かない。

『イメージしろ』

イメージ？

『そう。戦える身体をイメージしろ』

戦える身体を……。

『強くだ』

強くっ！

『もっと、強く』

っ！

「あぁぁぁぁぁぁぁ！！」

――水代神社・咲也視点

どれくらい探し回ったかわからない。

だけど、これで最後だ。

だって……。

「音々、さんっ」

見つけたから。

「来た、の」

無機質な表情だ。

まるで氷のような……。
まるで機械のような……。

今の彼女の表情は、そう見えた。

だけど、同時に無理してその表情を作っているようにも見えて……。

だから、ボクは……。

あの時、ボクが屋上から逃げる時に聴こえた言葉を。

あの時、ボクを不良から助けてくれた時の彼女を。

そして、今の彼女を信じて、言った。

「助けに……来ました」

第二十八話　Kを守るために……／それぞれの決意と想い（後書き）

K編始まりました！

始まったばかりですが
さぁ、この章完結まで
あと2話！

書いてて楽しいです！

今回は
短めだったから
次は長めかな……？

次回更新は
それこそ来週の木曜くらいです。

では、また！

第二十九話　Kを守るために……／少女が求めたモノ（前書き）

更新しました！

ちょっと長めですが

どうぞ

第二十九話　Kを守るために……／少女が求めたモノ

――水代神社・音々視点

「助けに、来た……？」

「はいっ」

何を言っているのか、理解できない。

助ける？

私を？

「ガ、ガイアメモリを捨ててくださいっ」

彼は、こちらに右手を差し出してくる。

私は、

「……」

何も言わない。

「あなたは、メモリを通して……誰かに操られているんです！」

なんて？

操られている？

一体どういうこと？

まったくわからない。

頭の中がぐちゃぐちゃだ。

【おい！　こんな奴の言うことなんて無視しろ！】

「……」

私がそう言ってくる。

……そうだ。

私は、

「……私は」

「貴方を殺さない、とっ」

『ナイト』！！

そうだ。

余計なことを考えてる暇なんてあったら、あの人のために働かないといけない。

それが、私の義務。

身体を闇が包んでいく。

もう、すっかり慣れたこの感覚。

そして、体の支配権がもう一人の私に移った。

私が出来るのは、視ることと喋ることだけだ。

視界が晴れ、目の前には、俯き震える彼の姿がある。

【おい、代わりに殺るか？】

『そんなこと、出来ないでしょう……』

【はっ、その通りだぁ】

私が、一歩一歩、近づいていく。

そして、彼と私の距離は、大体、数センチ。

もう殺せる範囲だ。

「……なんで」

彼が俯いて、そう呟く。

なんで、殺すか？

……それは――

「なんでっ、そんなに自分を苦しめるんですかっ！？」

『……えっ？』

予想外の……言葉だった。

なんで殺すか、じゃない？

なんで自分を苦しめるか？

今までで私に殺された人は、命乞いして、自分がなんで殺されなきゃいけないのかを執拗に聞いてきた。

取り乱して、必死になって……。

中には、金を出すからと言ってきた人もいた。

彼も同じだと思っていた。

色々言っても、どうせ死が迫ったら、必死に命乞いするんだと……。

確かに彼は必死だ。

でも……。

なんで、殺されかけているのに、自分の心配より私の心配をするの？

それに、必死になってる。

なに、それ……。

今までで一番訳が分からない。

「ボク、聴いたんです！　屋上から逃げた時、助けて、って……」

『……あっ』

あれは、無意識だった。

いや、もしかしたら、意識していたのかもしれない。

私は――

【ちっ！　くだらないこと言ってないで死ねや！】

『っ！？　待って！』

【……あ？】

私は、無意識に私を止めていた。

なぜかはわからない。

だけど、このまま殺してしまったら、私は……。

「……音々さん？」

『……』

彼は、私の目を見ている。

ドーパントになってる私は、どこが目なのかわからないはずだけれど、それでも私の目をしっかりと見つめてくる。

「……」

『……』

【おい！？　どうしたんだよ！？　もう殺していいのか？】

『……メモリを外に出す』

【はぁぁ！？　何をっ】

『……私がやるから』

【……ちっ、わかったよ】

渋々了承した私が、メモリを抜き取る。

メモリが体外に出ると、ゆっくりと身体の感覚が戻ってきた。

【早く殺れよ！】

「……あなたは」

【お、おい！？】

「なぜ、私を助けようとしている？」

未だに私の目を見つめてくる彼に、私はそう問いかけた。

彼は一瞬驚いた顔になり、次に、照れたように顔を真っ赤にして、

そして、真剣な表情になって言った。

「ボクは……音々さんが好きなんです！」

「だ、だからっ、好きな人が苦しんでいるなら……」

「ボクは、助けたいっ！！」

言葉が、出てこなかった。

それほどに、純粋で強い言葉。

私は、今までこんな人に出会ったことがなかった。

自分を偽らない人。

真っ直ぐ気持ちをぶつけてくる人。

自分よりも私を心配してくれる人。

そして、

こんな私を、好きだと言ってくれる人。

「……貴方は、私が化け物だと知っても、そう言ってくれるの……？」

「は、はいっ！」

「……私は、なんの取り柄もない……むしろ、親に捨てられるほど邪魔な、いらない人間だ。それでも……」

「そんなことないです！」

彼の言葉で、私はたった今気づいた。

私は――

「……これ……」

メモリを彼に渡した。

【おい！？　何をふざけてるんだ！！　あれがないと、お前は働けないんだぞ！？　わかってんのか！？】

「わかってる」

【なっ！？　お前、あの人のために働くんだろ！？】

うん、そう。

だけど、わかった。

私がこれを使っていたのは、あの人のためなんかじゃなかった。

私はただ愛されたかった。

身勝手だけど、何の見返りも条件もなしに、私を愛してくれる人がほしかったんだ。

そのために、私はガイアメモリを使っていた。

だって、私はあの人の愛しか知らなかった。

私がガイアメモリを手放したら、あの人は愛してくれないような気がして……。

愛してもらうために、自分を義務とか恩返しって言葉で縛り付けて、心を捨てていた。

そのくせ、たまに辛くなって、一人で泣き言を言っていた。

あの時もそうだったんだ。

心が悲鳴をあげて叫んでいた。

助けて

……って。

それに彼は、気づいてくれた。

だから、なんで自分を苦しめるのか、なんて言ったんだ。

私を心配してくれて、そして、好きだって言ってくれた。

だから、もう私はこれを捨てよう。

あの人に恩は感じてる。

私を拾ってくれたのは事実だから。

でも、私は捨てる。

これは、人を不幸にするものだから。

私が誰かを不幸にしたんじゃ、私を拾ってくれたあの人に申し訳ないから……。

だから、

「……これ、壊して」

私はガイアメモリを手放した。

「……は、はいっ」

緊張しているのか、少し震えた声で、彼は答えた。

彼がガイアメモリを受け取る。

……これで私は――

『壊されちゃ困るんじゃよ！』

――咲也視点

『壊されちゃ困るんじゃよ！』

声がした。

聞いたことのある声だ。

だけど、どこか違っていて……。

そう、エコーのかかったような声なんだ。

声がした方には、白い手術服のようなものに身を包んだ人がいた。

……人？

いや、あれは――

『ライトニング』！！

「！？」

ドーパントだっ！

そのことに気づいた瞬間、

――――バリリッッッ！！

光が轟音がボクを包んだ。

「――かっ……！？」

いき、がっ……でき、ない……。

「っ！？」

そのまま崩れ落ちてしまう。

が、それを音々さんが受け止めてくれた。

だけど、

「あ、っあぁぁぁぁ！！」

腕が、痛いっ。

まるで焼けるように……。

「……酷いっ」

音々さんがそう呟いた。

ボクも音々さんが見ているものを見る。

それはボクの右腕だった。

ボクの右腕は、ひどい火傷を負っていた。

「っ！？」

痛い。

意識が飛びそうなくらい。

『ほぅ、まだ気を失わないかの？』

声のする方を見る。

今度は、ドーパントではなく、人が立っていた。

その、人は……

「り……っぅ、べっ…」

痛みで、話すことすらままならないけれど。

そこにいたのは、龍平さんだった。

――音々視点

「なぜっ……」

「ん？　おぉ、音々か」

私は見ていた。

あの手術服のドーパントがあの人に変わる光景を。

戸惑う。

なぜあの人がガイアメモリを持っている？

あの企業に救われて、あの企業にいただけなんじゃ……。

「……ワシがガイアメモリを持っているのが、不思議かの？」

私にあの人は、優しく聞いてくる。

「なぜなんですか……」

「………………」

あの人は答えない。

沈黙が流れ、そして、

「ケケケ！！」

「えっ？」

あの人は笑い出した。

まるで私を馬鹿にするかのように……。

「なんで笑って――

「本当におめでたいのぅ！　ワシがお前を拾った理由が、本当に善意じゃと思っていたのかぁ？」

「え、えっ……？」

「このメモリを手に入れるためじゃよぉぉ！！！！　ワシはなぁ、この別の意思を発生させるメモリが、ほしくてほしくて堪らなかった！」

「だから、お前を拾った。ワシの思い通りになりそうで、なおかつ、企業に入りやすそうな貴様をなぁぁ！！！」

「あっ、え、……」

なに、それ……。

じゃあ、私の……今までの思い出は……？

拾ってくれたの、も

可愛がってくれたのも？

……全部……

「うそじゃよぉぉ！！！　ひゃひゃひゃひゃっ、ヒヒヒヒケケケケケケケケケケケケケケケ！　馬鹿なガキがっ、お前には感謝しとるわい！　楽に手に入れることが出来た！　このっ」

『ナイト』！！

「メモリをのぉぉ！！」

あのメモリがあの人の体に入っていく。
だけど、今の私には、そんな光景も見えていなかった。
今の私にあったのは、今までの思い出を否定された悲しみ。
ただそれだけ……。

『オペ』！！

『ライトニング』！！

『グラビティー』！！

『ルーム』！！

『わかったかのぉ？　もうお前には、家族も！　思い出も！　いていい場所も！　何もないんじゃよぉぉぉぉぉ！！！　ひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ！！』

「……」

……私、わたしには、もう……。

「……だっ……だいじょぶ、でっ…すっ！」

「……え」

気づけば、さっきまで私の腕の中にいた彼が、いなくなっていた。

彼の姿を探す。

「ね、ね…さんっ、……」

彼は、あの人の方に向かっていた。

痛々しい腕の傷もまったく癒えてないのに、

「音々、さんのっ……かぞく、も……いばしょも……」

歩いていく。

「ここにっ、あります！」

絶対痛いだろう。

彼は華奢で、戦いなんてできそうにない。

だけど、

「おもいではっ……これから、っぅ……つくり、ましょうっ、……」

向かっていく。

まるで、私を助けようとしているかのように……。

「ボク、がっ…全部……守りますっからっ！！！」

――ドクンッ

第二十九話　Kを守るために……／少女が求めたモノ（後書き）

K編二話でした。

いかがでしたでしょうか？

なんかこういう話を書くと自分の文章力のなさが浮き彫りになります（泣）

うぅぅ
文才が欲しい……。

次回更新は、木曜かな？
出来るだけ早く
更新しますね。

では、また！

第三十話　Kを守るために……／愛し愛する者たち（前書き）

K編ラストです

どうぞ、ご覧ください！

第三十話　Kを守るために……／愛し愛する者たち

――咲也視点

音が聞こえた。

何か生き物の心臓の音みたいな音だった。

もしかしたら、火傷の痛みから来る幻聴かもしれないけど、でも……

――ドクン

今もはっきり聞こえる。

――ドクン

一体どこから……？

ボクの心臓の音？

――ドクン

いや、違う。

これは……

――ドクン

――三人称

『まだ立ち上がるのかのっ。もういい、大人しくしとれ！』

オペドーパントが、足元のおぼつかない咲也に向けて右手をかざす。

「っ！　かっ、は!?」

途端に、咲也が地面に叩きつけられた。

『グラビティー』メモリの重力操作である。

今、咲也には通常の三倍もの重力がかかっている。

「止めてっ」

音々が悲痛な声をあげた。

無論、それで止める気配はない。

「止めて、やめ……てっ」

それでも声をあげ続ける音々。

自分を本当に好きになってくれた人が苦しんでいる。

それが嫌で、嫌で、ひたすらに叫ぶ。

「止めてぇぇぇ！！」

――ドクン

「……えっ！？」

『な、なんじゃ、今のはっ！？』

二人の耳に、何かの鼓動が聞こえてきた。

それは、どんどん大きくなっていく。

――ドクン、ドクン！

『どこから……むっ！？』

――ドクン、ドクン、ドクン！！

音が一段と大きくなったその時、

『ぐっ！？　む、がっ……がぁぁあぁぁあぁぁあ！？！？』

オペドーパントが頭を抱えて、もがき出した。

そして、膝をついて崩れ落ちる。

『あぁぁあ、あ、熱いっ！　体がぁぁあああぁ！？』

「っ、音々さんっ」

「えっ！？」

『グラビティー』の支配がなくなった咲也が、音々に近づいてきた。

「あ、大丈夫……？」

「は、はい…大丈夫です……」

「……酷い火傷…」

音々は、申し訳なさそうに咲也の右腕を見る。

そんな音々に咲也は、

「うんと、そのぉ……」

おどおどしていた。

こんな状況でも、そんな調子の咲也を見て、音々は少し笑ってしまう。

「えっ！？　あのぉ……ね、音々さん……？」

「あ、ごめんなさい。つい、可笑しくて……」

「あぅぅ……」

――ドクンッ

「あっ……」

「そうだった。あのっ、音々さんっ！」

「なに？」

「メモリを呼んでください！」

「呼ぶ？」

「は、はい。たぶんですけど……この音、ガイアメモリの鼓動だと

思うんです」

咲也は、以前、海斗からガイアメモリの鼓動の話を聞いていた。

だからというわけではないが、咲也は確信していた。

この鼓動が『ナイト』のものだと……。

その鼓動が強くなってから、ドーパントが苦しみ出した。

もしかしたら、『ナイト』メモリが反発しているのかもしれない。

元の持ち主の所に帰るために……。

だから、咲也は頼んだ。

『ナイト』を呼ぶことを。

その考えを音々は、すぐに理解した。

だが、

「……私は、もう」

メモリを使いたくはなかった。

メモリが白石の手に渡った時から、もう一人の自分の声が聞こえなくなった。

たぶん使用者が変わったためだろう。だが、それも一時的なもの。

メモリを呼んで、使えば、また戻ってきてしまう。

だから、音々は躊躇っていたのだ。

「……大丈夫、です」

「……えっ？」

音々の不安を感じ取った咲也は呟く。
その不安を取り除くために……。

「ボクが……使いますから……」

――音々視点

「それって……」

彼は言った。
自分が使うと。

つまり、それは……

「ドーパントに……なるつもりですかっ？」

「……違います」

彼は、首を横に振った。

ガイアメモリを使う？

でも、ドーパントにはならない？

それって……？

「ボク、思い出したんです」

「えっ？」

「ボクには、音々さんを守れる力があるって……」

そう言った彼の表情は、今までで一番自信に満ちていた。

だから、私は……彼を信じる。

目を閉じて、心の中で呼ぶ。

『ナイト』のメモリを。

『ぐっ……おぉおおぉ！？』

――ドクン

私の心に呼応するかのように鼓動がして、メモリが、排出された。

そして、メモリが向かってくる。

私に向かって……。

「――――っ！？」

向かってくるそれを見た途端に、私の心を恐怖が支配する。

彼を信じていても怖いっ

嫌だっ

目をつぶる。

でも、メモリは向かってきている。

「……大丈夫、です」

私に来たのは、メモリではなく声だった。

そう、彼の声。

そっと目を開く。

そこには、左手でメモリをつかんでいる彼の姿があった。

「大丈夫、です。ボクが守りますからっ！」

――ドクン

――咲也視点

メモリを掴んだ手が熱い。

でも、それは懐かしい熱さ。

なんで忘れてたんだろう……？

いや、今はそんなことはいいや。

左手に力を込める。

ボクの握力なんて、女の子と同じくらいだ。

それでも……

――ピシッッ

メモリが割れる音。

いや、正確には、メモリの塗装が剥がれる音、かな。

――ピシッッ

……来たっ！

――パリンッ！！

メモリが、変わった。

『ぐっ……な、なんじゃ、それは……』

ドーパントの龍平さんが、聞いてくる。

メモリが出たから、痛みがなくなったみたいだ。

「これは、ボクの能力です」

「兄さんがメモリの鼓動を聞けるように……」

「ボクはメモリを純化できる」

そう、思い出したボクの能力。
昔、使っていた能力。

「その、メモリは……？」

音々さんが、ボクの手の中にある物に気づいたみたいだ。

「これが、ボクの能力の証……純化した『ナイト』です」

手の中には、兄さんのメモリみたいな形をしたメモリがあった。

――三人称

『ふっふっふ、それはいいのぉ！　これが使える！』

いきなりのことに取り乱していた龍平は、落ち着きを取り戻し、そう言った。

冷静に考えれば、たかが純化したナイトメモリだけで自分に勝てるわけがない。

そう思ったのだ。

さらに、あの純化したメモリならば、持っていた白のドライバーが使えるとも……。

『そのメモリも、ワシがもらう！！』

ドーパント体のまま、咲也に飛びかかる。

人間の力であるならば、『ライトニング』になる必要もない、と思って……。

だが、それが間違いだった。

『トリガー』！！

『なっ、がぁぁぁあぁあ！？』

ドーパントの体に、何発もの銃弾が命中した。

「「えっ！？」」

咲也と音々、二人の驚嘆の声が重なる。

さらに、視線も重なり、その視線の先には、

「やぁ、さくやに……えぇと、音々ちゃん、だっけ？」

仮面ライダーファントム、水町海斗の姿があった。

「兄さん！？」

咲也が駆け寄る。

ボロボロな咲也を見て、ファントムのまま海斗は咲也の頭を撫でてやった。

「……その様子だと、僕の意見は間違っていたみたいだね」

「？」

「さくやの方が正しかった。この子を助けたんだね」

「……う、うんっ」

「じゃあ、あとは……」

僕に任せて、そう言おうとした海斗だったが、咲也は首を横に振った。

「……ボクがやる」

「……思い出したんだね？」

「うん」

海斗は頷いた咲也を確認すると、ドーパントに向かって走り出す。

追撃を加えるためではなく……。

『うぅううぅ、ぐっ……ドライバーがぁっ！？』

そう、倒れた衝撃で地面に落ちた白いロストドライバーを拾うために。

『とらせるかぁぁあ！』

「それ、貰うよっ！」

『サイクロン』！！

メモリを換え、巻き起こした風でドライバーを宙に浮かせた。

そして、

――パシッッ

――掴む。

「さくや！！」

「うんっ！」

投げられたドライバーを、咲也は受けとり、

――カシッ

装着する。

そして、メモリを起動させようとする、が……

「いたっ！？」

右手でメモリを持ってしまったため、痛みで落としてしまう。

それを、音々が拾って、咲也に持たせた。

「……頑張って」

「は、はい！」

今度は左手で起動する。

Kのメモリ。

『Ｋｎｉｇｈｔ』
騎士のメモリを。

『ナイト』！！

「へんしんっ！！」

――海斗視点

「へんしんっ！！」

その声と同時に、さくやの姿が変わっていく。

さくやを闇が包む。

それをさらに包むように、白銀の鎧が全身に現れ

やがて、音を立てて割れた。

そこに立っていたのは、ジョーカーに似た姿に、白銀の鎧を纏った戦士。

言うならば……。

「仮面ライダーナイト、かな」

僕は変身を解き、音々ちゃんに近づく。

「やぁ、音々ちゃんだね？」

「……貴方は？」

「僕は水町海斗。探偵でさくやの兄貴分って感じかな」

「……」

「ありがとね」

「……えっ？」

「さくやは君のおかげで強くなれた。いや、強くなるが正解かな？
とにかく、今はさくやを応援しようか」

「……はい」

――三人称

「これが……」

咲也は、自分の手や足を眺める。
それを見て、自分が変身したことを再確認。
そして、

「わぁあぁあ!?　どどど、どーしよう!?」

――狼狽えた。
騎士のような姿をした仮面ライダーが、あわあわ言って狼狽える光景は、中々に滑稽であった。

『なっ!?　少年、お前さんも仮面ライダーじゃったか……』

「ふへっ？」

立ち上がりながら、そう言ってきたオペドーパントの姿に、今の状況を思い出す。

「…た、戦ってたんだ……」

『ふ、ふざけおってぇえええぇぇぇ！！』

光になり、ドーパントが襲いかかってくる。

それを、

「え、えぃ！」

――ガンッ！

持っていた体より大きな盾で防ぐ。

その盾に、ドーパントがぶつかり、跳ね返された。

『な、なにが！？』

今度はオペドーパントが狼狽える番だった。

本来なら、ライトニング、つまり、雷になっている状態でならば、盾など簡単に貫けるし、まず当たるはずがない。

しかし、貫けなかったのだ。

『ぐっ……ならばっ、これでどうじゃ！！』

今度は、手をかざす。

『グラビティー』の能力ならば、盾で防ぐことは不可能。

そう考えた。

だが、

「たぁっ！」

今度は腰についていた細身の剣で、上空に一太刀。

すると、重力はかからない。

何事もなかったかのように咲也・ナイトは立っている。

『き、きさまっ！　一体なにを!?』

「えと、このナイトには、ガイアメモリを無力化する力があるみたいで……」

そう、仮面ライダーナイトは、他のガイアメモリの力を消すことが出来るのだ。

『ぐっ、ならばっ！』

ナイトを倒すことが出来ないと判断したオペドーパントは、攻撃の矛先を変える。

向かう先は、

「……え？」

――音々だ。

「音々さんっ！」

ナイトは駆ける。

音々を守るために……。

――ドクン

――カシャッ

『ナイトマキシマムドライブ』

「えっ？」

咲也の意思にかかわらず、『ナイト』メモリがドライバーから外れ、盾についていたマキシマムスロットに挿入された。

その瞬間、

『ぐっ、がっ？　うぉおおおおぉ！！』

オペドーパントが苦しみだした。

雷化も解除され、地面に転がる。

「さくやっ！」

海斗が声をあげた。

呆然としていた咲也・ナイトも我を取り戻し、頷いた。

そして、メモリを細身の剣の柄部分にあるスロットに差した。

『ナイトマキシマムドライブ』！！！

剣が淡い光を帯びていく。

ナイトは剣を構え、走り出す。

守りたいものを護るために……。

「はぁぁぁぁぁあ！！」

剣が、

『ぐっ、や、やめろぉ』

ドーパントを

「あぁあぁぁぁあ！！」

『ぐっ、おおぉおぉぉおぉ！？！？』

切り裂いた。

切り傷に光が集まり、そこから遠い箇所からドーパント化が解けていく。

そして、完全にドーパント化が取れると、切り口からメモリが排出されて、

――パリンッ

砕け散った。

――音々視点

目の前で、メモリは砕けた。

つまり、彼の勝利だ。

「ね、音々さん……」

変身を解いた彼が、こちらに歩いてくる。

その足取りはふらふらで、表情もさっきまで戦っていた人と同一人物とは思えないくらい、情けない顔をしていた。

突然、彼が倒れた。

私は、それを

――ギュッ

しっかりと抱き止めた。

「……ね、ねさん……」

「……なに？」

「だいじょ、ぶでし…た、か？」

「……うん」

「ボク……たすけ、られま…したか？」

「……うん」

「よかっ……た……」

彼は、そのまま意識を失った。

……いや、

「……すぅ……すぅ」

眠ってしまっていた。

……せっかく、話したいことがあったのに……。

でも、とりあえず今はおやすみなさい。

そして、

「……ありがとう」

――事件報告

依頼人

照井さん（源さん経由）

依頼内容

『ナイト』の捜索

詳細

連続失踪事件の犯人『ナイト』を探すのが、今回の目的だった。

犯人は、小春ちゃんやさくやのクラスメイトの白石音々ちゃんだった。

結果

『ナイト』の偽者作りに惑わされたが、なんとか発見した。

その時に、複数本のメモリを持つ白石龍平と交戦したが、敗北してしまった。

その後、さくやの交渉により音々ちゃんと和解、メモリを渡してもらった。

が、白石の襲撃に遭い、一時的にナイトメモリが、白石に渡ってしまった。

それを、能力を思い出したさくやが仮面ライダーナイトに変身し、メモリブレイクした。

ちなみに、依頼自体は失敗したと報告した。

同時に、もう『ナイト』は現れないとも報告。

源さんに問い詰められたけれど、なんとか分かってもらえた。

音々ちゃんを渡すなんて出来ないね。

犯行を行っていたのは、メモリによって生み出された意思みたいだから、あの子もメモリの被害者みたいなものだし。

なにより、もう彼女は……

――水舞高校・咲也視点

今の時間は朝八時半。

もう少しで、学校が始まる時間だ。

なのに、

「むぅ、あの子はまた休みかいねぇ」

そう、音々さんの席が今日も空いていた。

昨日は眠ってしまって兄さんにも何も聞けなかったし。

というか、ボク……

「あっ！？　い、いい、いたいですよっ」

「ななみは、包帯ぐるぐるさねぇ……つんつん」

「に、にゃぁぁぁ！？」

ボロボロだし……。

「ほら、叶ちゃん！　もう終わりです、席ついてください」

「しゃーないなぁ」

「うぅぅ」

「七海くん、大丈夫ですか？」

「だ、だいじょぶじゃ……な、いぃぃ」

大丈夫じゃないけど、とにかく席につく。

うぅぅ、痛いよぉ……。

――ガラッ

「はい、じゃあ、席につけ」

ちょうどいいタイミングで先生が入ってきた。

「えーとだな……白石さんなんだが……本人の希望で…退学した」

――ガヤガヤガヤ……。

教室が騒がしくなる。

だけど、その音はボクには、聞こえていなかった。

「……」

あ、あぁぁ。
な、なんで……。

「しーずーかーに！　……で、だ。今日、また一人、転校生が来た。……入れ」

――ガラッ

前の扉が開き、その転校生が入ってきた。

正直、そんなのどうでもいい。

あぁ……音々さん……。

『……』

なんだか皆、静かだけど……。

どうでもいいや……。

「……ま、まぁ、そうなるよな……とにかく、自己紹介だ」

カツカツと黒板に名前を書く音がして、

「……改めまして……」

「……ふへっ？」

聞こえてきた声に、顔を上げた。

そこにいたのは、

「七海音々です」

「七海咲也の恋人です」

「彼共々、よろしくお願いします」

まごうことなき、音々さんだった。

「……い、いったい？」

頭が追いついてないボクのもとに音々さんは、近寄ってくる。

……というか、さっきなんて――

――――チュッ

いきなり、唇に柔らかい感触が……した。

……って、ええぇえぇぇぇえぇえぇぇぇぇえ！？！？

「な、ななななななな にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにぉぉ！？！？」

顔があ、あちゅい！
あぁあぁ！？

「ん、返事」

「へ、へん、じ……？」

「そう、返事」

「これからよろしく、私の彼氏」

第三十話　Kを守るために……／愛し愛する者たち（後書き）

いかがでしたでしょうか？
K編終了です！

いやぁ、とりあえずここまで書けてよかった！
これを書きたかった！
よっしゃっ！！

ま、そんな感じで終了でした。
次回からは新章です。

が、その前に番外編をやろうと思います！
番外編は、この話の補足と日常のお話です。
話数は2、3話かな？

とりあえず

次回更新は未定です。

考える時間と、プロトの方を進めるので（「▽|；）

では、また！

番外編　生徒会副会長の1日／いや、待て。なんでオレなんだよ！？（前書き）

こんにちは！
藍沢です！

今回は番外編です。

タイトル通り、水舞高校生徒会副会長が主役です。

探偵事務所は一切出てきません。
ドーパントも一切出てきません。

日常だけです。

つまらないかもしれないですが、どうぞ

番外編　生徒会副会長の1日／いや、待て。なんでオレなんだよ!?

やぁ、こんにちは。

初めましての人がほとんどだろうから、自己紹介をさせてもらうぜ？

オレの名は、森下秋里
（もりしたあきさと）

水舞高校に通い、生徒会副会長を務める高校三年生だ。

実を言うと、オレには好きな女がいる。

その女は、オレと同い年の幼馴染みなんだが、これがまた……。

面倒な奴なんだ。

とにかくオレは、今からそいつとの日常の話をしようと思う。

生徒会会長・空野叶との日常の話を……。

――朝・空野宅

「おーい、叶！」

オレは、例によって例のごとく、空野宅に来ていた。

もはや、毎朝の習慣になっている幼馴染みを起こすためである。

――ピンポーン

インターホンを押す。

だが、

『……』

返事はない。

まぁ、これもいつものことだ。

「じゃ、お邪魔しますよー」

合鍵を使って、玄関を開ける。

勘違いするなよ？

これは別に、好きな女の家に侵入するために、密かに作ったわけではないからな！！

えっ？

別に思ってない？

……ならいい。

とにかく、叶のお袋さんから預かっている合鍵で、空野宅に入った。

あいつの部屋は二階。

だから、オレは階段を上がって、

――バタンッ！

「叶！　起きろ！　もう朝だ！」

叶の部屋に乗り込んだ。

そこには……

「ＺＺＺＺ」

叶がいた。

いや、叶の部屋なんだからいるのは当たり前なんだが……。

「ＺＺＺＺ」

「はぁ……今度はハンモックかよ……」

ベットがあるにも関わらず、ハンモックを吊り下げて寝ているのだ。

まぁ、こんなのもいつも通りなんだがな。

「おい、叶！」

――ゆさゆさ

「うぅ……んが……」

「かなえー！」

――ゆさゆさ

「起きろって！」

「う、ぐっ……も……」

「……も？」

「モロヘイヤぁぁぁぁ！」

「……」

意味わかんねぇ単語を寝言として言うのも、いつも通りだ。

ふぅ、とりあえず

「朝飯でも作っといてやるか……」

見捨てていくことにした。

――朝・水舞高校

「セーフぅぅ！！！」

チャイムぎりぎりに、叶が教室に入ってきた。

今日もどうにか間に合ったみたいだな。

そして、そのままオレの所に歩いてきた。

んで、一言。

「起こせっ！」

ってわけだ。

中々面倒だろ？

だから、オレはこう返すわけだ。

「起こしたっ！」

まぁ、あながち間違ってはいない。

一応起こしはしたし……。

「お前起こしても起きなかっただろ？」

「起きるまで起こす！　これ、常識さっ！」

「どこの常識だ！？」

「アイあんどユー」

「……そうかよ」

あぁ、本当に面倒だ。

――キーンコーンカーンコーン

おっと、そんなことをしている間に本鈴が鳴った。

「ほら、叶も席つけ！」

「……むぅぅ」

渋々去っていく叶。

おっと、勘違いするなよ？

別にオレは、毎朝こうやって叶と喋りたいから、朝起こさないわけではない！！

えっ？
思ってない？

……ならいい。

とにかく、授業だ。
一時間目は数学か……。

よし、叶の観察でもしてるか。

――休み時間・教室

「ふぅ……」

やっと二時間目が終わった。

数学の後に古文は辛い。

理解不能言語のオンパレードだった……。

だから、叶の観察して暇潰ししていたんだが……。

「こはるぅぅ！！」

「わっ、な、なんですか、叶ちゃん……」

奴の声が響いた。

声のする方を見ると、叶がクラスメイトの鳴海に突進をぶちかましている。

叶の周りには、

「聞いてくれぇぇ！　ななみがぁぁ！？」

「わぁぁぁ！？　叶さん、止めてくださいぃぃぃ！！」

突進された鳴海とクラスメイトで女顔の七海。

それと、

「……」

美人だが無口&無愛想な転校生・白石……いや、七海音々がいた。

……七海も七海だから、どう呼べばいいんだ？

まぁ、いいや。

にしたって、あの時はすごかったな……。

転校しなおすわ、いきなり七海（男）にキスするわ、恋人発言するわで……。

「……」

「だ、だからぁ！」

「うるさい！　このリア充ななみめ！」

「うっ、いや……そのぉ」

「まぁ、否定はできませんよね」

「あぅぅ」

顔を真っ赤にしている七海（男）をひたすらに責める叶。

それを苦笑いして見守る鳴海に、無表情の七海（女）。

……楽しそうだなぁ。

勘違いするなよ？

別にオレは友達が少ないわけではないからな！

えっ？

思ってない？

……ならいい。

――キーンコーンカーンコーン

……チャイムか。

はぁ、青春してぇなぁ……。

――昼休み・生徒会室

「はぁ……」

生徒会室で自分で作った弁当をつつきながら、ため息をつく。

なんか、

「……虚しい」

思わず呟いてしまった。

生徒会室とはある意味聖域だ。

役員以外は、基本立ち入り禁止。

でもまぁ、それは建前で。

実際は、活動していない時ならば、部外者でも入れる。

まぁ、鍵がないと入れないけど……。

だから、もし彼女とかいれば、毎日とはいかなくても、弁当作ってもらったりして、果ては……あーん、とか？

「だけど……はぁ……」

現実は甘くない。

今、オレは一人虚しく自家製弁当を食ってるわけで……。

――ガラッ

「ん？」

「あれ？　センパイ？」

生徒会室の扉が開き、見知った顔が入ってきた。

「よ、葉崎。どうしたんだ？」

生徒会室に入ってきたのは、生徒会書記を務める後輩・葉崎雄介だった。

いつもニコニコ顔のイケメン野郎。

成績優秀、スポーツ万能。

しかも、彼女持ちのリア充ときてる。

いやぁ、イラッとくるね！

「……センパイ、なんか笑顔が怖いんですけど」

「気のせいだ」

悟られたが、誤魔化す。

「まぁ、いいですけど……。それで、センパイ何してるんですか？」

「ん？　いや、たまには生徒会室で食うのもありかな、と」

「あ、奇遇ですね！　俺もですよ」

「そうか」

……って、ん？

そういや、こいつ……。

「彼女は？」

「えっ？　あ、いや……」

こいつにしては、珍しい。

いつもは、同じクラスの彼女と飯食ってんのに……。

「喧嘩でもしたのかよ？」

「いや、実は……」

そう言って、葉崎は鞄から可愛らしい弁当箱を取り出した。

そして、

「自分が作った弁当を、クラスの奴らに見られんのが恥ずかしいらしいっす」

「……」

「……あれ？　センパイ？」

……負けた。

――放課後・生徒会室

「はぁ……」

……なんか、ため息しかついてないな、オレ。

「とぅ！」

――バキッッ

「いったぁ！？」

後頭部にけっこうな衝撃が走った。

ってぇな！

一体、誰だ！

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

まぁ、こんなことをするやつは一人しかいないわけで……。

「……よ、叶」

「……よ、秋里」

挨拶を交わすオレと叶。

奴の手には……モロヘイヤ……。

「なんで!?」

「いや、ボーっとしてたから」

「いや、そっちじゃねぇよ!!　なんでモロヘイヤ!?」

「そこにモロヘイヤがあったからさっ！」

「あるかっ!!」

と、いつもより二割増しのやり取りをしてから、

「で、なんか用か?」

本題に戻る。

大体、こいつがオレを叩く時は、何かしら用がある時だからな。

「いやさ、もう皆帰ったのさ？」

「……へっ？」

周りを見ると、確かに誰もいなかった。

というか、もう夕暮れだった！？

「い、いつのまに……」

「いや、秋里がボヘーっとしてる間にさ」

「くっ」

――ピロリロリッ

ん？

メール……？

誰から……？

『ｆｒｏｍ：葉崎雄介』

『お先失礼します』

『もういい加減コクったらどうっすか？（笑）』

『会長と二人っきりなんてチャンスっすよ！（笑）』

「……」

にゃろっ！

葉崎のやつ謀りやがったな！！

あー！

ふざけんなっ！

何がいい加減だっ！
何が（笑）だっ！

明日、ぜってぇシメル。

「ん？　秋里、どしたぁ？」

「のっ!?　いや、なんでもないっ！」

「ん？　ま、いいさ」

ふぅ、誤魔化せたか。

叶がアホでよかった。

「よしっ、秋里！」

「なんだ？」

「一緒帰るさー」

「……」

……お、おぉおお！？

か、かか、か、勘違いするなよぉお？

べ、べっつに、久しぶりの二人っきりで下校だから嬉しいなぁぁぁ
とか

二人っきりで下校なんて、青春ぽくて最高だぁ！とか

最近は、一緒に帰れなくて寂しかった、とか

思ってねぇからなぁぁ！！

えっ？

嘘だろって？

……。

ああぁ！

そうだよっ！

嘘だよぉおおぉ！

嬉しいしっ！

青春ぽくて最高だしっ！
寂しかったしっ！

悪うございましたっ！！

ウソツイテワルウゴザイマシタッ！！

「おーい、秋里ぉ。置いてくさぁ」

「お、おぅ。……って、待て待てっ」

――下校途中

「……」

「で、こはるがなっ！」

どうする！？
告白しちまうか！？

確かに、葉崎の言う通り、いい加減って感じはある。

だが、しかしだなっ！

今のこの関係から脱却するためにはっ……。

「……ふぅ、でなっ！」

「……」

ん？
こいつ……。

「どしたのさぁ？」

「……」

久しぶりに一緒に帰ると、分かることがある。

観察をしてて少し感じてたけど、話をしてると余計に分かった。

「……おい、叶」

「ん？　なにさ？」

こいつは、

「ちっとは休めよ？」

「……」

疲れてる。

いつも元気いっぱいで、そんなキャラクターを崩さないけど……。

「……いやぁ、やっぱバレてた？」

「あぁ、バレバレだ」

疲れることだってあるんだ。

色々頑張ってる奴だから。

「まだ、教えてはくれねぇのかよ？」

「まだ、無理さ」

最近、叶は何かをしてる。

昼休みとかにいきなり消えたりして、夜中にボロボロになって帰ってきたり。

真夜中に家から慌てて出ていって、朝まで帰って来ないと思ったら、目の下に隈を作って学校にいたり。

悪いことはしていない、だから、今はそっとしておいてほしい、と言うから、オレは聞かない。

だけど……、

「心配だ」

「……ありがたいねぇ」

心配だよ。

だからさ、

「ん」

「……？」

屈んで叶に背を向ける。

叶はその意味が分かってないみたいで首を傾げている。

はぁ、たくっ……。

「おぶってやるよ」

「は？」

「だぁかぁらぁ！　……疲れてるんだろ？」

「……」

「教えてくれねぇなら、出来ることさせろよ。……だって……」

「オレら、幼馴染みだろ？」

そう言うと、背中に暖かい重みがかかった。

「……なら、頼むさ……」

「……了解、任せとけ」

立ち上がっておぶり直す。

心地いい雰囲気だ。

心が休まるような感覚。

「なぁ」

「ん？　なにさ？」

「他には何か出来ることないか？」

「んー、なら弁当を作るさ！」

「……えー」

「文句あるなら言うなっ」

この距離感が、この雰囲気が、今のオレには一番かもしれない。

この幼馴染みの関係が。

と、まぁ、こんな感じだ。

オレの日常は、どうだっただろうか？

つまらない？

まあ、他人の日常なんてそんなもんだろう。

他にも、葉崎とその彼女の仲を取り持った話とか
叶がオレん家に泊まりに来た話とか
色々とあるんだが……。

とりあえず、今回はここまでだ。
またオレの愚痴やら何やらを聞いてくれるとありがたい。

それじゃあな。

番外編　生徒会副会長の1日／いや、待て。なんでオレなんだよ！？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

こんな感じの番外編でした。

次回も番外編です。

次回は、咲也と音々の話になると思います。

更新は……またも未定。
ごめんなさい（汗）

そろそろキャラ設定も追加しようかと思ってます。

番外編終わったあたりに。

では、また！

番外編　２人の休日／デートって響きに心が踊る人と殺意を覚える人がいる（前

番外編投稿しました。

が！

予想以上に長くなったんで、二話に分けました。

まずは、一話目をどうぞ

番外編　2人の休日／デートって響きに心が踊る人と殺意を覚える人がいる

――朝・七海家・咲也視点

「ごちそうさまでしたっ」

朝食が終わり、箸を置く。

それと同時に、心臓の音が速くなってくのが分かった。

うぅぅ、緊張するよぉ……。

「あら？　今日は一段と食べないのね？　具合でも悪いの？」

「あ、えっと……」

目の前に座っていた人が、そう言ってくる。

ボクの母親の七海麻衣（ななみまい）さん。

ボクを孤児院から引き取ってくれた人だ。

「んん？　どうしたの、さくちゃん」

「えっと……」

こういう時、どうすればいいんだろう！？

やっぱり誤魔化した方が……、

「……もしかして、デート……だったり？」

「ふへっ！？　いや、べべべ、べちゅにそ、しょんなんじゃぁぁ！？」

「あらぁ……図星？」

「……あぅ」

母さんは、ボクが今日、デートをするのだと知って、キャーキャー

と騒ぎ出した。

母さんは、見た目がけっこう若いから、そういう風に騒いでると、女子大生といっても通用しそうだ。

というか、別にデートじゃない。

ただ買い物に付き合って欲しいと言われただけなんだけど……。

「それで？　相手は、どんな子？　可愛いの！？」

「えっ？　うん、そ、それにかっこいい……」

「かっこいい！？　も、もしかして男の子！？」

「えっ！？　ち、ちが――」

「あっ！　もしかして、前に言ってた『海斗お兄ちゃん』？」

「だ、だから、ちが――」

「な、なるほど……アリね……」

うぅぅ……。

なんでこうなっちゃうんだろう……。

ボクのデートの相手は……。

……って、

「あぁぁぁぁぁぁあ!?」

「ふわっあ!?　え、なに!?　ど、どうしたの、さくちゃん?」

「じ、じかんっ!」

時計を見ると、今の時間は八時四十五分。

つまり、待ち合わせの時間の十五分前。

「わあぁぁあ!　ち、ちこくっ!?　い、いってきますぅぅ!」

――バタンッ

「あっ！　さ、さくちゃん!?　……行っちゃった」

「大事な話があったのに……」

――水都自然公園

「……」

「はぁはあ…はっ……ね、ねねさっん……はぁ…」

待ち合わせ場所にいたのは、音々さんだ。

数日前に、こ、こいびとになったひと……。

と、とにかく、待ち合わせの時間の三分前にたどり着けた。

よ、よかった。

でも、いきがっ……。

「……だいじょうぶ？」

「は、はいっ」

音々さんが、顔を覗き込んでくる。

ボクは、カッコ悪い所を見せたくなくて、なんとか息を整えて答えた。

「……汗」

「ふぇ！？」

音々さんが、ポケットからハンカチを取り出して、汗を拭いてくれ

た。

「……」

「……」

お互い無言。

それが余計に……。

き、きんちょうする。

「はい、大丈夫」

「はい、ありがとうございます……」

ガチガチなまま、会話を交わす。

とにかく、話を進めなくちゃ……。

「あのっ、音々さん」

「なに？」

「今日は、どこに……」

「引っ越しの買い物をしたい」

引っ越し？

それって……。

「私は元々家なかったようなものだから……」

「あ……」

そう言えば、海斗兄さんが音々さんから色々聞いて、その一部をボクにも話してくれたけど。

『彼女は、ガイアメモリ関連のある企業で働いていて、そこのビルに住んでいたらしい』

『それで今回の一件で、その企業を裏切ったことになってる』

『だから、彼女を匿える場所を探してるんだ』

って言ってたっけ。

それじゃあ、ボクは音々さんの住む場所奪ったことに……。

「気にしないで」

「えっ？」

ボクの心のうちを感じ取ったように、音々さんがそう言ってきた。

さらに、言葉を続け、

「あそこは私の家じゃない。あそこは落ち着かなかったし……」

「……」

「それに、私は貴方の側の方がいい」

――ボンッ

沸騰した音が自分でも聞こえた。

うぅぅ……。

「どうかした？」

「い、いや……なんでもない、です……」

顔を赤くして言っても、説得力ないなぁ、と思いながら、もう一度話を戻す。

と、とにかく！

今日は音々さんの買い物にちゃんと付き合おう。

そう思って、ボクは音々さんに付いていった。

――？？？

『こちら、フェニックス。スプリング、聞こえるか？　オーバー』

手元のトランシーバーから声が聞こえてきた。

「聞こえますけど、なんかこれ、人としてダメな気が……」

『何を言う、こはっ――スプリング！！　これは、我々に課せられたミッション……そう、我々は何もないように見守らなくてはいけない！　オーバー』

「余計なお世話じゃ……。それになんですか、そのスプリングって……」

『ん？　なんかそれっぽいからさ。オーバー』

「は、はぁ」

『それじゃ、引き続き監視を継続するさ！　オーバー』

『行くさ、秋里ぉぉ！』

『えっ？　なにっ！？　これ一体何なんだぁぁぁ！？』

いつものように暴走するかな……フェニックスと、不憫な誰かの叫び声が聞こえた後、トランシーバーは、ブツリと音を立てて切れた。

「……どうしましょうか、これ」

――商店街

「……ここ？」

「はい、そうですよ」

ボクたちは、水都の中心に位置する商店街にやってきた。

水都商店街

大きな噴水を中心として、円を描くように様々な店が並ぶという独特の形をした商店街。

ここは、水都の中心にあるだけあって、寂れた雰囲気はなく、いつも活気に満ち溢れている。

「初めて来た」

「そうなんですか？」

「……そう」

それだけ答えて、興味深そうに周りを見渡す音々さん。

実は、歩き出したはいいが、音々さんは水都のことについてあまり知らなかった。

なので、とりあえずある程度の日用品なら揃うここに案内したのだ。

そして、今に至る。

「あ、あの音々さん？」

「ん、なに？」

「行きませんか？」

「……」

音々さんは、まだ黙って周りを見渡している。

……もしかして、

「まだ、見てたい……とか？」

ゆっくりと首を縦に振る音々さん。

そっか。

やっと日常を手に入れたんだよね。

こういう風景、見てたいんだろうな……。

そう思った。

だから、

「行きましょう」

「……」

「これからは、たくさん見れますから」

「だから、今は行きましょう！」

そう言ったボクに、音々さんは、一瞬ポカンとした後、

「わかった」

穏やかな声と表情をボクに見せてくれた。

番外編　2人の休日／他人のデートを尾行すると大概こうなるのがオチ

――商店街

「あとは、パジャマが欲しい」

買い物も一通り終わって、残りは何を買うのか聞くと、音々さんはそう答えた。

なるほど。

……パジャマ。

……パジャマ……。

［こんなの買ってみたの］

［あなたに見てほしくて……どうかな？］

［えっ！？　か、かわいい？］

［え、えへへ］

［ありがとっ！］

［そ、その……キス、してもいいかな……？］

［……ん……］

わ、わぁあぁぁあ！？
だ、だめですよ、音々さん！！
は、恥ずかしいですよぉぉ！！

「……何を言ってるの？」

「ふへっ？」

気付くと、音々さんの顔が目の前にあって……

「わ、わぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁ！？！？」

思わず飛び退いてしまった。

そんなボクを見て、音々さんは首を傾げる。

「なに？」

「あ、いいい、いえっ！？」

言えないよぉ。

パジャマ着て、キスしてくる音々さんを想像してたなんて……。

「……？」

「な、なんでもないですっ！！　さ、さぁ、い……行きましょう！」

「……？」

変な想像をしていたのがバレないうちに、音々さんの背中を押して、洋服が売っている店に急ぐことにした。

……にしたって、なんだかリアリティーのある想像だったなぁ。

それに、あの声って……。

――？？？

『すごいさねぇ、これ』

トランシーバーの向こうで、カチャカチャと楽しそうに何かをいじるフェニックス。

「あ、あのさっきの……」

『ん？　ちゃらちゃっちゃちゃ～ん！　フロッグポット！』

「某国民的アニメに登場する青いネコ型ロボットの真似は止めてください！」

『いや、だって……ねぇ？』

「だっても何もありません！　バレたらどうするんですか！？」

『後悔はしていない。反省もしていない』

「ダメじゃないですか！！」

もうっ！

ちゃんと尾行する気、あるんでしょうか……。

『……』

「……どうかしました？」

『なんだかんだでノリノリさねぇ』

「あっ！？　いやっ、そのっ！？」

『おっ？　ななみ達が動くさねっ！　じゃ、またさ！』

『お、おぉおおぉ！？　な、なんつうセリフをぉおぉおぉ……！？
パジャッ、パジャマッ！？　キキキキッキスぅうぅうぅ！？！？』

「……」

――商店街

「うぅぅ……」

お、おちつかない。

それはなぜか。

それは……

――シャーー

カーテンが開く音。

そして、

「！！」

「どう？」

目の前には、パジャマ姿の音々さん。

「いいとおもいましゅっ……」

「そう」

――シャーー

またカーテンが閉まる。

そう、ここは試着室の前。

ボクは、さっきからここで
音々さんの試着に付き合っていたのだ。

女の人の洋服屋なんてまったく来たことがないから、とても緊張するし、恥ずかしい。

なにより……

――シャーー

「……これは？」

「に、にあってましゅ！」

――シャーー

音々さんが着るパジャマは全部かわいくて、しかも、それを着ているのが音々さんだから、余計にどぎまぎしてしまう。

うぅぅぅ……。

し、しんぞうがぁぁ……。

は、はやく終わらないかなぁ。

ほんとはずっと見ていたいけど、心臓がぁ……。

うぅぅぅ……。

――シャーー

こ、こんどは、どんな……

「……どう？」

「……」

咄嗟に。

言葉が、出てこなかった。

今、音々さんが着ているのは、淡いピンク色のパジャマ。

別に、これといった装飾もないシンプルなもの。

普段なら味気なく見えそうな感じだけど……。

「？」

「……あっ！？　え、えっとそのぉ……」

「似合わない？」

首を傾げる音々さんに、ボクは目一杯首を横に振った。

「そんなことないですよっ！！」

「そう？」

「えっと……その、ただ」

「……ただ？」

「見とれちゃって……」

そう、それほどだったんだ。

シンプルだから、音々さんの綺麗さとかがより引き立ってて……。

淡い色も、いつもの音々さんのクールなイメージと正反対なはずな

のに……。

つまり、とても似合っていて、とても綺麗で、とても可愛かった。

「……」

「えっと、音々さん……？」

なんか、固まって……る？

「これにする」

「えっ？」

――シャーー

固まっていたかと思ったら、いきなりカーテンを閉めた音々さん。

「……？」

いきなりどうしたんだろう？

まぁ、決まったみたいだからいいかな。

――？？？

「うーん……」

「どうしたのさ、小春」

「あ、叶ちゃん。パジャマ、どっちがいいと思いますか？」

「おぉ！　左の奴、いい感じさ」

「じゃあ、叶ちゃんこっち着て、私がこっち着てみましょうか」

「おうさっ！」

――シャーー

「えっ？　オレ、どうすりゃいいんだ!?　おい、おい叶ぇぇぇ!!」

――帰路

「……」

「……」

買い物を終え、夕日に照らされた道を二人で歩く。

会話はない。

だけど、空気は悪くない。

ゆったりとした暖かい空気だ。

「……」

「……」

「……今日は、」

「えっ？」

音々さんの言葉で、沈黙は破られた。

「……」

「……」

また、沈黙。

いつもなら慌てて何か言おうとするだろうけど、待つ。

なんとなくだけど、今のボクにはそれが出来た。

たぶん、この暖かい空気のおかげだと思う。

「……今日は、ありがとう」

夕日を背に、音々さんはそう言った。

ボクの目を見つめて、また言葉を紡いでいく。

「こんな穏やかで優しい日は初めて……」

音々さんの表情は穏やかで……。

「昔はずっと不安だった。親から嫌われてるんじゃないかって……」

でも、

「昔はずっと不安だった。いつか捨てられるんじゃないかって……」

悲しそうで。

「昔はずっと不安だった。闇に呑まれてしまいそうで……」

だから、

「安心してくださいっ！　これからは、ずっとこんな日が続きますからっ」

そう、言っていた。

そんなボクに音々さんは、ホントに軽く、見逃してしまいそうなくらい短く、

「うんっ」

微笑んでくれた。

――七海家

「た、ただいまぁぁ」

家に帰ると同時に、玄関に崩れ落ちてしまった。

つ、つかれたぁ……。

というのも、音々さんは、
引っ越し先まで兄さんに送ってもらうということを、ボクの家の前に着くまで忘れていた。

そのため、ボクはわざわざ来た道を戻って、探偵事務所に行って、またここまで歩いてきたのだった。

門限は六時なんだけど、一時間くらいは遅くなっちゃったかなぁ？

うぅぅぅ……。
怒られるかもっ――

「さくちゃぁぁん！」

――ピタッ

「ふぇっ！？」

いきなり後ろから、母さんの声がして、目隠しされた。

え、えっと……？

「な、なに？」

「ふっふっふ……だーれだぁ？」

「え！？　か、かあさん？」

一体どうしたんだろう？

いつもなら、門限に三十分遅れただけで怒るのに……。

このテンションはおかしいっ。

「ふっふっふ……ちがいまーす！　正解わぁ……」

目隠しが外され、ボクは、条件反射のように後ろを振り向いた。

そこには、

「私でした」

「……」

さっきまで一緒にいたボクの恋人、

「正解はぁ……音々ちゃんでしたぁぁぁ！！」

音々さんがいた。

……って、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？

「な、なな、なんで、ねねしゃん！？」

「なんでって、新しい家族？」

「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

えっ！？　新しい家族！？
えっ！？　どういうこと！？
えっ！？　もしかして、ボク結婚した！？

「戸籍上は居候です」

「いいのっ！　それに音々ちゃんはさくちゃんの彼女さんなんでしょ？」

「はい」

「なら、未来の家族じゃないっ！」

未だに混乱するボクを尻目に、二人は勝手に話を進めていく。

「って、ちょっと待ってっ！　つ、つまり、どういうことなの！？」

「つまり」

混乱するボクを優しく諭すように、音々さんは言った。

「これからお世話になります」

こうして、ボクと彼女・七海音々さんとの同棲生活が始まったのだった。

……親付きの。

番外編　2人の休日／他人のデートを尾行すると大概こうなるのがオチ（後書き

と、こんな感じで
番外編終了です。

いかがでしたでしょうか？

ちょっと展開が早すぎましたね（「▽｀；）

ま、番外編なんで
大目に見て頂けると……。

番外編は、今後も区切りのいい所で挟みたいと思っとります！

できれば、お付き合いくださいｍ（＿）ｍ

えー
次は、設定を挟んで
新章に入りたいと思います！

三連休中には
アップしたいなぁ……（汗）

では、また！

設定・3（前書き）

設定です

設定・3

登場人物

七海音々（ななみねね）

１８歳
長く伸ばした黒髪と何者にも冷静沈着に接する少女
元はエンタープライズの社員兼幹部で『N』と呼ばれていた
『ナイト』メモリの力で別人格を植え付けられ、その人格が仕事を行っていた
白石龍平に拾われた恩を返すために働いていたが、白石の本性と咲也の愛を知って、『ナイト』メモリを手放して組織を抜けた
現在は七海家に居候として住んでいる

七海咲也とは恋人関係

七海麻衣（ななみまい）

永遠の１７歳（自称）
ほんわか笑顔が素敵な咲也の母親

咲也を施設から引き取った人物

咲也を『さくちゃん』と呼ぶ。

最近の趣味は、咲也を女装させること

森下秋里（もりしたあきさと）

１８歳
空野叶の幼馴染み
水舞高校生徒会副会長

前髪が長くて目が隠れている

性格は若干ものぐさだが、お人好しのお節介
その性格のために、後輩の恋を後押しし、見事に成就させたこともある

幼い頃から母親の手伝いをしていたこともあり、家事のスキルは一人前

幼馴染みの叶に恋心を抱いている

周りから見ると、それが一目瞭然なのだが、叶にはまったく気付いてもらえない

スペックは主人公だが、報われない悲しい男

葉崎雄介（はざきゆうすけ）

17歳

水舞高校生徒会書記

いつも笑顔を崩さない爽やか系のイケメン

成績優秀・スポーツ万能・容姿端麗と三拍子揃った完璧イケメン

秋里に自分の恋を応援してもらったことから、秋里を慕っている

また、中々発展しない叶と秋里の仲を進展させようとしている

好きなものは、彼女の弁当

メモリ設定

『クローン』：C

複製の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

メモリを使用しても、ドーパント体にならないのが特徴

本作では、金堂亜美真美姉妹の母親が五年に渡って使用し続け、亡くなった亜美真美のクローンを存在させていた
ファントムによってメモリブレイクされた後、白石の襲撃に遭うも無事に助け出された

『ナイト』：N

夜の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、黒い鱗のようなものに覆われた姿になる
目や鼻といった顔のパーツはなく、体から黒い靄を発生させている

本作では、白石音々が使用した
メモリの使用に伴い、別人格を植え付ける特殊なメモリであり、音

々がドーパント体になると、この別人格に体の支配権が移る
メモリブレイクはされず、七海咲也の能力で純化された
その際に別人格も消失した

『オペ』：Ｏ

手術の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、手術服をきた医者のような姿になる

本作では、白石龍平が使用した
能力は区切られた部屋内の物や人を硬度やリーチに関係なく切ることができる
限定的な能力だが、『ルーム』メモリとの相性がよく、白石は愛用していた

白石との適合率・９７％

『ライトニング』：Ｌ

雷の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、雷を纏った馬頭鬼のような姿になる
また、雷自体になることも可能

本作では、白石龍平が使用した
基本体がオペのために、能力のみが追付した

『グラビティー』：G

重力の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、ゴツゴツした岩のような体をして胸に大きな
黒真珠のようなものがついた姿になる

対象にかかる重力を操ることができる

本作では、白石龍平が使用した
基本体がオペのために、能力のみが追付した

『ルーム』：R

部屋の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

メモリを使用しても、ドーパント体にならない
自由自在に部屋を作り出すことが出来る

本作では、白石龍平が使用した
基本体がオペのために、能力のみが追付した

『ユニオン』：U

結合の記憶を引き出すメモリ
パラサイトガイアメモリの一種

ドーパントになると、右手と左手がそれぞれ磁石のS極N極のような形になる

このメモリ単体では、あまり意味をなさないが、メモリの再生や複数のメモリを使用しても負荷がかからないなどの作用がある

本作では、白石龍平が使用した
基本体がオペのために、能力のみが追付した

『ナイト』：K

騎士の記憶を引き出すメモリ

元々は、『ナイト』（N）だったが、七海咲也の能力で純化され、記憶自体が変化を起こした

ガイアメモリの能力を無力化する力を秘めているが、使用者の能力によって、力の質が変わる特殊なメモリである

設定・3（後書き）

次回から
新章開始です

申し訳ありませんが
更新日は未定です（汗）

では、また！

第三十一話　Dな思惑／倒すべき敵（前書き）

アップしました！
新章スタートです！！

だがっ！
……グダグダだなぁ。

と、とにかくどうぞ！

第三十一話　Dな思惑／倒すべき敵

――？？？

「はぁ……はっ…」

『……』

「……に、にげろ」

「や、やだよ！　置いてくなんてっ、やだっ」

「言うこと……ゴホッ、はぁ……き、け」

「いやだ……やだ」

『……』

「いいからっ、いけぇぇぇぇぇ！！」

――鳴海探偵事務所水都支店・海斗視点

「はぁっ……はぁ……」

意識が戻ってきたと同時に、飛び起きる。

周りを見渡すと、いつもの探偵事務所。

つまり、今のは……

「……夢か」

夢だと理解した瞬間、身体から力が抜けた。

背中に柔らかい布の感触。

どうやらソファに座ったまま眠ってしまったようだ。

それにしても、あの夢は懐かしかった。

できれば、見たくはなかったものだけど……。

「やっぱり、近付いたから……かな」

『あの人』の仇に。

とりあえず一旦落ち着こう。

紅茶でも淹れて――

「こんにちは、海斗さん」

「兄さん、きたよ？」

「……」

「おう、海斗。なんで俺も呼ばれたんだ？　面倒なんだが……」

紅茶を淹れ始めると、小春ちゃんとさくや、音々ちゃんに源さんが、事務所に入ってきた。

午後四時。

時間通りだね。

「いらっしゃい、紅茶飲むかい？」

――小春視点

「んで、海斗。俺たちに話ってなんだ？」

海斗さんが淹れてくれたお茶を飲んでいる最中に、源一郎さんがそう切り出した。

「あ、ボクも思ったよ。なにかあるの？　ねねさんも呼ぶなんて……」

源一郎さんに便乗するように、七海くんもそう言う。

確かにそうだ。

探偵としての仕事の話なら
私たち、探偵事務所のメンバーと源一郎さんを呼べば事足りるけど……。

「……」

チラリと音々さんのことを見ると、相変わらずのクールな表情。

うーん……。

音々さんの表情からは、わかりませんね。

やっぱり海斗さんの話を待ちましょうか。

「ふぅ……」

海斗さんは、一息つくと静かに紅茶のカップを置いた。

そして、音々さんの方に一度目を向けてから、私と七海くん、源一郎さんに向き直り話し始めた。

「音々ちゃんがガイアメモリ関連の企業に勤めていたのは、前に話したよね？」

「う、うん」

「ああ、なんか言ってたなぁ」

「……その、話ですか？」

コクリと首が縦に振られる。

「音々ちゃんから聞いた話によると、その企業はかなり大きな会社みたいでね。
今、水都に流通してるパラサイトガイアメモリのほとんどを製造してるらしい」

「！？　それじゃあ、その会社が……」

「うん、すべての元凶だね」

すべての元凶……。

風都では、『ミュージアム』という組織がガイアメモリ犯罪の元凶だった。

その『ミュージアム』から風都を救うために、仮面ライダーが組織を壊滅させた。

なら、水都は……。

「僕は、その組織を壊滅させようと思う」

やっぱり。
そうなんですね。

「根源を絶たなければ、水都はいつまでもガイアメモリに囚われ続ける」

そんなのは嫌だろう？と、海斗さんは言った。

その通りだ。

風都にいた頃も水都に来てからも、ガイアメモリに翻弄された人たちを数多く見てきた。

力に魅せられた人。
権力を掴もうとした人。
復讐をしようとした人。

中には、人を殺めてしまった人もいる。

だけど、ガイアメモリに関わらなければ、そんな悲劇は起こらなかったかもしれないんだ。

ならば、皆被害者だ。

ガイアメモリという悪魔の道具に人生を狂わされた被害者だ。

だから、仮面ライダーは戦う。

街を守るために……。

街の人たちを守るために……。

「だから、僕には関わらない方がいい」

唐突に海斗さんはそう言った。

「えっ!?　にい、さん?」

「……」

そういう、ことですか。
今日、私たちを集めたのは……。

「敵は巨大だ。その敵を壊そうとすれば、必ず危険が伴う」

だから、私たちを巻き込みたくない、と。

海斗さんらしい考え。

でも、

「……嫌です」

応じる訳にはいかない。

「小春ちゃん……」

だって、それに応じたら、海斗さんは一人で戦うことになる。

それは絶対ダメだ。

いや、嫌だ。

「一緒に戦います」

私に何が出来るかはわからない。

だけど……。

「一緒に、戦いたいんです……」

「……」

海斗さんも、誰も口を開かない。

沈黙。

空気が重くなっても、これは譲れない。

「……はぁ」

不意にため息が聞こえた。

その主は……海斗さん。

「そういうと、思ったよ」

若干呆れたような、諦めたような口調でそう言う。

「……えっと、それじゃあ……」

「うん、一緒に戦うよ」

海斗さんが手を差し伸べてくる。

「よろしく、小春ちゃん」

「はいっ！」

私はその手を掴み、握手をした。

一緒に戦う決意をしながら……。

「俺たちもいるんだが……？」

「え、えっと……ボク、一応仮面ライダーなんだけど……」

「……今回は」

「な、なに？　ねねさん」

「今回は、空気回」

――エンタープライズ・社長室

「白石はどうした？」

天城がガイアメモリを弄りながら、宮内に訪ねた。

「メモリをブレイクされ、今は警察にいるようです」

「捕まったか。……この場合、どうした方がいいだろうなぁ？」

薄ら笑いを浮かべながら、そう質問をする天城。

彼には、宮内がどう答えるかも分かっていた。

「はい、情報が漏れるのを避けるために、始末すべきかと……」

その答えを聞いて、天城は楽しそうに笑い出した。

「ははははっ、だよなぁ！　なら、頼むぜ、宮内ぃ」

「はい、わかりました」

一つ御辞儀をして、社長室を出ようとした。

そんな宮内を、

「おい、宮内」

天城が呼び止めた。

「……なんでしょうか」

「なぁ、計画をそろそろ進行すべきじゃねぇかぁ？」

「……」

天城の言葉に、宮内は少しの間考え、答えた。

「そうですね、頃合いかもしれません」

「探しておきましょう……『X』を……」

第三十一話　Dな思惑／倒すべき敵（後書き）

というわけで、始まりました！
新章です！

まぁ、前書きにも書いた通り、若干グダグダな気もしますが……。

今回のは、K編までの補足的な意味も含まれていますので、ご容赦ください（汗）

D編はあまり期待しないで読んでくださいね（「▽｀；）

次回更新は、三連休のどれか。

では、また！

第三十二話　Dな思惑／戦いに備えよ（前書き）

なんだかんだで
三連休最終日に更新です。

お待たせしてすみません。

それでは、どうぞ！

第三十二話　Dな思惑／戦いに備えよ

――水舞スタジアム

水都にあるとあるスタジアム。

そこに、四人の人影があった。

「じゃあ、準備はいいかな、さくや？」

「う、うん……」

ピッチに出ていた海斗が、同じくピッチに出ていたもう一人の人物、咲也に尋ねた。

咲也はその問いかけに自信なさげに答える。

「……大丈夫でしょうか」

「……おそらく」

そんな二人を心配そうに見守る小春と音々。

二人が心配そうなのも無理はない。

なぜなら、海斗たちが今からしようとしているのは、サッカーなどではない。

今からしようとしていること、それは――。

「始めようか」

『ファントム』！！

「い、いくよ、兄さんっ」

『ナイト』！！

「「変身っ！！」」

『ファントム』！！

『ナイト』！！

ガイアウィスパーが四人しかいないスタジアムに鳴り響く。

そして、海斗と咲也をそれぞれ白い霧と銀の鎧がまとわりつき――

――姿が変わった。

「……それじゃあ、お手合わせ願おうか。マキシマムの使用はなし、いいね？」

「うん」

仮面ライダーになった二人が対峙する。

念のために言っておくが、仲間割れではない。

ナイトの力を測るための模擬戦をするのだ。

ファントムになった海斗は、二、三度屈伸をすると、小春に声を掛けた。

「小春ちゃん！」

「はいっ」

「開始の合図、よろしくね」

「わかりました！」

小春の返事を聞いて、再びナイトの方に向き直る。

「……」

「……」

そして……、

「開始っ！」

戦いの合図。

「行くよっ」

『ジョーカー』！！

先に仕掛けたのは、ファントム。

フォームを変え、駆け出した。

「はぁぁぁぁ！」

「あっ！？」

いきなりの攻撃に反応が遅れるナイト。
急いで盾を構えようとするが……

――ガンッ！

「っ！？」

肉体を強化したファントムの拳がナイトの腹部を捉えた。

「くぅぅ……」

ナイトは、よろめきながら、数歩後ずさってしまう。

「まだまだっ！」

『ヒート』！！

追い討ちをかけるように、ファントムはナイトに詰め寄り、炎を纏った足で上段蹴りを繰り出した。

「らぁぁぁっ！」

それを――

「くうっ！」

――ガンッ！！

今度はかろうじて、盾で防ぐ。

「なかなかいい反応だね。……でもっ！」

ファントムは足に力を込める。

止められてなお、力を込めたのには理由がある。

さくやは力がない。

つまり、変身したとしても自分の方が力は上。

なら、押しきれる。

そう考えたからだ。

だが――

「ま、まけないっ！」

――トクン

ナイトが呟いた瞬間、それに呼応するかのように、ファントムの耳にメモリの鼓動が聞こえてきた。

同時に、

――シュウウ……。

「えっ……！？」

ファントムの足を纏っていた炎が消えた。

「っ」

その光景を目にしたファントムは、すぐに逆の足で盾を蹴り、その勢いを使って、ナイトとの距離を空けた。

「なるほどね……」

「えっと……」

突然のことで、理解できなかったようで、ナイトは自分の盾とファントムを交互に見て、しきりに首を傾げていた。

そんなナイトと対照的に、もう一人の仮面ライダーは事態を正確に理解していた。

「……ガイアメモリの無力化か」

そう呟くファントム。

そう、まさにその通りで、ファントムの炎を消したのは、『ナイト』の特性であるメモリの無力化である。

「えっと……？」

未だに何が起こったのか理解できていないナイト。

ならば、と、ファントムは……。

『サイクロン』！！

フォームを変えた。

途端に、風が巻き起こる。

「……うっ！？」

「いくよ！」

吹き荒れる突風に、飛ばされまいと必死に耐えるナイトの姿を見たファントムは攻勢に出た。

自らの起こした風に乗って加速する。

『サイクロン』のマキシマムドライブの劣化版の攻撃だ。

「はぁぁぁぁぁ！！」

劣化版とはいえ、加速で速度は十分。
速度と威力は比例する。

ならば、今のナイトの力では、盾で受けても防ぎきれない。
そう判断したファントムは、そのままキックの体勢に入る。

――が、

「え、えい！」

ナイトが剣を振る。

パニックになり、闇雲に振っただけのはずだったが、その一太刀は暴風を消し去っていた。

「……ふへっ？」

思いもよらない現象に、間抜けな声をあげてしまったナイト。

この能力もオペドーパント戦で、重力を無力化した力である。

「くっ！？」

「……はっ！」

少し呆けていたナイトだったが、ファントムの声で我に返った。

偶然で起きたことだが、ファントムを倒すなら、今。

そう考えたナイトは、一歩踏み出す。

「に、にいさん！　覚悟ぉぉ！」

剣を振りかざす。

予想していなかった勝利を掴むために……。

――ブンッ！

「……って、あれ……？」

風を切る音で気づいた。

ファントムが、

「い、いない……？」

目の前には空気しかない。

つまり、

「に、にいさんが空気になった！？」

――カチャッ

「いや、そんな訳ないでしょ……」

テンぱったナイトの後頭部に、銃口が突きつけられた。

ナイトは、ゆっくりと後ろを振りかえる。

そこには、

「……に、にいさん……」

「やぁ、さくや」

トリガーマグナムを構えたファントムの姿があった。

――七海家・咲也視点

お風呂からあがって、ベットに飛び込む。

お風呂は気持ちよかったし、ベットはふかふかだ。

だけど、

「はぁ……」

ため息が出てしまう。

思い出すのは、兄さんとの模擬戦のこと。

今日の模擬戦を思い返す。

結局、今日は兄さんには勝てなかった。

兄さんは『サイクロン』を無効にするのを、完全に読んでいた。
風に乗って攻撃をしてきたのもフェイクで、最初から後ろに回り込むのが狙いだったって言ってた。

「やっぱり強いなぁ、兄さん……」

そう思う。

ボクには、ガイアメモリの無力化が使えるけど、全然使いこなせなかったし……。

「うぅぅ……」

情けないな。
ボク、こんな弱くて、仮面ライダーできるかなぁ……。

「……気にしないで」

「……ふえっ!?」

突然、耳元で聞こえた声に、ベットから飛び退く。
その声の主は、ボクのベットに上に正座していた。

「ね、ねにぇしゃん……」

「もはや、原形がない」

「うぅぅ、ごめんなさい……」

声の主、音々さんに、噛みすぎて突っ込まれた。
確かに、自分でも何を言ってるか分からないよ……。

「負けても、いい」

ボクの心の内がわかっているかのように、音々さんはそう言う。

「今は、まだ始めたばかり……だから、大丈夫」

「……ねねさん……」

優しい言葉。

音々さんは、落ち込んでいたボクの心を癒してくれた。

「……よしよし」

――なでなで……。

……って！

「わぁぁ！？」

「！」

いつのまにか頭を撫でられていたっ！

は、はずかしいっ！！

「ねねしゃん！　そ、それはしゃすがにっ……」

「……だめ……？」

「う、う……」

相変わらずの無表情だけど、上目遣いでボクを見てくる音々さんに……、

「……問題、ないです……」

だめなんて、言えるわけないでしゅ……。

――エンタープライズ・会議室

――カッ、カッ

――カッ、カッ

「……来ましたか」

扉の向こうから聞こえる二つの足音。

それを聞いた宮内は、いつもの冷たい口調でそう呟いた。

――コンコン

「……どうぞ」

宮内がそう言うと、扉が開き、二人の人物が部屋に入ってきた。

「よう、久し振りだな！」

一人は、大男。

裕に二メートルはあろう巨体の大男は、体格に合った口調で宮内に挨拶をした。

「こんにちは、宮内さん」

もう一人は、まるで子供のような男。

一見、本当に子供かと思ってしまうほど体は小さいが、見た目と合致しない口調と声の低さで、男が男の子でないことが分かる。

「お久しぶりです。『W』に『I』」

宮内は礼儀的な口調で挨拶を返す。

「かぁっ、あんたはかわんねぇな」

宮内の言葉を受けて、『W』と呼ばれた大男が呆れ気味にそう言った。

「……」

「……宮内さん、今回はどんな指令でしょうか？」

黙る宮内に、『I』と呼ばれた男が質問をする。

「元幹部・白石龍平の殺害」

淡々とした口調。

本当に淡々とした、何の感情もこもっていない言葉が宮内の口から出た。

その指令に『W』と『I』の二人は、何を言うでもなくただ頷くと、部屋を出ていった。

第三十二話　Dな思惑／戦いに備えよ（後書き）

こんな感じの
D編二話でした。

うーむ
探偵事務所依頼来ないな……。
というか、ただ働き多いなぁ。

まぁ、いいか！

次回は土曜日に更新です。

あぁ、学校が嫌だ（「▽｀；）

では、また！

第三十三話　Ｄな思惑／執行する裁き（前書き）

おまたせしました
Ｄ編完結話です！

どうぞ！

第三十三話　Dな思惑／執行する裁き

――鳴海探偵事務所水都支店・海斗視点

さくやとの模擬戦が終わったすぐ後のこと。

音々ちゃんと二人で帰っていったさくやを見送り、僕は探偵事務所に戻ってきていた。

そして、現在、

「大人げないですよ……」

小春ちゃんからの非難を浴びている。

小春ちゃんは、仮面ライダーになったばかりのさくやに対して、本気で行ったことに呆れていた。

やりすぎだと。

「そうは言っても、メモリの性能では『ナイト』の方が格段に上だからね」

「……へー、ソウナンデスカァ」

「いや、そんな疑いの眼差しで僕を見ないでよ……」

女の子からじと目で見られるのは、精神的にきついものがある。

それを解消するために、一応説明をした

『ナイト』の性能が高いのは事実であること。

下手をしていたら負けていたこと。

そして、最後のこと。

「最後って……七海くんの後ろに回った時ですか？」

「そうだよ、あの時」

「……それで、大人げなかったあの時がどうかしたんですか？」

「……はぁ」

どうやら小春ちゃんに、今回のことで、相当呆れられてしまったみたいだ。

……今に始まったことじゃないような気もするけど……。

とにかく、今は弁明だ。

小春ちゃんに納得してもらうためには……、

「実は、あの時ね、気がついたらさくやの後ろにいたんだよ」

「……」

……あれ？

おかしい。

反応が返ってこない。

「……小春ちゃん？」

「……」

「小春、ちゃん……？」

「……」

「小春ちゃん！？」

「……海斗さん」

何回目かの呼び掛けに、小春ちゃんはやっと反応してくれた。

「何かな？」

笑顔で返事をする。

すると、

「いや……もういいです。ちょっと……疲れました」

「え……えっと？」

何やら物悲しげな表情で、そう言う小春ちゃん。

一体、なぜ……？

「そうですね、その大人げなっ……子供の心を忘れないのは、大事だと思いますよ？　例え、初心者の自分の弟をボコボコにしたとしても……」

「……」

うん、どうやら小春ちゃんの心の中で、僕の評価は著しい低下を起こしてしまったようだ。

「じゃあ、私は帰りますね」

「あ、送って――」

「結構です」

「……」

――バタンッ

音を立てて、事務所のドアが閉まる。

「……はぁ」

なんだか僕、情けなくなってきてるような。

……ま、でも、

「平和だからいいか……」

そう思う。

これからは、敵の根源との戦いが始まるはずだ。

なら、今は、

この平和を噛みしめていたい。

あ、でも、

「最後のが無意識なのは、本当なんだけどなぁ……」

――水都署・取調室

白石龍平は取調室にいた。

白石がナイトに敗れ、警察に捕まった日から数日が経っていた。

しかし、白石は法廷に行くでも、刑務所に行くでもなくここにいる。

それは、白石がガイアメモリ流通組織と深い繋がりがあると、警察側が確信しているからであった。

少しでも真実に近づくため。
水都から危険を取り除くため。

そのために、警察は白石を限界まで、ここに縛り付けることにした。

……しかし、

「……」

白石は何も話さない。

「ちっ、埒があかない……」

担当していた刑事も取り調べが進まないことに苛立っていた。

そんな時、

「よう」

不意に聞こえた男の声。

その声に、白石は顔をあげた。

白石には、その男に見覚えがあった。

「あ、加納さん」

取り調べを担当していた刑事が、男――加納源一郎に挨拶をした。

その刑事に源一郎は軽く返答して、白石をちらりと見ると、

「ちょっと席を外してもらえるか？」

刑事に退室してくれるように言った。

刑事はすぐに頷き、取調室を出ていった。

「……」

「……」

源一郎が席につくと、二人は机を挟んで向かい合う。

「……お前さん」

「ん？　なんだ？」

今まで黙っていた白石が、急に口を開いた。

それを聞き逃さないように、源一郎はしっかりと耳を傾ける。

「……」

少しの沈黙。

その後、

「お前さんは……誰じゃ？」

――ニヤァ

次の瞬間、源一郎の口が歪に歪んで……

「あ、加納さん……って、えっ！？」

数分後。

源一郎に伝えることがあったのを思い出した若い刑事が取調室に戻ってきた。

本来ならば、そこには、源一郎と白石がいるはずだった。

だが、

「おや、もう戻ってきてしまったんですね」

そこにいたのは、年端のいかない子供だった。

「はぁ、油断してしまいましたね……」

子供らしからぬ口調と声で、彼はそう言った。

「お、おい！　おまえっ！？」

刑事は拳銃を抜いた。

普通なら、丸腰の子供を相手に拳銃を抜くなど、警察官にあるまじき行為だ。

そう、『普通なら』

「どうやら、失敗してしまったようです」

その子供の向こうにいる白石龍平。

彼は、

「せっかく加納源一郎に白石殺害の容疑をかけようと思ったんですがね」

息絶えていた。

身体中に刺し傷があり、相当な量の血も流れている。

一目で絶命していることがわかった。

「と、とにかく動くな！」

そう言って、無線で応援を呼ぼうとした、その時、

――ドンッ

「えっ？」

後ろから何かがぶつかってきた。

目の前の子供から目を離してはいけない。

そう思っていたのだが、つい後ろを振り向いてしまった。

「なっ……！？」

振り返った先にいたのは、大男。

大男は刑事を見下ろしながら、言った。

「あーあ、可哀想にぃ！　もう少し遅かったら、助かったのになぁ……」

『ウォー』！！

――グシャッ

第三十三話　Dな思惑／執行する裁き（後書き）

いかがでしたでしょうか？

こんな感じで
新章が始まりました！

『W』と『I』の正体

海斗たちの過去

などなど

その編が明らかになったりならなかったりしていきます。

読んでくださってる方は
今後も読んでくださると
ありがたいです！

次回更新は、来週中のどれか
曖昧でごめんなさい（汗）

では、また！

第三十四話　逃亡のV／依頼人・角松郡司（前書き）

V編です。

どうぞ！

第三十四話　逃亡のV／依頼人・角松郡司

――鳴海探偵事務所水都支店

探偵事務所の床に一人の男が倒れていた。

いや、土下座をしているのだ。

倒れていると錯覚するほど深く、そして、不恰好な土下座だった。

「……」

「……うーん」

そんな光景が目の前に広がっているという事実に、小春は何も喋らずただ呆然とし、海斗は苦笑していた。

時は、日曜日の昼下がり。

世間では、仕事が休みで、家族や友達と遊びに出かける人も多いだろう。

だが、

「疑いを晴らしてくだせえ！！」

探偵業はそうもいかないのだ。

――三十分前

「小春ちゃん、紅茶いるかい？」

「あ、お願いします」

日曜日の探偵事務所には、海斗と小春の姿があった。

学校が休みということもあり、小春は海斗が仕事をしているか、確認しに来たのだが……。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます。……ふぅ」

すっかり和んでしまっていた。

「……って！」

「どうかした？」

「今日は紅茶を飲むためにここに来たんじゃありませんっ！」

笑顔で質問してくる海斗の姿に、小春は本来の目的を思い出した。

「仕事の状況です！　今月、依頼は何件きたんですか！」

が、

「……」

海斗は何も答えない。

目を反らしたままである。

「……まさか……」

「……ははは」

一層苦笑する海斗。

そう。

実は今月、海斗は一件の依頼もこなせていなかった。

いや、正確には『ナイト』探しの一件のみ。

というのも、今月はナイト探しやオペとの戦い、模擬戦など、色々なことがあり、事務所こそ開けていたものの、依頼を受けている暇はなかったのだ。

「……つまり……」

言葉は続かなかった。

あえて、である。

気休めにしかならない現実逃避だが、しないよりはマシということだ。

だが、

「うん……赤字、だね」

「うっ……」

核心をつく海斗。

これには、小春も顔を歪めるしかなかった。

ちょうどその時、

――バタンッ

探偵事務所の扉が大きな音を立てて開いた。

二人がそちらに顔を向けると、そこにいたのは一人の男性。

短く切り揃えられた髪に、黒のスーツ。

これだけならば、普通の会社員にも見えるのだが、彼が纏う空気は普通ではなかった。

なんというか危ない感じの雰囲気。

つまり、どこかの組関係の方。

彼は、事務所の中を挙動不審気味に見渡し、

「ここ、探偵事務所でいいんですよね！？」

切羽詰まった声で、海斗たちにそう問いかけた。

その問いに、海斗は頷きだけで答える。

すると、男性は突然床に膝をつき、そのまま頭を下げた。そして……

「片桐さんの、片桐さんの疑いを晴らしてくだせぇ！！」

土下座をしている現在に至る、というわけだ。

探偵事務所を訪れた男性の名前は、角松郡司（かどまつぐんじ）。

二人が感じたように、草組のヤクザである。

草組は、暴力沙汰こそ起こすものの殺人や薬などには、絶対に手を出さないという比較的、質のいい組であった。

しかし、先代の組長が亡くなった時を境に、今までの方針を否定する一派が現れた。

その一派のリーダー格は、組の中でなかなかに発言力があった幹部で、一時期は組の半分以上がその思想に染まってしまった。

だが、副組長の交渉によって、今では草組の九割が先代の遺志を尊重する側になったのだ。

その副組長が、今回の依頼人・角松が慕う片桐竜悟（かたぎりりゅうご）である。

そして、

その片桐竜悟にかかった幹部殺しの疑いを晴らす。

それが今回の依頼だった。

「それで、殺された幹部っていうのは？」

角松が所属している組のことまで聞いた海斗がそう質問した。

「……へい、向こうの頭だった男でさぁ」

「向こうの……先代の考えに否定してた人だね」

確認のためにそう聞いた海斗に、角松はしっかりと頷いた。

それを見て、海斗は少しだけ考える。

この依頼を受けるべきか、と。

普通ならば財政難の今、男からの依頼だろうが何だろうが、受けるべきなんだろうが……。

「……」

「どうかしました？　海斗さん」

ちらりと、小春の方を見る。

ヤクザが関わってくる以上、かなりの危険が付きまとう。

ここは断るべきだ。

海斗の（自称）フェミニストとしての心は、そう言っている。

それを踏まえて、海斗は、

「わかりました。引き受けましょう」

角松にそう答えた。

「本当ですかぃ！？」

「はい」

「ありがとうございます！　ありがとうございます！！」

角松が海斗と小春に向かって頭を下げる。

すると、

「……海斗さん……」

「ん？　どうかした？」

その光景を見ていた海斗に小春が近づいてきて、耳元で囁いてきた。

未だ、頭を下げ続けている角松を放って、二人は小声で会話をする。

「……海斗さん、よく引き受けましたね……」

「……どうして？……」

「……いや、だって……」

そこで、小春は、コホンと一つ咳払いをすると……

「小春ちゃんが危険になるようなことは引き受けられないよ、キラッ！」

キザったらしい声でそう言って、

「って言うじゃないですか」

「……そうだろうね……ええと……それ、僕の真似？」

「はい、そうですよ」

「……なんだか……悪意を感じるんだけど、僕の気のせいかな？」

「気のせいです！」

気持ちいいくらいに言いきった小春に、海斗は少しため息をしてから、疑問に答えた。

「だって、そう言っても、小春ちゃん聞かないよね？」

「はい！」

「どうあっても関わってくる気だよね？」

「はい！！」

とてもいい返事であった。

普段の海斗ならば、その返事に苦笑を返すところだが、今回は違っ

た。

「……だと、思ってね……」

「えっ？」

にこりと小春に笑いかけると、海斗は小声の会話を止め、角松の方を向いた。

「角松さん」

「へい！　なんでしょうっ？」

「引き受ける代わりに、お願いしたいことがあります」

「この小春ちゃんが危ない目に遭わないように、警護してください」

「えっ！？」

小春が驚きの声をあげた。

だが、それだけではなかった。

「それで、依頼が終わるまでこの探偵事務所に近づけないように、それもお願いします」

「へいっ！　わかりやした！」

「そ、それって、私は今回、関わるなってことですか！？」

笑顔で頷く海斗。

さらに、

「早速、今からで」

「わかりやした！」

海斗がそう言うと、角松は元気に返事をして、小春に向き直った。

「では、行きやしょう、姐さん！」

「い、いや、姐さんっ！？　って、海斗さん！！」

「よろしくお願いしますね、角松さん！」

結局、小春は抗議の声をあげながらも、角松に連れられて行った。

「……よしっ、調査を始めようかな」

――とある路地裏・片桐竜悟視点

「どこ行きやがった！？」

「向こうじゃねぇか？」

「じゃあ、お前はあっちを探せ！」

「わかった！」

――タッタッタッ……

足音は遠ざかって行った。

だが、まだ油断は出来ない。

ここで見つかったら……終わりだ。

「……ぐっ」

だが、声が少し出てしまった。

慌てて右腕を押さえる。

――ベチャッ

嫌な音と感触だ。
さらに、鉄の臭い。
止血のために巻いたタオルは、もう赤く染まってしまっていた。

……なんでだよっ！？

心の中でそう叫ぶ。

なんで、俺がこんなことになっているんだ？

「おい、血の痕だ！」

「なに！？　追うぞ！」

「おう！」

くそっ！？
見つかったか……。

声がする方向とは、逆方向に向かって、走り出す。

頭がくらくらする。

血を流しすぎたか……。

だがっ

「……絶対に逃げ延びるっ」

第三十四話　逃亡のV／依頼人・角松郡司（後書き）

やっと探偵業務が戻ってきたっ！

本業忘れないようにしないとですね（「▽｜；）

うんうん

次回の更新は土日にでもします
実は月曜は学校あるんで……はぁ

では、また！

第三十五話　逃亡のV／逃亡者・片桐竜悟（前書き）

V編二話目です！

予告通りじゃなくて
すみませんm（＿＿）m

本編をどうぞ！

第三十五話　逃亡のV／逃亡者・片桐竜悟

――水都署・海斗視点

ヤクザが揉めている。

ならば、警察が動かないわけはないだろう。

というわけで、僕は水都署の源さんの元を訪れていた。

だが、

「今、忙しいんだよっ！！」

予想だにしていない答えが返ってきた。

サボり魔な源さんが、忙しいと言って働いている？

そんなことが……。

「あり得る！　あと海斗よぉ、そういうことは思っても言うな……」

「声に出てました？」

「あぁ……」

どうやら心の声が、言葉に出ていたようだ。

失敗だったね。

「でも、何があったんですか？」

そう質問してみる。

源さんが引っ張り出されて、仕事をしているのは、それほどに珍しいことだから。

その質問に源さんは、一つため息をついて、小声で言った。

「白石龍平が殺された」

「なっ！？」

この答えも予想外。

さっきの答えよりももっと、だ。

「どういうことですか！？」

「お、おちつけ、海斗……」

「……落ち着きました。それで……」

僕が落ち着いたのが分かったようで、源さんは話をしてくれた。

数日前、取り調べの最中に白石龍平が殺された。

死因は、全身を鋭利なもので刺されたことによる失血死。

警察署の中で、しかも、取り調べの最中であったにも関わらず、犯

人の姿を見たものはいない。

「……いない？　なぜですか？　取り調べの最中だったなら……」

「あぁ、取り調べを担当していた奴はいたんだが……そいつも、な……」

そう言って、源さんはうつむいた。

もしかしたら、殺されたのは、源さんの知り合いなのかな……。

それは、辛いだろう。

だから、か。

だから、サボリ魔がこんなに仕事に力を入れてる。

こんな源さんは初めて見た。

だから、僕は……

「……失礼しますね」

「おい、海斗？」

「仕事、頑張ってください、源さん」

「……あぁ」

仕事の邪魔にならないよう、今は退こう。

――海光大学・海斗視点

ここは、水都にある私立大学・海光大学。

今いるのは、正門。

僕はここである人を待っていた。

「ちっ」

舌打ちの音が僕の耳に入ってくる。
顔を上げると、そこには待ち人がいた。

「やぁ、カイくん」

「なんでこんな所まで来やがった、海斗……」

――とある高架下

「大学まで押しかけて、何の用だ？　あ？」

いつも通りの不快感を露わにした口調で、そう言うカイくん。
まぁ、もうこの調子にも慣れたけどね。

だから、気にしないで話を切り出した。

「いつも通り情報が欲しいんだよ」

「……本当にいつも通りだな」

面倒そうな顔をして、カイくんは一つアクビをした。

これもいつも通りだね。

じゃあ、とにかく話を進めよう。

「草組、のこと」

「はぁ……よりによってヤクザ関連かよ……」

「カイくんなら最近起こった事件も知ってるよね？」

そう聞くと、カイくんは当然と言わんばかりに軽く頷いた。

「改革派の頭を、病気で死んだ組長の懐刀が殺した、つう話だろ？」

簡単にいうとそうだ。

だが、角松さんからの依頼で事件はそこまで簡単でないことが予想できる。

「容疑者である副組長は――

「片桐竜悟、だろ？」

やっぱり知ってるんだね。

なら、話は早い。

「僕は今回、その片桐さんの疑いを晴らすために動いてる」

「らしくねぇな、男からの依頼は受けないのが、お前の主義なんじゃねぇのか？」

「まぁ、そうなんだけど、そうも言ってられなくてね」

経営のためにも。
今現在、大変な思いをしているであろう小春ちゃんのためにも。

――水舞高校・小春視点

「はぁ……」

昼休み。
私は大きなため息をついた。

原因は、明確だ。

今はたぶん校舎の外で見回りをしているだろう角松さん。

彼が原因。

確かに、ヤクザが関わってくるとなると、危ないというのは分かっている。

だから、角松さんに護衛についてもらうのはありがたいんですけど……。

「……はぁ」

「どうしたのさ？」

「わっ！？」

――ガタンッ

机の下から、音もなく叶ちゃんが現れた。

突然のことに、机から飛び退いてしまう私。

し、心臓が止まるかと、思いました……。

「……か、叶ちゃん！　なんで机の下から出てきたんですか！？」

少し息を整えて、抗議をする。

だが、叶ちゃんはいつも通りどこ吹く風で、謝る兆しが全くなかった。

「はっはっは！　その方が楽しいからさっ！」

「……はぁ、そうでしたね。叶ちゃんはそういう人でした」

「そさ！　んで、なぁにため息なんてついてんのさ？」

叶ちゃんはそう言って、私の顔を覗き込んだ。

「まぁ、色々あったんですよ……」

「ふむ……ななみぃぃぃ！！」

「ひゃい！？」

「……あ、箸が……」

叶ちゃんがいきなり七海くんを大声で呼びつけた。

自分の席に座って、音々さんと一緒にお弁当を食べていた七海くんは、身体をびくっと弾ませた。

「ゴホッ、ゴホ……っ」

「……大丈夫？」

七海くんは、どうやらむせてしまったようで、それを音々さんが背中を優しく叩きながら、心配している。

……ラブラブですねぇ。

「イチャイチャしてないで、はよ来ぉぉぉい！」

叶ちゃんの雄叫びに、顔を真っ赤にしながら、七海くんはこちらに歩いてきた。

「イチャイチャしてないですっ！！」

「……ラブラブしてた」

「ね、ねねしゃんっ！？」

「違うの？」

「うぅぅ……ち、ちがいません」

「うん、大好き」

「ふぇっ！？　ボボ、ボクもでしゅっ……あ……」

目の前で繰り広げられる夫婦漫才。

……なんだ、この幸せバカップル……。

「い、いや……そのっ！？」

自らの言ったことの絶大な恥ずかしさに気づいたようで、七海くんが慌て始める。

……が、

「んなことはどうでもいい！！」

叶ちゃんがどうでもいいと一蹴してしまった。

「んでな、重要なのは……こはるの悩みなのさ！」

「……悩み？」

一蹴されたのも気にせずに音々さんがそう聞いてきた。

まったく、叶ちゃんのせいで七海くんたちまで巻き込んでしまいま

した。

……はぁ、しょうがないですね。

「……実は」

「なるほろ、つまりは探偵事務所に近づけないから、探偵くんが心配だと？」

「そんなこと言ってませんっ！！」

今の現状をそのまま話した結果、叶ちゃんに歪曲されてしまった。

なので、即座に訂正する。

「私が心配してるのは、事務所の経営と評判です！」

「嘘つけっ、ホントは探偵くんが心配なくせにぃ」

「いやいや、それはないです」

「兄さん、強いから、ですよね！」

「ほう？　つまり、小春は探偵くんを信用してるから心配はしてない、と」

「ぐむっ、ああ言えばこう言いますね……」

……叶ちゃんはどうしても私と海斗さんを結びつけたいようだった。

……。

まぁ、確かに海斗さん、見た目だけはかっこいいですし、私も彼氏いませんけど……。

って！

いけないいけないっ！？

どうにも最近、七海くんたちを見てると、焦りが。

大丈夫。

私、まだ高校生っ！

「――――すればいい」

「おっ、いいさね、そのアイディア！　んじゃ、早速……秋里ぉぉ！！」

色々考えているうちに、なにやら話が進んでいた。

叶ちゃんはクラスの男の子の名を呼びながら走り去り、音々さんは七海くんを連れてどこかに行ってしまった。

……一体、何をする気でしょうか……。

――放課後・鳴海探偵事務所水都支店・小春視点

「よっしゃ！　成功さね！！」

「……計算通り」

「え、えっ！？　あ、あの人はいいんですかぁ！？」

放課後のこと。

私たちは、探偵事務所の前にいた。

警護という名の見張りはいない。

というのも、

「さすが、音々さっ！　名付けて『偽者を追え大作戦』！　あんな策はそんじょそこらの人間じゃ考え付きすらしない」

「……叶も幼馴染みを囮にする判断はさすが」

「「……」」

叶ちゃんと音々さんがお互いをほめあっているのを見て、顔を見合せて苦笑いをする私と七海くん。

ここまでの経緯を少し話すと、

「角松さん、あそこにいるスーツの人、片桐さんじゃありませんか？」

「えっ！？　ありゃあ……」

――ダッッ

「逃げちゃいましたよ！　私のことはいいから追ってください！」

「へ、へい、ありがとうございますっ！」

――ダッッ

「片桐さん！　待ってくだせぇ！！」

「ひぃぃぃぃ」

……と、こんな感じで背格好の似た男子クラスメイトを片桐さんに仕立てあげ、角松さんに追わせたのでした。

「……可哀想に」

「ん？　なんか言ったさ？」

「いえ、言ってませんよ……」

「ん、なら入るさっ！」

――ガチャッ

「お邪魔し――

扉を開けて――

「……！？」

「な、なんさっ！？」

――絶句してしまった。

「ここ、これっ…」

部屋中に開いた大きな穴

そして、床についている赤い染み。

つまり、目の前に広がっているのは、ボロボロの鳴海探偵事務所。

その光景に、無意識に声が出ていた。

「なんですか、これ」

第三十五話　逃亡のV／逃亡者・片桐竜悟（後書き）

というわけでした。
いかがでしたか？

若干スランプ気味な気が……（「▽ｌ；）

いや、気のせいだ！
そう思いたい！！

気づいた人もいるかもしれませんが
今回、サブタイトル関係ねぇぇ！ｗｗ

はぁ、気にしないでくださいね……。

次回更新ですが、正直に言うと未定です。

というのも学祭がありまして、それように文を書く必要があるんです（「▽ｌ；）

……間に合うかなぁ。

という事情のため、ご容赦ください。

では、また！

第三十六話　逃亡のV／容疑者・？？？？（前書き）

更新しました。

今回はいつもの三倍になってしまいましたが……（汗）

それでは、どうぞ！

第三十六話　逃亡のV／容疑者・？？？？

――草組

小春たちが、悲惨な状態の探偵事務所を訪れる半日ほど前の話だ。

海斗は、草組に来ていた。

カイから情報を貰ったといっても、彼の、片桐竜悟の詳しい足取りがわからないならば、疑惑の晴らしようもない。

ならば……

「私立探偵？」

「はい、水町と言います」

片桐竜悟に詳しい、草組と直接手を組もう。

そんな動機で海斗は、動いていた。

「片桐の件……角松が話したんか？」

「はい、角松さんから依頼を受けました。片桐さんを探してほしい、と」

疑いを晴らしてほしい。

そう言われたことを、あえて教えない海斗。

今、ここに漂う空気はかなり刺々しい。組の大半が片桐竜悟に疑念や憤りを持っていることを、海斗は感じ取っていたのだ。

「はぁ……角松、恥を晒しおって」

重々しくため息をつく男。

だが、組内部の者からの依頼だ、ということもあり、最終的には、

「しゃあない。じゃあ、片桐を見つけるのに協力していただきましょか」

渋々ながらも、協力を受け入れたのだった。

組長、副組長が不在の今、草組を仕切っているのは、海斗が組で話をした男、名前を柏木という。

海斗は、その後の数時間、柏木の指示で動いていた草組の組員たちと行動を共にし、情報を提供し、提供されて、一時調査を終えた。

そして、

――鳴海探偵事務所水都支店

「ふぅ……」

海斗は、自分で淹れた紅茶を飲んで、一息ついた。

探偵としてのキャリアを積んでいるとは言え、やはりヤクザが相手だと気が抜けない。

そのこともあり、今日は一段と疲れた。

しかし、

「大体見えた、ね」

今回、草組を訪問したことで真相が見え始めた。

草組に入った時。

あの時からずっと海斗の耳には、音――鼓動が聞こえていたのだ。

聴こえた鼓動は、メモリ一つ分。

断定は出来ない。

だが、そのメモリの持ち主が幹部を殺害し、片桐竜悟に幹部殺害の

罪を擦りつけた真犯人だと推測はついた。

問題は、どうすれば片桐竜悟の冤罪を証明出来るか、ということだ。

「……証拠……自白」

海斗はソファにもたれ掛かり、思考を張り巡らせる。

いつもなら、だらしない姿を見せないようにする海斗だが（結果的には小春にだらしないと思われるわけだが）、今は自分の事務所に帰ってきたことで、海斗は気が抜けていた。

そう、

――コンコン

「はい」

――ガチャッ

「……こんにちは」

『バキューム』！！

油断していたのだ。

――現在・同場所・咲也視点

「一体、これは……」

一言も言葉が出ないボクの心を代弁するように小春さんがそう呟いた。

ホントに何が起こったのか、まったく分からない。

「……おそらく」

「「……えっ？」」

目の前の光景に呆然とするしかなかったボクと小春さんとは対照的に、音々さんはじっとその光景を見ていた。

その眼差しは、たぶん兄さんに似た眼差し。

つまり、音々さんは冷静に分析、推理していたのだ。

「おそらく、というよりほぼ確実に、これは襲撃の痕跡」

確かに少し考えればその通りだ。

普通だったら、こんなに派手に部屋に穴が空くわけないし……。

「でも、誰がこんなことをしたんですか？」

小春さんが尋ねる。

その質問の答えも、用意してあるようで、音々さんは右手の指を…

…二本立てて、

「可能性としては……一つ」

そう言った。

見ると、いつのまにか立てた指は一本だけになっていた。

……？

まぁ、いっか。

「今、水町が探している人物に関係している」

「えっと……片桐さん、でしたっけ？」

確かそんな名前だったと思うけど……。

「そう、そして、彼を追っているのは……」

「ヤクザ……さね？」

今まで何かを考えるように黙っていた叶さんが、音々さんの言葉を繋げる。

それに音々さんも頷いた。

「つまり、海斗さんは何かを掴んだために、草組に襲われたってことに……」

［ギギギギ……］

小春さんの声を遮るようなタイミングで、何かの音が聴こえた。

これは……

「あっ！？」

機械音の出どころを探して、上を見た時、思わず声をあげてしまった。

それにつられて、上を見た小春さんたちもそれを見つけたようだ。

そこにいたのは、

――？？？・片桐竜悟視点

あれから、どれだけ逃げ回っただろうか……。

執拗に追ってくる組の奴らを振り払い、今まで必死だった。

だから、気づかなかったが……

「ぐっ、意識が……」

かなり血を流したようで、少し意識が遠退き始めていた。

そんな中で思い出されるのは、俺が逃げるきっかけとなった時のこと。

あの日、俺は交渉に行ったんだった。

組の奴らの大多数を組長の遺志と同調することに成功はした。

だが、反対していた頭だったあいつは、まだ納得がいっていなかったようだった。

だから、交渉しに行った。

待っていたのは、物言わぬ姿になったあいつ。

そう、殺されていた。

化け物に……。

俺はそいつを倒そうとしたが、その化け物は死なないどころか、傷一つ負わない。

そして、俺は逃げた。

奴が俺の口を封じる気だと瞬時に理解したからだ。

そして、今の俺は、その化け物に罪を着せられ、追われる身、か。

「……馬鹿馬鹿しい」

まるでピエロかなにかだ。

――バンッ！！

「ん？」

突然、破裂音が聴こえた。

「銃声か……？」

……いや、違う。

よく耳を澄ませば、銃声より軽快な音だ。

辺りがまだ明るいからよく分からないが、あれは……

「はな、び？」

「……片桐竜悟さん、ですね」

「！？」

反射的に銃を構える。

だが、そこにいたのは、三人の子供だった。

しかも、全員女。

敵では、ない？
少なくとも、組にはいなかった顔だ。

「誰だ？　なぜ俺の名前を……」

「あっ、その……ですねっ」

「……私が」

「……は、はい」

しどろもどろになっていた一人に変わり、表情が乏しい一人が続けた。

「私たちは敵ではない。貴方を助けるよう、依頼を受けた」

「……依頼？」

「とにかくついてきて。話は移動しながら」

――河川敷

「なんだ！？　銃声か！？」

「こっちの方からだ！」

破裂音に誘われて、草組の組員が十数名、河川敷に現れた。

そして、

「お、おい、あれ！」

組員たちの視線の先。

河原に佇む一人の男。

そう、その男こそ彼らが追っていた人物。

「……」

「いたぞ！　片桐だぁ！」

銃を構えながら、土手を駆け下りてくる組員たち。

そんな状況でも片桐は動かない。

黙ったまま佇んでいた。

「……」

「撃てぇ！」

そんな彼を撃つよう組員の一人が声を上げた。

――が、

「待てや！」

その指示は、野太い声に掻き消された。

その声の主は、海斗が話を聞いた現在のトップ・柏木であった。

「……柏木」

今まで黙っていた片桐は、ボソリと呟き、柏木を睨み付けた。

「そう、怖い顔すんなや」

「何のつもりだ」

ゆっくりとした動作で土手を下りてくる柏木。

その柏木を、依然として睨んだままの片桐は、ドスの効いた声で喋る。

その声に片桐に銃を向けていた組員たちが、後ずさった。
それほどまでに、今の片桐には迫力があった。
手負いの獅子。
そんな比喩が合っているだろう。

「何のつもりは、こっちの台詞じゃ。なんで殺しをした？　お前は組長の遺志を汲んだはずだろう？」

獅子を前にしても、柏木は口調を乱さず、そう言った。
それに対して、片桐は、

「ふっ、よく言うぜ。俺を殺す気でいる奴が」

そう返す。
今まで副組長として組長を補佐してきた片桐が見れば、悪意など一目瞭然だった。

柏木の悪意、いや、殺意のベクトルは確実にこちらを向いている。
そう、感じ取っていた。

「一体、何の話をしとるんじゃ？」

「……もうばれてんだ。下手な芝居は止めとけよ」

「……」

「……」

対峙する二人のヤクザ。

一人は、武器を携えた十数名の部下を引き連れて。

もう一人は、銃で撃たれた傷痕を押さえ、満身創痍の状態で。

二人の間に流れる沈黙。

そして、それを破ったのは、

「くっくっくっ……そか、バレとるか」

柏木であった。

それは、自らの演技を認める発言だった。

「どこでバレた？」

「よく見てみろよ、てめぇの周り、改革派しかいねぇじゃねぇか」

「あー、こりゃうっかりしとったわ」

歪んだ笑顔を浮かべて、柏木が言う。

「まぁ、改革派のトップを殺ったのは、俺じゃ」

自らの犯行を認める柏木。

本来ならば、その発言は改革派の組員たちを驚かせるものだろう。

自分たちのトップを殺した人間が、今まで自分たちを仕切っていたのだから。

だが、

「「「……」」」

「なるほど、誰も何も言わないってことは、全員承知の上ってことか……」

「そういうことだ！　それじゃあ……」

『バキューム』！！

「死んでもらうとしましょか！！」

柏木は、懐から取り出した一本のガイアメモリを自らの左腕に挿した。

メモリは、そのまま柏木の体に入り込み……

『がぁぁぁぁぁぁ！！』

体の中心に、渦のような立体的な模様を持った灰色の化け物・バキュームドーパントに変身した。

『さ、お前らも渡したやつ使いや！』

「あ？」

『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』

バキュームドーパントの声に応えるように、銃を構えていた組員た

ち全員が『マスカレイド』のメモリを使った。

つまり、組員たちもドーパントと化したのだ。

『はっはっはは！　それじゃ裏切りもんの副組長さんには死んでいただいて、俺が組を貰うことにしましょ！！』

ドーパントとなった自分の部下たちに囲まれ、窮地に陥っている片桐を見て、バキュームは笑った。

だが、

「……ふぅ……」

そんな状況でも、片桐は堂々たるものであった。

『なに余裕かましとんじゃ！？　お前はここで終わり――

「終わるわけにゃいかねぇんだよ！」

バキュームが言い終わる前に、片桐が叫ぶ。

「組長は、俺みてぇなごろつきの悪ガキを拾って面倒見てくれた」

それは草組副組長としての、そして、

「俺は、恩を返さなきゃならねぇ！　だから……」

「てめぇみてぇな人殺しにゃ組は、やれねぇんだよぉぉぉ！！」

――組長の息子としての決意の叫びであった。

『うるせぇ、そんな下らないこと知るかぁ！！』

「下らなくは、ないよね」

『トリガー』！！

『なっ、なんじゃあ！？』

電子音が響いたかと思うと、ドーパントと片桐の間に何発もの銃弾が撃ち込まれた。

バキュームドーパントもマスカレイドたちも、突然の攻撃に驚き、大きく後ずさった。

沈黙が流れる。

その沈黙の中で、突然現れたその人物が話を続けた。

「拾って貰った恩は大きいんだよ。居場所をくれたんだから、ね」

少し時間が空いたことで、バキュームドーパントは我を取り戻し、

『だ、誰じゃあ!?』

銃弾が向かってきた方向を見る。

すると、そこには……

「誰って……この前も名乗ったはずですよ?」

「僕はしがない私立探偵で、ただの仮面ライダーです」

私立探偵・水町海斗、いや、仮面ライダーファントムの姿があった。

『あ、あの時の探偵!?　仮面ライダーだったんか!?』

「はい。片桐さんを調査している過程で、あなた方がガイアメモリを使って犯罪を犯したことを知りまして……では……」

ファントムはそう言ってから、少し間を置き……言い放つ。

「さぁ、断罪の時間だ」

一つ指を鳴らしてから、ドーパント達を指差すファントム。

『黙れ黙れぇ!　てめぇら、あいつも片桐も殺っちまえ!!』

それが癪に障ったようで、バキュームは、マスカレイド達に指示を出した。

その指示を聞いた直後に、マスカレイド達が動き出す。

十数名いるうちの半数は、ファントムに向かって。

もう半数は、片桐に向かって、だ。

「いくよ！」

『ジョーカー』！！

対するファントムも動く。

肉弾戦が得意なジョーカーに変わり、マスカレイドの中に入っていった。

「はぁ！」

『ぐぁっ！？』

「たあっ！」

『がぁぁ！？』

「らぁぁぁ！！」

『ぐがぁぁあ！？』

ジョーカーフォームとなったファントムの前では、量産型のドーパントなど赤子も同然。

相手にすらならない。

『くっ……全員、片桐を狙え！！』

仮面ライダーには敵わない。

そう判断したバキュームは、生身で、しかも怪我をしている片桐を狙うように命令した。

が、その考えは甘い。

仮面ライダーは、一人だけではないのだ。

「たあぁぁあぁ！！」

マスカレイドドーパント達と片桐の間に飛び込んだ白銀の鎧。

そう、仮面ライダーナイトである。

『また仮面ライダーか！？』

二人目のライダーの出現に動揺を隠せないバキューム。

そんなバキュームを尻目に、ナイトは不格好ながらもマスカレイドを斬りつけていく。

「え、えぃっ！　はあっ！」

『がぁぁ！？』

『う、くうっ……役立たず共がぁ！！』

十数人のマスカレイドドーパントがたった二人の仮面ライダーに倒されていく光景を見て、バキュームが怒りを露にした。

怒りに呼応するかのように、体の渦が蠢き出す。

さらに、バキュームがその前に空気を包み込むように、両手をかざすと、そこに見えない何かが溜まりだした。

「さくやっ！」

「えっ？」

「一旦下がって！」

「うん」

何かを感じ取ったファントムがナイトに指示をし、ナイトはそれに従い、数歩下がった。

その瞬間――

『がぁぁぁあああぁ！！』

強い衝撃がファントム達を襲った。

「あ、あれは……事務所で使った……」

呟くファントム。

彼の脳裏には、事務所で襲撃を受けた時の記憶が蘇っていた。

あの時は、ガイアウィスパーが聞こえた途端に、机の陰に隠れたので、事なきを得たが、今は……。

「くぅ……」

「おい、大丈夫か！？」

咄嗟のことだったんだろう。

ナイトは、片桐を庇ったために、衝撃をもろに受けてしまっていた。

「片桐さん、さくやを……お願いします」

それだけ言って、ファントムはバキュームドーパントと対峙する。

後ろは振り向かない。

確かに、負傷した弟分は心配だが、ここで敵から目を離せばもっと大変なことになる。

それを知っていたから。

だから、振り向かない。

『お、おぉ！　一人倒したか！　これならいけるわっ！！』

バキュームドーパントはそう言って、もう一度構える。

さっきの攻撃をするためだ。

もちろん、ファントムがそれをさせるわけがない。

『ルナ』！！

フォームをルナにし、左腕を突き出す。

幻想の記憶を纏ったファントムの左腕は、そのまま伸び、

「ふっ！」

――バキッッ

『なっ！？　ん、ごっ！？』

バキュームの顔面に直撃した。

『ぐっ……あ〝ぁぁああ〝ぁあっ！？』

「まだだよ！」

『メタル』！！

もがくバキュームに、ファントムは追い撃ちをかけるために詰め寄り、フォームをチェンジした。

メタルシャフトで足下に一振り。

『なっ……ナメるな！！』

体勢を崩しながらも、さっきよりも短く構えを取り、攻撃を放つ。

――が、

「ふっ！」

『避けおった！？』

「ネタは分かったから……ねっ」

今度は、ドーパントの鳩尾に突きを入れるファントム。

そして、ファントムはドーパントとの距離を離した。

メタルシャフトが届く距離、かつ、敵の近接攻撃の届かない距離に、だ。

片桐やバキューム・柏木たち、ヤクザ者から見ても、その動き、判断は見事言うしかなかった。

「貴方のメモリは『バキューム』……つまり、真空を生み出す記憶」

「シンクロ率は、約六十パーセント。六割ほどの力を引き出せるシンクロ率です」

「ちなみに、さっきまでの遠距離からの攻撃は、真空波といったところでしょうか」

『ぐっ』

「当たってるみたいですね？」

『なぜ、そんなことまで……』

「僕、少し変わっていまして」

そう言って、仮面の下で苦笑する海斗。

そう言うしか説明のしようがないからね。

……いや、あるかな？

「それに、僕、探偵ですから」

ふと思いついて、そんなことを言った。

が、それが悪かったようで……

『ふざけおってガキがぁぁぁあ！！』

――ドクンッ

「！？」

ファントムの耳に入ってきた音、メモリの鼓動。

それが示すものは――

「シンクロ率が……上がった！？」

『オォオォォ！！？！』

バキュームが叫ぶと同時に、ファントムの体が重くなった。

ガクンと、膝も落ち、地面に膝を着いてしまった。

「なっ……に――が、ぁ……」

（声が、出ない……いや、息が出来ない！？）

バキュームのシンクロ率が上がったことで、能力が進化したのだ。

今、ファントムの周りは真空状態。

息が出来ないのはおろか、このままでは、ファントムの体が消滅しかねない。

だが、ファントムには、打つ手がなかった。

いや、一つだけあったが、これは賭けだ。

ぶっつけ本番の賭け。

でも――

（……やるしか、ないっ！）

――咲也視点

「に、にいさ、んっ……」

手を伸ばす。
だけど、届くわけがない。
目の前で兄さんが苦しんでいるのに……。
せっかく力を手に入れたのに……。
ボクが弱いせいで、守れない？
そんなのっ、

「いや、だよっ」

音々さんを救ったこの力で、兄さんもっ！

「たす、けるっんだあ！」

――カシャッ

「えっ？」

何かが外れる音が聞こえた。
音がした所を見る。

「……メモリ、がっ」

音は、メモリがドライバーから勝手に外れた音だった。
そして、外れたメモリは、そのまま盾のスロットに……

――ガシャッ

入った。

『ナイト――マキシマムドライブ』！！！

――海斗視点

音はしない。

……当然、か。

今、僕の周りには空気がないんだから。

成功した、のかな……？

酸欠の頭で、周りを見渡す。

何も、見えないや。

『ぬっ？　なっ……ぐ、ぁあぁあぁあぁ！？』

「っあ！？　……はっ、はぁぁ……はっ……はぁ、はぁはっ…」

突然のことだった。
だが、理解した。
空気が帰ってきたのだ。

「ふ、はぁぁ……はっ、はぁ……」

息を整える。

……よし。

「どうやら、賭けに勝てたみたいだ」

少し離れた所に倒れている咲也を見る。

ありがとう、さくや。

心の中でそう呟いて、バキュームに向き直る。

『うっ……が、ぁあっ、ぐっ……なにを、し……おった、ぐっ！？』

質問には……今は答えない。

僕の予想が正しいならば、メモリを使っている間、彼は苦しみ続けるだろう。

だから、

『ファントム／メタル――マキシマムドライブ』！！

「メタルブランディング！！」

狙うは、鼓動の発信源の左肩。

「はぁぁぁぁぁ！！！」

シャフトが、左肩を、突いた。

――――パリンッ

「……ぐ、うぅぅ」

『バキューム』メモリが彼の体から排出され、砕けた。

これで……

「終わり、だね」

――事件報告

依頼人

角松郡司

依頼内容

殺人の罪を着せられた片桐竜悟の疑いを晴らす

詳細

原因は草組の派閥抗争。

亡くなった組長の遺志を継ぎ、真っ当な組のままでいこうとする片桐一派と、改革派の抗争がすべての始まり。

結局、その抗争は、副組長・片桐さんの説得で、組の大半が片桐さんを支持する形で決着がついた。

だが、その後、改革派のトップが殺され、その罪が片桐さんに掛かった。

というわけだ。

でも、本当は改革派の参謀役であった柏木とその部下達が犯人であった。

動機は、片桐さんを陥れて、組の流れを変えるため。

そして、元トップが横暴だったためらしい。

まぁ、それ以上のことは聞かなかったけど……。

結果

『バキューム』メモリを使用した柏木と『マスカレイド』を使った部下を撃破。

『バキューム』は『メタル』のマキシマムで破壊。

『マスカレイド』は『ナイト』のマキシマム時に、効力を失って、体外に排出された。

その後、彼らを片桐さんに引き渡し、角松さんに連絡を取って、依頼を完了した。

――数日後・鳴海探偵事務所水都支店・海斗視点

「はい、小春ちゃん」

「あ、ありがとうございます……」

なにやらノートに向かってにらめっこしている小春ちゃんに紅茶を出した。

「……そういえば……」

「何かな？」

不意に顔を上げた小春ちゃんが話しかけてきた。

「海斗さんが襲撃受けた時ありましたよね？」

「うん、あったね」

記憶に新しいことだし、なにより衝撃的だったから、忘れようもない。

……それがどうしたんだろう？

「いや、バットショットで動画撮って、フロッグポットに声を残す時間がよくあったなぁ、と思いまして……」

「あ、そのことかぁ」

そう、あの時、咄嗟にバットショットを飛ばし、フロッグポットにメッセージを残したのだ。

バットショットには、襲撃の様子を。
そして、フロッグポットには、小春ちゃん達に片桐さんの居場所と作戦を録音しておいた。

だから、今回は柏木を誘き出すのに成功したのだ。

それで、だ。

「あの時は必死だったからね。……それに」

「それに？　なんですか？」

「……ううん、何でもないよ」

「……？」

自分でも説明できないしね。

強いて言うなら……。

メッセージを残した後、気づいたら僕は外にいた。
まるで、瞬間移動でもしたかのように……。

――事件最中・草組

時は遡って、海斗が草組を訪れた数時間後。

「じゃあな、柏木さんよ」

「あぁ、ありがとなぁ」

一人の大男が柏木と握手をしていた。
そして、大男は踵を返し、草組の事務所から出ていった。

「お疲れ様、『W』」

「おう」

草組の事務所の外には、子供のような体をした『I』が、大男・『W』を待っていた。

「上手く打ち込めました？」

「あぁ、『マスカレイド』渡したら、簡単に信用しやがったからなぁ！」

「それはよかった。『X』探しも任されていますから、首尾よくやらなくてはいけませんからね」

そう言って、『I』は『W』に笑いかけた。

「とにかくこれでファントムの様子が見れる……」

「だな！　今から会うのが楽しみだ」

そこでニカリと少年のような笑顔を見せる『W』。

「確かに」

「ファントム……彼は『子供達』（チルドレン）かもしれないですからね……」

第三十六話　逃亡のV／容疑者・？？？？（後書き）

こんな感じの
V編最終話でした！

いかがでしたでしょうか？

補足として。

『ナイト』の盾のマキシマムは
普通は発動しません。

咲也の『守りたい心』や『助けたい心』に反応することでのみ発動します。
自動発動です。

能力は、メモリの無効化
それに伴い、ドーパントに内側からのダメージが発生します。

と、こんな感じかな？

次回更新は、またも未定
すみません（汗）

学祭の方が終わったら
なんとかなると思うので……（泣）

では、また！

第三十七話　Fの残光／ある少女と家出少年（前書き）

更新しました！

かなり間空いちゃいましたね。

ともかくどうぞ！

第三十七話　Ｆの残光／ある少女と家出少年

――？？？

「逃げろっ」

「絶対嫌だ！　あんたが死ぬのなんて嫌だ！！」

『……』

「はぁ、仕方ないな……」

「えっ？」

――ドスッ

「うっ、なんっ、で……」

「……咲也、蒼、海斗を連れて逃げるんだ！」

「……う、う゛んっ」

「父さんはっ！？」

「……はは、大丈夫。すぐに、行くよ」

「わかった。行くぞ、咲也！」

「……う、うん……行こ、兄さんっ」

「っ……と、とうさん……」

「……待たせたね」

『……』

「……追うつもり、かな？」

『いや……ここで彼らが逃げたのは、『神』の意志だ』

「追わない、と？」

『『子供達』には興味はない……だが、『彼』は別だ』

「……そっか。なら、止めるしかないね」

『……』

「『神』も『子供達』も関係ない」

「僕はあの子達の父親だ！」

「そして、君の父親だ。……止めさせてもらうよ、王芽」

『……』

――エンタープライズ本社

「……ふぅ」

眠りから醒めた天城王芽は、一つため息をついた。

懐かしい夢だ。

昔の夢。

「……くくくっ……」

不意に笑いが込み上げてくる。

あの時は楽しかった、と。

だが、同時に疑問を抱く。

確かに記憶はある。

だが、夢の中の自分が言っていた『神』とはなんだ？

『子供達』とは誰だ？

そして、『彼』とは……？

――コンコン

「ん？」

「失礼致します」

社長室の扉がノックされ、宮内が入ってきた。

天城は宮内が入ってくるのを一瞥すると、訪ねる。

「どうした？」

「『X』探しの件ですが……」

「お？　見つかったのか？」

「いえまだ。ですが、『W』と『I』に捜索を依頼致しましたので、すぐに……」

「ちっ」

不機嫌そうに舌打ちをする天城。
これでは、計画が進めることができない。
そんな思いが天城の中にはあった。

「早急に見つけ出させます。しばしお待ち下さい」

「……あぁ」

「……あ、そうそう、忘れていました」

「ん？　どうしたぁ、宮内」

と、社長室を後にしかけて、宮内はふと思い出したことがあった。
まるで台本を読むような口調で、天城にそれを伝える。

「社長、ご存知ですか？」

「『強盗ライダー』の噂を……」

――鳴海探偵事務所水都支店

ある祝日の昼下がり。
探偵事務所には、五つの人影があった。

一人目は、事務所の探偵・水町海斗。
二人目は、事務所の所長・鳴海小春。
三人目は、事務所のお手伝い・七海咲也。
四人目は、その恋人・七海音々。

そして、五人目は……

「強盗を捕まえて欲しい？」

「はい、そういうことなのですます！」

おかしな喋り方をした中学生、依頼人・天野原瑠色（あまのはらるい）であった。

瑠色の依頼はこうだ。

瑠色は、宝石商を営んでいる天野原（あまのはら）家の養子である。

そう、養子だ。

というのも、瑠色は五歳の時に両親を交通事故で亡くした。

それで、施設にいた所を天野原家の現当主、つまり、現在の父親に引き取られたという。

そして、今現在、両親と姉と兄と瑠色の五人家族で暮らしているらしい。

だが、

「強盗に、家を襲撃された……と？」

「……（コクン）」

海斗の問いに、瑠色は静かに頷いた。

そう、天野原家は宝石商をしているだけあって、かなりの資産があった。

それを家に押し入られ、狙われたのだ。

「でも、お兄ちゃんが退治してくれたのです」

「お兄さんが？」

「はいです！　お兄ちゃんはとても強いのですよ！　でも……」

急に兄の自慢に笑顔を咲かせていた瑠色の顔が曇った。

「お兄さんが……どうか、したのかい？」

「……怪我して……」

「素人が調子に乗って強盗相手なんか――」

「わ、わぁあぁぁ！？　ね、ねねね、音々さん！」

空気の読めない発言を平然とする音々の口を、咲也が手で押さえる。

「むがっ！？」

「ね、ねねさん、ちょっとあっち行ってましょうっ」

咲也は、そのまま音々を事務所の奥に引っ張っていった。

「……それでっ」

どうやら、瑠色の耳には、音々の言葉は入っていなかったらしく、話を何事もなかったかのよいに続けた。

海斗と小春も気を取り直して、聞く体勢に入った。

……のだが、

「お兄ちゃん、家出てっちゃったんです……」

「「……うん（はい）？」」

話が唐突過ぎた。

お兄ちゃんが怪我をした。→お兄ちゃんが家を出てった。

繋がりが無さすぎである。

「「……」」

「……？」

話の飛び具合にポカンとする海斗と小春の様子を見て、ポカンとする瑠色。

数秒の間、その場の全員が首を傾げていたが……

「えぇと、結局、瑠色さんのお兄さんは何で家を出て行ってしまったんですか？」

海斗より一瞬早く我を取り戻した小春が、状況を整理するための質問をぶつける。

その質問に、瑠色は、

「お兄ちゃん、強盗を……」

「仮面ライダーを捕まえるって……」

「「!?」」

そう、答えた。

――天野原家

天野原家は、水都の中心地・水都商店街から少し離れた高級住宅地

に位置していた。
その中でも一層、高級感溢れる佇まいの建物、それが天野原家である。

「……に、兄さん……」

その雰囲気に完全に呑まれているようで、咲也は海斗の腕を掴んで、おどおどしている。

「はは、大丈夫だよ」

「……うぅ」

（音々さんがいないと、ホントに情けないというか女の子ですねぇ、七海くん）

小春の心の声通りである。
咲也のおどおどっぷりは、情けないを通り越して、女の子らしい仕草にしか見えない。

ちなみに、音々は七海家で留守番中だ。
ここで空気の読めない発言をするのは、些か危険なので……。

「……お父さん！」

探偵事務所の面子と共に、自分の家に帰ってきた瑠色が父親を呼ぶ。
すると、

「瑠色！　良かった、帰ってきたのかぁ」

家の奥から、人の良さそうな男性が現れた。
彼の台詞から彼が瑠色の父親であることがわかった。

「お前までどこかに行っちゃったから……ん？　瑠色、そちらの方々は？」

「あっ、探偵さんです。強盗を捕まえて貰おうと思ったのですます」

「どうも。僕は、こういう者です」

瑠色の紹介を受け、彼女の父親に名刺を差し出す海斗。

「私立探偵……水町海斗、さん？」

「はい。瑠色ちゃんからの依頼を受けまして、こちらに参りました」

海斗は丁寧な口調で言って、一つお辞儀をした。

その姿を見て、

「これはこれはご丁寧に。私は瑠色の父親で、宝石商を営んでおります、天野原黄樹（あまのはらこうき）と申します」

瑠色の父親であり、天野原家当主でもある黄樹も海斗に名刺を渡した。

その名刺を受けとった海斗も、ご丁寧に、と返して、話を進める。

「では、お訊きしてもよろしいでしょうか？」

「例の強盗について……」

――？？？

「……」

とある路地裏に一人の少年が佇んでいた。

少し長めの黒い髪に、黒ぶちの眼鏡。

まさに、インドアな雰囲気を醸し出している少年であった。

そんな彼の周りには複数のチンピラ。

普通のインドアな少年ならば、萎縮してびくびくと怯えるような場

面だろう。

だが、

「お前ら、一つ聞くが……」

少年は彼らに一つの質問を投げかけた。

臆することなく。

「お前ら……強盗か？」

唐突な質問だ。

だが、その質問にチンピラの中の一人が口を開く。

「あ？　まぁ、確かにぃ？　俺たち、今から君からお金とか貰っちゃうけど？」

「……そうか、邪魔したな」

チンピラの答えを聞いて、少年は興味を無くしたように、その場を立ち去ろうとする。

もちろん、それを素直に帰すチンピラではなく、

「ああ？　ガキぃ、なめてんのかあ？」

そう言って、少年の胸ぐらを掴む。

「……」

「はっはっは！　黙っちゃって、びびってんのか、ああ？」

少年は黙ったまま……いや、

「……ろ……は……るい」

小声で何かを呟いた。

「あ？」

「んだ、こらぁ？」

「声も度胸も小さいのかぁ？」

そんなチンピラ達の言葉に、少年がついにキレた。

「今のオレは機嫌が悪いって言ったんだよぉぉ！！」

そう叫ぶと同時に、チンピラの腕を振り払う少年。

そんな少年に、チンピラも怒りを露にする。

「ああ？　なめてんのか、われぇ！！」

「ガキがっ、ぶち殺すぞぉ！」

「上等だ、やってみろぉ！！」

柄の悪いチンピラ達にまったく怯まずに、そう返す少年。

「てめぇらみたいな雑魚、相手にしてる時間がもったいねぇんだ！！　早くかかってこいや、チンピラどもぉぉぉ！！」

ただの子供に、しかも、こんな優男みたいな子供に、ここまで言われたんじゃあプライドが許さない。

そう考え、チンピラ全員が、ポケットから何か棒状の物を取り出した。

そして、

『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』
『マスカレイド』

それを――ガイアメモリを起動し、身体に入れた。

チンピラ達の姿が変わり、顔が骨が浮き出た覆面に覆われたマスカレイドドーパントへと変身した。

『へっへっへ、どうだ？　これでも、なめた口がきけるか？　ああ？』

品のない笑いを浮かべ、ナイフを持って、少年に近づいていくチンピラ達。

それに対して、少年は、

「盗む価値もない屑メモリがっ」

どこからともなく、コンバットナイフのような形をした武器と、

「ぶち壊してやるよぉ！」

一本のメモリを――ガイアメモリを起動した。

『トリック』！！

第三十七話　Fの残光／ある少女と家出少年（後書き）

はい、F編一話目でした。

いかがでしたか？

まぁ、いつも通り事件の障り部分なので、あまり面白くはなかったかな？

あ、とりあえず補足として

『子供達』は

チルドレンというルビが付きます

文中には書かなかったんで、ここで説明をば。

次回更新は……不明です（汗）

ただ土日には更新出来ないと思います。

ほんとすみませんｍ（＿＿）ｍ

では、また！

第三十八話　Fの残光／強盗ライダー（前書き）

遅くなりました（汗）

更新です！

どうぞ！

第三十八話　Fの残光／強盗ライダー

――水都署

天野原邸を海斗たち三人が訪れた翌日。

今度は音々も加えた探偵事務所の面々は、水都署超常犯罪捜査課に来ていた。

もちろん、件の強盗の情報を集めるためである。

「あぁ、色々話はあるな」

何か情報はないかという質問に、源一郎はそう答えた。

「どんな話ですか！？」

瞬時に小春が食いつく。

その尋常ではない雰囲気に源一郎はたじろいでしまった。

「お、落ち着け、嬢ちゃん！」

「落ち着いてられませんよ！　その強盗、『仮面ライダー』を名乗ってるって言うじゃないですか！！」

そう、強盗は、天野原家から去る時、自らのことを『仮面ライダー』だと名乗ったのだ。

それを知った小春は激怒した。

風都で翔太郎たちの助手をしていたこともあり、仮面ライダーの名を騙り、悪事を働く強盗が許せなかった。

「まぁまぁ、小春ちゃん。深呼吸深呼吸」

そんな小春をなだめるのは海斗である。

本来ならば、彼も怒るべきなのだろうが……。

「あーもう！　海斗さんは、悔しくないんですか！」

「いやぁ、悔しいし許せないよ？」

「じゃあ、なんでそんなに落ち着いてるんですか！？」

「ははは……」

自分より慌てている人を見ると、意外と自分は冷静になれることがある。

現在、海斗の身にも似たようなことが起きている、というわけだ。

「……とにかく、話を」

いい加減話を進めるべきだ、そう判断した誰よりも冷静な音々が口を開いた。

「そ、そうですねっ。源一郎さん、お話聞かせてくださいっ」

咲也もおどおどしながら、音々の発言に便乗する。

おどおどしているのは、小春の迫力に気圧されているからなのは、言うまでもないだろう。

「そうですね。源さん、知っている範囲でいいので教えてください」

「『強盗ライダー』の話を」

最後に、海斗がそう言ったことで、小春のボルテージの上昇が一旦止まり、全員が源一郎の話を聞く態勢に入った。

「ん、あぁ。まぁ、簡単な話だ。今月に入ってから、資産家の家に強盗が押し入る事件が多発していてな」

「多発？　天野原邸だけじゃないんですか？」

海斗の質問に、源一郎は縦に首を振り、話を続ける。

「今、わかっているだけで四件。その中で一番損失が大きいのが、お前らが依頼を受けたっつう天野原だな」

「……なるほど」

「あ、あのっ、犯人はわからないんですか？」

「あー、それなんだがな……まぁ、なんだ」

咲也が容疑者について聞くと、急に言葉を濁し始める源一郎。

そんな様子の彼を、

「候補が挙がってるんですね！？」

今の小春が問い詰めないわけがなかった。

その気迫に呑まれながらも、源一郎は答える。

「天野原家の長男じゃねぇかっつう話だよ」

「「えっ！？」」

その言葉に驚いたのは、小春と咲也。

残る二人、海斗と音々はというと……

「うーん、やっぱりそうなるよね……」

「……」

あまり驚いていなかった。

その可能性、つまり、失踪した天野原家の長男が犯人だという可能性。

状況から見れば、事件直後に失踪したのだから、可能性としてはなくはない。

その可能性には行き着いていた海斗。

だが、苦虫を噛み潰したような表情ではあった。

もし、それが事実ならば、依頼人の瑠色を悲しませることになる。

海斗にとっては、それは一番嫌な結末だ。

だから、そうならない可能性に賭けてみる。

「……とりあえず、僕らは彼以外の容疑者を挙げてみますよ」

海斗はそう言って、立ち去ろうとする。

その間際、

「ほらよ、海斗」

源一郎が何かを放り投げてきた。

それを振り向き様に、右手でキャッチする海斗。

見ると、それは何かの資料のようであった。

「なんですか、これ？」

「強盗に襲われた資産家を書いといた」

「……ありがとうございます」

一つお礼の言葉を返し、今度こそ海斗は超常犯罪捜査課を後にした。

そして、その後を追うようにして、小春、音々、咲也の順で部屋から出ていった。

「……にしたって、海斗の奴張り切ってたな、久しぶりの女からの依頼だからか……？」

後に残ったのは、源一郎のそんな言葉だった。

――鳴海探偵事務所水都支店

源一郎から『強盗ライダー』に襲撃を受けた資産家のリストを貰った海斗は、事務所に戻ってきていた。

無論、小春たちも一緒である。

「それで……どうするんですか？」

小春が口を開いた。

どうする、とは、勿論どうやって他の容疑者を炙り出すかという意味だ。

「そうだね、本当はここのリストにある家を訪ねるのがいいんだけど……」

「……時間がない」

海斗の言葉の続きを音々が紡ぐ。

「ど、どうして？」

「理由は二つ」

咲也の質問に、海斗は左手の指を二本立てた。

そして、それを一本にして説明を始める。

「一つ目は、瑠色ちゃんのお兄さんが『強盗ライダー』を見つけたらアウトだから」

「？」

「彼がいくら強いといっても、生身で、しかも手負いの状態だからね。『強盗ライダー』と対峙したら、確実に酷い怪我をする」

「な、なるほど……」

咲也は納得したのか、相槌をうつ。

「そして、二つ目は……」

さらに、指を一本立てて、続ける。

「警察が動き出す前に真犯人を見つける必要があるからだよ」

「警察は、瑠色さんのお兄さんを犯人と思っているからですね」

「そういうこと。だから……」

そこまで言って、海斗は懐からスタッグフォンを取り出した。

「海斗さん、どこにかけるんですか？」

「ん？　ちょっとね」

「わかったよ、真犯人が」

電話を切った海斗が、小春たちにそう言った。

「本当ですか！？」

「うん、とにかく向かおう。『強盗ライダー』はそこにいる」

――同時刻・『トリック』を持つ少年視点

「……それは本当なんだな？」

「は、はは、はいっ」

目の前でボロボロになる男にそう問う。

これが最後の確認だ。

「……」

「も、もう……これ以上はやめてくださいぃ」

「わかった」

この男の言うことは事実だろう。

そう判断して、俺はこの場を去ることにした。

「あっ」

「ひ、ひぃ……な、なんでしょうかっ……」

言い忘れてた。

「これに懲りて悪いことは止めろよ？」

「は、はいっ」

人を散々殴っといて言う台詞じゃないな、と思う。

だけど、しょうがない。

これも全て家族を危険にさらした、あの強盗を……『仮面ライダー』を捕まえるためだ。

――数分後・鳴海探偵事務所

「結局、なんだったんだろうな？」

通話を終えた翔太郎がそう訊ねた。

「さぁ？　検索結果だけ見れば、闇ブローカーでも探していたんだろう？」

翔太郎の問いに答えたのは、探偵事務所の隅で本を読んでいた相棒・フィリップ。

「ああ。だけど、なんか嫌な予感が……」

「くどいよ、翔太郎。……まったく、君は女性と弟子にはとことん甘いねぇ」

「あ？」

「独り立ちした弟子の仕事を、必要以上に気にするなんて……本当に君は『ハーフボイルド』だね」

「んだと、フィリップ！」

いつも通りの鳴海探偵事務所。

だが、翔太郎の嫌な予感は謀らずも当たることになるのだった……。

第三十八話　Fの残光／強盗ライダー（後書き）

いかがでしたでしょうか？

こんな感じのF編二話でした。

話が進まねえっす……（「▽ｌ；）

次は、結構長めになるかもです（汗）

次回更新は
来週の月曜か火曜になります

では、また！

第三十九話　Fの残光／解き放たれた獣（前書き）

更新しました！

どうぞ

第三十九話　Fの残光／解き放たれた獣

――土宮邸

――ピンポーン

『はい』

海斗がインターフォンを鳴らすと、中から声が聞こえた。

海斗は、それと一言二言話し、その前で待つ。

海斗たち、探偵事務所一行は、『強盗ライダー』の襲撃を受けたという資産家の家・土宮邸に来ていた。

土宮邸は、天野原邸がある住宅街の中にあり、天野原邸ほど大きくはないが、それでも十分「お屋敷」という雰囲気が漂っている。

屋敷の周りには塀、さらに、屋敷の正面には、大きな門が建っていた。

「大きいですねぇ」

「そ、そう、ですね」

屋敷の外径を見ながら、小春と咲也がそう呟く。

ちなみに、小春と咲也がいるのは、門の前ではない。

その門から見えないように、屋敷の周りを囲む塀の陰に隠れているのだ。

「お待たせいたしました」

屋敷の中から、恰幅のよい中年の男性が現れた。

男性が現れた途端、小春と咲也が硬直した。

そんな二人の様子とは対照的に、海斗はにこやかに男性に話しかける。

「度々申し訳ありません。事件について、二三うかがいたいことが

ありまして……」

「いえいえ。私の金を取り戻して頂くためならば、いくらでも捜査に協力しますよ、刑事さん」

「ありがとうございます」

そんな二人のやり取りを黙って見ている小春たち。

「こ、小春さんっ」

「な、なんですか、七海くん」

男性から距離があるにも関わらず、会話が聞こえないように、と二人は小声で話を続ける。

「こ、これ、大丈夫なんですかぁ？」

咲也がいう、これ、とは、つまり、海斗が警察と偽り、注意を引き付けているうちに、小春たちが屋敷に侵入し、証拠を探すことである。

バレることを恐れて、いつも以上にびくびくしている咲也に、

「……大丈夫。私たちは早く証拠を見つける必要がある」

音々が、いつもと変わらないクールな口調でそう言う。

小春は気合を入れ直したようで、音々の言葉に力強く頷いた。

「それでは、こちらにどうぞ」

あちらでは、話が進み、海斗が男性に案内されて、屋敷の奥に行ってしまった。

だから、覚悟を決めた。

「行きましょう！」

小春たちの潜入ミッションが始まった。

――数分後・土宮邸・『トリック』を持つ少年視点

「……ふぅ」

屋敷を見て、一つため息をつく。

やっとたどり着いた。

あとは、ここで、うちから盗まれた宝石を見つければ終わりだ。

「……」

懐からメモリを取り出し、ナイフのスロットに入れる。

『トリック』！！

……さぁ、行くとしようか。

――土宮邸・内部・小春視点

「！？」

人影が見えたので、慌てて物陰に隠れる。

物陰から、慎重にさっきの人影を確認する。

そこにいたのは、

「警備員……ですか？」

「いや、それにしては物騒」

私の疑問に、音々さんがそう答えた。

確かにそうです。

ただの警備員なら、あんなもの――拳銃なんて持っているわけがありません。

つまり、これは……

「……大当たり」

「み、みたいですねっ」

七海くんと音々さんと頷き合い、先に進む。

一瞬、不法侵入という言葉が頭をよぎりましたが……

この際、関係ありません！

それにしても、

「海斗さん、大丈夫でしょうか……」

少し心配。

もし、私たちが捕まったりしたら……。

「小春さんっ！」

「えっ！？」

――海斗視点

「ご協力ありがとうございました」

「はいはい。頑張って捕まえてくださいな、刑事さん」

「はい。それでは――」

そろそろ時間を引き延ばすのは、無理だと判断して、帰ろうとした、
その時、

「旦那様！」

大きな音を立てて、扉が開き、一人の黒服が部屋に入ってきた。

そして、その黒服の後ろには、

「に、兄さん……」

「すみません、海斗さん」

「……しくじった」

ガムテープで手足を縛られた小春ちゃん達の姿があった。

「おい、こいつらは何者だ!?」

主人が黒服にそう訊ね、黒服は捕まえた時の概要を話した。

「刑事さん……この者たちとはどういうご関係で?」

主人が僕に警戒の眼差しを向けてくる。

……はぁ、しょうがない。

「彼らは、僕の助手です」

「助手?」

「申し訳ありません。実は、僕は刑事ではありません。探偵です」

「なっ！？」

「とある人物から依頼を受けて、貴方も被害にあったという『強盗ライダー』を探していました」

「それが、なぜ助手を我が屋敷に忍び込ませることになるのかね！？」

まぁ、確かにその通り。

だけど、

「闇ブローカー……保険金」

「むっ！？」

「それだけ言えば、お分かりですね？」

彼は確かに被害に遭ったが、盗品には多額の保険金が掛けられていた。

その上、彼は表沙汰には出来ない盗品を売り捌く、闇ブローカーと

いう顔も持っていた。

あとは、物的証拠が欲しかったけれど、しょうがない。

「……もう証拠は挙がっています。終わりにしましょう」

「『強盗ライダー』さん」

「！？」

主人の顔色が変わっていく。

空気が、変わった。

「……ばれていましたか。仕方がない」

そう言って、彼は懐から、何かを取り出した。

「知られたからには」

「消えて頂こう」

『コンクリート』！

顎の下に挿された灰色のメモリは、そのまま体内へと入った。

そして、ゴツゴツした岩のような体や手足、下顎がしゃくれ、目鼻のないドーパント・コンクリートドーパントへと変貌を遂げた。

『はっはっは、見せてくれようぞ！　このメモリの力をぉぉ！』

コンクリートドーパントがそう言うと、途端に体の形が変わり始める。

岩のような手足体が細く、顔も下顎が引っ込み、存在しなかった目が、大きな複眼として現れた。

その姿は、まるで……

『見ろ！　これが『仮面ライダー』だぁ！』

確かに、姿は仮面ライダーだった。

そう。

姿だけは。

僕は、懐からドライバーを取り出し、装着する。

そして、言う。

「下らないね、見せてあげるよ……」

『ファントム』！！

「本物の仮面ライダーを！」

「変身！！」

ファントムメモリを入れたドライバーを展開させる。

いつものように、身体に霧がまとわりつく。

数秒後に、その霧が晴れた頃には、僕は仮面ライダーになっていた。

そして、『仮面ライダー』を名乗る偽者を指差し、言い放つ。

「さぁ、断罪の時間だ！」

『か、仮面ライダー！？　本物か！？』

狼狽えるコンクリートドーパント。

その隙は、逃さない。

「はぁぁ！」

『メタル』！！

走り出すのと、同時に、フォームを変える。

『ぐぅう！？』

「たぁ！」

射程に入った瞬間に、メタルシャフトで相手の足元を払う。

『のわっ』

バランスを崩し、転倒しかけたところに、

『トリガー』！！

銃弾を放ち、追い撃ちをかけた。

放たれた銃弾は、ドーパントの胸部に数発被弾し、ドーパントは倒れる。

『がっ、うおっ』

優勢だ。

このまま行けば……

『なっ……ナメるなぁぁあぁあ！！』

「っ！？」

突如として、声をあげたドーパント。

その体が、最初に姿を変えた時のように、変形しだす。

……いや、あれは――

『おぉおおぉおおぉ！！』

ドーパントは、雄叫びをあげた後、液体になって、地面に消えた。

「……なるほど。『コンクリート』だね」

さっき、コンクリートドーパントに触れた時に得た情報と、今の光景で理解した。

つまり、敵は地面に、コンクリートの地面に、自らの体を同化させた、というわけだ。

これでは、どこから攻撃が来るかわからない。

これは、確かに脅威だ。

だけど、

――トクン

いた。

『ヒート』！！

フォームを替えて、拳に炎を溜める。

そして、メモリの鼓動が聞こえた場所に、拳を叩き込む。

「はぁぁぁあ！！」

熱を、炎を帯びた拳は、正確に鼓動の元を突き、

『がぁぁぁ！？　な、なぜ、だぁあ！？』

敵を地面から引きずり出すことに成功した。

「ふぅ」

熱さに悶えるコンクリートドーパントを見ながら、一つため息を吐く。

そして、

『ファントム／ヒート――マキシマムドライブ』！！！

狙いを定め、火球を撃ちだ――

『動くなあ！！』

「えっ？」

入口の方、つまり、小春ちゃん達がいた方から声がした。

見ると、そこにはマスカレイドドーパントがいた。

しかも、一人だけではない。
ざっと十人ほど。
これじゃあ……
『ふ、ふ……はははは』
その声で、思い出す。
――ドガッッ
「が、っう!?」
腹に鈍い衝撃が走る。
遅れて、自分が殴られたのだと気づいた。
そうだ。
今は……戦いの最中だった。

『よくやった！　後で特別給与を出そう！』

そう言って笑うドーパント。

そして、ゆっくりと近づいてきたドーパントは、

――ドスッ

「かっ、は……」

鳩尾を思い切り蹴りつけてきた。

何発も、何発も。

意識が遠退く。

「海斗さん！」

「兄さん！」

――声が、聞こえる。
小春ちゃん達の声。

……あぁ。
……助けなきゃ。
……僕は。
……仮面ライダーなんだ。
……翔太郎さんや。
……フィリップさん。
……そして。
……『あの人』と同じ。
……仮面ライダーなんだ。
……だから。

――――『ファング』――――

――『トリック』を持つ少年視点

「ふっ」

『がっ』

目の前に立ち塞がるマスカレイドを、ナイフで切りつける。

その度に、相手の体からメモリが排出されていた。

「これで、七本目か……はぁ」

嫌になる。

こんな屑メモリを手に入れてもどうしようもないのに……。

「……いや、これも復讐のためか」

『強盗ライダー』を潰すためには、これも必要なことだ。

だが、にしたって……

「このメモリはないな」

奪ったメモリを眺めながら、そう呟く。

こんな屑じゃあ、戦力の足しにもならない。

……とにかく、今は盗まれたものを取り返すことが先決か。

その後、潰せばいい。

「行くか」

俺の家のものを取り返すために、歩き出したその時、

『ぐぎゃぁあぁ！？』

くぐもった叫び声が聞こえた。

その声は、あの時聞いた、あの『強盗ライダー』の声。

「あっちか！？」

走り出す。

奴を潰すために。

――咲也視点

訳が分からない。

今、目の前で起こっていることが……。

「海斗さん！　もう止めてください！」

隣であがった小春さんの声に、我に帰る。

そうだっ！

呆然としてる場合じゃない！

「に、兄さんっ！　も、もう止めてっ」

「ひ、ひぃいぃい!?　もう止めてくれぇぇ」

ボク達の目の前には、メモリをブレイクされて、人の姿に戻ったこの家の主人と、兄さんがいた。

一人は、メモリブレイクの反動で動けないはずの体を無理矢理動かし、後退りながら。

もう一人は……、

『グルルルル……』

唸り声をあげて、命乞いをするもう一人を追い詰めている。

それが、兄さん……ファントムだった。

だけど、様子がおかしい。

いつもの凛とした雰囲気は、荒々しく攻撃的に変化して、背中にあるはずのマントも無くなっていた。

なにより、顔の右半分を覆っていたはずの仮面が、消え去り、紅い、血よりも真っ赤な複眼がその姿を現していた。

「あれ、本当に兄さん……？」

そんな言葉が、口をついて出てしまった。

それほどまでに、違っていたんだ。

あれじゃあ、まるで、

「……猛獣」

『がぁあああぁ！！』

ファントムが吠える。

その声で大気が震える。

それほどの衝撃。

「ひ、ひぃ」

『……グルル』

『アームファング』

ガイアウィスパーが鳴る。
それに反応するように、ファントムの手が光り、鋭くて長い爪が現れた。
それで、
「って！」
「ふぇ！？」
「七海くん、ボーっとしてる場合じゃないです！」
「ふぇぇぇ！？」
「音々さん！」
「……分かっている」
小春さんの言葉に頷いた音々さんは、ボクの懐をまさぐり始めた。
って、えぇぇぇぇ！？
「ああ、あにょっ！　ねねしゃん、ななな、にをっ！？」

ボクの言葉に耳を貸さずに、音々さんは黙って、まさぐり続ける。

わ、脇腹とか触られて――

「ひゃうっ」

「……あった」

――カシャッ

「……えっ？」

腰に何かが巻き付く感覚。

これって……

『ナイト』！！

「……行ってらっしゃい」

「は、はい」

腰に巻かれたドライバーが展開したのを確認して叫んだ。

「変身っ！」

第三十九話　Ｆの残光／解き放たれた獣（後書き）

いかがでしたでしょうか？

えっ？
いつもは三話完結なのに
完結していないって？

はい。
実は、この話から四話完結にしたいと思います。

まぁ、前々から考えてはいたんですよ。
今までも最終話が長くなる傾向があったので……。

なので、思い切ってやってみました。

……ネタ、尽きないよなぁ？
ま、なるようになるでしょう！

次回更新は、来週の日曜日です。

では、また！

第四十話　Ｆの残光／野獣と騎士と怪盗と（前書き）

お待たせしました
更新です！

それでは、どうぞ！

第四十話　Ｆの残光／野獣と騎士と怪盗と

――音々視点

「……ふぅ」

彼が変身したのを確認して、小さくため息をつく。

これで大丈夫。

彼なら負けない。

彼を信じているのもあるけれど、何より『ナイト』の性能があるから。

「行くよ、兄さんっ」

『がぁあぁぁぁあ！！』

「あっ、そ、その前に……」

そう言って、ファントムと対峙していた彼がこちらに向き直った。

……？
なにを？

「よい、しょっ！」

――プツッ

「……あ」

私たちの手足を拘束していたテープが切られ、剥がされた。
彼の手によって。

「ありがとうございます、七海くん！」

「……ありがと」

「あ、そのぉ……うん」

変身しても、いつもと同じ様子で彼は頷く。

しどろもどろになっている所が……可愛い。

……いやいや。

……ノロケてる場合ではなかった。

「怪我はしないように」

「う、うん」

私の言葉に彼は頷き、ファントムに向き直る。

そして、剣を構え、

「行くよっ、兄さん！」

――駆け出した。

――咲也視点

一歩踏み込んで、剣を横に払う。

――シュッ

だけど、避けられてしまう。

そこに、

『ぎしゃあぁぁぁあ！！』

兄さん……いや、ファントムが飛びかかってきた。

「っ！？」

一瞬だった。
ファントムは、一瞬でボクの目の前に移動していた。
前に模擬戦をした時より、速いっ！？

『グラァァア』

――ギィィィィ

「うっ！？」

ボクが盾を構える前に、ファントムは鋭い爪で、腹部に切りかかってきた。

装甲と鋭い爪が擦れ合う嫌な音が響く。
同時に火花も散る。

「……っ！」

その威力に後ずさってしまう。
膝もつきそうになったけれど、剣を地面に刺して、なんとか堪えた。
けど、

『グラァウッ！』

――シュッッ

またっ！？

――ギィィィィィ

「かっ、はっ！？」

今度は後ろから！？

さっきは目の前にいたのに……。

反応が追いつかない。

ならっ！

『ナイト――マキシマムドライブ』！！

メモリを剣に装填して、マキシマムドライブを発動する。

「こ、これでっ」

闇雲に振り回す。

……フリをする。

そして、大振りの一太刀。

これは、わざと。

こうすれば……

『グラァァァ！！』

――来たっ。

ちょうど真後ろの位置から、ファントムが向かってくる。

うぅ、やっぱり速い。

やっぱり速い、けど、直線なら！

「たぁぁぁあぁあ！！」

剣を、突き出す。

その突きは、ファントムの胸を、捉えたっ！

『グラァッ！？』

吹き飛ぶファントム。

「……は、はぁぁ」

思わずため息が出てしまった。

よ、よかった。
せいこう、したぁ。

そ、それに、兄さんに刺さったりしなくてよかったよぉ……。

「あっ、そうだっ。と、とにかく、今のうちに――」

『……グ、ルルルル……』

「えっ？」

メモリを、と続けるはずが、続かなかった。

絶句してしまったから。

目の前の光景に。

目の前で立ち上がるファントムの姿に……。

『グ、ル……』

『……』

『ナイト』のマキシマムを受けたはずなのに、ファントムは立ち上がっていた。

フラフラと、じゃなく、何事もなかったかのように……。

いつのまにか、唸り声は消えていた。

荒々しい雰囲気も、鋭い爪も、消えていた。

代わりに、マントが、仮面が戻ってきていた。

それは、つまり……

「兄さんっ！」

戻ったんだっ。
兄さんが――

そう思い、変身を解いた。
そして、駆け寄る。

「だ、大丈夫？　兄さん……」

『……』

でも、返事は、ない。

……？

どうしたんだろう？

「にいさ――
「咲也っ！！」

――声。

さらに、横から何かがぶつかってきた。

ボクはかなりの衝撃を受け、その勢いのまま、地面に倒されてしまった。

「……えっ？」

横を、横からぶつかってきて、今はボクに覆い被さっている何かを見る。

その何かとは、

「ね……ねね、さん？」

音々さんだった。

「はぁ、はぁ……はっ」

音々さんは今、荒い息を吐いて、ボクの上に覆い被さっていた。

……？？

「あ、あのぅ……ねね――

「逃げるっ！！」

ボクの言葉を最後まで聞かずに、ボクの手を引く音々さん。

逃げる？

なんで……？

「二人とも！　左に飛んでくださいっ！」

「っ？」
「ふぇっ！？」

反射で、その指示に従った。
その後、地面に肩を打ち付けながら着地する。

「つっ」
「……はっ、はぁはぁ」

何がなんだか分からない。
肩は痛いし、音々さんも息切れしてるし……。

一体何が……

――ズズズズズズズ

「……え？」

黒が、闇が、ボクたちがさっきまでいた場所を喰らっていた。

そう、黒い大量の蛆が……。

「……『ナイト』……」

音々さんが忌々しげに呟く。

そうだ。

あれは、『ナイト』の、夜の力だ。

音々さんが囚われていたメモリ。

それをなんで兄さんが？

「っ……はっ、ああ」

――ガクッ

「音々さんっ！？」

突然、音々さんが崩れ落ちる。
それをなんとか、ギリギリで支えることに成功した。
けど、

「……うっ」

音々さんの様子は変わらない。
むしろ、時間が経てば経つほど、顔色が悪くなり、身体も震え始めた。

きっと、この光景は、嫌が応にもあの頃を思い出してしまうんだ。
メモリに囚われていた頃のことを……。

と、とにかくっ

「音々さん、にげましょうっ」

「……っ、分かってる」

そうは言うけど、やっぱり音々さんは身体から力が抜けたままで、だから、ボクが支えて、その場を離れる。

――離れようとした。

「七海くんっ！　上ですっ」

小春さんの声で、上を見る。

頭上は一面黒。

つまり、ファントムの攻撃が迫っていた。

「は、っ……はぁ」

ど、どうしよう！？

音々さんを支えながら、避けるのは、絶対に無理だっ。

だからと言って、音々さんを見捨てるなんて、あり得ないし。

じゃあ、どうすればっ！？

考えている間にも、蛆は迫ってくる。

「くっ！？」

「わっ、わぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁ！？」

「……」

「……」

「……あ、あれ？」

蛆の闇に呑まれた。

そのはずだった。

だけど、ボクにも、隣で目をつぶっている音々さんにも何も起きていなかった。

「……よぉ」

「えっ？」

ボクと音々さんの他にもう一人。

そこにはいた。

どこか冷めた様子で、ボクを見つめてくるその目。

眼鏡という相違点はあったけど、その人のことを、ボクは覚えている。

この人は……

「……蒼、くん？」

「相変わらず女々しい奴だな、咲也は……」

彼は……蒼くんは昔と変わらない口調で、そう言った。

――天野原蒼視点

「さてと……」

懐かしい奴に、昔の家族に挨拶を済ますと、辺りを見渡す。

「……あ」

いた。

この屋敷の土宮邸の主で、恐らく俺の家を襲撃した『強盗ライダー』が。

いた、にはいたのだが……。

「……なんで泡吹いて倒れてんだ？」

まぁ、逃げないなら都合がいいか。

「……咲也」

「え？　え、えっとその……なに？　蒼くん」

「あれ、これで縛っとけ」

用意していた縄を、咲也に投げて渡す。

「ふぇ？」

「そいつは、俺の家族を危険に晒した奴だ」

「生かしておく訳にはいかない」

「えっ！？」

驚いた顔をする咲也。

それに、咲也の近くにいる二人の女も、同じような顔をしている。

……？

なんで、そんな顔をしている？

制裁は当たり前のことだろう？
俺の家族を危険に晒しておいて、何もないはずがない。

「蒼くん、そ、それは……」

「……咲也、忘れたのか？」

「え、えっ？　な、なにを……」

「父さんのことを」

「っ！？」

目を見開く咲也。

どうやら覚えてはいるようだな。

なら、

「縛っとけ」

それだけ言って、視線を別に向けた。

視線の先には、一人の『何か』がいる。

……さて。

「お前は何者だ」

『……』

案の定、返答はない。

なんとなくはわかってはいたが……。

しょうがない。

「おい、咲也。ついでに教えろ。……これはなんだ？」

咲也の方には振り向かず問いかけると、少しの間があって、答えが返ってきた。

「……に、兄さん」

「あ？」

「海斗兄さんだよっ」

「……ほぅ」

偶然は続くもんだな。

咲也に引き続いて、馬鹿海斗にも会うことになるとは……。

「じゃあ……」

ナイフを、持ち直す。

いつもの感覚だ。

「すぐに終わらせるっ」

『……』

――鳴海探偵事務所水都支店・小春視点

強盗ライダー事件から、二日が経ちました。

土宮家の主人・強盗ライダーは、「無事」、警察に逮捕されましたし。

今回の依頼人である天野原瑠色さんのお兄さん・蒼さんも無事家に戻ったそうです。

これで一件落着……。

「じゃあ、ないですよね……」

ベッドに横になっている海斗さんを見る。

今日で二日目。

そうです。

あの後、ファントムのメモリを蒼さんが掠め盗ってくれたお陰で、海斗さんの変身は解けました。

でも、二日間、目を覚ましていません。

「はぁ」

ため息。

なんで……。

「こんなことになってるんでしょう、海斗さん……」

「……」

答えは、ない。

こんなに不安なのは、初めてかもしれません。

最初に見た、獣のような姿。

次に見た、いつもと同じ……だけど、何かが違う姿。

あれは、一体なんなんでしょうか……。

「……」

何かがある。

なのに、それが何かまったく分かりません。

それはたぶん。

本当に、ただの勘でしかないんですけど……。

『海斗さんの過去』

七海くんや天野原蒼さんと育ったという孤児院時代もそうですし……。

思い出せば……。

海斗さんは、私がフィリップさんから預かったドライバーを渡す前から、『ファントム』のメモリを持っていました。

だから、あの姿の謎も、過去に何かがあるような気がします。

「……」

まだ目覚めない海斗さんを見て、呟く。

「……一体」

「何があったんですか？」

第四十話　Ｆの残光／野獣と騎士と怪盗と（後書き）

……と！
いうわけで、Ｆ編第四話でした。
いかがでしたでしょうか？

少し展開が早すぎるかな、とも思ったのですが
ファントムと蒼のバトルは省略させて頂きました。

あと、補足として
天野原蒼＝怪盗２０
です！

まぁ、『トリック』を出した時点でお気づきだとは思いますが、一応、ですね。

次回更新は……。

ごめんなさいっ、未定です
どうにか今週にはあげようと思います（汗）

では、また！

第四十一話　Ｊを想う者／手紙（前書き）

更新しました。

いつも通りの導入編です。

どうぞ！

第四十一話　Ｊを想う者／手紙

――水舞高校

本日は平日。

高校生にとっては普通に学校があり、授業がある日である。

そんな日の昼休みのことである。

「……まだでしょうか」

小春は、携帯を手の中で弄りながら、呟いた。

彼女のこの落ち着きがない様子には理由がある。

とある人物からの連絡を待っているのだ。

そんな中で、

「こっっっはるぅうぅぅ～～～！！！」

「！？」

突然の、自らの名前を呼ぶ大声に、小春は反射で振り返った。

顔の目の前。

そこに、彼女の顔があった。

その彼女、とは……。

「か、叶……ちゃん」

「おぉ！　皆さんご存知、叶さんさぁ！」

そう。

空野叶、その人である。

「どしたのさ！　落ち着きなく携帯いじったりして……ってまさか！？」

「えっと、叶ちゃん？」

「彼氏か！？」

「違いますっ！」

いきなりやってきて、話を勝手に飛躍させる叶に、即座に突っ込む小春。

だが、突っ込んではみたものの、落ち着きがない、ということに関しては、小春自身にも自覚はあった。

そのため、小春は一つため息を吐いた後で、叶に話し始めた。

「海斗さんのことなんですけど……」

「あぁ、探偵くん関連かぁ。なるほどね」

海斗が倒れたことを聞いていた叶は、得心したように頷いた。

「海斗さんが倒れた原因を今調べてもらってるんです」

「ふむ、医者には行ったのさ？」

「あ、いえ……そういうのではないと思うんです」

そう。

当然だが、海斗が倒れ、未だに眠ったままなのは、普通の病気などではない。

恐らく、メモリの作用だ。

小春と咲也、音々。

三人の見解は、そのように一致し、今、その原因を探って貰っている最中なのである。

その探ってもらっている相手というのが――

「話、終わったかしら？」

……と。

小春と叶の会話に割り込むように、声がかけられた。

「えっ？」

「あー、忘れてたさぁ……」

小春も叶も、声がした方を見る。

そこにいたのは、一人の女子生徒。

栗色のロングヘアーに、その身に纏う上品な雰囲気。

その手には、漆塗りの扇子が。

さらに、彼女の背はすらりと高く、身体の凹凸もハッキリ見てとれる。

一見、高校生には見えないその大人びた風貌に、小春は少し見とれてしまっていた。

「えぇと？」

「悪い悪い、紹介まだしてなかったさぁ」

小春の様子に首を傾げるその女子生徒に、叶が軽く謝る。
どうやら彼女は、叶の知り合いであるようだ。

「……はっ！　えっと、叶ちゃん、この方は？」

我に返った小春が尋ねると、叶は一つ咳払いをして答えた。

「こちら、隣のクラスの天野原紅（あまのはらこう）～」

「天野原紅と申します。生徒会会計を務めていて、その関係上、叶には色々聞いています」

「初めまして、鳴海小春さん」

叶の適当さにも慣れた様子でスルーし、彼女――天野原紅は、笑顔で小春に右手を差し出した。

「あっ、はいっ」

それが握手だと、少し遅れて気付いた小春は、慌てて自らの右手を、紅の右手に重ねた。

と、ここで小春は、あることに気付いた。

「あっ……天野原ってもしかして……」

「はい」

小春の言いたいことがわかったようで、紅は微笑みを返しながら、答えた。

「先日は、家の蒼と瑠色がお世話になりました」

「やっぱり、瑠色さん達のお姉さんなんですね」

「はい」

ニコリと頷く紅。

確かに、前の依頼人である天野原瑠色は、兄の蒼以外にも、姉がいると言っていた。

なるほど。

その姉が彼女なのか。

小春はそう納得したと同時に……。

（……あれ？　確かあの蒼さんって人、海斗さんにも七海くんにも、かなり口悪かった気が……）

と思い至る。

咲也は小春たちと同じく高校三年生である。

海斗は、正確な年齢は分からないが、小春たちよりは歳上であろう。

そして、今現れた蒼の姉だという紅が高校三年生。

つまり……、

（蒼さんって年下！？）

と、小春は内心かなり驚いていた。

まぁ、蒼の海斗と咲也に対する態度を見ていれば、無理もないだろう。

と、ここで、

「それじゃ、ここいらで本題といきますか！」

叶が、握手をしていた二人の間に、文字通り割り込みそう言った。

「本題、ですか？」

叶の言葉に小春は疑問符付きでそう返した。

叶が、紅を紹介したのもこの本題あってのことである。

早速、というか、やっと叶は、本題を話し始めた。

「実は先日、紅に一通の手紙が届いた」

「手紙ですか？」

「うむ。いつのまにやら、下駄箱に入っていたらしい」

「もしかして、ラブレター……とかでしょうか？」

下駄箱に手紙。

そんなシチュエーションの中で、真っ先にラブレターが思い浮かぶのも無理はない。

だが、叶はそんなセオリーを否定した。

「いやいやいや、違うのさ……はぁ」

珍しく、ため息をついた叶は、制服の胸ポケットから何かを取り出す。

そして、

「これを見よ！」

そう言いながら、取り出した何かを小春の前に突き出した。

それは……

「な、なんですか、これっ！？」

小春がそう言ってしまうのも無理はない。

小春の目の前にあったのは、一通の封筒。

よくラブレターが入れてあるような封筒。

だが、それは明らかに普通ではなかった。

それは、真っ赤だったのだ。

真っ赤な……。

血のような、真っ赤な色をした封筒。

それを掲げながら、叶は言った。

「これを……」

「この『脅迫状』を出した人間を突き止めて欲しいのさっ！」

と。

第四十一話　Ｊを想う者／手紙（後書き）

はい。
こんな感じのＪ編一話でした。

随分と間が空いた更新になってしまい、申し訳ありません（汗）
リアルが色々と忙しかったもので……。

次回更新は……すみません
未定です（泣）

頑張って早く更新できるようにしますので
応援お願いしますっ！

では、また！

第四十二話　Ｊを想う者／企み（前書き）

予想より
随分と早く更新できました！

それでは、どうぞ！

第四十二話　Ｊを想う者／企み

――水舞高校・生徒会室

脅迫状の送り主を見つけてほしい

叶の友達である天野原紅から、その依頼を受けた小春は、叶に連れられて生徒会室に来ていた。

「……えっと、大丈夫なんですか、叶ちゃん」

辺りを見渡しながらそう訊ねる小春。

「ん？　あぁ、人払いはしといたさ」

「……そうですか」

内容が内容のため、流石に人に聞かれるのは、まずいだろう。
そう考えていた小春だが、叶の言葉と紅の微笑みで、とりあえず納得した。

「それじゃあ、その……脅迫状を見せてもらえますか？」

「……お願いします」

「はい」

小春は、紅から直接、赤い封筒を受け取る。
そして、それを、開けた。

中身も外側と同じ赤い紙。

内心、恐々と、小春はそこに書かれている言葉を、黙って目で追っていく。

『拝啓　天野原紅様』

『突然のお手紙申し訳ありません』

『本来ならば、私のこの気持ちは、貴女に伝えるべきではないのだと思います』

『ですが、貴女の姿を校内で、校外で見る度に、私の胸は切なく疼くのです』

『家でも同じです』

『貴女のことを思えば思うほど、この気持ちは大きくなってゆきます』

「……？」

そこまで読んだ小春は、思いきり首を傾げた。

文章も文字も綺麗。

しかも、そこに書かれている言葉は、甘酸っぱい恋心そのもので。

つまり、ただのラブレターにしか見えないのだ。

「えぇと、叶ちゃん？」

「ん？　どしたぁ～？」

「……紅さん」

「はぃ？」

叶の気の抜けた返事を聞き……。

結局、紅の方を見てしまった。

この手紙が本当に脅迫状なのか、疑問を感じたからだ。

「……あの、これ、本当に脅迫状なんですか？」

そう聞いた小春に、紅が苦笑を浮かべつつ、答える。

「……二枚目、見ました？」

「えっ？」

その指摘に、慌てて二枚目に目を向けた。

そこには、

『ある時、私は気づきました』

『この気持ちは』

『きっと……』

『殺意、だと』

「なっ！？」

『そう』

『この狂おしいほどの想い』

『貴女を見る度に、私の心には殺意が込み上げて』

『殺したくて』

『殺したくて』

『殺したくて』

『殺したくて』

『殺したくて』

『どうしようもなくなってしまいました』

『だから、今度の週末』

『私に殺されて頂きたいのです』

『……ダメ、でしょうか？』

『……いえ』

『そんなことはないですよね？』

『貴女もきっと私に殺されることを望んでいるんですよね？』

『私達、両想いですもんね』

『じゃあ、今週末に』

『私が殺すまで死んじゃ嫌ですよ？』

『J』

「――っ」

声が出なかった。

ただただ戦慄するしかなかった。

ただの文章に過ぎないのに、小春は、その文章に込められた殺意に呑まれてしまっていたのだ。

「……読み終わったようさね……」

「……って、これ脅迫どころじゃないですよ！」

叶の声に、我に返った小春は、そう叫んだ。

そう。

これは脅迫よりもよっぽど性質が悪い。

殺人予告だ。

「こ、これっ、警察にっ！」

「無理さ」

「えっ？」

警察に届けるべきだ。

最もで妥当な小春の提案は、叶によって一蹴された。

「なんでですかっ！」

もちろん、反論しない訳がない。

ここに証拠があるのだ。

これを警察に突き出せば……。

そう言葉を紡ぐ寸前で、

「あの、小春さん」

「紅さん？」

紅が口を挟んだ。

「……これが、手紙と一緒に入っていたんです」

と、紅が取り出したのは、二枚の写真だった。

それに写っていたもの、それは、二人の人物。

「蒼さんに、瑠色さん……」

その二人とは、つまり、紅の弟と妹の姿だったのだ。

「それがこれと一緒に入っていたってことは……」

「そさね」

「逃げたり警察に届けたりしたら、二人を狙う」

「……てことで間違いない」

「っ！？」

人の弱味につけこむような真似だ。
誰だって、こんなことは許せるものではない。

……助けたい。

友人の友人として。

依頼を持ちかけられた探偵事務所所長として。

だから、小春は

「……分かりました」

鳴海亜樹子と同じ、所長としての強い意思で、

「脅迫状の犯人捜し」

「私が引き受けますっ！」

そう答えたのだっ――

「話は聞かせてもらったあ」

――咲也視点

「話は聞かせてもらったあ」

「ふ、ふぇぇ！？」

今まで一緒に生徒会室の机の下に隠れていた音々さんが、いきなり机を押し退けて、飛び出した。

ボクも音々さんに強引に引っ張られ、机の下から飛び出してしまった。

な、情けない声もあげちゃったし、机に頭もぶつけたし……。

うぅぅ……。

「音々さんっ！？　に、七海くん！」

「……そう」

「うぅぅ、はぃ……」

とりあえず、小春さんの呼び掛けに、二人で答える。

「……とにかく、話は分かった」

「小春が依頼を受けるなら、私達も手伝う」

「というか、小春だけを、危険に晒させる訳にはいかない」

「海斗には、咲也の家を斡旋して貰った恩もあるし」

「こういう時こそ、恩返しの時」

と、音々さんが強引に話を進めていく。

うわぁ。

いつもの五倍は話してるよぉ。

「……咲也」

「ひゃ、ひゃいっ！」

いきなり指名されてしまったっ！

えぇと……。

なな、なんか見つめられてるよぉぉっ！？

「……頼りにしてる」

「えっ……あっ、うんっ」

はぁぁぁ。
ボク、頼りにされてるんだぁ。

「分かりました。じゃあ、お願いします、二人とも」

「了解」

「……ふぁ……」

「それじゃあ、調査といきたい所ですが、まずは……」

「どした、こはるぅぅ？」

そっかぁ。
ボク、頼りにされてるんだ……音々さんに。
やっぱり、好きな人に頼られてるのって嬉しいよね！

「紅さん」

「はい？」

「なにか、差出人に心当たりはありませんか？」

「え、えぇと……」

「こはるぅ、たぶんないと思うさぁ」

「えっ？　どうしてですか、叶ちゃん？」

えへへへぇ。
そっかぁ。

「いや、紅は人気者だからさねぇ……」

「いえいえ、そんなことは」

「あるさぁ」

「……成績優秀、容姿端麗、品行方正、同性異性問わず人気が高い」

「おっ？　ねねも紅ファンなのさ？」

「……噂で聞いただけ」

……音々さん。

音々さんから頼られてるんだ、ボク。

嬉しいなぁ。

「ま、というわけで……」

「本来なら殺意なんて沸くはずもない、ってことですね？」

「そさっ！」

「あ、あの……それは言い過ぎでは……？」

「いやいやいや、言い過ぎではないのさっ」

「……それが原因では？」

「どういうことですか、音々さん？」

……。

……よ、よしっ。

「……完全さに対する嫉妬、という可能性」

「あっ、確かにそれなら……」

「……いや、実は紅に対する反対勢力は微塵もないのさ」

「えっ！？　そうなんですか！？」

「そ！　生徒会長様の全校調査によると、なんと支持率ひゃくぱーと出た！」

「それは、凄いですね」

「……凄い」

「ま、何にせよ。容疑者絞りは無駄なことさねぇ」

「じゃあ、どうしましょうか？」

ボクに出来ることなら、何でもしようっ！

それに応えられたら、きっともっと頼ってくれるよねっ。

「それでさっ！　考えた作戦が一つ」

「……作戦？」

「そさ！　囮作戦って知ってるぅ？」

「……えっ！？」

「もしかして、私を使って誘き寄せる、んでしょうか？」

「……それはダメ。依頼人を危険な目には遭わせられない」

「それでは、どうするんですか？　私を囮にしないなら……」

「ふっふっふっ。適任がいるさ」

……よ、よしっ！

「が、がんばるぞぉぉ！」

「なっ？　七海ぃ！」

……。

「ふぇ？」

――？？？視点

殺したい。

あの人を、殺したい……。
あの人……紅さんを。

この気持ちは、きっと殺すことでしか晴れないから。

あぁ、早く週末が来ないかなぁ。

待ち遠しい待ち遠しい。

この想いが叶ったら……って……。

あれ？

そういえば、なんで殺したいんだっけ？

あれ？

そういえば、この気持ちって……？

『その感情は殺意だよ』

『真っ赤で真っ黒な殺意』

……。

あぁ、そうだ。
その通りだった。

これは、殺意だった。

殺意だから。

殺さなきゃ。

殺さなきゃ。

『そう』

『いってらっしゃい』

第四十二話　Ｊを想う者／企み（後書き）

Ｊ編二話目終了です。

久しぶりにこんなに間を空けずに更新出来ましたが……。

辛いですねぇ（　▽-　；）

なにより
指が痛い！！

ひたすらに吊りそうです（汗）

次回更新は……未定です（汗）
ごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

出来るだけ早く
更新できるよう頑張りますが……。

では、また！

第四十三話　Ｊを想う者／憎しみ（前書き）

更新です。

それでは、どうぞ！

第四十三話　Ｊを想う者／憎しみ

――土曜日・天野原邸

手紙に書かれていた予告の週末がやって来た。

探偵事務所一行（未だ目覚めない海斗以外）は、天野原邸にやって来ていた。

小春と咲也は二度目、音々は初めての訪問である。

「二回目ですけど……緊張しますね」

「……確かに凄いお屋敷」

「あ……うぅぅ」

と、先の三つがそれぞれ三人の反応である。

まぁ、いつも通りの反応である訳だが……。

その中で、一人だけ……

「あわっ……うぅ…うぅぅ」

咲也の反応だけが、

「あぁあぁぁ……うぅぅ！」

異常なまでに過剰であった。

「……あの、大丈夫ですか？」

その様子に、ついそう訊ねてしまったのは、紅である。

紅のその問いかけに、咲也は情けない声をあげながらも、何とか笑顔を作り、答える。

「は、はぃ……」

なんとも情けない返事である。

が、これも仕方のないことではある。

なぜなら……、

「やっぱり私がやりましょうか？　……囮」

「や、いや、大丈夫ですっ！　ボボ、ボクがぁ、しますっ！」

というわけである。

叶が提案した作戦、それは……、

「偽者の紅を襲わせる」

というものだった。

本来ならば、同じ背格好の人間がやるべきである。

しかし、もし襲われた時に、身を守る力がない者では怪我を負ってしまう。

そこで、身を守る力……つまり、仮面ライダーになれる咲也が囮に選ばれたのだ。

決して、叶の『面白そうな思いつき』ではない。

……決して。

……たぶん。

それで、その肝心の発案者は、というと……

「……発案者が欠席はおかしい」

「家庭の事情じゃ仕方ありませんよ」

と、紅のフォローの通りである。

叶は家庭の事情とやらでここにはいないのだ。

が、そんな理由で、恋人が危険に晒されることに黙っている音々ではない。

「……しかし、発言の責任はしっかり取るべき」

「……囮を変われ、とは言わない」

「……でも」

一度口を開いたら止まらない音々。

いつものクールさからは、考えられない饒舌さである。

まぁ、当然といえば当然ではある。

そんな音々に、

「だ、大丈夫ですっ、音々さん！」

他でもない咲也本人が、その不満を塞き止めた。

「……咲也？」

「ま、任せてください！」

「でも」

「ダイジョブですっ、ボクがやります……」

「……」

――咲也視点

紅さんの家を出てから、どのくらいが経っただろう？

三十分？

一時間？
それとも、もっと？

とにかく、ボクは歩いていた。

紅さんが普段着るような服と紅さんの髪と似たカツラ。

そして、服で隠すように、ロストドライバーを着けて。

「うぅぅ……」

どうしても声が出てしまう。

いつでも変身は出来るといっても、

「……やっぱり怖いよぉ……」

怖い。

だって、あんな手紙を出してくる人を相手にするんだから……。

……それでも、頑張りたい。

音々さんに頼りにされてるんだし、それに……。

「兄さんっ」

今は、兄さんにも頼れないんだから。

――カツンッ。

気を引き締め直した時だった。

その足音が聞こえたのは。

そして、声。

その声は、

『天野原紅さん』

まるで、この世のものとは思えない、

『……じゃないよねぇ！？』

殺意に満ちた声だった。

――音々視点

ちょうど土宮の屋敷を出て、十五分が経った時だった。

咲也の背後に、それは現れた。

『貴方はだぁれ？』

殺意に満ちた声。

それを聞いて、咄嗟に叫ぶ。

「咲也！」

「ふぇ！？」

「ナイトにっ！」

本当に咄嗟だった。

「っ……変身っ！」

彼がドライバーを展開した。
それと同時に、白銀の鎧が現れ、彼をナイトへと変えた。

「……ふ」

一つため息をつく。

……が、まだ安心するのは早かった――。

『私の邪魔、しないでぇぇぇぇぇぇぇ！！！』

「っ！？」

「音々さんっ！」

私を呼ぶ小春の声がした。

だけど、目を離せない。
目の前に迫る『それ』から。

『死んじゃえぇえぇぇ！』

余りにも過剰すぎる殺意。

「っ」

思わず目をつぶってしまう。

避けなくては――。

そう思うだけで、身体は動かない。

――殺られる。

そう思ったその時、

「やめろぉぉおぉ！！」

『ナイト――マキシマムドライブ』！！

声がした。

彼の声が、した。

恐る恐る目を開く。

そこには、

「っ……はぁっ……ダイジョブですかっ、音々っ、さん……」

『それ』から私を護るように、自らの体を盾にしている彼、ナイトの姿と……。

『がぁぁあぁ、がぁっ！？』

攻撃を中断してまでも、苦しむ『それ』の姿があった。

「音々さん、七海くん！」

と、小春も私たちの側に近付いてきた。

「二人とも、大丈夫でしたか！？」

「う、うん。ボクは平気」

「同じく」

と、咲也も無事であることを確認してから、冷静に状況を整理する。

まず、この私に襲いかかってきた奴は、今回の脅迫状の犯人。

そして、ナイトの盾のマキシマムが効いている。
つまり、これはドーパント。
なら、

「これを天野原紅に届ける？」

「「いやいやいやっ」」

……却下されてしまった。

「とにかく警察に頼みましょうか？」

と、小春。

確かに、それが無難だろう。

……ふむ。
こういう後のことは、いつも海斗任せだったから、よく分からない……。

と、小春たちとこの後のことに話していると、

『……』

『それ』が、妙に静かなことに気付く。

……？

さっきまで、あんなに苦しがっていたのに――

『……殺さなきゃ』

「「「えっ？」」」

『……殺さなきゃ、殺さなきゃ、殺さなきゃ、殺さなき、殺さなき、殺さなき、殺さなき、殺さな、殺さな、殺さな、殺さな、殺さな、殺さな、殺さな、殺さ、殺さ、殺さ、殺さ、殺さ、殺さ、殺さ、殺、殺、殺、殺、殺殺』

――ドクンッ

『きやぁぁあぁあぁあぁぁぁぁぁあぁぁぁぁあぁああぁぁぁあぁっ！？』

突然、『それ』が失いかけていたものを、殺意を取り戻した。

「っ！？」

三人とも、いきなりのことに動けない。

が、

「っ！　ねねさんっ、こはるさんっ」

咲也が、辛うじて動いた。

――ギィィィィン――

彼の鎧と『それ』のナイフがぶつかって、金属音が響いた。

「うぅっ！？」

なんとか仰け反りつつも、私たちの前で盾になってくれたナイト。

変身を解いていなかったことが幸いした。

もし、変身を解いていたらと思うと、ぞっとする。

「っ……なんで……？」

咲也が呟く。

そうだ。

このドーパントはナイトのマキシマムを食らったはず……。

なのに、なぜ動ける？

とにかく、一旦、

「……咲也」

「う、うんっ」

名前を呼んだだけで、私の意図が伝わったよう。

こういう時は助かる。

「小春っ」

「は、はい！？」

小春の手を取って走り出す。
いきなりだったため、小春は混乱してるようだ。

「音々さん、一体っ」

「……逃げる」

戦略的撤退。

自分の身を守る力のない私たちは勿論、マキシマムが無効化されたナイトも、一度逃げた方がいい。

それが私の判断だった。

が、

『あぁぁぁあああぁぁぁあぁあぁっ！？！？』

「うっ！？」

――甘かった。

現状認識も判断も甘かった。

咲也が押し切られている。

このままじゃ、逃げられない。

全員……

「殺すぞ、あぁ？」

「……えっ？」

――咲也視点

ボクとドーパントとの間に、突如として現れたその人。

それは、

「蒼くん？」

「咲也か？　この前ぶりだな」

蒼くんだった。

短いナイフを、ドーパントのナイフの持つと重ね、こちらには振り返らない。

その状態で、蒼くんは質問をしてくる。

「こいつだよな？」

「……えっ？」

短い問いかけ。

でも、その声には、強い感情が隠っていることがわかった。

その感情の正体は、

「紅姉を殺そうとしていたっつう、屑野郎はっ！！！」

「ひっ……う、うん」

怒りや憎しみのそれだった。

その感情のあまりの強さに、悲鳴をあげかけて堪える。

なんとか返答できた。

『なんで……邪魔するのぉ……』

『わ……はっ……こ…んに……いを……けなのに……』

『だから……殺さなきゃ』

「えっ？」

殺さなきゃ、という言葉の前。

何か、ドーパントが言っているのが分かった。

何かを、訴えるような声が。

だけど、小さくてか細い声。

だから、聴こえない。

そんなドーパントの様子に、目もくれず……

「そうか……じゃあっ！」
「……蒼くん？」

「潰れろっ！」

蒼くんはナイフを振り抜いた。

第四十三話　Ｊを想う者／憎しみ（後書き）

こんな感じの
Ｊ編三話目でした。

前回から四話で一つのエピソードになっていますので！

いかがでしたでしょうか？

と、言っても
あんまり話は進んでいない気が……（汗）

まぁ、次で話がかなり進むんで、今話はご了承くださいｍ（＿）ｍ

次回更新は
今週中にはする予定です。

では、また！

第四十四話　Ｊを想う者／歪み（前書き）

Ｊ編完結です！

どうぞ！

第四十四話　Ｊを想う者／歪み

『やめるさっ！』

――咲也視点

蒼くんのナイフが、ドーパントを切り裂く直前、怒声が響いた。

同時に、二本の黄金の剣が降ってきた。

その剣が、二人の間に刺さる。

「っ！」

『うっ！？』

聞き覚えのある声。

あれ？

この声って――。

『らぁぁぁぁ！』

誰かがドーパントを蹴り飛ばした。

その誰か。

それは、いつかの屋上で見た黄金の騎士。

……って、えっ！？

さっきの声は、絶対に……。

ボクが呆然としている間に、黄金の騎士は持っていた杖に、何かを入れた。

と、同時に、

『アドベント』

機械音がなり、

――キィィィッ！

何処からともなく、騎士と同じ黄金色をした鳥が現れた。

『ななみっ！』

「ふぇ！？」

いきなり名前を呼ばれた。

ボクを呼んだのは、黄金の騎士。

「えと、なんでボクの名前を……？」

『いいから、変身解くさっ！』

「はっ、はいっ！」

言われた通りに変身を解くと、その騎士に腕を捕まれた。

この展開には、覚えがある。

だから――、

「音々さんっ、小春さんっ！！」

二人を呼んで、手を伸ばす。

その手を音々さんが、掴んだ。

『ぴー子！』

――キィィィ！！

騎士の声に応じるように、鳥は羽ばたき、ぐんぐん高度を上げていった。

――水舞高校生徒会室・小春視点

私たちは今、休日の生徒会室にいます。

本来ならば、部外者は立入禁止らしいんですけど……。

とりあえず今は大丈夫でしょう。

それは、休日だから、という理由ではなく……

「で？　説明してもらうさ」

生徒会長である叶ちゃんが一緒にいるからです。

ちなみに、叶ちゃんの他にここには、私と七海くんに音々さん。

そして、ドーパントと交戦していた天野原蒼さんがいました。

「生徒会長様がなんで邪魔しやがるっ！！」

その蒼さんはというと、叶ちゃんに対して、怒鳴り声をあげていました。

かなり怖い……。

……本当に年下なんでしょうか？

いえ、それは今はいいです。

それで、なぜこんなに怒っているのか、というと、

「か、叶さんが黄金の騎士の正体だったんですね……」

そう。

今、七海くんが言ったように、叶ちゃんがあの騎士の正体だったのです。

……私、聞いてないです！

と、いつもなら言っていたと思いますけど、今は言葉が出てきません。

余程、私も七海くんも驚いた顔をしていたようで、叶ちゃんは、苦笑しながら言いました。

「まぁ……そうさね……」

その表情は、いつもの叶ちゃんらしくないもので……。

もしかすると……。

「……叶ちゃん」

「ん？　なんさ？」

「聞かない方がいいです、よね？」

気付くと、私はそう言っていました。

なんとなく、そうすべきだと感じて。

私の質問に、叶ちゃんは苦々しげに頷いて、

「そうしてくれると、助かる」

返ってきたその答えに、私は頷き返し、話を変えることにします。

「えぇと、叶ちゃんに今の状況を説明しますね？」

「ふむ、なるほろ……」

一通り説明し終わると、叶ちゃんは、腕を組みながら唸り始めました。

今の状況を整理してるんでしょうけど……。

そんな中、

「おいっ！　いつまで、ここにいる気だ!?　あいつを潰しゃいい話だ」

と、蒼さんが騒ぎ出しました。

潰すって……。

本当に乱暴な人なんですね……。

見た目は、インテリ系の好青年なのに……。

「そ、そうくんっ、お、落ち着いてっ」

そう言って、蒼さんをなだめにかかる七海くん。

「黙れ、咲也」

「で、でもねっ」

「つか、お前が落ち着いてなんて言える立場じゃねぇだろ。落ち着きがねぇてめぇに言われたくない」

「……う、うぅぅ」

……。

七海くん、言い負かされちゃいましたね。

まぁ、なんとなく分かってましたけど。

「……貴方」

「あ？」

七海くんを慰めていた音々さんが、突然、蒼さんに声をかけ、

「……馬鹿？」

って！？

「ちょっと音々さん！」

「なに、小春？」

いや、何って……。

「なんで火に油を注いでるんですか！？」

「……や、だって、この人馬鹿だから」

「理由になってませんよっ！」

それに、そんなこと言ったら――

「だと、てめぇ……。もう一回言ってみろ」

や、やっぱり……。

「馬鹿じゃないかと言った」

こっちも引かない！？

「ふっ……ふふ……」

そして、叶ちゃんは笑ってる！？

って！

「叶ちゃん！」

「……ぷっ……んん？」

「笑ってないで止めてくださいっ！」

「いやぁ、このままにしときゃいいさぁ」

「なっ！　なんでですか！？」

「んー、見てれば分かる」

「……」

もう、いいです……。

色々疲れました……。

諦めましたっ！（自棄）

――蒼視点

「誰が、馬鹿だ！」

「貴方」

「このっっ！」

なんだ、こいつはっ！？

イラつく。

かなり、だっ。

助けてやったの忘れてんのか？

咲也にくっついてるとこを見ると、咲也の女みたいだが……。

咲也も、このムカつく女のどこがいいんだか。

「貴方は……」

「ああ？」

「貴方は敵を殺そうとした」

「悪いかよ？」

「……悪い」

悪い？
んな訳ない。

「あの野郎は、紅姉を……俺の家族を殺そうとしていた屑だっ！」

「んな奴を殺そうが何しようが構わねぇだろうがっ！」

「……」

やっぱりな。
この程度で黙る奴に、何が分か――

「貴方……」

「あ？」

「……貴方の殺意は歪つ」

「貴方には何かあるのかもしれない」

「でも、それも」

「人を殺していい理由にはならない」

「復讐からは何も生まれない」

復讐からは何も生まれない？

「ふざけんなっ！！」

女の胸ぐらを掴み、

「俺の気持ちも分からねぇくせに知った気になってんじゃねぇ！！！」

――叫ぶ。

復讐を、『あの人』の敵討ちを否定した奴は……許さねぇ……。

胸ぐらを掴んで、数秒。

「……ふぅ」

女はため息をついた。

そして、

「……冷静に考えて」

「貴方が家族を想っているというのなら、ちゃんと考えるべき」

「貴方が人を殺した後に、残される家族の気持ちを……」

「――っ！？」

くっ……。

俺が嫌いな正論だ。

だが、

「……分かった……」

……その通り、だ。

紅姉と瑠色に嫌な思いはさせたくない。

奴を殺すことはしない。
それだけは守ってやる。

そう言うと、女（確か、音々つったか？）は、静かに頷いた。

――小春視点

ヤクザみたいな切れっぷりを見せた蒼さんでしたが、
結局、音々さんのおかげである程度落ち着いたみたいです。

スゴいですね、音々さん。

と、感心していると、

「……あと一つ、気になることが」

未だに七海くんを慰めている音々さんが手を挙げ、そう言いました。

「気になること、ですか？」

「そう」

問いかけると、音々さんは話を続け――

「その前にっ！」

……る前に、横槍が入りました。

横槍を入れたのは、言うまでもなく、叶ちゃんです。

「どうしたんですか？　話の途中で……」

「……これからがいいところ」

音々さんと二人で抗議するも

「こっちの方が重要さ！」

無論、却下されました。

……まぁ。

分かってはいましたけどね。

「ま、話もまとまったとこで、叶様から重大発表！」

「「「「……」」」」

私も音々さんも、若干拗ねていた七海くんも、不貞腐れていた蒼さんも。

たぶん同じことを思っていたでしょう。

絶対ロクなことじゃない

……と。

――天野原邸

もう日も落ち始めた頃、彼女は天野原邸にいた。

目的は一つ。

天野原紅の殺害。

昼間は変な邪魔が入ったが、屋敷の中で、追い詰めて殺せばいい。

彼女は、昼間の失敗を経て、次の手をそう決めていた。

休日の夕方。
その時間帯を選んだのにも理由がある。
その時間、基本的に天野原の屋敷には彼女以外に、誰もいないのだ。
それのことは、彼女が最も熟知していた。

何故なら彼女は、この屋敷の使用人なのだから。

学校の下駄箱に手紙を入れた。
屋敷の外で襲おうとした。
そもそも、それらの手間は全て、自分に疑いがかからないためだった。

だけれど、

「……どうでもいいや」

そう思うようになった。

自分が疑われることより、紅を殺せないことの方が重大な問題だ。
彼女の中で、その思いが強くなる。

だから、

「……紅様」

彼女は、部屋にいた紅に声をかけた。

「あら？　どうかしました？」

いつものように、紅はそう言葉を返してくる。

その反応が。
その声が。
その笑顔が。

彼女の中の感情を駆り立てる。

強い、殺意を。

「今、殺して差し上げます」

「えっ？」

「……」

彼女は、無言で『それ』を取り出す。

『それ』は、力をくれるもの。

殺すための力を。

「……きゃ」

『ジャック・ザ・リッパー』！

起動したガイアメモリは、
彼女の首に入ってゆき、彼女は殺人鬼・ジャックザリッパーを模した姿へと変貌を遂げた。

そして、

『殺さなきゃぁぁ！』

「っ！？」

ナイフを振りかざす。

今度こそ殺すために。

「……なるほどな」

――蒼視点

「……なるほどな」

――ギィィィンッ

奴のナイフを、自分のナイフで受け止める。

金属がぶつかり合う嫌な音が鳴り、

「らぁぁぁぁぁっ！！」

――ガンッッ

『なっ！？』

目の前の人物が突然変わったことに対する動揺。

その一瞬の隙を逃さず、奴の手をナイフの柄で殴った。

その不意打ちに、対応できる訳もなく、

『くぅっ……あ！？』

――カランッッ――

奴はナイフを落とす。

勿論、それを見逃す俺ではない。

「っ――だぁぁぁ！！」

『ぐっ……！？』

ナイフで、目の前のこいつを切っていく。

一応、力をセーブして、だ。

「らぁ！」

「おらっ！」

「だぁぁぁせいっ！！」

『がっ、ぐあぁぁぁあぁあっ！？！？』

何度も。

何度も、斬りつける。

そして、最後に横に一閃。

それを受けた奴は、後ろに転倒した。

「はっ、決めてやるよっ！」

『トリック――マキシマムドライブ』！！

ナイフのマキシマムスロットにメモリを入れた。

いつもの感覚がナイフを持つ右腕全体を包む。

それを、そのまま、振りおろ――

――ドクンッ

『……がっ』

「っ！？」

『ぐがぁぁぁぁぁぁ！？！？』

突然だった。

奴は声をあげた。

声……叫びに近い声。

それをあげて、奴は、

『……が、うぅ……』

奴は、立ち上がった。

立ち上がり、言った。

『……なんで、こうなっちゃったの……』

その声は、今までとは全く違う、弱々しいもので……。

『あっ……あぁぁあぁ！？』

それでも奴は、俺に向かってきた。

――木場氷視点

私は、木場氷、という。

ただの高校生だったのが、今から半年前のこと。

つまり、裏を返せば、半年前に普通の高校生じゃなくなった。
そうならざる負えない出来事が私の身を襲った。

私は親に売られた。

私の家は、片親でお父さんしかいなかった。
そのお父さんは、家のことを考えない、酒に、ギャンブルに溺れている人だった。

だから、借金があっても不思議ではなかった。
なのに、私はそれに気づかなかった。

気づいた時には、

……売られていた。

お父さん……。

いや、かつてお父さんだった人は、借金をチャラにするために、娘の私を差し出したのだ。

私は逃げた。

けれど、たかが女子高生が逃げられるわけもなく……。

怪しい人達に、捕まり、襲われそうになった、その時――

「その子、私が買いますっ！！」

そう言って現れたんだ。

彼女、天野原紅、様が……。

どうやって、人身売買のことを知ったのかも分からない。

なんで、そんなことを言ったのかも分からない。

だけど、助けてくれた。

その後、私は、紅様に連れられて、天野原家にやってきた。

そこで、言われた。

「ここで働かない？」

私は二つ返事で答え、使用人に、メイドになった。

――音々視点

『あぁあぁぁぁあ！？』

「っ、ぐっ！？」

私達が、天野原紅の部屋に入った時、彼は押されていた。

前は、圧倒していたのに、なぜ？

そう思った。

だが、それと同時に思う。

『なんでっ、なんでぇぇぇぇ！！！』

「るっせぇ！！」

――ギィィィン

「……」

あのドーパント……。

「ねねさん？」

「どうしました？」

今、追いついたようで、咲也と小春の声がする。

でも、それどころじゃあなかった。

だって、あのドーパント……、

「……私、みたい……」

昔の私のようだったから。

――木場氷

天野原家で働くようになって三ヶ月。

私は、新人のメイドとして、仕事をこなし続けていた。

でも、慣れない仕事だったから、やっぱり失敗はしてしまっていた。

そんな時、必ず紅様は、私を励ましてくれた。

「大丈夫ですよ」

「こんな仕事、初めてでしょうしね？」

「それに」

「頑張ってるの、知ってますから」

「だから……」

「元気出してください」

「ね？」

……私は。

その笑顔に。
その言葉に。
その心に。

惹かれていった。

そして、気づいたら……

殺したくなっていた。

あ、あれ？

なんで？

殺したく、なった、の？

どうして？

わたし……は？

――音々視点

「さくやっ！」

「ふぇっ！？」

私は叫んでいた。

無意識に、咲也の肩を掴んでもいる。

『がっ、わっ……たしっ……はっ！』

聞こえてくる声。

あのドーパントの、いや。

あの娘の声。

強大すぎるメモリの力に呑まれて、今にも自らを失ってしまいそうな声。

それが、聞こえていた。

だから、

「おねがいっ、さくやっ！！」

「ねねしゃん！？」

「あの、娘を、助けてあげてっ」

そう言っていた。

早く。

早く助けないとっ！

「……あの娘も呑まれてしまうっ」

「っ、七海くん！　行ってください！」

「う、うんっ」

咲也が駆け出していく。

そんな彼の横を、

――――――スッ

何かが、駆け抜けた。

――木場氷視点

『あっ、うぁぁぁ！？』

「……っ」

拾ったナイフを振り回す。

邪魔をするなっ！
私は、殺すんだっ！

――彼女を。

殺すんだ。
殺すんだ。
殺すんだ。

『邪魔を、するっ……なぁ』

「うぜぇ！！」

――カランッ

ナイフが、手から落ちた。

はじかれたんだ。

でも、殺すんだ。

どんなことがあっても。

殺すんだ。

殺、すんだ。

殺、すん……だ。

『……殺すんだ』

「もうだまれぇ！！」

『トリック――マキシマムドライブ』！！

殺、すん……だ。

ころ、すん……だ。

「らぁぁあっ！！」

『……ころ、すん……だ』

ころ、す……ん……だ。

ころ――――

「やめてぇぇっ！！」

声。

そして、

――――ギュッ。

身体を包む、ぬくもり。

この声は……。

「紅ねぇ!?」

……そうだ。

紅、さまだ。

私がころしたい人。

「おい、紅姉!」

「……蒼ちゃん、もういいよ……」

「よくねぇよ！！　こいつはっ！」

「いいのっ！！」

あぁ。

……やっぱり。

この人は優しい。

だから、ころしたくなるんだ。

あれ？

ころしたくなる？

「この娘は、氷ちゃんだよ」

「なっ！？　あのメイドだと！？」

「うん……ある人から聞いたの」

おかしいな。

この感情が、さつい？

ころしたくなる感情？

「氷ちゃん」

『……はい、こうさま』

「ごめんねっ、気づいてあげられなくて……」

『……』

「私のこと……」

そうだ。

違う。

これは、さついなんかじゃない。

これは……

「好きだったんでしょ……」

『……はい』

『私、紅様の……こと……』

『好き、なんです』

「だから……」

――ギュッ

紅様のぬくもりが強くなる。

なんで？

……あっ、そっかぁ。

『ジャック・ザ・リ――

――パリンッ

私、人間に戻れたんだ。

――事件報告（代理）

依頼人

叶ちゃん（空野叶）

依頼内容

友人・天野原紅に脅迫状を出した犯人を突き止めてほしい

詳細

今回の依頼は、天野原紅さんに、脅迫状を出した犯人を見つけることでした。

結論から言えば、犯人は天野原家でメイドとして働いていた木場氷さんでした。

動機は、殺したいだけ、みたいでしたが……

結果

七海くんを囮にした作戦では、ドーパントになっていた木場さんを誘き寄せることには成功しました。

でも、ナイトのマキシマムが破られたことと蒼さんの乱入で、一旦離脱しました。

そして、二度目の囮作戦。

『トリック』メモリで、紅さんに成り変わった蒼さんに、木場さんは襲いかかりました。

それを止めたのは、紅さん本人。

紅さんの身体を張った介入で、木場さんのメモリは自然に壊れて、事件は終わりました。

ちなみに、木場さんは今まで通り、天野原家のメイドではなく……。

紅さん専属メイドになったそうです。

「うん、よく書けてるよ」

――鳴海探偵事務所水都支店・小春視点

「……よく書けてるよ、じゃないですよっ！」

事件の翌日の月曜日。

私は、授業が終わってすぐに探偵事務所にやってきました。

そして、現在。

目の前の人……海斗さんに怒鳴っていました。

「小春ちゃんは笑顔の方が可愛いよ？」

「私だって好きで怒ってるんじゃありませんっ」

そう。

私が怒ってるのには、ちゃんとした理由があります。

実は、私たちが調査に乗り出した日に、海斗さんは目覚めていたというのです。

なのに、海斗さんは、私たちに連絡もせず、一人で事件について調べていた、という……。

「ほら？　やっぱり事件は早く解決した方がいいでしょ？」

「それはそうですけどっ！　……うぅ」

せっかく、心配していたのに……。

「……小春ちゃん？」

「何でもないですっ！」

「そっか」

はぁ、倒れたっていうのに……。

って、そうでした。

「海斗さん！」

「何かな？」

「私たちがいない間、翔太郎さんかフィリップさんから電話きましたか？」

忘れていましたが、フィリップさんに海斗さんのメモリについて、調べてもらっていたんでした。

「いいや、来てないよ」

「……そう、ですか」

どうしたんでしょうか？

まだ調べ終わってないとか……。

もしかすると、事件で忙しいのかもしれません。

なら……。

「わざわざ電話はかけない方がいいですよね……」

――鳴海探偵事務所

「フィリップ」

「ん？　なんだい、翔太郎？」

「例の件、海斗に直接伝えといたぜ」

「あぁ、そうか。ありがとう」

「だが、本当なのか？」

「……あぁ」

「水町海斗がなったフォームは、その特徴から『ファング』であることは、まず間違いない」

「だがよぉ、フィリップ……」

「あぁ」

「僕は、彼のドライバーには……」

「『ファング』の記憶は入れていないんだ」

――エンタープライズ・会議室

「よぉ、『I』。あれは、どうなった？」

「ん？　なんだ、『W』か」

『I』は、『W』を一瞥すると、自らのメモリを弄りながら、答えた。

「例の殺人鬼のメモリは順調かよ？」

『Ｉ』の隣に、座る『Ｗ』。

椅子の上だというのに正座である『Ｉ』。

椅子にだらしなく座る『Ｗ』。

その様子から、正反対なのは身長だけでないことが、見て窺えた。

「……壊れた」

「壊れたぁぁ！？　なんでまた？」

「刷り込みが甘かった、みたいだ……」

「ははは、お前が失敗したとはなぁ！」

『Ｗ』は本当に可笑しそうに笑う。

それを見て、『I』は顔を歪めた。

「だが、分かったこともある」

「んあ？」

今までの表情から一転、『I』は笑顔で、言う。

「『子供達』が確定した」

「ほう！　誰だっ？」

「水町海斗」

「七海咲也」

「天野原蒼」

「この三人が、『子供達』だ」

「そして……」

「『X』の見当もついた」

第四十四話　Ｊを想う者／歪み（後書き）

いかがでしたでしょうか？

Ｊ編完結話でした。

……。

……はい。

わかってます。

四話編成にしました。

……はい。

そうです。

相変わらず長ぇぇよ！

……ですよねぇ（「▽｜　；）

なぜか、こんなに長く……。

ごめんなさいm（＿）m

そして、次回更新は未定。

ごめんなさいm（＿）m

……はぁ（汗）

では、また！

番外編　２５日の過ごし方／クリスマスは二人で過ごそう×三人分（前書き）

こんばんは
お久しぶりの藍沢です。

今回は
クリスマスと言うことで
ショートの番外編です。

ありきたりですが
……どうぞ！

番外編　２５日の過ごし方／クリスマスは二人で過ごそう×三人分

本日は１２月２５日。

世間一般には、クリスマスと言われている日だ。

今から記すのは、三組の男女のクリスマス。

詰まる所、日常の中の些細な非日常の話である。

――咲也と音々の場合――

「……あーん」

「……ふぇ」

「……だから」

――七海家・咲也の部屋・咲也視点

「……あーーーん」

「ふ、ふぇぇぇっ」

ボクは叫んでいた。

といっても、恐怖心から来る悲鳴じゃなくて、恥ずかしさから来る悲鳴。

「……あーーーん」

「あ、あのっ……ね、ねねね、ねねしゃん！？」

名前を呼んでみても、今の状況は変わらない。

今の状況、それは、

『音々さんが手作りケーキをボクに食べさせようとしている状況』
だ。

嬉しい。
けど、恥ずかしさに耐えきれないし、それに……

「……む」
――ギュウウウウウ

「は、はわぁぁ！？」

いきなり音々さんが、ボクの腕に抱きついてきて、思わず情けない声をあげてしまう。

うぅぅ……。

けど、しょうがないんだよぅ！
だって、柔らかいし、いい匂いするしっ！

混乱と緊張の中で、腕に感じるのは、とっても柔らかい、ね、音々さんの――

「……あーーん」

――むにっ

「あうぅぅ」

音々さんがボクの口許にケーキを運んでくる。

けど、食べれないよぉ。

だ、だって……む、むむむむ、むにぇがぁ……。

「……？　咲也、顔赤い」

「ふぇっ、そそそ、そのっ!?」

「熱がある？」

「い、いや……あのっ」

「……おでこ」

「ふ、ふぇ？」

音々さんが顔を近づけてくる。

……って！

「ねねしゃん、ちかいでしゅよ！？」

「……そうしないと測れない」

「で、でもっ」

――むにぃぃぃ

「はうっ！」

むにぇっ、あたって――

「……熱、あるか分からない……」

「じゃあっ、ちょっと離れて――」

「……」

「……ね、ねさん？」

「……体温を測るには、口の中が一番いいらしい」

「……ぇ」

今、なんて……？

「……んー」

って、ふぇぇぇ！？

な、なんで！？

いきなりどういうこと！？

音々さんが
ねねさんの顔がっ
ねねしゃんの唇がぁぁ

「んー」

ボクの顔の近くにっ!?

そ、それにっ

――むにぃぃぃぃぃぃ

「はぅぅ!」

む、むにぇもあたってて。

心臓が、バクンバクンバクンバクンバクンバクンバクンバクンバクンバクン

はぅ！

「……んー」

はぅぅ！

――むにいいいい

はぅぅぅぅぅぅぅぅ！？

――――ボンッ！

「きゅうううう……」

「……沸騰した」

「はぅぅ」

「……むぅ」

「……先は長い」

――蒼と瑠色の場合――

「……なぁ、瑠色」

「どうしたんですますか、お兄ちゃん？」

「これは、紅姉に怒られないか？」

――商店街・蒼視点

俺と瑠色は、商店街に来ていた。

今日は、本来、クラスの女子に映画に誘われていた。

だが、瑠色が遊びに行こうというので、誘いを断って今に至っている。

それで、紅姉に怒られないかと言ったのは、

「えへへなのです！」

――ギュッ

そう。

腕を組んで歩いている今の状況に、だ。

どうやら、紅姉は、俺と瑠色が仲良くするのを嫌ってるようだ。

甘えたがりな瑠色を、撫でてやったり、手を握ってやったり。

あとは、今みたいに腕組んだり、とか。

ただそれだけだ。

だが、そんな時、紅姉は必ず恨めしそうな顔をする。

何故かは知らんし、見当もつかん。

だが、俺としては、大切な家族である瑠色、紅姉とは、仲良くしたいんだが……。

と、考え込んでいた所で、

「大丈夫なのです！」

俺の心配を否定した瑠色。

なんでだ、と聞くと、

「周りも腕を組んで歩いている人が多いのです。だから、ダイジョブなのでします！」

そう言うことらしい。

まぁ、確かに。
クリスマスなだけあって、
周りは腕を組んでる奴らがうようよいやがる。

雰囲気なんて、普段はくそくらえだが、確かに今は好都合かもしれん。

「確かにこの人混みなら、紅姉がいても、わかんねぇか……」

「ですっ！」

ならばと、俺は瑠色が腕を組んでくることを許してやった。

それを聞くと、瑠色はさらに身を寄せてくる。

そのうち……

「瑠色とお兄ちゃん……恋人に見えてますですかね？」

なんて言ってくる始末だった。

勿論、本気で言ってる訳じゃなくて、テンションが上がっての発言だろう。

中学生とは言え、クリスマスではしゃぐなんて、まだまだ子供だな。

そんなことを考えていると、瑠色が突然、

「……しあわせですますぅ」

「今なら、紅お姉ちゃんに見つかってもいいですぅ……」

なんてことを言う。
それに俺は苦笑混じりに返した。
「俺は勘弁だな」
「……なんでですぅ？」
「いや、紅姉はキレると怖えし……」
実は昔一度、紅姉がキレた所を目の当たりにした時がある。
顔を真っ赤にして、理解不能言語を叫びながら、椅子やら机やらを投げ飛ばす。
普段の落ち着いた紅姉からは、信じられない姿だった。
もし、紅姉が今の俺らなんかを見たら……。
この状況だけを見るに、確実に誤解されるだろう。
瑠色にそんな意図がこれっぽっちもなくても、だ。

「うーん、怒ったお兄ちゃんの方が怖いですますよ？」

俺らにキレる紅姉をシュミレーションして、戦慄していた途中で、瑠色がそんな風に話を変えてきた。

ずいぶん急な話題転換だが、とりあえず答える。

……って。

「俺、瑠色に怒ったことあったか？」

「ないです。でも、強盗の時とか……」

そう言って、瑠色は顔を伏せた。

あぁ。

あんときか。

……まぁ、確かに。

あんときは、ぶちギレてたからな……。

あー。
でも、そりゃ……

「そりゃ、大切な瑠色が危ない目にあったんだ」

「当然怒りもする」

これは正直な気持ちだ。
あんときは、瑠色に寂しい思いも怖い思いもさせたのは分かってる。
だが、動かずにはいられんかった。
許せなかったからだ。
俺の家族を危険に晒した奴を。

「……えへへ」

と、俺の顔を見て、笑う瑠色。

……そうだな。

今日は難しいことを考えんのも、嫌なことを思い出すのもなしだ。

とりあえず

「お兄ちゃんっ♪」

「どうした、瑠色？」

今日は、

「大好きなのですますっ！」

「ははっ」

瑠色と楽しもう。

「……ふ、ふふ……」

「あ、あの……紅様？」

「……氷さん……」

「は、はいっ！？」

「家に帰ったら、私の部屋には入らないで下さいね？」

「わ……わかりました……」

「……ふ、ふふふふ」

――海斗と小春の場合――

「……」

「……」

「……海斗さん」

「なにかな？　小春ちゃん」

「……仕事をしてください」

「……」

「してくださいっ」

「……」

「し・て・く・だ・さ・いっ！！」

「……はい」

クリスマス。

その日は特別な日。

とある二人は一緒にケーキを食べながら。

とある二人は一緒に買い物をしながら。

とある二人は一緒に仕事を片付けながら。

その日を過ごすのだ。

もちろん、皆が皆、ロマンチックなクリスマスを送れるとは限らな

い。

だけれど……。

「……あっ」

「ん？　どうかした、小春ちゃん？」

「……雪」

「あ、本当だ」

「……はは、綺麗だね」

「……はい」

だけれど、二人なら……。

まだまだ先が長くたって。

気持ちに気づいていなくたって。

いつもと同じだって。

二人でいる。

ただそれだけで、幸せになれる。

……のかもしれない。

番外編　２５日の過ごし方／クリスマスは二人で過ごそう×三人分（後書き）

はい
クリスマス特別編でした。

もろに日常ですね
ほのぼのしすぎたかなぁ（「▽」；）

……うん。
たまにはいいでしょう（笑）

次回から
かなり大幅に話が動き出します！

本当は
これと同時に更新したかったんですが
気に入らなかったため
現在書き直し中です（汗）

申し訳ありませんっｍ（＿＿）ｍ

えー
次回更新は
大晦日とかだと思います。

それでは
メリークリスマス！！

第四十五話　Gと神隠し／疑惑の海斗（前書き）

遅くなりました（汗）
更新です！

どうぞ！

第四十五話　Gと神隠し／疑惑の海斗

――？？？

『おいで』

……。

『どうしたんだい？』

……僕は……。

『『僕』？　いや、君は『俺』というべきだ』

……。

『君は、『あの人』にはなれないんだから……』

……俺は……。

『そうさ、分かっているだろう？』

違う、俺は……俺だ。

『……違うね』

『君は……『私』さ』

「……っ！？」

――鳴海探偵事務所水都支店・海斗視点

意識が覚醒し、飛び起きる。

周りを見渡すと、そこは見慣れた僕の探偵事務所。

まだ小春ちゃん達も来ていないようで、しんと静まりかえっている。

「……すぅ、はぁぁ」

一つ、深呼吸をする。

まずは、落ち着く。

そうしてから、思い出す。
今の夢の内容を。

「……また」

内容を思い出し、そう呟く。

そう。
さっきの夢を見るのは、初めてじゃあない。

今まで夢を見ることはよくあった。

夢の内容は、全て、昔の……孤児院時代の思い出。

そして、『あの人』の夢。

だけれど、逆に言えば、それ以外のことを夢に見ることなんてなかった。

それだけ昔のことが心に、脳に、焼き付いているから。

なのに……

「また……あの夢……か」

俺……僕があの夢を見始めたのは最近。

天野原邸での戦いの後に落ちてしまった長い眠り。

その眠りから覚めた直後からだったと思う。

それから毎日、僕は今見ていた夢を見続けている。

……そう。

毎日、毎日。

あの夢は、一体……

――バタンッ

と、自分の夢に思いを巡らせている時に、いきなり大きな音を立てて、事務所の扉が開かれた。

そこに立っていたのは、一人の幼い女の子。

綺麗に切り揃えられた黒髪に、人形のような顔立ち。

年は五歳くらいだろうけれど、将来はかなりの美人になるだろうと簡単に想像できる。

そんな女の子が、

「……うぇぇんっ……」

泣きながら、事務所に入ってきた。

「どうかしたのかな？」

――なでなで

いきなりのことだったけれど、

『可愛い女の子が泣いている』

僕にそんな状況は耐えられるはずもない。

とにかく、女の子を落ち着かせるために頭を優しく撫でてやる。

「……うぇぇん……」

「よしよし」

――なでなで

撫で続けること十数分。

「ひっく……うぅ……」

「いい子いい子」

――なでなで

「……くすんっ……」

――なでなで

「すんっ……」

「……だいじょうぶ？」

「……（コクッ）」

どうやら少しは落ち着いてきたようで、女の子は泣き止んでくれた。

うん、これでよし。

女の子の涙は嫌だからね。

幼くても女の子は女の子。

とにかく泣き止んでくれてよかった。

――くいくいっ

「ん？」

「……おにいちゃん……」

僕の袖を掴んで引っ張ってくるその女の子。

何か言いたげに上目遣いで

僕を見上げてくる。

「どうかした？」

笑顔を返してあげると、女の子は、

「おにいちゃん、いい人……やさしい……」

「わたし……」

「おにいちゃんと、けっこんするぅぅ！」

――ガタンッ

「えっ？」

事務所の入り口。

そこに……

「な、七海くんっ！　警察を呼んでください！」

「ふぇぇえぇ！？」

「……小春」

「なんですかっ!?　音々さん」

「……警察もう呼んだ」

「ありがとうございます」

「ふぇぇえぇ!?」

「……か、海斗さんが女の子好きなのは知ってましたがっ」

「……幼女に手を出した」

「私は所長として、どう責任を取ればっ!?」

「……」

事務所の入り口には、パニック状態の小春ちゃん達がいた。

正直、僕もパニックになってしまいそうだけど……。

「……あぅ、おにいちゃん……」

――ギュゥゥゥゥ

見ると、女の子は僕の腕にしがみついてきていた。

「……うぅぅ」

その声も、身体も小刻みに震えていた。

きっと、小春ちゃん達がいきなり現れた上に、警察を呼ぶとか物騒なことを言っていることに怯えてしまってるんだろう。

かわいそうに……。

……うん。

パニックになってる場合じゃないね。

僕がすべきことは一つ。

それは……

――ギュッ

「……おにい、ちゃん？」

女の子を抱き締める。
頭を軽く撫でてあげることも忘れない。
これは勿論、女の子を安心させるため。
そして、優しく言葉をかけてあげる。

「怖かったね。……でも、大丈夫。君は僕が守るから」

「……」

少しの沈黙。
だけど、その沈黙はすぐに、

「……えへへ」

腕の中から聞こえる嬉しそうな声に破られたのだった。

……めでたしめでたし。

「……いい話っぽく締めないでください、海斗さん☆」

「……」

女の子を抱き締めるのを止め、声の方に振り返る。

そこには、笑顔の小春ちゃん。

……うん、とてもいい笑顔だ。

その手には……作者でさえもその存在を忘れていた……鉄製スリッパが握られている。

そのスリッパには、文字が書かれていた。

『ロリコン撲滅』

それが――。

「この責任は……」

僕が見た――。

「海斗さんを消して償いますぅぅぅ！！！」

最期の言葉だった。

――バキッ

「……で、海斗は頭に包帯巻いてんのな」

――二十分後・鳴海探偵事務所水都支店

ため息混じりにそう言ったのは、通報によって駆けつけた加納源一郎である。

ソファに座る海斗を、見下ろしながら、呆れ顔を浮かべている。

「海斗がやべぇ、って聞いて来てみりゃ……」

「す、すいませんっ！　私が勘違いしたばっかりにっ！」

源一郎の言葉に、一番に反応したのは小春。

その小春は物凄い勢いで、何度も頭を下げている。

「いや、色々な誤解があったんですよ」

当の海斗は、いつも通り笑っている。

そして、その膝の上に、

「えへへ、おにいちゃん」

ちょこんと座る女の子。

もうすっかり落ち着いたようで、海斗の膝の上で楽しげな表情を浮かべていた。

源一郎の目も、その子にいったようで、

「……海斗、このちっこい嬢ちゃんが？」

そう訊ねる。

ここまでの大まかな経緯は、音々と咲也からも聞いていたため、源一郎も、海斗の膝の上のその子が件の女の子だと分かっていた。

だが、念のため聞く。

ややこしい状況の整理のためだ。

海斗も、その意図を読み取ったようで、源一郎の質問に答えを返した。

「はい。この子が……」

「依頼人の豊橋花ちゃんです」

そう。

その女の子・豊橋花は、迷子になって、探偵事務所にたどり着いたのではない。

花は、依頼をするために、海斗のもとを訪れたのだ。

泣いていたのは、事務所に着く前に、一人でいることが心細くなってしまったためだった。

五歳の女の子なのだ。

仕方ないことだろう。

問題は、なぜ五歳の女の子が一人で探偵事務所を訪れたのか、ということだ。

実は、これは、今回の依頼内容に関わっている。

その依頼内容は……

――とあるビルの屋上

「神隠し、なぁ」

「あぁ」

ビルの屋上で、新聞を片手に、話をしているのは、一人の大男と一人の子供。

……いや。

「どう思う？　『W』」

「さぁ？　『I』、お前と違って、俺は頭が悪いんだ」

『W』と『I』であった。

『W』の返答を受けて、『I』は、無言で新聞に目を落とす。

『またも神隠し！　今度は生物学の権威・豊橋夫妻』

新聞の記事には、そう書いてあった。

「まぁ、うちの会社が関わっているのは確実だろうなぁ」

退屈そうに欠伸混じりにいう『W』。

「……あぁ。メモリ開発のために、拐ったというのが妥当な線か」

『I』は、新聞に目を落としたまま、考えを口にする。

適当だが、大方当たっているだろう。

だが、そんなことは彼らにとって、どうでもいいことなのだ。

彼らの今の仕事は『X』を見つけること。

その『X』も、おおよその見当はついた。

だが、今は……

「なぁ、『W』」

「どうしたぁ？」

「早速、会いに行きましょうか」

『水町海斗』
『七海咲也』
『天野原蒼』

「彼らに……」

「我々の同族」

「『地球の子供達』（ガイアチルドレン）に……」

第四十五話　Gと神隠し／疑惑の海斗（後書き）

はい。
G編始まりました！

遅くなった言い訳とか
色々とあるんですが……

まずは
遅ればせながら
あけましておめでとうございます。

昨年は
震災などで大変な年でした
今年は
その立ち直り、再生の1年になればいいですね。

とにもかくにも
今年も一年、私の遅筆と駄文に付き合ってくださるとありがたいです
ｍ（＿＿）ｍ

さて、今年一筆目から
更新が遅れてしまったわけですが……

実は、現実の方が多忙でありまして、今後も更新不定期になりそうです（泣）

読んでくださっている方、大変申し訳ありません

なんとか早めに更新したいとは思います（汗）

頑張りますっ！

では、また！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0982u/

仮面ライダーファントム

2012年1月11日05時45分発行